と命じた。

「直ぐだよ」と、後から急立てる聲を聞いて、女中は階下へ下りたが、間もなく上つて來て、

「お正午前から出てるんですつて。何處だか出先を云はないんですけど」

「ぢや、少し待つてもいゝから、早く來るやうに云つといてお呉れよ」香取はさうなると外の女を呼ぶ氣はしなくなつた。が、暫らく待つてゐても、何の音信もなかつた。

「出先さへ分つてれば、當人に話をするんですけど、幾ら訊いても、あの家で出先を教へて呉れないんですよ」女中は二三度電話口へ寄つて嚴しい口を利いた後で、二階へ上つて來て言譯をして、「もつとお待ちなさいますか。それとも今日だけ外のご御辛抱なさいますか」と、冷淡に訊いた。

「いや、今日はあの女でなくちゃいけないよ」と、香取は生真面目になつて、どうしても呼んで來るやうに女中に言付けた。

例にない執着を女中は不思議がつて階下へ行つた。香取は再び高欄に舞上る蝶を夢のやうに眺めてゐたが、その中時間は餘程過ぎたらしく、日光は障子の下へ沈んで、階間から染込む風は薄寒くなつた。で、障子を締めて、所在なげに寢ころんで、疲れた目を閉ぢてゐたが、すると、蝶蛾の身體が仰にまはれとない懷かしいものやうに現はれて、自分の唇が其處へ吸寄せられるやうだつた。

と、誰れだか側にゐて自分の樂しい空想を眼いてゐるやうな氣がして、そつと薄目に開けて見ると、部屋の中には人影はなくて、煙草の吸殼のみが煙つてゐた。で、また目を閉ぢると、そこへ女中がアタフタ階子段を上つて來て、

「今歸つたつて電話が掛りましたよ。今度こそ間違ひはありませんよ」と、やう〳〵安心したやうに云つた。

「今までどんな家へ藥喰込んで稼いでたんだらう」と云つて、香取は身を起して、今迄の空想から心を移さうとつとめた。

電氣を點けて、火鉢にも添炭して、食卓を拭つて、茶を入替へて、絹みの食物を伺つて、女中は階下へ下りた。室間は殺風景だつた部屋の中が、何となく色めいて來たのを見ると、香取は唄でも聽きたいやうな浮いた氣持になつた。そして自分に心を許した女を待受けてゐるやうで、階下の物音に耳を付けてゐた。

が、間違ひのない小菊の聲のしたのは、障子の外も夜になつて、高欄の西洋館が海黑く染えて見える時分だつた。隣の部屋にも客が來て、女中を相手に騷染の藝者の噂をしてゐた。

「こんなにお待たせして、何だか悪りが惡いわね」と云つて、小菊は襖の側で躊躇してから入つて來た。

今まで何處へ行つてゐたのか冷かしてやらうと思ひながら、その顏を見ると、香取は相手を厭がらせるやうな酷い事が云へたくなつて、「僕はまだ飯を食べないで待つてたんだぜ」と云つて、女懷かしい心の中を素直に自分の目顏に出して終つた。

「さう。本當に濟みませんでしたわね。私、氣になつて〳〵二三度此家へ電話を掛けたんですけど、どうしたんだか、少しも通じないんですよ」

「…目の緣が紅くなつてるね」と、香取は不斷よりも女の顏を美しく見ながら、「酒を飲んだのかい」

「え、私自棄になつて飲んぢやつたの。…だつて焦躁つたくつて仕樣がないんですもの」と、女は急に無理酒に惱んでるやうな目付をした。

「今夜僕はどうしても一人でゐられないんだから、長くゐるよ。家へさう斷つておき。外から呼びに來ないやうに」と云つて、香取はせめて

今宵はこの女を人手に渡さぬやうにと思つてゐた。

「私そのつもりで來たのよ。貴下と分つてれば、家から呼びに來る氣遣ひはないわ」

女は相手が些しも氣揚い思ひをしてゐないのに安心して、馴々しく旅行後の事を訊いたり、年末に迫つたこの頃の色町の樣子を話したりした。香取は話の中味よりも、聞馴れた柔しい聲を喜んで、いゝ加減な返事をしながら、茫然聞惚れてゐた。そして、言葉が切れると、

「もつと何か話してお呉れ。お前の話聲が切れると、外の事が考へられていけないから」と促して、「話がなくなつたら、三味線でも彈いてお聽かせよ」

「貴下、何か唄つて？」

「僕は何も知らないよ。僕は幾ら遊んでも唄なんか唄はうつて氣持になつたことがないから。…他人の唄つてるのを聽いても些とも分らないんだよ。だけどお前のだけは聽いて見たい氣がする。一心に聽いてるのだから、何でも好きなものを彈いて御覽…」

女は望まれる儘に三味線を引寄せて、調子を合せながら、「貴下も唄つて騷いでたら氣が晴れるんですよ」

「さうかねえ。ぢや教へてお呉れよ。お前の後に隨いて僕も唄つて見るから」

「え、さうして御覽なさい」

女は都々一のやうなものを二つ三つ唄ひながら、男の口元の剛かに動くのを見詰めてゐた。が、何時まで立つても聲が少しも漏れて來ないので、張合がなくて、撥を持つた手を下へ置いて、「一人で唄つても詰らないわね」と、三味線を後へ押退けようとした。

「もつと彈いといで。かうやつてればいゝんだから」と、香取は强ひて女に唄はせて、矢張小首を振りながら、唇を尖らせ、鮫のやうな聲で眞似をしてゐたが、やがて、ふと女が笑出した。

「どうした？　何が可笑しいんだい」香取は目を弱つて不思議がつた。

「だつて、貴下の樣子が可笑しいんですもの」と、女は聲を出してます〳〵笑つた。

「何故？　そんなに僕が滑稽に見えるかね」と、香取は俯目になつて自分の身體を見廻した。そして、自分の身に附いてつい忘れてゐたことが、急に思出される樣だつた。

「そんな所ぢやないのよ。貴下が唄つてる時の樣子が可笑しいのよ。こんなに顏ばかり振つて」と、女は目を細くして盛とお道化て首を振つて、男の眞似をして見せた。が、その樣子は香取の目にはさしていやらしくはなかつた。むしろ愛くるしかつた。で、

「僕に鏡をお見せよ」と、手を伸ばして女の懷鏡を取上げて、自分の顏を映しながら、生眞面目に今女のしたやうな身振をして見た。

「成程いやらしいね」

「何していらつしやるの」と、其處へ入つて來た女中は、それを見て笑つた。

「此方はね、御自分の顏に見惚れてるのよ。唄ひつ振が乙だつて」と、小菊は面白さうに說明した。

香取は鏡を投出して、「男の顏つて醜いものだね。僕は暫らく自分の顏を染々見たことがなかつたが」と、苦笑して皮膚の硬張つた女中の顏を見詰めながら、「でも女の目には男の顏がよく見えるんかね。お前なんかよく客の顏付に目をつけてるんだが、男の顏をどう思つてる？」

「さあ、どうですかね。私達はお顏の鑑別は不得手ですから一向分りませんですよ。これで商賣柄藝者衆の妻のよし惡しなら、道で擦違つても直ぐ目につきますけど、殿方のお顏はど

うだつても構はないんですからね。大らしつて下さる方を皆様美男子に思つてるんですよ」

女中は笑ひながら戯談らしく云つて、小菊に向つて、「でも、随分酷い美男子もあるわれ。松香さんのあの人」と云ひかけて、下唇を反らせて、その客の顔付を真似て、「あの人は此とも此家へ来たくなつたのよ。何處か外の家へ行つてるのかしら」

「さうでせう。…でも、松香さん時々あの人のことを惚けてるのよ。あんな口してる人が情が深いんだつてね」

香取は知人の顔を思浮べたがら、彼等がそれぞれに女に愛せられてゐるらしいのを不思議に思つて、「僕は男が女に惚れる譯は分つてるが、女が男に惚れる譯は分らないよ…でも女も男に惚れるんだね」

「それは當然でさあね。ですけど私なら顔で男に惚れようとは思ひませんね」

「私だつてさうよ」

で、女二人は色懸の話に興が乗つたやうに、互ひに勝手な事を喋舌り合つてゐた。それが眞心の聲であつてもなくつても、香取は只部屋の中が色づぽい言葉で賑ふのを喜んで、時々感心したやうな相槌を打ちながら、耳を傾けてゐたが、やがて女中が階下へ行くと、ふと夢から醒めたやうに、眞顔になつて、

「妙なものだね。何と云ふことなしにお前とも懇意になつたれ」と、自分たがら不思議に思つて、「しかし、僕はもうお前に會へんかも知れないよ」

「何故？　遠方へでもいらつしやるの？」

「…僕は呑氣に藝者遊びなんかしてゐられる身分ぢやないんだよ。初めからお前にだつて分つてたらう」

問詰められるので、女は「そんなことはたいわ」と、瞬目に答へて、「…偶あに入らつしやることも出來なくつて？」

「あゝ。僕のやうな者でもくちやならないからね。かうしてると、頭が輕くなつて下らない心配を忘れてるけれど、これが癖になつて毎日此家へ來たくなつても困るからね。だから今夜切りと思つて、お前も外の事を忘れて、精一杯僕を大事にして呉れよ。これで心殘りのしないと云ふぐらゐにして貰ひたいね。僕は只の一度だつて女に可愛がられた例がないんだから情ないよ。男としてせめて一日でも、好きな女に可愛がつて貰ひたいがさう云ひながら、香取は過去を顧みて自分のまだ經驗しない強い快樂が其處に潜んでゐるやうに思つた。あの女も物足らなかつた。あの時分にも物足らなかつた。

（十五）

で、彼れは長い夜を快く眠る間もなく過して、翌朝霜に濡けた時分に寢床を離れた。久振りに市街の中で朝を迎へたので、隣下を通る物賣の聲や、賑かな足音や、人聲が珍らしかつた。日當りのいゝ障子際に怠い身體を寄掛けて、側に坐つてゐる女の顔を見てゐると、思切つて淋しい自分の家へ歸る氣にはなれなかつた。朝餐を食べてからも、さして話もないのに、半時間一時間と時を延した。

「かうしてても詰らないから、何處かへ遊びに行きませう」女は退屈して、下町の年末の模樣を見に行くやうに誘つた。

「僕は世間藝者を連れて東京の市街を歩く氣にはなれないよ」と、香取は飽くまで斥けた。「お前は此處にゐたくなくなつたら、何時でもお歸りよ。さうしたら仕樣事なしに僕も出て行くだらうから」と、自分を持扱ひかねたやうに云つて、身動きもしなかつた。そして、只女が自

分の側を離れないでゐて呉れゝばと念じてゐたが、女は相手をしてゐるのに困じ果てたのか、やがて、「では私お湯に入つて來るわ。直ぐ來ますから待つていらつしやい」と、息抜きに立つて行つた。

で、暫らく一人ぼつちで日を既つてゐた。すると、そのまゝ暗い谷底へ落ちて行きさうで心が戰いた。目を開けると、明るい障子に自分一人の影が淋しさうに差してゐる。誰れか側にゐて懐かしい聲で催眠歌でも唄つて、快く眠らせて呉れたらばと思つてゐると、其處へ女中が様子を見に來て、お愛想を言出した。

「香取は此部屋に倦んで、「帳場へ行つてゐちや惡いかれ」と、出抜けに云つて、「あの女はもう來なくつてもいゝから斷つて呉れ。そして日が暮れたら、お前と寄席へでも行かうぢやないか」と、急に思付いて、懇つこく云つた。

「えゝ、寄席ならお伴したいわね。だけど小菊さんも連れて入らしつた方がいゝでせう。後で知れると惡いから」

「いや、あの女と一緒だと、今夜また歸れなくなるから、お前だけの方がいゝよ」と云つて、女中が微かに笑つてゐるのを見て、「何も惚れてゐるからさうなんぢやないよ。只大勢で出て行つて、僕だけ独り家へ歸るのが厭なんだよ」と言譯をした。

そして、女中に随いて帳場へ下りて行つて、長火鉢の前の厚い座布團に坐つた。主婦は買物に出てゐて、可愛らしい娘が顔に不似合な甲高い聲で喋舌りながら、忙しさうに周圍をうろ〳〵してゐた。お歳暮と書いた紙包が幾つか片隅に重つてゐて、其側には大きな厚ぼつたい羽子板が立つてゐる。鍵帷子を着た百日髮の凄々しい男が大きな目を開けて睨んでゐる。「誰れだらう、あれは」と香取は訊いたが、聞えないのか、煩さがつてか、側に返事がなかつた。で、彼れは自分の記憶を索りながら、羽二重の御顔を見詰めてゐた。さま〴〵の舞姿と役者の顔とが浮んでは消えた。と、その芝居の土間の中に、自分が一人惜然坐つてゐる様が、今見えるやうだつた。そして、あの芝居を今一度觀たいと、華やかな世界を忍ぶ氣もしなかつた。

最早一座芝居の木戸口を潜らなくても遺憾はたい…凡ての感覺の死んでしまつてゐるやうに、世の樂みに些しの未練もなかつた。兄弟であれ女人であれ、誰れにも會ひたくもなければ、その動靜を知りたくもなかつた。世の凡ての男には些しの執着をも持つてゐないのに、何故女に對してのみ愛着の念が絶えないのだらう？

「お退屈様…もうお風呂が沸きますよ」と、云つて、女中は臺所の方へ消えた。玄關には客の來たらしい氣色がした。

燈火が點いて、電話口で女の名前が呼立てられて、再び色めいた夜になるまで、香取は長火鉢の側を動かなかつた。と、二階からも竹向ひの料理屋からも、陽氣な三味線の音が聞えて來た。前の銅壺には酒の匂ひが舞上つて、娘は立膝で海苔を焙出した。

周圍が慌しく動搖してゐると、香取は自分が其處にぢつとしてゐるのが邪魔になるやうに思はれたので、近所を一廻りして來ようと思立つて、家の者に斷らないで、そつと外へ出た。

人の目を惹くやうに涙手に飾つた居先を見ながら、坂を下りてゐたが、昨日あの家へ入つてから餘程の日數を經てゐるやうな氣がして、賣出の提灯も今初めて目についたやうだつた。坂の方右に並んだ福壽草や蔦蘭の赤い實を見るにつけても、急に年の迫つてゐることが知られた。そして坂を下讀すと、元の道へ戻つて、「やまと」の前まで來たが、まだ忙しがつてゐるだらうと

思ふと氣臆れがしたので、素通りした。

で、再び大通へ出て、雜沓の中に入つてゐたが、ふと、留守の間の家の樣子を見て來る氣になつて、次第に人通りの薄らぐ方へ足を向けた。心細い思ひをして、町外れの暗い道に入つて行つた。家へ歸ると、何時ものやうに茶の間の障子に微かな燈火が映つてゐる。下女に何か訊くつもりでその障子を開けて覗くと、言葉を掛ける先に、水引のかゝつた紙包が目に付いた。

「誰れか來たのかい」と、彼れは急いで取上げて見た。「お歳暮、湯原」と、菓子折の上に拙い女文字で書いてある。

「上野町の奥樣が畫過から、夕方まで待つてゐなさつたんです。折角來たんだから、お目に掛つて行きたいつて、大變殘念がつてゐなさいました」

「別に用事がありさうぢやなかつたかね」

「いゝえ。そんな風にも見えませんでした。別段お言傳もありませんでした」

下女は呆けた返事のみして、要領を得なかつたが、香取は細君の訪問が氣に掛り出した。下女と半日も話してゐる間に、どんな事を感付いたかも知れない。不圖湯原が細君の前で縛つてゐた事が破れたかも知れないと氣遣はれた。

が、何時も此方へ來ると云ふ口實をつくつては、香取の心に意地惡い興味を起させぬでもなかつた。で、彼れは机の前に坐つてからも、心をその一點に凝して、事件の成行を今見るやうに描いてゐた。細君の手を借りて湯原を苦めるのが、次第に小氣味よく感ぜられて、萎れてゐた身體が俄かに勢づいた。

お多代がそのためにどれほど苦境に陷らうと、それはあまり念頭に浮ばなかつた。只湯原が氣樂さうにあの女と遊んでゐられなくなるのが、腹の透くやうに悦しかつた。

で、この新なる希望を見付けた彼れは、最早「やまと」の女中を連れて、寄席などへ行く氣はしなくなつた。

（十六）

紅く龜んだ手で傘を差して、吹付ける雨を冒して、香取は和泉町の戸田の家へ急いだ。その朝菓子書を見て、俄かに思立つたのである。

菓子書には細君の名前で、いろ〳〵話したいことがあるから、年内に一度來て呉れ、前以て知らせて呉れゝば御馳走して待つてゐると書いてあつたが、彼れは早くその話を聞きたいやうな氣がして、出拔けに訪ねて行つた。

細君の注意で、濡れた衣服を脱いで、主人のに着替へて、濡酒した座敷で、新しい桐の火鉢に寄掛つて、切髮の老婆と向合つてゐると、心が改まつて、何となくゆつたりした氣分になれた。「去年も今時分何ひましたね。江戸のお正月のお話を老婆に聞きましたね」と、あの時の光景を懷かしさうに顧みる氣にもなつた。

「また一つ年齢を取ります。何時までも裝束塞げをして。まだ薬が盡きませんですかしら」と云つて老婆は笑つた。

そこへ座に加はつた細君も、豫期してゐる話を持出しはしないで、暫らく年來の景氣や、明けてからの計畫を話の種にしてゐた。香取は此方から訊出さうと思ひながら、折角和いでゐる自分の心を、細君の話次第で、亂されさうならぬのが恐ろしかつた。で、時刻を延し〳〵してゐたが、やがて、ふと、

「貴下にお目に掛けたい人があるんですがね」と、細君が云つた。「今日入らつしやると分つてゐれば、此家へ呼んで置くんでしたのに……寫眞でもあるといゝんだけど」

「誰れのことです」香取は氣付かぬ風をしてゐ

たが、細君の言葉の意味は略分つてゐた。そして、當てが外れたやうだつた。

「いゝ事なんですよ。私一人で極めてゐるんですけど、ぢや、春になつてお話しませう」と細君は些つと匂はせたばかりで、話を引込めて、老婆と謎見たやうなことを言合つてゐた。

香取はその事には興もなくて、冷〻かに聞流してゐたが、稍あつて、上野町の噂を引出さうとして、「先日湯原君の細君が私の留守に訪ねて來ましたよ」と知らせた。

「へえ……。此方へは暫らく來ませんですよ」細君の答へは案外だつた。そして、「あの女も一時は暴立つて、始終私に泣言を聞かせた癖に、少し落着くと滅多に顔も見せない」と、不平らしく云つた。

「さう云へばお多代さんは、この頃どうしてるんだらうね。矢張神戸へ行つてるのかしら」と、老婆はそれを疑つてゐるらしい目付をした。

「どうだか分るものですか。あゝ云つた女は直ぐに情夫を拵へるんだから、まだ東京にうろうろしてるんでせうよ。私ちやんとさう睨んでますの。それに夏時分から外に情夫があるらしいと、私一人で思つてたのですがね。どうも素振がさうらしかつたんですよ」細君は眞實しやかに云つて、香取の方を見て、「でも、こんな事は上野町へ入らしつても話さないやうにして下さい。東京にゐると知つたら、夫婦ともいゝ氣持はしますまいから」

「えゝ」香取は探つた思ひをした。そして、人間の所行の案外他人に分らないのを不思議がつた。では湯原は何時までもあゝして、秘密の快樂に耽つてゐられるのだらうかと心の中に疑ましかつた。

「東京は廣いから何をしても分らないんですね」と云ふと、

「さうですとも」と、細君は言葉に力を入れた。

他人の素振に氣をつけて、有る事無い事尾に尾をつけて仰山に吹聽したがる細君さへ、少しも湯原の秘密を嗅付けてゐないらしいのが、齒痒くてならなかつた。平生の態度から押して、この人ばかりは感付いてゐることと思つてゐたのに、こんな重大な事件をさへ見逃してゐると、相手の細君が白痴らしく見えた。

で、香取は雨を冒して態々此家まで來た甲斐のなかつたのを悔いてゐたが、でも、容易に暇を告げようとはしないで、年暮の御馳走にもなつて、平和な話を左右から聞かされながら、盛圖々々してゐた。細君は春まで延すと云つた事を隱し了せないで、自分で樂むやうにチラチラ微見かせて相手の意向を索出した。

「決して貴下の爲にならんやうなことはしませんから、大人しく私の云ふことをお聞きなさい。間違ひの起らない中に、極めるものは早く極めた方がいゝんですよ」と、親切な口を利いて、「この頃はお家にばかりいらつしやるんですか」と、意味ありげに訊いた。

「えゝ。今年一杯は保養するつもりで、何處へも出なかつたんですが、來年からはまた働かなきや食へないんです」香取は明年後の自分を信じかねて、とても悠長な人並の結婚など思ひも染めないで、「私なんかにお世話なすつちや、貴女が迷惑なさるばかりですよ」と、少しも話に乘りさうな風を見せなかつた。

「そんな事があるものですか。……どんな人だつて相當の年齢になれば、結婚してるぢやありませんか。一人よりも二人の方が仕事にも身が入つて、結句氣樂に暮らせるんですよ。それに貴下などは些とも將來の御心配がないぢやありませんか」

「さう思はれますかね」香取はまじ〳〵細君の顔を見ながら、さも凡ての人間の代表者に向つ

てゐるやうな氣になつて、「しかし、私が何を考へてるか、今に何をし出すか分らないでせう。私自身にだつて、自分がどうなるんだか分らないくらゐですもの」

「何故です？　貴下がそんな事を仰有つてた日にや、世間に心配のない人つたらありやしない」

「だから、僕は不躾不思議に思つてゐます」香取は此處ぞとぶつた風に自ら力を入れて、「よく皆な平氣で生きてられるものですね。僕は人中へ出ないで家にぢつとしてても、戰慄するやうなことがあるのに、よく世間の人は平氣でそれぞれ勤めをしてゐられるんですね」

「それは仕方がありませんさ。いくら厭だつて、稼がなければ生きられませんからね。貴下のやうに半年も一年も遊んでゐられる極な御身分なら結構だけど」

「僕だつてもう駄目だ。せめてもの手鞠りにしてた金ももう無くなつたのです」

「お遊びたすつたの。だからお一人だといけないんですよ」

「別に遊んだつて譯ぢやないんです」

香取は疑護するやうに言掛けたが、ふと氣付いて、こんな人と顔面目くさつた話をしてゐるのが忌しくなつて、口を噤んで、只相手の云ふがまゝにまかせて聞いて、自分は勝手な空想に耽つてゐた。

で、細君の話は烟はしい雜音に化してしまつたが、まだ降頻つてゐる雨の中へ飛出して、何處へ行くのかと思ふと、温かいこの部屋を離れるのにも躊躇された。

（十七）

春になつたら、お知らせするから、その日に是非遊びに來て下さい、歌留多でも取りますからと、歸り際に細君は外の意味を含めて云つた。

香取は細君がそれほどに自分を信用してゐるのを怪みながら、承知して戸外へ出た。

そして、次手だから、上野町へも寄つて行かうと思つて、お歳暮の返禮に味付海苔を買つて、その方へ足を向けたが、その家の前まで來ると、ふと足を留めた。湯原は最早勤先から歸つてゐて、何か眼かに話してゐる。その間に細君の聲も微かに聞えた。

すると不快な祕密に包まれた二人の中へ分入つて、突々しい話をして、兎もすれば湯原に利用されねばならぬのが、厭な氣がされて、どうしても入る氣になれなかつた。弟向ひの夫婦の顔が障子越しにまざ〳〵と見えるやうだつた。

で、逃げるやうに後返りして、寒さに身を縮めながら、刺み足で電車道まで出た。そして、無駄になつた手土産の處分をつける口實を考へて、自分の方へ足を運んだが、世の中の無事平和に過ぎるのが合點が行かなかつた。

湯原の家庭も何時までも穩かなやうだ。お多代も湯原を厭つてゐながら、何時までもキヨバリした處置をつけようとはしない。いやらしい塊と思はれる腕兒は無事に育つてゐるらしい。……で、彼れは、二三ケ月前に湯原に訪ねられてから亂れ出した自分の心は、湯原が死に、腕兒が死に、あるひはお多代が死なければ、とても平和は得られないやうに思はれた。

いつそ生きたお多代は無くつてもいゝ。湯原に消され得るお多代はなくつてもいゝ。いやらしい塊に人らしい形を具へさせるお多代はなくつてもいゝ。さうすれば、自然に自分の心も穩かに輝くなるかも知れない。……あの女も自分を思つてゐたのだと云ふ懷かしい思出だけを殘して、外の女に心が傾いて行くかも知れない。……女自身にしても、どうせ將來に望みがないとすれば、一日も早く湯原の目をのがれ、悪運の手をのがれて死んでしまふ方がまし

だ。……痛々しい樣子を傍の人に見せないだけでもいゝ。……

香取は果しない苦惱の種が其處にあるやうな氣がして、自分の手で湯原を殺し腕兒を殺し、果はお多代をも殺したらと、我知らず恐ろしいやうな樂しいやうな空想に沈んだ。さうすれば世界が晴々しくなつて、自分も生れ變つたやうになれさうだつた。心を厲らせてゐる毒氣が消えてしまひさうに思はれた……。白く光つてゐる匕首やいやらしい塊から流出る悪血があり〳〵と胸に浮んだ。……

ふと後から怒鳴るやうな聲が耳に入つたので、彼れは驚いて、左右を顧みた。綱引の俥が袂を掠めて、泥を跳掛けて行過ぎた。

先日湯原が立寄つた酒屋は直ぐ側に見えた。

「こんな鬱陶しい日に、どうして暮らしてゐるだらう？」彼れは足を早め出した。

手土産を投出して、龜んだ手を温めながら、香取は針を持つたお多代の手の動くのを見てゐた。女は火影に横顔を見せて俯首いたまゝ、その手を休めなかつた。

「貴下のお家ちや、もうお正月のお支度が出來て？」

「……僕はこの衣服でお正月だ」

「……春着をお拵へなさいな。私が見立てて上げますから。此家で買へば安いんですよ」

「えゝ」

「……お正月には貴下方は何をしてお遊びなさるの」

こんな事が途切れ〳〵に話された。女の言葉も柔付も穩かで、縫合はせた絲の跡を扱く音にも、穩かな心が現はれてゐるやうだつた。香取もからしてゐれば、焦立つた心が柔かい手の平で撫でられてゐるやうなので、何時までもこのまゝでゐたかつた。互ひに縮い感上を惹起すやうな言葉を口にしないで、二人の座をも亂したくなかつた。正面に女の顔を見ないで、その指先や衿足を見ながら、恋に空想に耽つてゐる方が樂しかつた。

「これだけ片付けますから、もう一寸待つて下さい、ねえ」と、女は口を上げて子供らしい口を利いて、更に仕事に取掛つた。

戸外には雨足が衰へて、軒の雫も長閑に落ちてゐた。火鉢に掛けた湯沸からは盛んに湯氣を吹出した。香取は自分で茶を入れて、温かい雫を腦に染込ませながら、お愛想に女の話掛ける話に、輕い返事を與へてゐたが、女はやがて、ホッと息を吐いて、周圍を片付けて、火鉢の側ににじり寄つて、冷い手を翳した。そして、「お待遠樣」と云ひたさうに媚を含んだ目を動かした。

「今年ももう四五日ですわね。何處も忙しさうでせう。私、些とも市街へ出て見ないんですけど」

「……僕は今朝から和泉町へ行つてたらです。彼處はもうお正月らしかつた」

香取は話の種を造らうと思つて、何氣なくかう云ふと、

「どんなでした？　彼處は」と、女は力を入れて問返した。

何と答へていゝかと、香取は逢つて、暫らく口を噛んでゐたが、女は目を放さないで、

「私のことを何か云つてたでせう。紋度」と、答へを迫つた。

「いや、そんな話は些ともしませんよ。何も知らないんでせう」

「さう？……只遊びに入らしつたの」

女はまだ不安らしかつた。で、香取はそれを打消して、自分が何も口外しなかつたことをも確めさうとして、

「彼處の伯母さんが僕に女房を持たせようと

思つてるんです。用事があると云ふから行つて見たら、その話なんです」

「ぢや、いゝお話だつたのですね」と、女は微笑して、「貴下の奥様は何んな方だらう。私の知つてる人ぢやないんでせうね」

「どんな女だか……どうせあの伯母が見つけたんだから、碌なのぢやないでせう」

香取はこの話に深入りしたくなくて、揉消さうとしたが、女は興がつて、最早極つてゐることにして、何かと頻りに訊出した。「早くお貰ひなさいな、あんまり遅好みすると却つてよくないのよ」と、賛嘆で勧めたりした。

香取は自分の結婚について、女が少しも心を懸ましてゐないらしいのを、飽氣なく思つた。

そして、今夜は女が浮々して、さも機嫌に安んじてゐるらしいのを訝つて、また湯原に言ひくるめられたのではないかと疑ひながら、「あの後湯原君は何か云つてましたか、此間僕が此方へ来てゐた留守の間に、細君が僕の家へ来たさうですよ」と云つた。

女はドキッとして顔色を變へたが、直ぐに冷笑を浮べて、「どうにでも勝手にするがいゝさ」と呟いた。そして、横へ向いて、唇を噛んで暫らく默つてゐた。その血相が怖いやうなので、香取は自分の言葉を悔いて、相手を宥めようとして、

「僕はあの細君に些とも會はないんですよ。久振りに今日寄つて見ようと思つて、門口まで行つたのだけど、厭になつて引返しちやつた。湯原君も大きな聲で面白さうに話をしてゐて、また酔拂つてるらしかつたから、拉まつちや大變だと思つて、逃げて歸つたんです」と、勢づいて云つた。

「面白さうな話つて、どんな話をしてました？」と、女は鋭い目付をして慌しく訊いた。

「どんな話だか、よく聞かなかつたのです」

「聞いていらつしやればいゝのに」

女は詰るやうにかう云つて、何か考へてゐたが、軈て打解けた笑ひを見せて、「どんな事でも勝手に云はせとけばいゝわね」

「えゝ」香取は相手の言葉の意味は分りかねたが、只機嫌の直つたのが悦しかつた。で、嫌ひるやうに、「僕もこの家へお歳暮をやらなくちや悪いでせうね、度々邪魔に来るんだから」と、云ふと、

「いゝんですよ、そんな御心配なさらなくつても」と、女は膝を潜めた。「私主婦が貴下の事をよく思ふやうに〳〵と不斷氣をつけてますの。だから、此とも主婦に氣兼ねしなくつていゝのよ。……今夜も何時までででも遊んでいらつしやい。貴下さへ構はなきや、かうして夜明ししたつていゝんですわ。主婦も皆つ張りだし、私も夜が更けると、寂しくつて變なことばかり考へられるんだから、夜明しぐらゐ何でもないの」

「僕も徹夜ぐらゐは構はないけど……だけど、貴女は經物が忙しいんでせう」

「いゝえ。どうせ御年始に行く家はないし、何時まで掛つたつて構ひませんわ……主婦にお茶菓子を買つて来て貰つて、皆なで面白いお話しましませう」

女がいそ〳〵して次の間へ行つた後で、香取は知らぬ間に煙草の煙で部屋の濁つてゐるのに氣付いて、緣側の雨戸を開けた。雨は上つて名殘の滴が幽かに慄へてゐる。面に觸れる外の空氣は痛いほどに冷かつた。主婦が門の方へ出て行きながら、此方を顧みた目が、薄明に氣味悪く光つた。そして、その日が此方の心を見てゐるやうで、油斷のならない氣がした。と、不意に、

「貴下近くにまた上野町へ入らつしやるんでせう」と、後で聲がした。

で、振向いて、物思ひに凝つてゐる女の瞳を見て、元の座へ戻ると、女は再び同じ事を訊いた。

「年内に一度は行かなくちや悪いかも知れない。……何か用事があるんですか」

「用事なんかあるものですか」と、忌々しさうに男の問ひを押潰して、眉を曇らせて思案してゐた。

「人間は遠慮して小さくなつてちや駄目ね」女は思案の果にかう云つて、口元に憎みを含んだ笑ひを微かに浮べて、「馬鹿にしてやがる」と呟いたが、やがて、男の瞳に目を吸付けて、「ぢや貴下はこれから彼家や和泉町へ度々入らつしやるんだわね。そして、此家へは來て下さらないんでせう」

「僕は成るべく來ないやうにするつもりです。あの主婦が氣味が悪いから……貴女が此家を出て自由な身體になつてから訪ねて行かうと何時も思つてるんだけど、外へ出るたびに、つい此家へ足が向いて仕方がない」

香取は無邪氣らしく云ふと、女は快く微笑して、睨いた目付をして、「貴下が來て下さらないと、私、本當の一人ぼつちよ。皆なから悪者にされて、味方になつて呉れる人は一人もないんですもの。まだしも此家の主婦は私の最良をして、いろんな口を利いて呉れるんですよ。初め思つたほど決して悪い人ぢやないの。だから、心配なさらないで、今夜泊つていらつしやい」

「だけど……」と、香取は決しかねた風をしたが、其處を我出る力はなかつた。かうして女の息に包まれてゐると、これまで味ひ知らなかつた快感が湧きさうだつた。恐ろしいやうな度外れな快感を覺えてゐるやうだつた。逃げようたつて手足は自由に利かなかつた。で、彼れは默つて其處に坐つてゐたが、女の髪の毛から爪先まで、彼れを刺激して、不自然な空想の色を刻々に濃くさせた。

と、其處へ主婦が歸つて來た。「外は凄いんですよ」と云つて入つて來たが、その日も鼻もいくら思直さうとしても、香取の目には、意地悪さうに見えた。自分の幸福を遮るやうに思はれてならなかつた。

「どうも御苦勞様、主婦も此處へ入らつしやい」と、女は陽氣に云つて、座を開けて招いた。

主婦は肥つた身體を二人の間に据ゑた。そして、女同士の呑氣らしい話が夜の更けるまで續いた。

香取はつひに歸るべき機會もなくて、勧められるまゝに、宿の主人の夜具にくるまつて、火鉢の側で假寝をせねばならなかつたが、その夜具には穢しい老爺の垢や、湯原の肌の脂が染付いてゐるやうな氣がして、安らかに身體を落着けることが出來なかつた。次の室からは主婦の寝息が、靜かな夜の空氣を破つてゐる。彼れは其息を押潰したかつた。……

夜明前から、女は深い眠に落ちた。香取は主婦が雨戸を開けるのを待つてそっと起上つて襖の外から一言聲を掛けて顔も洗はないで戸外へ出た。最早日は高くて、表は年末らしく賑つてゐた。

彼れは脇目も觸らず自分の家へ歸つた。机の上には昨日の朝の戸田の葉書がそのまゝに置かれてあつた。

「いろ〳〵お話申上げたきこと有之候へば……」この文句に心惹かされて出て行つたのだがと、彼れはあれから今朝までの事を跡を追つた。

すると、忌はしい記憶が蘇つて來たが、不思議にもその底に潜て覺えない做が蠢いてゐ

た。命掛けの冒険をして、力強い者を打挫いたやうで、沈んでゐた心が急に魔力を帶びて來た。

で、彼れは毛布にくるまつて横になつて、長い間悩んでゐた心をも身體をも休めた。珍らしく熟睡に陷つて、二三度下女に呼びかけられても目を開けなかつた。そして、名殘なく夢から醒めたのは、部屋の中が薄暗くなつてからだつた。

見ると、床の間には鏡餅が供へられてあつた。三寶に大きな伊勢海老が乗れてゐる。茶の間の煙火も不斷よりは冴えてゐて、注連飾が其處に投出されてあつた。

「お次手に報恩寺を買つて來てお呉んなさい」と云つて、下女は獨り留守番で春の準備をしてゐたことを知らせた。

「今夜福壽草でも買つて來ようかね。外に入るものがあれば何でもさう云つて御覽」と云つて、香取は下女から貰だの皿だのと、足らない世帶道具の名を訊いて、夕餐が濟むと、直ぐまた外へ出た。

そして、買物をしながら神樂坂まで出て、床屋へも入つた。ストーブに温まつてから、鬚を剃られながら、見るともなく自分の顏を見てゐるとも、主婦に向つて横越しに云つた。おだが、その顏はこれまでのやうに見苦しく萎びてはゐなかつた。目にも口にも彈力があるやうに思はれた。傍の鏡に映つてゐる外の男の顏を見下げるやうな氣にもなつた。あんな非外れの快樂は誰れも知るまい……

其處へ入つて來た二三人の藝者の白い軟かい顏も鏡に映つた。知合らしい客を揶揄つたり嬶弄はれたりし出した。と、小菊の顏までも思出されたが、そんな女の俤めいた言葉や目つたるい言葉は、彼れの心を少しも唆しさうではなかつた。

で、「やまと」の近くまで歩いたが、最早その氣薄な空氣に興も起らなくて、引返して家へ歸つた。まだ「菊」の閉ぢた福壽草の鉢を床の間に置いて、机の前に落着いて、部屋の中を見廻すと、來る春には何か望みを含んでゐるやうだつた。寂しい陰氣な空氣は彼れの左右から遠ざかつた。……自分だけが他人に與へられない禁制の快樂の底へ落込んでゐるやうで、知人が皆恩しく見えた。最早明日からの生活の事などは、屈託する氣にはなれなかつた。最早誰れにも氣兼しないで、人中へ出て行かれる。お多代にさへも手強く物が云はれる……

彼れの顏には、憎い者の鬢に刃を當てた時のやうな笑ひが微見えた。

一大晦日の晩には是非遊びに行きます、そのつもりして待つてゐて下さい」と、その夜お多代に葉書を送つた。

そして、今年の最後の夜に彼處へ行つて、彼處で除夜の鐘を聞く有樣を濃い色取で芝居のやうに描きながら、眠に就いたが、ふと、あの主婦の顏を想起した。

「どうも彼女の目が邪魔だ」彼れはその目が自分の心を睨んでゐるやうに思はれて、次第に不安の念が萌した。で、夢の醒めるたびに不安が增して、果は、主婦の前だけでは自分が萎縮けてゐるやうに思はれ出したので、その目を抉取りたくなつた。

《十八》

一日隔てて次の日は大晦日だつた。が、それまでにお多代から葉書一つ來なかつた。「あの夜から餘程惱んでゐさうなものだが」と、訝りながら、一日を送つて、暮れるのを待つて退分へ急いだ。

庭口から聲を掛けて障子を開けると、お多代の妻は見えなくつて、主婦が笑顏で快く迎へた。何か搜出すやうな目付をして部屋の中を見てゐ

ると、

「今し方湯原さんと買物に出掛けました。直き歸んなさるでせう」と云つただけで、主婦は茶の室へ引込んだが、其處には珍らしく主人の聲がしてゐた。

香取は一人火鉢の側で綴たり起きたりして、待つてゐた。二人が歸つて來たらどんな風をしてどんな口を利くだらうかと豫想しながら、次第に心を興奮さしてゐた。そして、外の足音に耳を澄ませてゐたが、容易にそれらしい音はしなかつた。

時刻の經つほど、張詰めた香取の神經は疲れて、幾度たく想像に浮かんで來る二人の言葉や素振が針の先のやうに痛く響いた。で、心を紛らすために、何か讀むものでもないかと、部屋の中を搜したが一枚の新聞すら見當らなかつた。痛い針の先から逃げるやうに椽側へ出ると、星が目眩しく微動してゐる。通の物音が呻くやうに聞えて來る。

と、やがて、下駄の音に交つた高い話聲が耳を驚かして、門の戸が開いた。

「やあ、君かい」と、湯原は近寄ると、不斷の通りの聲をした。明るい處へ入つて來て、風呂敷包を其處へ投出して、「切通まで引張つて行かれたよ」と、主婦に向つて横越しに云つた。おお代は提げて來たよ」と、袋を置いて、曖昧な微笑を浮べて挨拶した。香取はその目を蒼明しがつて避けるやうにして、

「貴下の家の用事は片付いたんですか」と、湯原の方を見た。

「今年も苦しい思ひをして、やうやく遣繰りをしたのさ。だけど先づ無事に年が越せるから、お目出度い譯だね」と云つて、湯原はふと氣付いたやうに、

「君に借りたものも拂はなくちゃならないね。皆拂ふ譯にも行かないが」と、紙入を出して、考へながら、貨金の半分ばかりを前に置いた。香取はそれを受取つて、そつとお多代の方を見ると、女はよせ、袋を開けて、中から鶴だの箱だのと、色んな物の出て來るのを悦しがつてゐた。

「子供騙し見たいなもんだね」と、湯原は手を伸して取上げて見た。

「でも、刺にいゝのが當つたんですよ」と云つて、女は石鹼の箱を取つて、その臭ひを嗅いで、「これもさう惡くないの。見て御覽なさい」と、目の前に出した。

湯原は一寸手に取つて、「これで何もかも揃つたね。……ぢや、これから皆なで年越酒夢でも食べようぢやないか」

風呂敷の中には下駄もあつた、肩掛もあつた。お多代は暫らく其等から心を放さなかつた。

香取には二人の間が何の異狀もないのが案外だつた。お多代は先日來に見なかつた柔和な顏をしてゐる。酒肴が來ると、主人も主婦も招かれて人つて來たが、誰れも此處に並んでゐる男女に對して、邪推の目を向けてはゐない。

その晴々しい世間話を聞いてゐると、香取はふと、先日の夜自分だけ夢を見てゐたのではないかとも疑はれた。が、それが夢であらうとなからうと、かうして平凡な話を何時迄も聞かされてゐると、刺々に心が苛まれるやうだつた。

「僕は歸らうかね」と訊くと、

「僕でも少しして歸るんだから、一緒に行かう」と、湯原は引留めた。

「香取さんは何時までいらしつてもいゝんでせう。また此間のやうに夜明ししませう。元日のお祝ひしていらつしやい」と云つて、お多代は湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちゃ惡いんでせう」と、つけ〳〵云つて、そして、湯

原が人のよささうに笑つてゐるのを見て、「私、明日お家や和泉町へ御年始に行つてもよくつて？」

「来られゝば来たつていゝさ」

「おや、行きますよ、屹度。私、此とも構はないから」

「おれだつて構はないさ」

「ふゝん」と、お多代は微かに冷笑を洩らして、勝ち傲つた顔付をした。

それが香取の目には凄かつた。男を侮つたやうな太々しい心の底が見えるやうだつた。自分を怖つてゐたいらしいのが憎くなつた。で、緩い寒を湯原の前で曝し出したらと思つてゐたが、湯原は女を宥め賺しながら、帰りさうにしては、また腰を据ゑた。

「貴下はもつと遊んでて下さいな、淋しいから」と、女は香取の立上りさうにするのを見て、頼むやうに云つた。

「えゝ」と、香取は承知したが、此處に留まつてるのが、自分の身に危かしい氣がして、逃つてゐた。あの太々しい心や刺戟の強い肉感に、自分がへし潰されさうなのが恐ろしかつた。

「さあ一緒に行かう」と、湯原は何氣なく云つて、引立てるやうにして、戸外へ出た。外套の襟を立てて懐手をして、足早に歩みながら、「僕の家も少し雲行が悪いんだからな。君も警戒しといて呉れたまへ。家の奴が君に會ふと、屹度何か訊出すから……」

「しかし、お多代さんは何時までもあゝして置くんですか。子供が出来ても……」と云掛けて、香取はいやらしいその影を浮べて口を噤んだ。

「仕方がないさ。僕もあゝして置いて時期を待つんさ」

香取はそれ以上に訊きやうもなかつた。電車道で別れて、當てもなく電車に乗つたが、「やまと」へでも行く外落着くところはなかつた。

で、其家の二階へ上つて、身體を投出してゐると、太々しいお多代の素振が、自分を取殺すやうに、目の先を離れなかつた。

感想斷片

私の信奉する『小說作法』の第一ページには、『いゝ小說を書くには、美學修辭學あるひは小說作法に拘泥する勿れ、自己を凝視せよ人生によく目を注げよ』と書いてある如く、私の信奉してゐる『戲曲學』の第一ページには、戲曲に於て傑れた作家たちんにはまづ戲曲學など稱するものを抛棄せよ』と書いてあるのである。歌學者と歌人とは昔から違つてゐるのである。

私は先夜ある寄席で、ある若い男が現今の役者の假聲を使ふのを聽いて、そのうまいのに感心した。七八人のが悉く本物そつくりであつた。この男に比べると、圓右のつかふ假聲など甚だ下手だ。いろ〳〵な藝事に於て、今の者必しも昔の者に劣つてゐるのではあるまい。役者だつてさうであらう。たゞ私自身が年齢の加減で、役者といふ者に對して、興味を失つてゐるので、みんなが結らなく見えるのだらう。

（『白鳥随筆集』の「感想斷片」より）

命の綱

荒木は夕餐後ランプを點火すには早いし、散歩するのも大儀で、長椅子に身を横たへ、雲の低い雨のまだ降れ切れぬ空を、ボンヤリ眺めてゐた。すると、廊下で二三の下女の騒々しい笑ひ聲が、バタ〳〵と駈け行く草履の音と渾亂になつて聞えたが、その中を縫うて男の浮えた笑ひ聲が通つて、ドシ〳〵と重い跫音が荒木の部屋の前に止まつた。

「居るな」と、宗谷と云ふ小柄な痩せた男が、隙間から覗いて、それから「失敬」と笑顔で入つて來て、

「何を考へてる？　鬱いでるぢやないか」と、床柱を後に胡坐を掻いた。

「君を待つてたのだ、あの事はどうなつた」と、荒木は椅子の上で細い目を開けて、柔しい聲で問うた。

「いや、又君を煩すんだね、今日も家にゐると五月蠅くてならんから、早速飛び出して來たのだ」

「しかし、もうあの女の所に泊るのは止せよ、君の母堂から苦情を持込まれて、僕まで困るから」

「あゝ、もう行かんよ」

「君のこつたから當てにやならん」

「ハヽヽヽ、以後は、謹なよ」と輕く云つて、廊下を通つてゐる下女を呼留め、

「おいお村さん、先きの話は内所だよ、それから一つお茶の濃い奴を飲まして呉れ給へな」

と、締りのない顔を仰向けて、ボンヤリしてゐる。年齢は荒木と同年の二十六だが、誰れの目にも三つや四つは若く見える。

「二三日前だつたが、菅野女史が來て、君の情話を云つたよ。宗谷もあれぢや可哀想だなんて」

「ハヽヽヽ、全く弱るからね」と、宗谷は人事のやうに云つて、「昨日もこの通り母に引つかれたんだからね」と、腕をまくつて赤い爪跡を見せて、「あれが怒鳴る時の顔つたらないぜ、それに髪が薄くなつて地頭が赤光りになつてるんだから堪らない」

「老人が醜くなるのは當然だが、美人の方はどうしても元の精へ收まらないかね」

と、荒木は眞面目で氣に掛けてゐる。

「先づ六ケ敷からうよ……が、まあいゝさ」

と、宗谷は下女に茶を注がせて、惡洒落を云つて恐悦がつてゐた。

この二人は一昨年同じ學校を出てから、同じ會社に勤め、報酬も同じだが、荒木は下宿暮し、宗谷は兩親と妹二人とあつて、狹い家に住んでゐる。境遇も性質も違ふが、却つて交際は親密だ。で、荒木は宗谷の家庭に何事かあると、相談役ともなり仲裁役ともなり、柄にない大人ぶつた口をも利く。この春に宗谷が勤めを怠けて、宿直の番をも誤魔化したことが分つて、殆んど免職になりかゝつたのを、荒木が社長に歎願して、漸く喰止めたのであるが、この時も當人は平氣で、朝から毛布を被つて寝ころんでゐるので、母親は氣が氣でなく、今にも一家五人が餓死でもするかの如く心配して、終ひには我が子に向つて手を合せて、「この通り頼むから會社へ出てお呉れよ」と涙ぐんだ。宗

谷は毛布から頭を出して吹出し、
「拜んだだけでは駄目だよ、お賽錢でも投げて呉れにや、お神酒も供へて呉れるといゝね」
と調戯つた。すると、母は、
「この不孝者めが。親を馬鹿にしやがつて」
と、度胸で喰ひしばつて怒つたが、それも一時で、矢張涙聲で、
「お前が自棄になつちや、皆な路頭に迷はにやならない」
と嘆息する。
そして宗谷が奮ら力を添へて、「何處か又いい仕事があらあれ」と慰めても、中々承知しないで、自分で荒木の宿を訪ねて、社長へ取なしを頼んだ。何なら自分が社長の前へ出て頭を地べたへつけてお詫をするからと頼んだ。で、お詫がかなふと、宗谷は元の通りに出社したが、別に以前よりも仕事に身を入れるでもなく、上役の目顔を偸る風もない。却つて荒木の方で心配して、
「僕も君の爲に責任を帶びてるんだから、樣子だけでも眞面目になつて呉れにや困るよ」
と注意する程であつた。
宗谷は元學問嫌ひで、小學校時代から私立大學卒業まで、只の一度も自分で好んで學課に向つたことはなかつた。子供の時分は、小柄でも力があり、小手先が敏捷くて、素人相撲に七人抜きをやつて、筆や紙の賞品を取つたこともある。聲がよくて、聞覺えの都々逸や、端唄を座興に唄つても、捨てがたい江戸前の響きを傳へる。そして自分では學問するよりは、仕事師になるか、舟乘りになるか、いつそ米屋町へでも來公して、行々は立派な相場師に成立ちたい位の考へを持つてゐるが、兩親は物堅くて、とてもそんな眞似をさせる所ではない。是非學校へやつて官員さんか學校の先生かに仕上げて見たい、借金しても諸道具を賣拂つても、家の者が燒糞を詰めても、この子一人が學校を卒業さへすれば、後は一家安穩、親々も樂隱居が出來ると定めた。宗谷自身は先々の事は抱負もないが、兩親がさう定めたのならさうするさと、自然の成行に任せて、朋輩が職工になつたり、年期奉公に出るに引變へて、制服制帽を着ることになつた。
薄給で今の會社に勤めるやうになつても、宗谷自身には左程の希望もない。只母が早くから起きて雜當をも拵へて、時間が來ると、宗谷の夜具を引ぱつして、追立てるやうにするから、詮方なしに出掛けて行く。衣服にも食物にも贅澤を云はず、衛生の法など少しも顧みないが、朝夕牛乳を五勺づつ飲む。これも自分には厭なのだが、母が牛乳は非常に藥になると聞いて、無理に飲ませるので、仕方なしに飲むのだ。この一家には最早不動產もなく、外に働き手もなく、只私立大學卒業生宗谷君藏一人が生命の綱となつてゐる。病氣になられて堪るものか。
所がこの宗谷が二三ケ月前に情婦を拵へた。自分から進んで戀ひ焦がれたのではないが或日友人の家で出會つた女學生と惡意になつて時々その宿へも遊びに行つて、無駄話をしてゐる間に、自然に關係がついてしまつたのだ。流石に惡くはない。月給は母の手で捲上げられ、遊びに行く餘裕もなし、さう容易く地色の出來る柄でもなし、それに何事にも註文の少い男だから、相手の女の容貌や氏素性を氣にすることもない。で、始終微笑々々顔で、さも情婦が出來たらしい素振をも見せる。母も沢々感付いても、大目に見てゐたが、或月末宗谷が月給を持つて女の宿へ泊り込んで、朝まで歸らなかつたので血眼になつて急に騒ぎ出し、何處から聞いたのか宿を搜し當てて、二人の寢てる所へ飛び込んで、宗谷の胸倉を攫んで、月給を搖きたくつて歸つた。その瑞句が、荒木の周旋で、女

を宗谷の家へ同居することとなつたが、狹い家に大勢ゴタ〳〵してゐるんだから、辛抱し切れなくて、十日も經たぬ間に女の方で逃げ出した。
宗谷は濃い茶を甘さうに二三杯呑んでから、コロリと横になり、寿延びをして、
「僕も一生に一月でも下宿生活をして見たいな」と欠伸まじりで云つた。
「それよりや亟來利加行でも復活させたらいゝぢやないか。彼地でうんと儲けて此方へ送つて來るやうにすりや、君の爲にも家の爲にも却つて好都合だらう、劍持なんか彼地でうまくやつてゐるさうだよ」
と、荒木は宗谷がとても會社で永く用ひられる望みのないことを知つてゐるから、今から外の方法を取らさうとする。
「そりや出來ぬ相談だ、親爺やお母は外國へ行きや、もう一生會へない位に思つてるんだから……それ所か、僕あ家から先を知らないのだからね。二三日でも僕が姿を隱さうなら、それこそ警察へ捜索願ひでも出すだらうよ、僕の帶にや年中綱がついて此處へ來てゐたらつて親爺と母とが家でその綱を引張つてるんだよ」
「しかし君あ柔順だからいゝさ。僕等は一人でかうしてても、何だか會社の束縛を感じてるやうで厭でならんめだが」
「さうかい。結句僕の方が安心だらうよ。綱付きで泳いでるんだから浮かうと沈まうと、責任は僕にやないんだ」と云つて、宗谷は眠をころがして笑つて、
「叫日も親爺が母の尻馬に乘つてブツ〳〵怒つてゐ、貴樣のやうに女に迷つてちや、乾度會社の方も怠けてゐるに違ひない、それぢや、社長さんに相濟まんから、いつそ免職させて頂くやうにすりや、何だか、會社の束縛を感じてるやうに、おれが社へお願ひに行くと、大變た權幕さ。僕あ可笑しくつて吹出すと、親を馬鹿にすると云つて、鯵ひにや刀を出して斬つてしまふなんて怒鳴るから、僕も紳妙に手を合せて念佛を唱へて、さあ斬つて下さいと首を突出すと、母が泣くやら妹が留めるやら、そりや滑稽だつたよ。だが要するに、僕は死ねないのだ、幾ら僕の方で望んだつて、死ぬる權利はちやんだのと取上げられてるんだよ。君なんか個人の自由ないんだのと云ふが、僕は死の自由が
と、べら〳〵饒舌つて、足をバタ〳〵させてゐた。薄い細い眉が乘れ、鼻の先がピタ〳〵と動いて、身體に何處となく餘裕がある。聲も上つ調子で氣樂さうだ。荒木は椅子の上からヂツと見下して、相手の話を眞面目で聞いて、その家庭のゴタ〳〵した樣を思ひやつて憐れに感じた。
宗谷は一しきり話すと、スツタと立上つて、
「さあダツ〳〵してると呼びに來るから、僕はもう歸らうよ、君は又勉强するんだらう」と廊下を下りた。
その翌朝荒木が井戸端で顔を洗つてゐると、宗谷の母が不意に前に立つて、挨拶もそこ〳〵に、
「你は昨夜お伺ひしましたですか、まだ歸つて參りません」
と、目に角立てて云つた。
「そんな筈はないが」と、荒木は落着いて云つて、靜かに手拭を絞つて、冷水摩擦しながら、「まあお上んなさい」と云つたが、老母は氣が氣でなく、
「乾度又彼女の所へ滑り込んだのですよ、貴方

は今度の宿を御存じぢや御座いますまいか」
「僕はよく知りません、それに宗谷君も、もう被處へは行かんでせう、何處か外へ行つたんぢやないですか」
「いえ、それに違ひないんですよ。昨日も易者に見て貰ひますと、表面は行かん風をしてこつそり行つてるんだから御注意をなさいと申すんですもの、此度それに違ひありませんよ。一體あれにや電車賃と煙草錢しか渡してないんですから、どうしたつて外へ遊びに行けよう筈は御座いません」と、老母は四隅構はず甲走つた聲で云つて、スタ〳〵と通りへ行きかけたが、又踵戻つて、「申しかねますが、會社へお出でなすつたら、社長さんにお願ひして、体の行先をお調べ下さるやうにして頂きたいんですが」
と云ふ。荒木は勝手な事を云ふ人だと呆れたが、
「はあ承知しました」
と、氣安めを云ふと、老母は多少安心したらしく、
「本當に仕方のない男で御座います」
と云つて、歸つた。
荒木は二階へ上つて、深呼吸をしながら、廊下から見てゐると、老母は四辻に立つて、キョトキョト四方を見て二三度行き迷うてゐた。

宗谷は定刻に出勤して、荒木から事情を聞いたが、只「さうかい」と云つて、別に氣にも留めず、例の如くに仕事をして、定刻に會社を出た。しかし彼れの運命は日一日と縮まつてゐる。「役に立たぬ奴」「無用の長物」だとは公評であつて、當人も認めてゐるのだから、荒木の力で如何ともすることが出來ぬ。
で、その晩も氣掛りで散歩がてら宗谷の家を訪ねたが、二室切りの狹い家はひつそりしてゐる。冷えるとは云へ、まだ秋になつたばかりなのに、老父は袷を襲ね着して、火鉢に當つて指先を揉みながら、クウン〳〵と喉を鳴らしてゐる。老母は姉妹に按摩を取らせながら、居眠りをしてゐる。宗谷は座敷の柱に凭れて、玩具の人形を操つて目の玉を飛出させたり、舌を出させたりして遊んでゐる。
「靜かだね」と、荒木が前に坐ると、
「むゝ、嵐の後だからさ」と、宗谷は目尻に可愛い皺を寄せて、伺人形を動かしながら、自分の顔で拍子を取つてゐた。ゐ一、二、と掛聲までする。

「よくそんな馬鹿な質問をするね」
「面白いぢやないか、昨夕煙草一つ買ふ代りと思つて、夜店で買つて來たんだ」
「さうか、君の家もそれで天下泰平だ。しかし社では動搖があるやうだよ」
「さうかい、僕なんか最先に免めさされるだらうよ」
「さうでもないさ」
「だつてそれが當然だからね、どう思つたつて、僕が社で入用だとは思はれん」
「ぢや、やめたらどうする」と、俯つて小聲で問ふと、
「母に聞いて呉れ給へ、世間ぢや不用の僕でも、母は遊ばせときやしない、何かに任命するだらうよ」

四五日立つて、宗谷の父が荒木の宿を訪ねて來た。宗谷は最早免職されてゐるのだ。そして父は「どうかなりますまいか、貴方のお力で」と、無理強ひに輻んで「今度は六ケ敷いでせう」と云はれても、中々承知しない。
「外でもようがすが、どうかあれだけの月給の所へお世話下さいませんか。でなけりや學資は

使ひ損ですからな、自分にや車掌にでも出方にでもなるて云ひますが、折角身に付いた資を棄てるのは惜うがす」
と、少し反身になつて、昔風のノンビリした顔を鹿爪らしく拵へ込んで云つて、決して母親のやうに「家の者が食へんから」と、泣き事を云つて輒みはしない。
荒木は「さうですとも」と云つて「いづれ又いい仕事を捜してみませう」と間に合せの安受合をして老人を辟退した。
しかし荒木は自分は他人の職業を周旋する勢力などありやうはなし、世の中はかの老父母の思つてるやうに、宗谷一家と荒木との爲に造られてゐるのではなしと思つて、氣の毒でもあるが、當惑もした。そしてかの老父母が押寄せぬやうに、不意に遠方へ轉居した。
十日も立つて、宗谷からの端書に、
「僕も今は家の者にすら無用扱ひにされてゐる。しかしまだ死の自由は與へられず、生かして置いて身體を働かせようと、兩親の思案最中なり」
とあつた。

斷片語

△芭蕉はさすがに傑れた詩人である。西行よりは遙かに詩人的天分に富んでゐる。しかし、私自身は詩作に巧みな芭蕉よりも詩作に拙い西行の氣持に共鳴を感じてゐる。自然に同化し、世俗から隱遁しようとしたところは、二坪相似てゐるやうであるが、非常に違つたところもあるのだ。
△「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休が茶に於ける、其貫道するものは一なり。しかも風雅に於ける、造化に從ひて四時を友とす。見るところ花に有らずと云ふことなし。思ふ所月に有らずと云ふことなし。思ひ花に有らざる時は夷狄に齊し、心花に有らざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化に從ひ、造化に歸れとなり」と、芭蕉はその「珊瑚紀行」に於て云つてゐる。彼れの心境はかうであつたのだらう。花に徹し月に徹してゐたのである。少くも徹しようとし、また徹したつもりであつた。西行も、彼れが生きてゐた時代の歌人の常套を脱しないで、月と花とを詠歌し、「願はくば花の下にて春死なむ」とか、「佛にはさくらの花をたてまつれ、わがめちの世を人とぶらはじ」とか歌つてゐたが、彼れの心には、「風雅に從ひ造化に從ひ四時を友と」しただけでは安んぜられない懷疑の念が燃えてゐた。芭蕉の如き風流的樂天家ではなかつたのだ。
△「無常」を題として作歌をしても、西行には、實朝や定家とは違つた深みをもつてゐた。云ひ廻しの巧さだけではない、實感が出てゐる。「まぼろしの夢をうつつに見る人は、日もあはさでやよをあかすらむ」の如き、技巧によつてつくられた歌ではない。「天真素朴の芭蕉歌人などとは心境がまるで違つてゐる。風雅を主とした後世の歌人の歌ひ得られるものでもない。「ねどろかむと思ふ心のあらばやは、長きねぶりの夢も覺むべく」など、彼れは、屢々驚かんことを望んでゐる。國木田獨歩が、「人生の不思議に驚かん」としたことが思出される。

（「文藝評論」の「斷片語」より）

入江のほとり

一

長兄の雅一が奈良から出した絵葉書は三人の弟と二人の妹の手から手へ渡つた。が、勝代の外には誰も興を寄せて見る者はなかつた。

「何處へ行つても枯野で寂しい。二三日大阪で遊んで、十日ごろに帰省するつもりだ」と筆でぞんざいに書いてある文字を、鐵絲の近眼鏡を掛けた勝代は、日を凝らして、判じ讀みしながら、

「十日とおへば明後日だ。良さんはもう一日二日延して、榮さんに會うてから學校へ行くとええのに」

「會つたつて何にもならんさ」良吉は率氣なく云つて、「今時分は奈良も寒くつて駄目だらうな。わしが行つた時は暑くつて弱つたが、今度は花盛りに一度大和巡りをしたいな。初瀬かも多武の峰へ廻つて、それから山越しで吉野へ出て、高野山へも登つて見たいよ。兄の丈夫な間は歩けるだけ方々歩いとかなきゃ損だ」

「勝は何處も見物たとしようない。東京へ行つても寄宿舎の内にちつとしてゐて、休日にも外へは出まいと思うとるの」勝代はわざと哀れを籠めた聲でかう云つて、先きから一言も口をきかないで、炬燵に頬杖突いてゐる辰男に向つて、「辰さんは今年の夏中休暇にでも遠方へ旅行して來なさいな。家の者は男は皆んな東京や大阪や、名所見物をしとるし、温泉へも行つたりしとるのに、辰さんばかりは地とも旅行しとらんのぢやから、氣の毒に思はれる。自分では東京へ行つて見たいとも思はんのかな」

「行けりゃ行つてもいゝけど……」辰男は低い鈍びた聲で不明瞭な返事をして、口蓋を舐めずつた。

「わしが東京に居る間に來りゃよかつたのに。下宿屋に泊つて、電車で見物すりゃ費らも金は入らないんだから」

「勝と辰さんは電車を見たことがないのぢやから、兄弟中で一番時代遅れの田舎者だ。勝は岡山まで汽車に乘つてさへ頭痛がするのに、東京まで何百里も乘つたら卒倒するかも知れんから、心配でならんがな。その代り東京へ行つたら、三年でも四年でも家へは戻らんつもりだ」

「わしの暑休みの間に行くやうにすりゃ、連れてつてやらあ。さうしたら帰りに大和巡りも出來るし丁度都合がいゝんだよ」

「いや〳〵、勝は一人で行かう。それくらゐの甲斐性がなければ、自分の目的を遂げられませんもの」

「目でこそ元氣のいゝことを云つてゐても、途中で腹が痛んだり、汽車に酔つたりしたらどうするんだい。自分の村でさへ出歩けない者が、方角も分らない東京へ行つてマゴ〳〵すると思ふと、心細くなるだらう。東京のいゝ家では、つい近所へでも若い女一人外へ出しやしないよ。榮さんが帰つて來たらよく聞いて見るといい」

「死んだつて團はん覺悟をしとるんだもの……」

勝代は負けぬ氣でさう云つて口を噤んだが、ふと不安の思ひが萌して顔が曇つて來た。良吉も話を外して、小さい弟を綾しなどした。

そこへ唆髪の報知が階下から聞えたので、皆なドヤ〳〵と下りて行つたが、勝代は一人後へ

殺つて、二三度母の呼立てる聲を聞いてから、やう〳〵炬燵を離れた。机の上の絵葉書帖に兄の絵葉書を插んだ。そして、目を凝めて、夕月の寒さうに冴えてゐる空を仰ぎながら、雨戸を閉して階下へ下りた。吊ランプを取圍んで、老幼取まぜて十人もの家族が騒々しく食事をしてゐた。勝代は空いた席へ割込んで、独り生冷たい煮返しに柔かい菜漬しを添へて、不味い思ひをして飯を執つた。

外の者の膳には郷味噌の飯鮨や海鼠などが付けられてゐて、大きな飯櫃の山が見る〳〵崩されてゐた。

隣村まで來てゐる電燈が、いよ〳〵月末にはこの村へも引かれることに極つたといふ噂が誰かの口から出て、一村の使用數や石油との總費の組違などが話の種になつてゐた。電燈を見た事のない子供達は、いろ〳〵に想像しては喜んでゐた。良吉はメートルとかスキッチとかタングステンとか洋語を持出して電燈の講釋をし出した。

「僕は東京の下宿にゐた時には、五燭の球を外して、二十五燭のを使つてたよ。さうするといい。一つで家中明るくならあ。そして長い紙で八方へ引張るさ」

「そんなことが出來るかい。電燈も村へ來りや丸で騙る譯にや行くまいから、まあ義理に一つだけは付けることにしようが、畢竟無用の事ぢや」と、老父は云つた。

「しかし、皆な電燈にすると、手數が掛らんし、火事の危險も少うなつてよう御座いますぜ」と、次男の才次はさう云つて、少くも二つは引かなきやなるまいと言張つた。そして、博覽會見物に行つた際に見た東京のイルミネーションの美しさを語つた。良吉もそれに相槌打つた。

「夜も晝のやうだ」

平凡で簡單なこの言葉ほど、都會を知らぬ者の心に都會の美しい光景を活々と描かす言葉はなかつた。

が、辰男はこんな話に毫しも心を唆られないで、例の通り默々としてゐたが、只窃かにイルミネーションといふ洋語の綴りや譯語を考へ込んだ。そして、食事が終ると、直ぐに二階へ上つて、自分のテーブルに寄つて、頗りに英和對書の頁をめくつた。かの字を索り當てるまでには餘程の時間を費した。

「あゝこれか」と獨言を云つて、捜し當てた英字の綴りを記憶に深く刻んだ。次手にスキッチとかタングステンとかいふ文字を捜したが、それはつひに見付からなかつた。

廣い机の上には、小學校の教師用の教科書が二三冊あつて、その他には、英語世界や英文の世界歴史や、英文典など、英語研究の書籍が亂雜に置かれてゐる。洋紙のノートブックも手許に備へられてゐる。彼れは夕方學校から帰ると、夜の更けるまで、減多に机の側を離れない。英語の獨學に耽るか、考へ事に沈んで、四年五年の月日を送つて來た。手足が冷えると二階から階下かの炬燵の空いた座を見付けて、そつと温まりに行くが、昔て家族に向つて話を仕掛けたことがなかつた。直ぐ下の弟の良吉とは、一時隣國の山間の小學校で一緒に教鞭を執つたことがあつたので、多少打融けた話もしてゐたのだつたが、それさへ年を經ると共に、隔たりが増して、この冬の休暇には親身な話は只一度もしないで過した。

でも、良吉が傍で洗濯物や乾魚を小さい行李に收めて明日の出立の用意をしかけると、辰男も書物を措いて屢々その方を顧みた。

七八年前の冬休みに、兎を一匹讓めて、弟と交互に撫いで、勝先から帰省したことが、ふと彼れの心に浮んだ。

二

階下では、老父母も才次夫婦も子供達も、彼方此方の部屋に早くから眠りに就いて、階子段の下の行燈が、深い闇の中に微かな光を放つてゐた。二階では良吉と勝代とが炬燵に當つて、一しきり東京話を聞いたり訊かれたりしてゐたが、やがて別々の部屋に別れて寢支度をした。

「良さんには當分會へんかも知れんな。來年高等學校を卒業したら、成るべくなら東京の大學に入れるやうな方法を取りなさいよ」と、勝代は兄の寢床を延べながら云つた。そして、自分は悲さに傷まぬやうにと、懐爐を腹に當てて眠つた。

弟と妹の安らかな寢息を耳に留めながら、辰男はまだ椅子に腰を掛けて、雜誌に出てゐる和文英譯の宿題をいろ〳〵に工夫してゐた。

アルハベットの讀方から、滿足に教師によつて手ほどきされたのではないので、全くの獨稽古を積んで來たのだから、發音も意味の取り方も自己流で世間には通用しさうでない。二年間東京の英語學校で正則に仕上げて來た良吉に屢々一田舎で語學を勉强したつて骨折損だ、それより早く正教員の試驗を受けた方がいゝぜ」と忠告されて、父や兄からもそれを最も賢い方法として說勸められたが、彼れは馬の耳に風で聞流して、否か應かの返事をさへしなかつた。で、家の者は彼れの心を量りかねて、涼臺や炬燵の側での茶呑み話の折々、眞面目の問題として持出されたことは二度や三度ではなかつた。

「最初ヴァオリンを習つて音樂家になりたいと云つたのを聞いてやらないんだから、それであんな風になつたのぢやないかと思ふ」と、ある時父が思當つたやうに云つた。

「それぢやかりぢやない。鼻がまだ直り切らんのでせう。一寸見ると拗ねて居るやうぢやが、五年も六年も拗ね通されるものぢやない。身體に故障があるからでさあ」と、才次は云つた。

「あれぢや商人にもなれんし、百姓にもなれまいし、まあ躰でも吸れるくらゐの田地を分けてやるつもりで、抛つて置くか」

とゞのつまり、かう解決をつけて、最早彼れの身の上を誰も問題にはしなくなつた。見馴れた目には、彼れの行爲もさして不思議には映らなくなつた。

十一時が鳴ると、辰男は椅子を離れて押入から夜具を取出した。そして、百姓所へ行つた帰りに、階下の炬燵の殘り火を掻起して、半身を下り込ませて、氣儘に温まつた。自ら睡氣の差すまで、かうして過してゐる二三十分間が、彼れには一日中の最も樂しい時間であつた……今日新に習ひ覺えた英語を口の中で繰返してゐたが、ふと弟の明日の出立が思出されて、自分が默つてゐる間に出掛けられては殘念な氣がしたので、例よりも早目に炬燵を出た。

闇で仕切られてゐるだけで、嘗て襖の立てられたことのない自分の居間で、幼い數珠團に足を縮めて横になつて目を閉ぢた。何時もならば、目を閉ぢると直ぐに睡眠に落ちるのだが、今夜は慣例を破つて、まだ睡氣の伸さぬ前に炬燵を離れたためか、頭が冴えて眠付が惡かつた。

何遍かの障子を破つてゐる猫の爪音が烈さく耳に付いた。辰男は「シッ〳〵」と云ひながら疊をパタ〳〵と叩いたが、やがてランプを點けて音のする方へ行つて見ると、猫は最早障子の破れ目から縁側へ飛下りて啼聲を立ててゐた。雨戸を少し開けて猫を屋根の方へ追出しながら、辰男は久振りに自分の村の夜景色を眺めた。十數町を隔てた小學校へ往來する外には、春にも秋にも殆ど一歩も門を出たことがないのみ

か、家の周圍にどんな騒ぎが起つてゐようとも、滅多に窓の外へ顔出したことがなかつたので、平生雨戸一枚隔てた外の景色とは顔染が薄いのだつた。

夕月が既に落ちて、幾百もの松明が入江の一方に絵のやうに光つてゐる。耳を澄ますと小波の音が幽かに聞えたが、空も海も死んだやうに靜まつてゐる。宮を圍んだ老松は陰氣な影を映してゐる。彼れは他郷から歸省した者のやうに、今夜は少年時代の自分の妻を腦の中の彼方此方に見詰めた。……もつと快活で元氣のよかつた昔の事が未生前の時代のやうに心に浮んだ。

冬でも厚の笠を被つて濱へ出て、餌を拾つて、埠頭場に立つたり幸神湯の岩から岩を傳つたりして、一人ぼつちでよく釣魚をしてゐた。釣れても釣れなくても、兄弟や近所の友達と遊ぶよりは面白かつた。潮が滿ちて湯が隠れると衣服を腕まくしまくし揚げて、陸へ上るので、衣服は何時も潮臭かつた。あの時分は川尻に蘆が生えてゐた。湯からは淺蜊や蜆や蛤がよく獲れて、綺麗な模樣をした貝殻も多かつた。が、今は入江の魚が減つて、岩のあたりで釣魚をしたつて、雑魚一匹釣にかゝつて來ないらしい。山や海の景色もあの時分は今よりも餘程美しかつたやうに思はれる。向ひの小鳥へ落ちる夕日は極樂の光のやうに空を染めてゐた。漁夫の身體付からして昔は嚴のやうだつたり枯木のやうだつたりして面白かつた。

お宮の松には鳥が棲んでゐたのぢやがと、その不氣味な鳴聲を思出しながら、暗い梢を見上げてゐると、その木蔭から一羽の鳥が羽叩きして空を切つてゐるやうな氣がした。

辰男は雨戸を閉めて座間へ戻つてからも何となく物哀な氣持がした。側の壁に凭けて置き乍ら日頃忘れ果てゝゐたヴァオリンに目がついて、久振りで彈いて見たくなつた。樂器を負んだ黄ろい袋は夜日にも日立つほど汚れてゐた。

山間の寂しい小學校にゐた間、俸給の俸割を積んで買つて、獨稽古で勝手な音を出し、夜毎にこれを弄んでゐたことが、涙ぐまるゝやうな追憶となつて、乾いた彼れの心を潤はした。

「明日の晩には是非彈いて見よう。春高樓を彈いて見ようッ……」彼れは新しい英字の變則な發音よりも、昔馴染のヴァオリンの變則な音色に、一層强く自分の魂が打込まれさうに思はれた。

三

辰男の明方の夢には、藏の萌える學校裏の山が現はれて、其處には可愛らしい山家乙女が眞白な手を露出して草を刈りなどしてゐた。……と、誰かに呼立てられたやうな氣がして目を開けたが、左右の室には誰もゐなかつた。良吉は最早出立したのか知らんと、急いで階下へ下りると、弟は竹の手のついた蟬草鞋を膝に載せてゐる父親の前に不恭好なお辭儀をして、これから出掛けようとするところだつた。皆なが上り框に突立つて見送つてゐた。

辰男はそつと皆なの後に寄つて、默つて弟の出て行くのを見てゐたが、直ぐに二階へ引返して、弟を乘せた俥が濱通を過ぎるのを見下した。俥の音の消えるまで窓際を離れなかつた。

「良さんも行つてしまうた」何時の間にか勝代が傍に來てゐた。「これで勝が出て行かうものなら、辰さんは二階に一人法師で淋しうなるぞな」

「……」辰男は默つて茫然してゐた。

「早う嫁さんを娶りなさいな。小串に丁度よこ

さうなのがあつて、車屋の爺さんが話を持つて來たから、も一度よく問糺して、成るべくならあれにでも極めたいと、お父さんが云うて居つた。少々氣に入らんところがあつても我慢して、その人を嫁さんに貰うたらえゝにな。傍の者が皆な相應だと思うたら、辰さんも強ひて否とは云はんでせう」勝代は母親の命令で、何氣ない風で兄の腹の中を索つて見た。

「――そんなことはお前が訊かいでもえゝ」辰男は嶮しい聲でさう云つて、自分の居間から歯磨粉と手拭を持つて來て、靜かに階下へ下りて井戸端へ出た。大きな酒樽にどつさり大根が漬けられてあつて、大嫌ひな糠味噌の臭ひが鼻を襲つて逆吐きさうになつた。

勝代は、「何であゝ變人なのであらう。家中で私だけが同情してやつてるのぢやないか」と忌々しく感じた。が、しかし、後で直ぐに心を和げて、自分がかうして一緒にゐるのも今暫らくの間だから、出來るだけ大切にして上げて惡く思はれぬやうにしたいと思ひ返した。……外の兄弟は皆な好きな學問をしてゐるのに辰さんばかりは一生こんな汚い村の先生をして暮すんだもの、可哀さうだ。お父さんが不公平だと、兄の身の上を不仕合せな人として憫んだ。

そして、紙帶を持つて兄の机の上の埃を拂ひながら、書物の間に插んである洋紙を覗いて、拙い手蹟で根氣よく英字を書留めてゐるのに、感心もし、冷笑を浮べもした。その中には、同窓の誰にも劣らなかつた英語自慢の勝代にも解き得ない文句が多かつた。

「ミシニニニ」といふ言葉には圏點を附けて、ノンセンスと假名をも振つて大事さうに記してゐる。

「貴女の云ふことはノンセンスよ」などと、朋輩の間で言合つたことを勝代は思出して獨笑ひをした。そして、辰さんはこの英語の意味を理解して居るのか知らんと訊きたかつた。

と、そこへ、辰男は梅干で茶漬の朝餐を濟まして、歯を吸ひ／＼上つて來たので、勝代は押入から洋服を取出してやつて、

「晩まで勝にこのテーブルを貸してお吳れな。腰を掛けて勉強したら、お腹がよう減つて氣持がようなるかも知れんから」

「……」辰男は自分の机や椅子を他人に――たとひ妹であつても――使はれるのが厭であつたが、他人に向つて――たとひ妹であつても――否と斷言することは出來なかつた。無論快い承諾を與へる氣にもなれないのだが……

「使うてもよからう――本はちやんとこのまゝにして置くがな」

「フーン」と辰男は微かな返事をした。カラアもネクタイも附けない洋服の上に短いトンビを着て、辨當を提げて裏口から家を出て、狹い畔道を通つて學校へ向つた。

子供達も揃つて出て行くと、廣々とした家の中は大風の跡のやうに靜かになつた。母や兄嫁は立つたり坐つたり、何となしに家事に忙しかつたが、勝代はざつと二階の掃除をして、時間外れの朝餐を一人で食べると、下女に吩咐けて、二階の炬燵に火を入れさせて閉籠つた。良吉の歸つてゐる間入學試驗の準備を怠つてゐたので、最早小說など讀耽つてはゐられなかつた。上京までの日數を數へると心が慌しかつた。……落しも落第をしようものなら、一年前に入學してゐる朋輩に對しても家の者や村の者に對しても、おめ／＼顏は合はされない、とても生きてゐられないと、神經を昂らせながら、英語讀本を披いた。

が、辭典を片手に精一杯研究してゐながら、心は動もすると書物から離れて、外の思ひに紛れた。深夜も白晝のやうな東京で、落第した自分がモルヒネか何かの毒藥を飲んで自殺する悲

しい有樣を空に描いたり、西洋の婦人と自在に會話を取かはしてゐる得意な有樣に胸を轟かせたりして徒らに時を過した。運動不足のために、柔かい食物も消化が惡くて、勉強に取掛ると、腹の重苦しいのが一層氣になつた。

辰さんのやうに一心不亂に勉強するつもりで、炬燵を離れて兄のテーブルに向つたが、裾の方が寒くて、手の先も冷えて、とても長い辛抱は出來なかつた。で、再び炬燵の側へ戻つて、額を櫓の縁に押當てて、取留めのない空想に耽り出した。好きな蜜柑を母親が籠に入れて持つて來て吳れると、胃に惡いと知りつゝ手を付けて二つ三つ甘い汁を啜つた。

辰男は極つた時刻に學校から歸つて、テーブルの位置も書物の配置も亂されてゐないのに安心した。衣服を着替へて椅子に腰を掛けると、昨夜ヴアヰオリンの音を戀しがつたことを思出して、壁の方へ目を向けたが、感興は何時の間にか消えてゐて、そんな物を手に執るのさへ懶かつた。矢張英語修業に心が惹かれた。

夕日は障子の破れ目から、英文典の上に細い光を投げてゐる。下女はランプに油を注いで、部屋々々へ持廻つてゐる。

四

十日には旨い魚を買溜めて待設けてゐたのに、榮一は歸つて來なかつた。「もう四五日遊んで歸る」と、大阪の市街を寫した繪葉書を寄越した。

誰よりも勝代が一番長兄の歸省を待ちかねて、母親に向つて頻りに噂をしてゐた。「榮一さんが春まで家に居つて吳れると、勝も東京へ隨いて行けるのぢやけれどな、戻つたと思ふと、直ぐにまた行つてしまふんでせう。東京で暮すよりや田舎に住んで居る方が仕合せだと、よく手紙に書いて來るけれど、自分だつて、一月とも田舎にはぢつとして居られんのだもの。……學問した者は、こんな下等な人間ばつかり住んで居る村へ戻つて來たつて話相手はないし、見るもの聞くものが嫌になつて仕樣があるまい。勝には榮さんの心持がよう分つとるがな。……勝も今の間にせつせとお姉さんや祖母さんのお墓へ詣つて置かうと思うとるけど、途中で人に顏を見られるのが氣味が惡いから、どうしても出て行かれん。勝は外を通つてる人の聲を聞いても時々氣疎いことがありますぞな。ようあんな下卑たことを大きな聲で喋舌つてげら／＼笑つて居られると愛想が盡きてしまふ。こんな人間ばかりのゐる村で一生を暮らすとすりや聾になりたいと勝は思ふがな」

無口な母親は、娘の言葉に輕く雷同するだけだつたが、才次が傍で聞いてゐようものなら、默つて妹に話を續けさせて置かなかつた。兄弟中では稍常識に富んだ穩かな彼れは、決して烈しい口は利かないが、小間癪れた妹の言語態度が女學生めいてゐるのが氣に觸つて、揶揄ふか冷かすかしなければ蟲が收まらなかつた。

ある夜も勝代が、上京心得と云つたやうな事を書いてある東京の友達の手紙を母に讀んで聞かせて、母子が炬燵に差向ひで話込んでゐるところへ、筒袖を着た才次が、兩手を細い兵兒帶に突込んだまゝ、のそ／＼傍へやつて來た。

「お前の友達は皆なペンで手紙を書くんかい」と、四角な桃色の封筒を手に取つた。

「昔風の候づくめの手紙なら卷紙に筆で書くのがよう似合うとるけど、言文一致にや西洋紙にペンを使うた方がえゝ。第一一枚の紙にも仰山に字が書けて、お父さんの口癖の經濟的にもなるんぢやもの」勝代は皮肉をまぜて答へた。

「また友達同士英語で手紙のやり取りは出來ん

かい」才次は產田人の名前を見て封筒を下へ置いて、

「この女も東京言葉を勉强しに、高い賃本を費うて東京の學校へ入つとるのかい」

「そないな悪口は勝等には何ともないがな。此方に居る者でも、手紙にはお互ひに東京言葉を使うとるんぢやもの」

「……東京の女も變挑な言葉を使ふぜ。一寸逗を訊いても、べら〳〵と云うて何やら譯が分らん」

「東京の人は一體口が早いんぢやらうか」勝代はふと眞面目に考へた。そして、卑しい田舍訛を朋輩に嗤はれはしないかと氣遣つた。

「口が早いばかりぢやない、何か知らん忙しさうでゴタ〳〵した處ぢや。若い間はあんな町で好きなことをして暮らすのもよからうが、歳を取つたら居れる處ぢやない。田地まで賣つて大阪や神戸へ行つた者が、よく見い、大抵は失敗つてヒョコ〳〵戻つて來るぢやないか。儲けて他所の錢を持つて戻る者は十人に一人もありやせん。大抵はこの貧乏村の錢を持出して都會へ捨てに行くんぢやから、村はます〳〵貧乏になるばかりぢや。近い話が寺の坊主からして、わざ〳〵揖をしに神戸へ投機をやりに行くとふ有樣だもの」

「來月の祖母さんの十三回忌までには、お仕持さんは戻つて來るぬぢやらうか」と母親が口を出した。

「法事よりも村に祭式があつたらどうするつもりでせう。坊主は寺の物を奪ばして他所へ行つてもよからうが、さう荒して出られちや、後ではこの寺へ來て呉れ手がないから檀家が迷惑ぢや」

「耶蘇教で祭式をすると、却つて輕便で神聖でえゝがな。勝はお經も嫁ひだし想住のお祓ひも嫁ひぢや」

才次は宗旨などどうでもいゝので、妹が友達の耶蘇信者が女學校で死んだ時の儀式の樣子を話すのを雜錄をつけずに聞いてゐたが、やがて、先き云はうとしたことに話を戻して、

「家の者も東京なり神戸なり、出て行く以上は、その土地々々に一生落着くことにして、生活がパケ腹うなつて生家へ轉がり込まんやうにきつぱり縋りをつけとかにやならんと思ふ。都會住ひをした者に田舍を手組りにせられちや、此方で貧素な生活をしとる者は迷惑するし、第一朔に合はん話ぢやから、兄弟だからまさかな時にや世話にたりやえゝ、といふ量見で居られちや共倒れぢや」

「それは利己主義ぢやがな……」

「どうせ皆たが利己主義ぢやから、初めからさう極めとくに限るんぢや。辰男だけはこの村で別家さすにしても、此處とは少し離れて家を建ててやるとえゝ。直ぐ側に親類が並んでると、よけりやよし、惡けりや惡しで、嫌んだりけなしたりし合つて煩さいものぢや」

「昔は兄弟は近い處に居るのがえゝと云うて、高松の伯父さんなぞは直ぐ裏の地續きに、自分の家と間取りから柱の數まで同じい家を弟に建ててやつたのぢやが、今時はさうは行かんぢやらう」と、母親は反對もしなかつた。

「兄弟同士嫌むことまで考へとかいでもえゝがな。家の兄弟にはそんな下等な人間はありやすまいに」

勝代は細い眉の間に皺を寄せて、「辰さんはあないな風なのに、誰も構うてやらにや可哀さうぢやがな。勝は貧乏しても何處で暮らしとつても、辰さんの力になつて上げにやならん」と、昂奮した調子で云つた。

「他人のことよりや、勝は自分の身の間違ひのないやうに考へとれ。女子が愚圖々々して歳を取つて、英語を喋舌つて學校の先生になつたつて、何が面白いことがあらうぞい」才次は、眼鏡を掛けた妹の平たい顏を憐憫な思ひをして見入つた。

「才さんに學資を出して貰やあせず……」勝代は兄が勸もすると、自分の樂しい理想を破らうとするのが口惜しくて、かう言放つて、顏を見られぬやうに炉燵の上に俯伏した。

才次は濃い顏をして口を噤んだ。

「女子で月給取りになるのも、容易なことぢやあるまい」と、母親は感じのない聲で獨言めやうに云つた。

昔ながら暫らく默つてゐるところへ、辰男は階子段を軋ませて、のつそり下りて來て炉燵の空いた處へ足を入れた。

「辰さんはテーブルの下へ火鉢を置きなさいた。辰さん一人火の氣のない處に居つちや凍に合はんぞな」勝代は今氣づいたやうに云つた。

「ランプを點けつ放しにしといちゃ危いぜ」才次は二階から降して來る燈火を見上げて云つた。

五

勝代は腹がキク〳〵痛みかけると、悚燈だけでは「心許なくて、熱湯を注込んだ大きな德利を夜具の中へ入れて眠ることにしてゐたが、ある夜、德利の效目がなくつて昏夜中頃に暫らく忘れてゐた激しい痛みを感じ出した。階下へ下りて母親や兄嫁を驚かすのは氣の毒であるし、それよりも自分の腸胃のまた癒つてゐないことを家の者に知られて、東京行を引止められるかも知れないのが恐ろしくて、腹を壓へて呻きながら我慢してゐたが、疼痛は容易に收まらなくつて、呻き聲は自然に高くなつた。

才次の室に寢てゐる辰男の耳にも入つた。彼はふと目を醒まして、それと氣がつきながら、妹の樣子を見に行かうともせねば、聲を掛けもしたかつた。寢返りを打つて再び眠りに就かうとした。が、呻吟が次第に耳障りになつて仕樣がない。猫を追出すやうにこの睡眠の邪魔物を強ざける譯には行かない。……で、彼はランプを點けて、そつと自分の寢床を、光目まで良吉のゐた矢の室へ持つて行つた。其處では呻吟聲が大分遠くなつた。

「辰さん……」と、勝代は襖を洩れる燈火に目をつけて、掏なげな聲を出した。

辰男は返事をしない。夜半の寒さに身震ひして、寢床の中へ潜込んで、燈火が消した。

勝代は再び兄を呼んだが、返事がないので、寢床から辷り出して、襖を開けて更に呼んだ。「お父さんの机の上にある藥を取つて來て呉れんかな」と頼んだ。藥嫌ひで醫者が呉れた藥さへ二度に一度は秘密で棄てたほどなのに、今の場合父の常用の消化藥をさへ手頼りにする氣になつた。

確かに兄は起きてゐたのにと訝りながら、勝代は手探りでマチを搜して、ランプを點けて見ると、兄は例の處に寢てゐなかつた。近眼を顰めてやう〳〵その寢床を見付けると、腹を壓へながら側へ寄つて耳許で聲を掛けた。譯にも知らさないで、そつと取つて來て呉れと頼んだ。

辰男は物をも云はず、突如に起上つた。そして、裾の短い寢衣のまゝランプを持つて階下へ下りて行つた。行燈の火は今にも消えさうに搖めいてゐた。彼れは父の部屋や兄の部屋には殆に一度足を入れることがあるかないかで、部屋の樣子がどうなつてゐるか知らなかつた。

吾のせぬやうに襖を開けて入ると、子供の時分から見馴れてゐた赤毛氈を掛けた机が、以前の通りに壁際に据ゑられてあつた。机の上には大きな硯や厚い帳簿や筆立や算盤がごた〳〵

と一杯に盛られてあつた。新聞に蔽はれてゐる碧い藥瓶を摸用しながら、彼れはふと大音圓三といふ其筒の文字に目を留めた。母が先日問はず語りに云つてゐた緣談の周旋者の名前が大谷だつたので、彼れは其筒を取上げて眺いたが、手紙を引出して讀まうとはしないで、元の處に置いた。そして、枕に掛つた寒暖計を見て、一三十五度か、寒い譯だ」と思ひながら部屋を出た。どの室からも安らかな寢息が洩れてゐて一人も目覺めてゐなかつた。ガランとした家の中には寒い風が流れてゐる。

勝代は待ちかねた藥瓶を兄から渡されると、直ぐに手の平に藥を移して、「このくらゐの分量で利くぢやらうか」と兄に訊いた。

「そんな藥は毒にもならん代り利きやせん」と、辰男はぶる〳〵慄へながら、顏を蹙めた妹の苦しげな樣を見下してゐた。

「水を持つて來て呉れなんだのかな」

「……德利の湯で飲んだらよからう」

勿體振つた兄の言葉を妹は可笑しく感じた。教へられた通りに、德利の栓を拔いて口移しに湯を啜つた。太息を吐いて、いくらか安らかな氣持になつて、

「階下では皆な寐とつたかな。勝は心細いから、も少し其處で起きとつて呉れな」

さう云はれると、辰男は自分の寢床へ退くことが出來なかつた。

「勝はこないに身體が弱うちや困るがな。外の兄弟は丈夫なのに勝一人だけは……」

「……運動せんからぢや」

「この村にや都らしい人間ばつかり居るから外へ出るのが恐ろしいもの。……辰さんは身體が強いからえゝなあ。家ぢや姉さんが早う死んだし、勝も長生せんやうに思はれるけれど、女子は幾さんになるまで生きて居らん方が結句仕合せなやうに思はれる。お姉さんは家で皆なに介抱されて死んだのぢやけれど、勝は他所の土地で一人で死ぬのぢや」勝代は疼痛が和ぐのにつれて、こんなことを云つて涙を浮べた。

辰男は幾度も嚔をした。寒さに堪へられなくなるし、妹の愚な言葉に興も起らないので、雪葉の切れ目にその側を離れて、自分の寢床へ入つた。夜具の中へ首をすつ込めて足を縮めて、冷えた身體の暖まるのを待つた。

今見た手紙の內容がいろ〳〵と想像され出して、自分に女房の出來るのが不思議でならなかつた。……學校の小さい生徒か母か、妹かの外には、女と口を利いたこともなければ、染々女の顏を見たこともないので、思出にも若い女の影ははつきり浮ばない。山間の學校にゐた時分には、土地の若い女に逢ふと、神祭の惡い悪ひをして顏を外らせてゐたのだつたが、今は平氣でゐて自然に目がつかぬやうになつてゐる。……彼れは自分の縁談から、どんな男にも、女房のあることに思ひ及んで、妙な氣がした。そして、勝代が出て行つた後で、まだ見たこともない女と自分とが、この二階に住ふことを、夢のやうに感じながら、ぐつすり睡眠に陷つた。

翌日學校の往歸りの途中でも、彼れは屢々結婚について珍らしげに考へた。搗造ふ女の姿形を無心に見過せなくて、職しい田舍女の一人々々が頭の中に浸込んだ。テーブルに向ふには向つたが、今日は英字の解釋に早く根氣が拔れて、所在なさに屢々机を離れては障子を開けて外を眺めた。

西風の風いだ後の入江は綾のやうで、漁船や肥舟は眠りを促すやうな櫂の音を立てた。海向ひの村へ通ふ渡船は、四五人の客を乘せてゐたが、四角な荷物を背負うた草鞋脚絆の商人が駈けて來て飛乘ると、頼被りした船頭は水杓で岸を突いて船を辷らせた。辰男は暫らく船の行

方を見入つてゐたが、乘客の笑ひ話は靜かな空氣を傳つて彼れの耳にも入つた。入日の海や野末の風景場をも彼れは久振りに見下した。夜は例よりも長く感じられて當つて過した。

六

榮一が歸つて來たのは、豫報の日取よりも遲れ遲れて、最早誰も忘れたやうに、噂にさへ上さなくなつた頃であつた。夕餐の膳が片付いて、皆たが彼方此方へ別れてゐるところへ、傳夫の提灯を先に、突如に喧い上問へ入つて來た。散らばつてゐた家の者はまたぞろ〳〵出て來て一ところに集まつた。勝代も物音でそれと知ると、書物を抱いて二階から下りて來た。

が、辰男一人は椅子から身動きもしなかつた。二三日前から作り始めた英文に心を打込んでゐた。「眠つた海」無用な行爲などが、自ら選んだ課題であつた。大谷が問に立つて取做しかけた緣談は、除に話し通まぬ中に立消えになつて、父の口から明らに彼れに告げて意向を確める必要もなくて濟んだが、彼れは二三日妄想に悩んだだけで、元の彼れに返つて、テーブルに針付のやうになつてゐられた。……

一風が吹けば浪が騷ぎ、潮が滿ちれば湯が陸れる。漁船は年々減りつゝある。川から泥が流れ出て海は次第に淺くなる。幾百年の後にはこの小さな海は干乾びて、魚の棲家には草が生えるであらう。……」こんな自作の文章を、辟書を繰つては、一々英字で埋めて行つた。

以前、二三度英語雜誌へ宿題を投書したことがあつたが、一度も掲載されなかつたので、今は全くそんな望みを絕つて、只自作の英文は絹絲で綴ぢた洋紙の帳簿に綺麗に書留めて置くに止めてゐる。自分ながら初めの力のに比べると、文章は次第に巧みになつてゐるやうな氣がする。熟語なども折々使はれるやうになつた。

階下が賑つてゐるので、炉燵に當りに行くのを遠慮してゐたが、末の妹が息をせか〳〵吐きながら上つて來て、「榮さんのお土產」と云つて、栗饅頭を二つ机の上に置いて行つた。辰男はインキに汚れた骨太い指で摘んで火口に食べた。そして、冷くなつてゐる手を內懷に入れて溫めながら暫らく息休めをした。

妹と母とは、階下から夜具を運んで、次の室へ兄の寢床をのべた。と、間もなく榮一が上つて來たが、辰男の方を一寸振返つたばかりで、次の室へ入つて襖を締めた。直ぐには寢ないで、手紙を書いたり雜誌を讀んだり、良吉が殘して行つた書物を手に取つたりしてゐた。矢鱈に吸つてゐる煙草の煙は、襖の隙間から洩出て、辰男の鼻のあたりにも漂つた。

階下が寢鎭まつてから暫らく立つて、榮一は部屋に漲つた煙を外へ出して、燈火も消して寢床に就いた。平生眠付の悪いのが癖なのに、堅い寢床が身體に馴染まなくてます〳〵寢づらかつた。

「辰はまだ寢ないのか。燈火が邪魔になつていけないな」

四年目で耳に觸れた兄の聲は、相變らず尖つてゐた。辰男はその聲を聞くと同時に、ペンを筆筒に收めてインキ壺に蓋をした。ランプをも吹消した。

翌日は日曜なので、辰男は目醒めても容易に起上らないで、寢床の中で書物を讀んでゐた。お土產の栗饅頭を一つ母が枕許に置いて行つて呉れた。風もないし、障子に差した朝日は春のやうに溫かだつた。

「榮一は早く起きて海岸を散歩して來たが、朝餐後に一時間ばかり讀書すると、また外へ出ようとして階子段の方へ行きかけたが、ふと振返

つて、辰。……山へ登つて見んか」と誘つた。そして、二三歩辰男の居間へ踏込んで、テーブルの上に目を据ゑた。

辰男は立上りざま初めて兄の顔を熟視した。……四年前よりも父の額に著しく似通つてゐた。兄が身體を屈めて、英作文を一二行見てゐる間に、辰男は帽子を被りトンビを着て直立してゐた。

一人はヌチツキを持ち草履を穿き、一人は日和下駄を穿いて、藪蔭を通り荒地を拔けて、小松の繁つてゐる後の山へ登つた。息休めもしないで一氣に登つたので、一人の額からは汗がぽた〳〵落ちた。頂上近い處にある小祠まで來て、その側の石に腰を卸した。小祠は田舍の郵便箱のやうな形をしてゐる。扉は壞れて中には枯松葉が散つてゐるだけで、神體はなかつた。其處からは曲りくねつた海を越し山を越して、四國の屋島や五劍山が微かに見えるのだが、今日は光が燈つて海の向うは模糊してゐた。

草履を穿いてゐる兄の方は却つて足が疲れ息切れがしてゐたが、冷々した山上の風に汗を乾かして爽かな氣持になると、今までの沈默を破つて、弟に向つていろ〳〵の話を仕掛けた。彼方此方に見える鳥の名を訊いたり、近くの山の裾の村々の有樣を訊いたりしたが、はつきりした答へは得られなかつた。

辰男は全で他郷を見渡してゐるやうで方角も取れなかつた。萬國史で見た西洋の天子の冠のやうな形をした小さい島が入江から最近い處にあるのに今初めて氣がついた。入江に出入りして來る漁船は皆その側を通つてゐるのに、彼れは嘗て其處迄も行つたことがなかつた。

「あれが鵜島だ。海がよく茂つてるから、あの周圍にはよく魚が寄つてると云ふぢやないか」と、却つて兄に教へられたが、さう聞けば島の名前は子供の時から聞馴れてゐるのだつた。

「しかし鵜よりも王冠によく似てゐる」と思つて、冠島といふ課題で英文を作らうと思ひついた。日の下の墓地も、海を渡つてゐる鳥の群も、辰男には皆英文の課題としてのみ目に觸れ心に映つた。飛んでゐる五六羽の鳥は蒼だか鳳だか彼れの知識では識別けられなかつたが、プラックバード」と名づけただけで彼れは滿足した。

「辰は英語を勉強してどうするつもりなのだ。目的があるのかい」冬枯の山々を見渡してゐた榮一はふと弟を顧みて訊いた。

ブラックバードの後を目送したから、「飛ぶに相當する動詞を案じてゐた辰男は、どんよりした日を瞬きさせた。直ぐには返事が出來なかつた。

「中學教師の檢定試驗でも受けるつもりなのか。……英語は面白いのかい」と、兄は疊みかけて訊いた。

「面白うないこともない……」辰男はやかて瞳眸な返事をしたが、自分自身でも面白いとも面白くないとも感じたことはないのだつた。

「獨學で何年やつたつて檢定試驗なんか受けられやしないぜ。外の學問とは違つて語學は多少教師について稽古しなければ、役に立たないね」

「……」辰男は默つて目を伏せた。

「それよりやそれだけの熱心で小學教員の試驗課目を勉強して、早く正教員の資格を取つた方がいゝぢやないか。三十近い年齢でそれつぱかりの月給ぢや仕方がないね」

「……」足許で椚の朽葉の風に飜へつてゐるのが辰男の目についてゐた。いやに侘しい氣持になつた。

「今お前の書いた英文を一寸見たが、全で無茶苦茶で些とも意味が通つてゐないよ。あれぢやいろんな字を並べてゐるのに過ぎないね。三年も

五年も一生懸命で頭を使つて、あんなことをやつてゐるのは愚の極だよ。發音の方は尚更間違ひだらけだらう。獨案内の假名なんか當てにしてゐちや駄目だぜ」

「……」

「娯樂にやるのなら何でもいゝ譯だが、それにしても、和歌とか俳句とか、田舍にゐてもやれて、下手なら下手なりに人に見せられるやうなものをやつた方が面白からうぢやないか。他人には全で分らない英文を作つたつて何にもならんと思ふが、お前はあれが他人に通用するとでも思つてるのかい」

さう云つた榮一の語吻は鋭かつた。弟の愚を憐むよりも罵り嘲るやうな調子であつた。

「……」辰男は黙ずんだ唇を堅く閉ぢてゐたが、目には涙が浮んだ。無論他人に教へるつもりで讀んでゐるのではないし、他人に見せるために作つてゐるのではないし、正格でないことは常に承知してゐるが、全然無價値だとこの兄に極められると、つく〳〵情なかつた。

「さあ、歸らうか」と云つて、榮一は裾の埃を拂つて、同じ道を下つた。墓地近くなつて、のろのろ下りて來る弟を待合せて、妹の墓と祖母の墓とへ詣つた。日が淀んで息の臭かつた妹の死際の醜い姿は、辰男の記憶にはまざ〳〵と刻まれてゐて、妹といつて直ぐ思出したが、今墓場に立つてゐると、×子の墓と彫つた新しい石碑に對して追慕の感じは起らないで、石の下の棺の中で虹に喰はれてゐる死骸の醜さが胸に浮んだ。

僧侶が投機に凝り出してからは、寺は雨戸を鎖して空屋のやうに汚れて、墓場の道は草が生え木の葉の散るにまかせてゐた。兄弟は朽葉を踏んで墓地を下つた。

一辰は家で許したら、學校へ入つて眞剣に英語の稽古をしようといふ氣があるのかい」榮一は前とは異つて穏かに話しかけた。

が、辰男は兄の言葉に甘えた快い返事はしようとはしなかつた。「別段學校へ入りたいといふことはありません」と、干乾びた切口上で答へた。

「せめて、もう四年も早く決心して、強硬に親爺に說付けたなら、東京に英語研究に行けんことはなかつたらうのに。勝代さへ行くやうになつたのだもの。……しかし、お前は今からぢやあまり遲過ぎるね」

家へ歸ると、辰男は外に自分の置く處がないやうにテーブルの前に腰を掛けたが、作りかけの文章に目を向けるのが厭な氣がした。

午過ぎになると、所在なくて、文典など讀みだしたが、今までのやうに傍ら人無きが如き態度ではゐられなくて、兄の足音が聞えると書物を脇へ片寄せた。

七

階下で兩親や才次などが一家の雜務に取掛つてゐる間に、二階では三人が各自の部屋に籠つて、それ〳〵に讀んだり書いたりしてゐた。一人も他の部屋へ入つて無駄口を利くこともあまりなかつたが、階下から才次などが上つて來て勉强を亂すことは尚更極だつた。良吉のゐた時分のやうな賑かな笑ひ聲や打解けた雜談は二階では跡を絶つてゐて、榮一の歸宅は勝代が豫期したやうな明るみを家の中へ齎さなかつた。

榮一は自分を憚つてゐる辰男に向つて强ひて話を仕掛ける氣はなかつたが、でも折々辰男に對しては神經を凝してゐた。ランプの下で難解な英字に青春の根氣を絞らせてゐる弟の青黑い顏の筋肉の微動をも、搜越しに見透してゐるやうに感ずることもあつた。しかし自分に親しみを寄せたがつてゐる勝代をば、極めて淡く見

過してゐた。妹の聞きたがつてゐる東京の女學校や女學生の氣風について話をしてやるでもなく、妹の東京行について一日も明らに様に可否の意見を述べなかつた。二十未滿の女が小説で知つてゐる東京に憧れて、東京の何とかゞふ英語學校へ入つて、學問で身を立てて、一生獨身で通すといふやうな乳臭い青草を食ふ面目に聞いて、兎や角と無用な干渉な意見を述べる氣にはなれないのだつた。そして、窮かに、一女の子にまで高等な學問をさせるやうになつたとすると、家の身代にも大分餘裕が出來たなゝと思つた。

大勢也健を附んで居る時、

「わしが初めて東京から歸つて來た年に大病に罹つて座敷で寝てると、勝が蚊帳の側へ飯つて來ちゃ惡戯をしたり小便を垂れたりして煩さくつて困つたよ。それが一人で東京へ行くやうになつたのだから、わしも知らない間に歳を取つたのだね」と、榮一は幾年か隔てて會ふたびに不思議なほど異つてゐる妹の顔を見入つた。

「榮さんよりゃ才さんの方が老けて見えるがな。才さんの頭にゃ白髪が仰山生えてる。もう若白髪ぢゃないなあ」勝代がさう云つて、兄達の顔を見比べると、外の者も知らず〳〵相互の顔や頭に目を留め出した。よく見ると、離れてゐた間の年月は誰の顔にも刻まれてゐた。發育盛りの妹ばかり違つてゐるのではなかつた。

「何と云つても四十近くなると、大間はそろそろ衰へ出すんだね」榮一は弟に向つて云つて、「おれ達が一生にやりたいと思ふ好きなことをやつて見るのは今の中だぜ、金を活かして使ふのも今の中のやうな氣がするよ」

「その事はわしの方が一層本氣で考へてる」と、才次は話に乗つて來て、「少し資本が續けば、この土地でも能分利益の上る事業があるんぢやが、資本を自由に用してわしに任せて奥れる者がないから我とも實行が出來ん」と云つて、老父が何時まで立つても、財産の一部も彼等に手渡しない不平を露見かせた。

「おれは事業をやらうとは思はないが、今の中に少くも氣儘な旅行をして見たいな、十分の路用を持つて、二三年西洋へ行つて來られゝばそれに越したことはないが、支那とか朝鮮とかあるひは日本の内地だけでも端から端までゆつくり旅行して見たいよ。も少し歳が老けると、足が疲つたり不精になつたりして長旅が厭になるし、旅行の樂みといふものが減つて來るからね。内地なら旅行費なんか幾らもかゝりやしない。千圓もあれば半年くらゐ力々で氣樂に遊んでられらあ」

旅行費に千圓とは、贅澤の極のやうに勝代は思つて、「東京で暮らすとすれば、見る物聞く物が何でも極うとつて、旅行なぞせいでもよからうに。東京でさへ、年中居ると單調になるぢやらうか。勝は去年の春から、家の門の閾から外へ出たことは數へるほどしかないのぢやもの」

「わしは旅行しようとも學問しようとも思はんが、自分の記憶を一度は成功しても失敗しても實地にやつて見に宵覚めが惡い。この歳までたつた一度も自分量見でやつたことはないんぢやから」と、才次は云つた。

「何か面白いことがあるのかい」

「それは一寸今云ふ譯に行かんのぢやが、自分の得にもならんのに漁夫等の世話を焼いてやつても詰らんからなあ」

「しかし、この村の漁場をよくして村を繁昌させるのは面白い事業ぢやないか。食ふに困らないで、さういふ公共的の仕事をやつてるのは愉快ぢやないかなあ」

「いや他人のことだと思ふと張合ひがない。漁夫の方から云うても、組長には相當な大間を他

所からでも雇つて來てそれで食へるだけの月給をやつて働かせた方が得なのぢや。月給を取るにや食へん人間なら、自然一生懸命に働いて、他村との競合ひでも漁場の見廻りでも、行屆くだらうし、漁夫等の望みなら無理なことでもやつて呉れるだらうが、名譽職の組長にやそんな假似は出來ん。無理な註文をおいそれと聞いて飛廻る氣にでなれんからなあ」

「さうかも知れんね」榮一は軽く弟に同意した。

「紀州の沖や土佐の沖ぢや、一網に何萬と鰹が入つたの鮪が捕れたのと云ふけれどこの海の内海ぢや魚の種が年々盡きるばかりだから、次第に村同士で漁場の争奪が激しうなるんぢや。漁夫もこの頃は將來の望みのないことに多少氣がついて來て、思切つて百姓になる者が出來て來たが、百姓だと米の飯に魚を添へて食ふ譯に行かんし、こんな村ぢや海でも陸でもえゝことはない」

「しかし、此處いらの奴は皆な身體は強いし、陸分過激な勞働には耐へるんだから、智慧と資本のある者が先へ立つて使つてやれば役に立つんだが……」

「そりゃ何處でもさうだ」

榮一は深入りして弟の割烹の底を叩かうとはしなかつたが、才次は平生胸の中にもだ〳〵してゐる不滿な思ひを兄にこそ洩らし榮がするやうに感じて、何かと問はず語りをした。可成り財産のある家から良吉を養子に欲しいと申し込んで來てゐるのだから、早くその話を極めて家の負擔を減らした方がいゝ、確かな財産の分配をされるよりは當人のためにもいゝと云つたり、若しも夫婦養子の口があれば、才次自身大抵な家なら我慢して行つてやるつもりだ、こんなに愚圖々々して歳を取つてゐるよりはましだからと云つたりした。弟や妹が自分の知らない英語ばかりこそ〳〵勉强してゐるのを彼れはさも目障りでならぬと云つたやうな口調で話した。

暫らく默つて聞いてゐた榮一は、「だけど、辰男が英語を楽みにして、一生通せるのなら、好きなやうにさせといたらいゝぢやないか。傍の者へ迷惑を掛けないのだから」と辯護するやうに云つた。

「普通つて迷惑は掛けんが、しかし、家族の一人として毎月同じ假稼の飯を食うとると、自然に他の者の氣を惡うすることがあるんぢや。自分の力で生活するだけの月給を取つて來てそれで食へるだけの月給をやつて働かせた方が得なのぢや。月給を取るにや食へん人間なら、自然一生懸命に働いて、他村との競合ひでも漁場の見廻りでも、行屆くだらうし、漁夫等の望みなら無理なことでもやつて呉れるだらうが、名譽職の組長にやそんな假似は出來ん。無理な註文をおいそれと聞いて飛廻る氣にでなれんからなあ」

「さうかも知れんね」榮一は軽く弟に同意した。

「紀州の沖や土佐の沖ぢや、一網に何萬と鰹が入つたの鮪が捕れたのと云ふけれどこの海の内海ぢや魚の種が年々盡きるばかりだから、次第に村同士で漁場の争奪が激しうなるんぢや。漁夫もこの頃は將來の望みのないことに多少氣がついて來て、思切つて百姓になる者が出來て來たが、百姓だと米の飯に魚を添へて食ふ譯に行かんし、こんな村ぢや海でも陸でもえゝことはない」

「しかし、此處いらの奴は皆な身體は強いし、陸分過激な勞働には耐へるんだから、智慧と資本のある者が先へ立つて使つてやれば役に立つんだが……」

「そりゃ何處でもさうだ」

榮一は深入りして弟の割烹の底を叩かうとはしなかつたが、才次は平生胸の中にもだ〳〵してゐる不滿な思ひを兄にこそ洩らし榮がするやうに感じて、何かと問はず語りをした。可成り財産のある家から良吉を養子に欲しいと申し込んで來てゐるのだから、早くその話を極めて家の負擔を減らした方がいゝ、確かな財産の分配をされるよりは當人のためにもいゝと云つたり、若しも夫婦養子の口があれば、才次自身大抵な家なら我慢して行つてやるつもりだ、こんなに愚圖々々して歳を取つてゐるよりはましだからと云つたりした。弟や妹が自分の知らない英語ばかりこそ〳〵勉强してゐるのを彼れはさも目障りでならぬと云つたやうな口調で話した。

暫らく默つて聞いてゐた榮一は、「だけど、辰男が英語を楽みにして、一生通せるのなら、好きなやうにさせといたらいゝぢやないか。傍の者へ迷惑を掛けないのだから」と辯護するやうに云つた。

「普通つて迷惑は掛けんが、しかし、家族の一人として毎月同じ假稼の飯を食うとると、自然に他の者の氣を惡うすることがあるんぢや。自

八

榮一は翌日の日課として後の山へ上つて沖を見渡した。瀬戸通ひの汽船が鳥々の彼方にはつきり見えて、春めいた麗かな日光の讃岐の山々に照つてゐることもあれば、西風が吹荒れて、海には漁船の影もなくつて、北國のやうな暗澹たる色を現はしてゐることも偶にはあつた。そんな風の强い日には、大きな家の中がさながら野原のやうで、いくら襖や雨戸を閉切つても、何處からか風が吹込んで、寒さを防ぐ術もなかつた。

「これでは冬籠りも出来ないね。早く東京へ歸ることにしようか」と、榮一は故郷の様子を見ただけで滿足して、再び都の小さい備へ家へ歸らうとした。不漁つゞきで、海鼠や飯鮹などの名産もあまり口へ入らないし、落着いて勉强も出来ないし、殊に家族の中に交つてゐると、急に歲を取つたやうな氣持になるのが厭だつた。

「明日の中に立たう」と、榮一は急に決めたが、鶴かにそれを喜んだのは、辰男だつた。明日の晩から、何時までランプを點けてゐようとも、最早苦情を云ふ者はなくなるのである。彼れの英語の發音を試驗したり、彼れの英文について無慈悲な批評を下したりしたがる素振を見せて驚かす者がなくなるのだ。……辰男はこの頃英字に親しめなくなつて、動もすると心が外へ散つて、寂しい詰らない氣持がし出したのを、兄の所爲と思つてゐた。

「この書物を讀んでしまつたらお前にやらう、荷物は成るべく輕くしときたいから」と、出立の前の夜、榮一は弟のテーブルの上に英書を二册置いて行つた。

辰男は表題と著者の名前とを見詰めたが、讀方をも意味をも判じかねた。そして知らない文字に攻められるのが恐ろしさに、内部をば開けて見ないで、手馴れてゐる自分の書物で蔽うて机の片隅へ押遣つた。

今夜一晩と極つたため、階下の炉邊には皆なが集まつた。珍らしく銚子も加はつて何かしら話が弾つてゐたが、辰男一人は相變らず、二階にぢつとしてゐる。書きかけの英作文にも取掛れなかつたので、懐手をしてぼんやり、風に晩いてゐる障子を見てゐた。すると心が勉んで、われ知らず机に頭を垂れて假寝をし出した。

やがて、夢の中の物音に驚いてふと目を醒ますと、ランプは机の向うへ押落されて、火は障子に燃移つてゐた。……辰男は氣拔けがしたやうな顏をして突立ちながら、聲も立てず、直ぐには手出しもしなかつた。……外では風がザワ〳〵音を立てゝゐる。……「この家は燒ける」と思い焔を吐いてゐる。……「この家は燒ける」と思ふと共に、灰燼になつた屋敷跡が彼れの心に浮んだ。

やがて、彼れは兩手に力を入れて、何年も動かしたことのないテーブルを書物の載つてゐるまゝ、次の室へ移した。そして、座蒲團を丸めて、火を叩消さうとしてゐるところへ、階子段に氣立たましい足音がした。

「火事だ……」と、榮一の慌てた叫聲が階下にゐる人々の耳を劈いた。外を通つてゐた者をも驚かした。

大勢がどや〳〵駆寄つて、口々に荒い言葉で指圖し合つて、燃付いてゐる障子を屋根から外へ抛出したり、バケツや手桶で水甕の水を掬つて來たりした。父の目も血走つた。妹も息を切らして素足で井戸端へ駆けた。皆なが駆出すと、辰男は後退りをして薄暗い處に突立つてゐた。石油が燃盡きると共に火の手は見る〳〵衰へたが、彼れのテーブルも書物もびつぷ濡れになつてしまつた。韓げ落ちたノートは半ば灰になつてひら〳〵してゐた。

先きから辰男の不注意を罵つてゐた父や兄は、火が消えて心が落着いてから、一様に彼れの力へ目を向けて問詰つたが、石のやうに身動きもしないで、堅く口を閉ぢてゐるのに呆れて、次第に相手にしなくなつた。

疊を上げて汚れ物を片付けて、念のために二階の部屋々々を見廻つて、階下へ下りたが、調子も皆陣氣を醒ましてゐて、子供まで中々寝床へは入らなかつた。

見舞に來た隣近所の者が歸つて、表の戸を卸した後、草臥休めの茶を沸して駄菓子を食ひなどして、互ひに無事を祝して夜を更した。

「電氣にしとけばこんな危險はないのだがね」と、榮一が云ふと、父は、

「電氣は不經濟なばかりぢやない、柱や鴨居へ穴を明けて家を毫なしにするから考へ物ぢや。今夜のやうなことがあるとすると保險はつけといた方がえゝかも知れんが」

「辰の奴、何か碌でもないことを爲出かしやせんかと思うとつた。これからは夜遲くまでランプを點けて置かせんやうにしませう。勝も他所へ行つて辰一人が二階に居ることになると不用心で仕樣がないから」と、才次は眉根を顰めた。

「しかし、こんなことは滅多にあるまいが、兎に角今年中には嫁を取らせて、別家させて、自分の始末は自分でやらせることにしたら、些とは善通になるだらう」

「さあ」才次は父の言葉は空々しく受けて、「一軒の家の災難はどんなことで湧いて來んとも限らん。今夜にしても、もう十分遲う氣がついたら取返しがつかなんだのぢや」

皆なの言葉が杜切れたところへ、時計が一時を打つた。寒さうに風が音を立ててゐる。父は手燭を點けて茶屋々々を見廻つて自分の寝室へ入つた。

勝代は姙跡の隣で眠るのが厭さに、何時までも炬燵の側にて假睡をし出した。兄二人が最後まで話に耽つてゐたが、其處へ辰男は忍足で下りて來て、便所へ行くが早いか直ぐに階子段を上つた。

「まだ起きとるんか」と、才次は聲を掛けた。氣にかゝつたので、手燭を點けて見に行つたが、辰男は姙跡の隅つこの疊に夜着を被つて寝てゐた。

「榮さんの室に一緒に寝たらいゝぢやないか」と柔しく說いたが、

「わしは此處でえゝ」と云つて、辰男は枕を直して目を閉ぢた。

闇の中に目を閉ぢてゐても、辰男は絶えず周圍の汚れた姙跡を頭に描き鼻で嗅いでゐた。ぐちや〳〵になつてゐる書物や帳面を日に乾さねばならぬと思つたり、何と何とが燒失せたか檢べて見なければならぬと思つたりしたが、このまゝ廢屋にしてしまひたい氣もした。……机上に安んじてゐた彼れの堅固な心が長兄の歸省前後から破れかけてゐたのに、今夜の災難は最後に下された鞭のやうだつた。

手燭を點けて茶屋々々を見廻つて自分の寝室へ入つた。

勝代は姙跡の隣で眠るのが厭さに、何時までも炬燵の側にて假睡をし出した。兄二人が最後まで話に耽つてゐたが、其處へ辰男は忍足で下りて來て、便所へ行くが早いか直ぐに階子段を上つた。

「まだ起きとるんか」と、才次は聲を掛けた。氣にかゝつたので、手燭を點けて見に行つたが、辰男は姙跡の隅つこの疊に夜着を被つて寝てゐた。

「榮さんの室に一緒に寝たらいゝぢやないか」と柔しく說いたが、

「わしは此處でえゝ」と云つて、辰男は枕を直して目を閉ぢた。

闇の中に目を閉ぢてゐても、辰男は絶えず周圍の汚れた姙跡を頭に描き鼻で嗅いでゐた。ぐちや〳〵になつてゐる書物や帳面を日に乾さねばならぬと思つたり、何と何とが燒失せたか檢べて見なければならぬと思つたりしたが、このまゝ廢屋にしてしまひたい氣もした。……机上に安んじてゐた彼れの堅固な心が長兄の歸省前後から破れかけてゐたのに、今夜の災難は最後に下された鞭のやうだつた。

九

翌朝辰男は火事話を避けるために、起きると直ぐに家を出た。始業時間までには餘程の暇があつたので、所在なさに、先日兄に隨いて上つた山の力へ足を向けた。荒地を拔けると、一歩一歩眼界が擴がつて、冴えた朝日は清かな海を明るく照らしてゐたが、昨夕の不快な記憶が彼れの頭から消えなかつた。先日のやうに目前の眺めが英文の新な材料として目に映らず、永の

すると、學校から歸つた後の毎夜々々の長い時間を何もしないで持てあましてゐる自分の姿が見窄らしく目先にちらついた。……以前ふとヴァヰオリンが厭になつた頃には、語學に興味が起つて、心がその方へ吸寄せられたが、今度は新しい道は開かれさうでなかつた。

陰鬱な氣懶い氣持が夜が更けるにつれて刻々に骨の髓まで喰込んだ。そして、いつそ今夜の火事が擴がつて、机も書物も家も、自分自身も焔の中に包まれて、燃えてしまへばよかつたやうに思はれ出した。

家から家へ火が移つて、村一面に焔の海となつて、見覺えのあるあの村の者共が煙や手足を燒焦がして泣叫んでゐる光景を彼れは夢みた。

年月自分を押籠めた宇屋の壁か何かのやうに侘しく見えた。……この先五年十年この土地にどうして生きてゐられるか生きる術が見つからなかつた。

白い雲の漂つてゐる海の向うへ出て、何處ともなく旅から旅を續けたらと、ふと家出を考へたが、それも一瞬間の妄想に止まつて、旅費なしには一日か二日も他郷へ出掛ける無謀な勇氣を彼れは持つてゐなかつた。「見ず知らずの人達は一椀の麥飯も食はしては呉れない。只では汽車にも汽船にも乗せて呉れはしない」といふことを彼れは今更しみ〳〵と考へたが、それにつけても、今まで無用な書物を買込んで月々の俸給を浪費したことが後悔された。で、これまでの俸給の總てを貯蓄してゐたらば、幾ら〳〵になつてゐたのにと、諧算をしながら、山を下つて學校へ行つた。

授業を終へて歸つて見ると、兄は昨夕の驛ぎのために、出立を一日延してゐた。火事の跡始末がついてゐて、障子が新に張替へられ、テーブルも久振りで綺麗に拭はれてあつたが、濡れた書物は西日の差した縁側へ亂雑に抛り出されてあつた。乾いて皺をつくつてゐた。

辰男はそれ等を本箱に收めて、紙切一つ置かれてゐないテーブルの前に腰を掛けた。"Conflagration." "Nonsense." などいろ〳〵の英語が頭腦の中に黒く綴られながら現はれた。

新に買つた二分心のランプを小さい妹が持つて來たが、辰男は目が霞れても燈火を點けなかつた。記憶に刻まれてゐる英語を闇の中で果もなく綴つては崩し、崩しては綴りしてゐた。兄が既に整へてゐる旅の荷物を亂すのが厭さに、終日何もしないで退屈醒ましに、勝代に英語を讀ませたり、不審な字句を解いてやつたりしてゐるのが、樓越しに彼れの耳へも入つた。

一辰は其處にゐるのかい、ランプも點けないで」

榮一は樓を細目に開けて、晴かりを透かし見して、「此處へ來い、此處へ」と、無理强ひに空いた座へ招いた。

妹の机には青い机掛けが掛つて、その上には木彫の奈良人形と、亡妹の寫眞を插んだ寫眞立があつた。毛絲のランプ敷に据ゑられたランプの明るい光は、差向ひでも燵に當つてゐる兄弟の手に持つた英書を照らしてゐた。辰男は燈光の邪魔にならぬやうな處に坐つた。

「わしも學校にゐた時分には、會話に身を入れて、西洋人の夜學校へも通つたりして、一時は大抵の事は自由に話が出來たものだ。しかし今は丸で駄目だね。一寸した挨拶さへよく考へなくちゃ英語で云へなくなつたよ。日本にゐりゃ外國人と話をする機會はないし、會話の研究こそ全くの無駄骨だつた」

榮一は「妹の『實用會話集』に出てゐる日常の用語を久振りで口ずさんだが、勝代は兄の唇の微動を見入つた。自分も二三年したらあんな風に巧みに操れるだらうかと厳々とした氣持になつて、

「……田舎者よりや東京生れの人の方が英語の發音が早く上手になるんでせう」

「何故？　同じことぢやないか」

「……田舎者は日本語の發音でも下等で頑固ぢやから、それが癖になつてしまつて英語でもすら〳〵と音が出し難いんぢやないかと思ふがな」

「そんな馬鹿なことがあるものか。……勝も東京へ行つて三月もすると、東京言葉を使つて田舎者を馬鹿にするやうになるだらうな」榮一はさう云つてから、辰男に向つて、「お前は今から學問したつて追付かんから、農業か何か實業をやつて見い、そんな頑丈な身體をしてゐるし、辛抱强いのに、机の前で萎けてゐるのは詰ら

ないぢやないか。先日山から見た鳥を借りて桃を栽ゑても、後の泥山を拓いても何か出來さうぢやないか。兄弟の眞似をしないで、お前一人は泥まみれになつて本當の田舎者になつちまふさ」

「そんなことは出來やせんなあ、辰さん」と勝代は代つて答へた。「去年二百圓も出して、青年會の人が松を山へ栽ゑたんぢやけど、直きに枯れて了うたのぢやもの、桃もつく處へは何處へでも栽ゑてるし、この邊の土地は衰微するとも今よりようなりやせんと勝は思ふがな。この先の鳥は漁夫が巡査に見付けられん樣に賭博を打ちに行く處になつとるんぢやもの」

「へえ。あれが漁夫の賭博場かい。さう思つて見ると面白いね」榮一は一服のいい、思付のつもりで云つたことを、妹のために容易く打消された照れ隠しにかう云つて、

「しかし、自分で鋤鍬を持つて働くつもりなら何かやれんことはないさ」

「それはやれないことはありません」と、辰男は意外にはつきりした返事をした。

「ぢや、田地を分けて貰つて、百姓になり切つちやどうだい」

「さう云ふ氣にもなるんけど……百姓をして米や麥をつくつても面白うないから」

「面白くなくつても、田圃に麥や、米が出來なきゃ困るぢやないか。……西洋の草花でも造りや綺麗で面白いかも知れないが」

「花なら自然に生えてるのが好きぢや。山に居つた時分に植物の標本を些とは集めたことがありました」

「植物の採集もこの邊にゃ珍らしいものはあるまいが、作州の山には高山植物があるんだらう」

「へえ。いろ〳〵珍らしいものがありました。二三百は異つたのを集めて蔭干にして取つといたのぢやけど、彼方の學校を止めた時に皆な燒いて來ました」

「そりゃ惜いね。學校へ寄附しとけば植物學の教授に役に立つのだらう」

「名が分らんから教へる時には役に立ちません。私にだけにしか誰にも分らんでせう」辰男は雜草でも木の葉でも手あたり次第に採集して、出鱈目な名前を付けてゐたのだつた。

「それで滿足出來るかね。世間で極めた名前を知らずに集めてばかりゐても樂みになるのかい」

「へえ。あの時分は樂みにしとつたんでせう」

今夜は何故だか珍らしくチキパキと話すのを聞いてゐると、榮一は弟の辰男を、永年家族が極めてゐるやうな低能兒とも變人とも思はれない氣がした。が、飢を見ると、光のない鈍い眼、小鼻の廣い平たい鼻、硬さうな黑い皮膚がどうしても愚ものらしく被れを見させた。他人から癒愛を寄せられさうな潤みや光は、身體の何處にも持つてゐない。

「何か望みや不平があるのなら明ら樣に云つたらいゝぢやないか。おれが立つ前に聞いといたら、多少お前の爲になる樣な事があるかも知れないぜ」と、榮一は優しく訊いて弟の心の底を索らうとしたが、

「そんなことは他人に云うたつて仕方がありません」と、辰男は冷かに答へた。押返して訊いても執念く口を噤んで、他所目には意地惡く見えるやうな表情を口端に漂はせた。

「仕方がないつて、お前なんかつまりは兄弟の世話にならにゃ生きてられない時が來るんだよ。兩親の達者な間に方法を立てて貰つとかなきゃ駄目ぢやないか、無駄な事ばかり氣儘に勉强してゐても、食ふ道は些ともついてゐないのだから」

兄の聲が失つて來ると、辰男は目を伏せて心

を外へそらせた。

「勝は學校を出てお金を取れるやうになつたら、辰さんに上げるつもりぢや、勝は利己主義は嫌ひぢやから」勝代は氣取つた口を利いた。

これで話を止めて、榮一は横になつて、挽春の鶯きを聞きながらうつら〳〵假睡の夢に落ちた。勝代は温かい過ぎる炬燵で逆上せて頭痛がしてゐたが、それでも座を立たうとはしないで、一口が粘つて氣持が惡いから蜜柑を食べたいがな。辰さんは奢つて呉れんかな」とねだつた。

「お前が自分で買ひに行きや奢つてやらあ」

「勝は物を買ひになぞ行つたことはないのに。およしでも使にやりやえゝがな」

「自分で行かんのならわしは銭を出さんぜ」辰男は頑なに云つた。

「辰さんは時々意地の惡いことを云ふんぢやな」

勝代は階下へ行つて母にねだつて貰つて來た蜜柑の一つを兄の前に置いたが、辰男は手に取らなかつた。

十

榮一は翌朝車で村を離れると、のび〳〵した氣持になつた。二里も隔つた停車場までの途すがら伸夫は頻りに村の話をして聞かせたが、それによると、隣縣の者が近い中に乗合馬車をこの近所の國道へ通さうと企ててゐるさうである。

「さうしたら お前達は困るだらう」と訊くと、

「馬車たぞは 永續きはしますまい。何でもその金主は、性の惡いことをして監獄へ入つとつて、この頃出て來たばかりぢやさうですから」と伸夫は答へて、「若旦那は澤山金を儲けてお歸んなさつたんぢや と皆ながぶうとりますがな」

伸夫の話が自分のことや家族のことに關係し出すと、榮一は相手にならなかつた。そして、汽車に乗ると勝代の顔も辰男の顔も心に薄らいで、只入江のほとりの古めかしい大きな家の二階にあんな弟妹の住んでゐるのが、憎みも愛もなく顧みられた。

「辰はおれが遺つた〇〇の英文小説を讀むか知らん」と、ふと、思つたが、それも譯、く間に消えてしまつた。

辰男は二三日テーブルの前に懷手をして腰を掛けたまゝ夜を過した。妹の頁をめくる音を聞きながら……。

讀書餘錄

△アメリカの映畫は、伊佛獨などの歐洲物に比べると、卑俗であるやうに云はれてゐる。アメリカ文學が平俗であることは、日本の文壇でも定評のやうになつてゐる。アメリカの宗教は俗惡だといふことも、内村鑑三氏などによつて屢々說かれてゐる。しかし、私は幾程前から、將來アメリカから新しい偉大な文學が現出するのではないかと想ひてゐる。米國には歐洲のやうに、古くさい傳統的の塵がついてゐない。物質文明科學文明の盛んな國には傑れた藝術が起らないといふ理窟は、必ずしも全面を現はしてゐないのではあるまいか。

△晩秋のこの頃、私は、一菊の香や、奈良には古き佛達」と詠じた古詩人の心境を追想するとともに、若くして死んだ異國の詩人シェリイの「西風に寄せた」詩の激情にも心が動されるのである。「枯れつ葉を吹拂ふやうに死んだ思想を追拂へ。……冬來りなば春遠からじ」

（『文章評釋』の『鶴の卵』より）

牛部屋の臭ひ

一

稼業がら潮の干滿に關係の深い漁夫どもは、季節の變化や年中行事の何事にでも陰暦を標準とした。伊勢の太神宮のお札と一緒に頒られる國定の暦には除かれようとも、村役場などでいくら陽暦の採用を奬勵しようとも、隣近所の村々が次第に新の年月を迎へるやうにならうとも、この小さい漁夫村の一區劃だけは、迚はないで昔通りに歳を送り歳を迎へてゐる。海で生計を立てる者に取つては、陰暦に依つて區切りをつけた方が自然の道に適つてゐた。

今年もその舊の正月が來た。大晦日までには、不斷は淋しい濱邊にも小さい船や大きな船やが景氣よく並んだ。××丸と染出したり墨で書いたりした旗を立てたのは、多くは荒海を乗越えて遠方から歸つて來たのである。陸の家はどんなに穢しくても、舟といふ舟は背綺麗に掃除されて、飾藁を乗れ蜜柑や串柿などを供へられてゐる。潮が滿ちると漣が舟端に戯れ、潮が退くと牡蠣殼が模様のやうにところ〳〵色取つてゐる潟の柔かい泥が舟底に吸付いた。海が淺いのに、小川からは絶えず汚い水を吐出してゐるため、干潮時の海際には一種の臭氣が漂つた。村の者が無頓着に流す洗濯水の臭ひ、腐敗した食物の臭ひ、魚の臭ひや藻の臭ひや、黄尿の臭ひさへその中に交つてゐるのである。潮の差退きの激しい海邊のやうに柔かい白沙はこの灣内の何處にも見られないが、その代りに袋の中のやうな此處の入江の魚は内海の中では殊に旨味に富んでゐる。濁つた泥海は魚の餌を豐かにするし、靜かな水は魚の疲勞を少くした。そして、沖で勞れた魚などは鯖で休めるために、樹木の繁つた島蔭に集まつて來た。

海鼠や飯蛸の漁の盛りは年内に一先づ終つて、此處暫らくは松明の光が闇の海を照らさなくなつた。網曳の懸聲も舟唄も聞えなくなつた。が、海がひつそりとして來る代りに、陸は俄かに賑しくなつた。餅搗のために村中の井戸水が濁れて、全村の飲料水となつてゐる山の藍藻の「清水」さへ濁れかけた。

元日から毎日隣村の牛肉賣りが入つて來た。漁夫どもは注連飾をした神棚の前で車座になつて、この牛肉を喰つて酒を飲んで唄ひ囃して新玉の春を祝つた。盛紅のやうな顔色をしてゐても猥雜な唄を怒鳴つてゐても、年中海風で鍛へた彼等の喉から出る唄聲は凛々として周圍に響いた。太鼓にでも合はすとその聲が一層よく調和してゐた。七草まで毎夜濱の集會所で催される旅藝人の浪花節よりも、漁夫自身の無心のざれ唄の方がどれほど快い音を含んでゐるかも知れなかつた。

浪花節は毎夜客止の賑ひで、中日から妻席をも企てられた。藝人と名のつくものがこの狹い貧乏村へ只の三日でも足を留めることは年に一二度あるかないかなのだから、村の浮氣な娘だの、寡婦だの、あるひは亭主持までも、白粉を饅塗りにしてめかし込んで、浪花節語りの宿へ押かけた。夜は集會所の樂屋口に立つて彼等が出て來るのを待受けた。

その中でも取分けて贔屓に上つたのはお村といふ三十近い女だつた。何時も笑つてゐるやうな顔をしてゐる大柄な女で、これまでに三度も四度もこの土地の漁夫や隣村の百姓の家などへ

縁付いたのだが、何時も自分で逃出すか先方から追出されるかして、半歳も尻の落着いてゐたことはなかつた。今は誰と極つた一人の亭主は持たないで、母親と二人家内で、蜜柑だの干物だの季節々々の物を籠で背負つて、近村を賣廻つてゐる。そして、盆とか祭とかの田舎の休日には、年下の男女の中に交つて浮かれ騒いで、惡遊びには人に遜れを取らなかつた。青葉の頃にこの村へ廻つて來る伊勢神樂の一座や、偶然に流れ込む祭文語りなどといろんな噂を立てられたこともあつた。

「またお村さんが……」と、朋輩の菊代は眉を顰めて蔑んだが、この女は正月が來ても、沖から若い漁夫どもが歸つて來ても、お村のやうに臙脂白粉をつけるどころではなかつた。同い歳で幼い時分からの遊び友達で、今も同じやうに背負籠を背負つて物賣をしてゐるのだが、菊代には八十を越してゐる祖母がまだ生きてゐる。母親は兩眼とも潰れてゐる。そして父親とか兄弟とか手頼りになる男切れは身内の中に一人もなくなつて、たつた一人の姉は、菊代が十二三の頃播州室津の飲食店へ身賣りして、惣嫁とかになつて、それきり音信不通になつてゐる。菊代にも二度ばかり確かに夫と名のつけられるものが出來たのであつたが、一人は兵役に服してゐる中幾度も脚營してつひに死刑に處せられ、後の夫は繫累の多いのを厭つて朝鮮へ出稼ぎに行つたきり、五年六年葉書一本の音信さへしないので、正月になつても、菊代には心待ちにする舟はなかつた。隣近所共同の一つ春で餅を搗くにも、菊代は人前の恥かしい思ひをしたが、それでも微ばかりの餅は工面して搗へたが、餅の外には正月の支度として、金のかゝることは何一つ出來なかつた。何かの手傳ひに始終出入りしてゐる家主の家の仕舞湯へ入つて、其處の下女と愛の結ひ合ひをして、注連飾は其處の作男に貰りの藁で一摑み、神棚へ垂れるものだけ造つて貰つた。祖母は何十年前影に變化のない枯木のやうな身體で、他家の飲み水汲みや使ひ歩きをしてゐたのだが、年末に水桶を擔つたまま蹴躓いて、向う脛を擦剝いてからは、戸外の便所へ出て行くのをさへ術ながつて、晝も夜も炉端に臥せつて、をり〳〵心細いことを云つちや唸つてゐる。壁や塀を手索りに傳つて近まはりへだけ獨りでも出掛けられる母親は、質屋使ひを稼業のやうにして、一錢二錢の使ひ賃を貰つてゐるので、節季には菊代と一緒の餅米搗きとこの質屋使ひとで盲目相應の役があつて忙しかつたが、一夜明けると用もないので、炉燵の中で眠飽きると、隣近所の女達を相手に、持前の高聲でげら〳〵と笑ひ話をして興じてゐる。

一つ春で餅搗きをする仲間内は、便所も共同で、小川の裾の方に貧しい一區劃をつくつてゐるのであるが、菊代の家は先日まで、この村では可成りな大地主の濱屋の牛小屋であつたのを、新しい小屋が上の地面に建てられたので、その跡の不用になつたのを、無家賃同樣で借りてゐるのである。小川の緣に堆くなつてゐる芥の臭ひやこの界隈の家々から洩れ出るさま〳〵の臭氣は、不潔な臭ひに馴れてゐるこの村の者の鼻にさへ、一種異樣な刺激を與へたが、菊代の家には、その上に牛部屋らしい臭ひがまだ漂つてゐる。二枚の莚を敷いた板の間に寢起してゐるが、土間は元のまゝで、牛の五體から出た汚い物は日常りや風通しの惡いためか、まだ乾き切らないのである。冬の間はまだしも、梅雨時や暑中には、蝿と蚊と臭い溫氣とでとても家の中にぢつとしてはゐられないのである。

でも、祖母や母親は寒い冬よりも夏を慰しがつた。腰卷一つで埠頭場で涼んでゐられる夏の

方が、腹の減つて手足に盛が出來て身體の凍える冬よりもどれほど暮しいゝか知れなかつた。旨い南瓜や瓜が鰐腹食べられるし、旨い水が夏は錢入らずで飲まれた。

「おらに一合だけ神酒を飲ませて呉れ。それでおらも有難い正月が祝はれるんぢやから、祭には强請みやせんから、三ケ日の中にたんだ一合だけ買うて來て呉れい」

祖母のおみちは三日の朝向ひの家の老爺の酒臭い息を嗅いでから、矢も楯も溜らないやうな氣になつて、わざと哀れげな聲をして菊代に頼んだ。

「お婆がとう〳〵お極りを云ひ出したなあ」

菊代は鼻で笑つて、「その間に新田の酒屋へ蜜柑を持つて行くんぢやから、その時に酒の積りを貰うて來て上げらあ」

「阿呆吐かせ。酒の積りでお正月が祝へるか。……去年の秋にお上から盃とお金を五十錢頂戴した時に、これも長生したお蔭だから、早速神樂に神酒を供へて、そのお餘りをあの盃で頂かうと思うたら、われは何と云うた。もう寒うなるからこのお金でお母の半纏を出しとくことにして、お酒は正月まで辛抱しなさいと云うたぢやないか。おらあよう覺えとるがな」

「お婆も勝手なことはよう覺えとるなあ。おらあ、何もかも忘れてしまふから苦がないと先日も云うとつた癖に」

菊代が笑つて相手にもしないので、おみちは汐寢入りに寢入つた。其處へ長刀草履を引摺つて何處かで貰つた飴菓子を舐りながら歸つて來た母親のお夏は、菊代に譯を聞いて、

「そないに飲みたがつとるのなら買うて上げたらえゝがの、われは知るまいが、お婆は昔は寢酒の一合ぐらゐ缺かしたことはなかつたものぢや。お初が重たい徳利を抱へてよう買ひに行きよつた。あの時のことを思ふと、お婆に酒の氣のない正月をさすのは不憫ぢやから一斑めでも買うて來て上げい」

お夏は滿々物の黑白の見えてゐた遠い昔を夢のやうに思出した。その時分には、亭主もまだ生きてゐて三度の食事には不自由しなかつたので、婆さんは婆さんで自分の稼いで取つた金は、皆な自分の飲食に費つてゐたのだつた。……母親に生寫しといはれた姉娘のお初の日の大きな脊の高い姿や、貰ひ乳して育てた菊代の幼姿は、日の開いてゐた時代の懷かしい記念として、をり〳〵お夏の胸に浮んでゐた。今も炉燵に當つて、口をもぐ〳〵させながら白眼を天井へ向けて、過去つた影を捉へてゐると、先きから炉燵の上で謹慎らず鏡にわが影を映して獨りや樂んでゐた菊代は、ふと顔を上げて、

「お母はにや〳〵笑つて、何か可笑しいことがあるんかな、口の端に飴の汁を垂らして……」

「お母は泣きも笑ひもしとりやせん、われの目にやさう見えるんか」お夏は例になく突慳貪に云つて、手の甲で口端を拭つて、「……お姉が今ひよつと戻つて來たらわれはどないな氣がするだらう」と出抜けに云つて、聽い耳を戸外の足音に留めた。

「お母にも呆れるがの、突拍子もないことを云ひ出すんだもの。盆なら幽靈になつて精靈棚へでも出て來るかも知れんけれど、お正月にどうしてお姉が戻つて來るものか」

「われは何時でもさう云つて、お母の腹の中の樂みを腐らしてしまふ。お姉が死んだといふ確かな報知があつたのぢやなし、今の今でもどないえゝ身裝をして、お母もお婆も大丈夫で居つたかなというて此處へ入つて來んとも限りやせん。おしも婆さん處の喜左を見い。紀州沖で難船して七年も音沙汰がなかつたから、位牌まで拵へてお線香を上げたりしとつたのに、一昨年の秋祭にひよつくり戻つて來たぢやないか。八

丈島へ流れ着いて生命が助かつた上に、その島は暮らしえゝ土地ぢやというて七年も其處で漁をして氣散じに暮らしとつたさうぢやないか。それだもの、われ、お姉にしても何處ぞえゝ島で不自由のない月日を送つとるかも知れやせん。喜左も他國の者に親切にされても、つい家の事が思出されてぢつとして居れん氣になつたかも、皆たに留められるのを逃げるやうにして、夜遁して此方へ戻つたといふから、お姉も何時身内が戀しうなつて戻つて來まいものでもないがの。どんな遠方に居つても、この頃は汽車や蒸汽船があるから、造作もないこつちやがな」

「何ぼ便利でも冥途からは汽車も蒸汽も通つとらんからの」

菊代は欠伸まじりで云つて、炬燵の上へ顎を當てて目を瞑つた。爽い遣一つ隔てて向ひの家からは酔ひどれ聲の浪花節が聞えて來た。牛肉の燒けつく臭ひや酒の匂ひはます〳〵烈しく窓から入つて來た。窓には疎い格子が嵌つてゐるだけで障子がないので、夜は舟板の壞れで風を防ぎ、晝間は開けつ放しのまゝで明りを取つてゐる。

「菊は居らんのかい」と、ふと窓の上の、地主の庭の方から聲がした。

「へえ、居ります」お夏は代つて返事をして、「何ぞ御用で御座りますか」

「午餐のお菜にするんぢやから、魚を買して來て呉れんか。何でもえゝから生かして持つとる處があつたら買けて貰うて來て呉れいな」

「えゝ、承知しました。……お松が去んどる間はお事多う御座いませう」

お夏は窓の上の足音が消えてから、言附かつた用向を繰返して、菊代を促したが、菊代は夢現で返事しながら容易に立上らなかつた。平生過度な働きをしてゐたのが生中二三日骨休めをしたために、手足がだるくて、坐つたが最後、身動きもしたくなかつた。それに、初日から二日つゞけて浪花節を聞いて夜更しをしたので、今はどやされて來てから眠りやえゝのに」と、母親はやきもきしたが、菊代はわれ知らず快い夢に落ちた。

「どの舟にも今魚なんぞあるものか」と菊代はふと目を開けて、寝言見たいに呆けた口を利いたが、直ぐにまた寝息を洩らし出した。

二三度背を搖つても手應へがないと、お夏はその上娘を急立てることは出來なくなつて、炬燵の中の屠細い足を摑んで、「お婆〳〵」と呼立てた。

「お婆一寸起きて下んせ。……大儀ぢやらうが、お前でも濱屋の魚を買ひに往て上げにやなるまいがの」

「おらがかい。……おらに酒の一合も飲まして呉れりや往てもえゝが、只ぢや一足も歩く氣にやなれん」と、婆さんは片手で支へて身體を少し持上げて子供染みた口調で云つた。

「そないな無理を云うてうちを困らせるもんぢやない。足が疼うても濱まで往て來て下んせ。神酒は屹度うちが飲まして上げるあな」

「ほんまにか。この頃は世間が皆なおらを欺してどもならん。今度はわれも謀をこくと承知せんぞ」

婆さんは自分で疼い〳〵と思過してゐた足を動して、二三度呻いてから起上つた。そして引摺り〳〵戸外へ出たが、盲目のお夏と同じやうに杖は手にしなかつた。

頭巾代りに汚い手拭で頭を包んで、縞目も分らぬやうな單衣の上に綿の食出た猿子を着てゐるだけで、足袋さへ穿いてゐなかつた。魚桶を濱屋から持つて來て、心當りの漁夫の家を訊いて歩いたが、被處此處に見覺えのない若い漁夫どもが五人十人寄り集まつて、飲んだり喰

つたり、面白さうな話をしてゐたりした。

「誰かと思うたらおみつ婆さんか。お婆はまだ生きとつたのか」と、遠海へ出稼ぎに行つてゐた漁夫が遣ひざま、興覚めたやうな顔して婆さんを見詰めた。

「へゝえ。……今年の寒は温うておらのやうな老人には何よりぢやがの」

「まあ大事にして長生をしなさい」

漁夫は卒氣なく云つて、にこつともせずに行過ぎた。婆さんはその男は誰だつたかと考へ考へ歩いてゐると、菊代の二度目の夫と仲よしだつた何とかぢふ男らしくも思はれ出した。さうならば訊ねることもあつたのにと殘惜しさうに振返つたが、最早影も形も見えなかつた。「まだ生きて居らいでか」と、婆さんは口の内で獨言を云つた。

二

正午前には静かだつた空も、季節がら、午餐の煙が家々の煙筒から噴出される時分には、西風が濱の松林に烈しい音を立てて、鏡のやうな入江もうね〳〵と皺をつくつた。菊代の家では風避けに舟板を窓へ立掛けたので、家の内は眞晝でも薄暗くなつて、竈の煙が何時までも漂つてゐた。三人は飯を入れて温かい雜炊を食べてからまた炬燵の中へ潜繰込んで、話もなくやう〳〵眠つた菊代は、昨夕の浪花節の續きを想像してゐた。鳴物などの藝事には子供の折から現を脱かす質で、祭文や阿呆陀羅經でも語り手の後に隨いて聞惚れてゐたので、歳を取つてからも村に興行物のあるたびに工面のつく限りは滅多に缺かしたことはないのだつた。

しかし、今度は二日とも濱屋で不用な入場切符を呉れたので、無錢で聞きに行かれたものの、三日目の今夜からはさうは行かなかつた。正月の三ケ日が濟んだら、明日からは賦でも問屋で品物を借りて出賣をしたければ、芋粥も啜れないくらゐなのに、八錢の聞賃で耳の保養などは迂闊に出來なかつた。……二つの燭臺の明りで左右の頬を照らされながら、目を細くして呆つてゐる寅若の姿が目にちらついたが、それよりも菊代の心を唆かしてゐたのは、膝と膝との擦れ〳〵に込合つてゐる場内の賑ひであつた。若い百姓や若い女どもが薄暗い席に矢鱈に入雜つて、息と息とを交互に通はせながら、語り手の聲に浮かされてゐる有樣であつた。……不斷は相手の得られない菊代も、其處では色めい

た仲間入が出來るやうな氣がした。昨夕は誰と誰とが前後に坐つて足を抓つたり膝頭でどうしたりしてゐたとか、誰と誰とが終ひの一席を聽かないで早く歸つたとか、いろんな噂が翌日の若い同士の口に上つてゐた。そして菊代自身は願つても噂の種になるどころではなかつたが、女房も情人もない若い漁夫と並んでゐると、今にも何事か起りさうで心がどきめきするのだつた。

マッチの空箱に入れて神棚にそつと載せてある自分達の總財産を浚つて行けば、木戸錢が拂へた上に、中入に捩菓子の二三本は買喰ひの出來ないことはないのだが、菊代はさう思つても直ぐにさうすることは出來なかつた。そして人寄せの太鼓がどん〳〵鳴り出すとそは〳〵して、やゝもすると手が神棚の方へ伸びて行きさうだつた。

朝から、行方不明の姉娘の上を樂みに思續けてゐた母親は、ふと菊代の方へ顔を向けながら、「われは遊びに行きたいのか、遊びに往てもえゝけれど、お村さんのやうにならんやうにせい。われは一度ならず業曝し奴に騙されてどえらい目に會うたんぢやから、若い男の居る處へは寄付かんやうにせい。何を云はれても本當

にしちやならんぜ」
「阿呆云はんすな。お母がまた入らん心配をし出した」
「われが先きから尻をもぞ〳〵させて遊びに行きたさうにしとるのが、お母にはちやんと分つとるがの。萬が一われが嫁にならうといふ者があつても、お母によく相談してからにせい、お母は日は見えいでも男の腹の中はよう分るんぢやから、隠さずに何でも打明けるのがわれが身のためぢや、嫁方から戻つて來た漁夫の居る間は若い女子は危いこつちや」
母親は周囲かまはずに聲高にさう云つたが、菊代が取合はないので、元の沈默に返つて、姉娘の事をまた思續けた。西風はます〳〵吹募つて舟板の隙間からぴう〳〵吹込んで白髮まじりのお夏の髮を亂した。火の消えかゝつた炬燵の中へ菊代が粉炭を一掴み入れると、ぱち〳〵火花が散つて、長く突出してゐる婆さんの足の裏へも頻りにとんだ。が、垢や何かで皮膚の硬ばつてゐる婆さんは、火の子の熱さぐらゐには怯えなかつた。そして一杯の酒が自分の目の前で注がれる時を夢まぼろしに見續けてゐた。
「菊さん……寒いなあ。どがいしとなんさる？」
戸の外から聲を掛けて行過ぎたものがあつた。菊代は思はず伸上つて返事をしようとしたが、聲の主の急ぎ足には追ひつきさうでなかつたので、返事は喉で留つた。
「およしぢやないか、あの聲は。今朝橋の側で會うたらえゝ包ひをさせとつた。あれが香水と云ふものか知らんが高い錢を出して身體に匂ひをつけたつて、何の得にもならんこつちや。勿體ないのに」
母親がさう云つても菊代は默つてゐたが、やがてそつと炬燵をすざり出て上り框の方へ行つた。「遊びに行くんなら行先をお母に云うといて行け い」と聲を掛けられると、「直きに戻つて來るがの」と答へて、表の戸を開けて横つ面を寒い風に曝した。一足闇を跨いで神棚の金入を顧みたが、そのまゝ戸の外へ出て行つた。小走りに小川の縁へ出て、袂を掻合せて首を縮めながら、何處といふ當てもなく爪先で輕く歩いてゐたが、やがて、その足はお村の家の裏口に留つた。よく若い者の足溜りとなつてゐる家なので、今はひつそりとしてゐた。戸の節穴から覗くと、竈の火に照らされた母親の顏が先づ目についた。炬燵は何時ものやうに若い男の顏が動いてゐないで、お村が手枕して横になつてゐた。
樣子を見定めてから菊代は戸を開けて、「寒うなつたなあ、叔母さん」と懷かしさうに聲を掛けた。
「あ、吃驚した」
火箸を持つたまゝ、思はず立ちかけたお村の母親は、相手の顏を見て安心して、竈へ箸をくべながら、お愛想など云つた。菊代は上り框に腰を掛けて、土間の庭に置いてある鹽魚や、板の間の背負籠に入つてゐる蜜柑やネーブルの量の多いのを羨ましげに見廻しながら商賣話を持出した。
「お正月なんぞ早う去んだ方がえゝ。菊さんは何時から商賣に出掛けなさる？」
「うちはもう二三日休んどりたいと思うとるけど、さうしちや居られまいなあ」
菊代は半ば自分に向つて云つた。お村のやうにちやんと用意が出來てゐるのではないし、今夜の中に問屋から品物を借りて置かねばならぬので、急に安閑としてはゐられない氣がし出した。
「せつせと稼ぎなされ。家のお村も三ケ日が濟んだら商賣に出て異れんと困るかの」母親はさう云つてから聲を潜めて、「今の先きにも晋松か茂平が耳の餘えるやうな聲を出して、やち

もない話ばかりして、その擧句にや、本氣だか戯談だか掴合ひをし出したのぢや。うちもこれまでに皆なのすることを大目に見て默つとつたけれど、今日はあんまりのことで業が煮えてならんから、わい蛉は人の家を何と思うとると糞さん〳〵に怒鳴りつけて、擔棒を振廻して追出してやつたところぢやがな」
「叔母さんがそんないに怒るのはよく〳〵のこつちやな」
「お前さんの家にはあんなやいんちや者が寄付かんからえゝ。あの連中の樓嫁を害ねても後が氣疎いし、したいまゝにさせとくと方圖がないし、うちも困つて居るがな」
「叔母さんは人がえゝから……」
だから娘がだらしのない好いた眞似をするのだと、菊代は他人事でも歯痒く思ひながら、お村の寢樣を覗みてゐたが、ぐつすり眠入つてゐるらしかつたお村は、意外にも晴々した顏をしてむく〳〵と起上つて、
「お母は餘計なことを云はんすな」と叱つて、「菊さん、まあ上つて當りんさい。面白いことを聞かせて上げるから」
「……」菊代はどうせ朋輩の色話だらうと、聞きたいやうな聞きたくないやうな氣持になつて、にや〳〵笑ひながら炬燵の側へよると、お村は相手の耳許へ大きな口を持つて行つて、
「……」と笑ひ〳〵囁いた。
「よう聞えんから、笑はいでぼつ〳〵云うとくれな」
「ぢや一寸待つとくれ」
お村は笑ひを纏めてから、菊代の福々した耳を抓んで引寄せて、再び囁いた。……それはおよしといふまだ十八九の不器量な女とある男との密會を覗きに行からではないかといふことだつた。今夜家の者が浪花節を聽きに行つた留守に出會ふ約束をしてゐたのを、立聞きしてすつかり知つてゐるので、初心なおよしの樣はさぞ面白からうと、さも面白さうに戯言まじりで話した。
「お前さんは阿呆臭いことばかり云うて」と、菊代は取合はぬ振りをしながらも胸をわく〳〵させてゐた。炬燵のほとりには今まで遊んでゐた漁夫共が喰荒らした蜜柑の皮や駄菓子の端切れの散らかつてゐるのが、夕暮の薄明りで目についたが、そんな物を見るにつけても、この家は若い者の出入が多いために、餘分な利得のあることを菊代は考へないでゐられなかつた。そして、この朋輩に負けんやうに商賣をしたいと發作的に氣張つてゐた。
お村は相手が生眞面目になるのも構はずおよしを冷かしたり、浪花節の口眞似をしたりしてゐたが、その間に母親が膳立して、ランプも點けると、炬燵から辷出て、親子差向ひで茶漬を掻込んだ。
西風は雨戸に音を立ててゐたが、自分の家に比べると、温かで陽氣で、身分違ひの人の住居のやうなのが菊代は殊更今日は妬ましかつた。ぎんな仕事をしたつて、お村などに引けを取るんぢやないのにと、姉の手助けをしてゐる此處の母親と、邪魔をしてゐる自分の母親や祖母とを引比べた。若い者が寄つて來ないのも、盲目やよぼ〳〵の婆さんがゐて煩らしい思ひをさせるからだと、何もかもの不幸の元を二人に擦りつけるのが、考へ事した最後の行詰りだつた。
「うちも去んで お夕飯を食べようかい」と座を立つた。
「御馳走があると嬉んで上げるのになと」と母親は懶れみを含んで見上げた。
「今のことは別として、今夜は一緒に遊ばうではないか。お前さんが出て來にや、此方から誘ひに行くぞな」
お村の押付がましい聲を後に聞きながら、菊

代は裏口から飛出した。三日月は磨ぎ澄ました空に震へてゐた。何處でも戸を鎖してゐたが、ところ〴〵に賑かな聲はしてゐた。菊代は祖母や母親の傍へ歸りたくはないので、遊ぶ道さへあれば夜遅くまで遊んでゐる氣だつたが、それには先づ空腹を癒さなければならなかつた。浪花節を聽くにしても、何かの遊び事をしてゐる人群りへ出掛けるにしても、一文無しでは仕方がなかつた。で、足許の暗い川端を傳つて自分の家へ戻ると、豆ランプが神棚で幽かに光つてゐた。盲目のお夏は、娘の留守の間は自分達老人には不用としてランプは消して置くのだが、お正月にはお燈明として神棚に載せてゐた。

菊代はランプの心を捻上げてから、取下さうとしながら、神棚をよく見ると、出掛けには確かに其處にあつた金入が見つからなかつたので、頭りに捜してゐると、

「金入ならお母が持つとる」と、お夏は訊かれぬ先に、袂から財布を出した。「今お婆に一合だけ買うて來て上げたのぢや。見い、お婆はいゝ氣持に酔うて寝とらうがな」

「まあ呆れた……」菊代は浮かりすると、踏付けさうな祖母の頭をランプを持つて見下したが、さう思つて見ると繊くちやの顔にも稍人間らしい紅味が差してゐた。微かに吐く息にも酒の香が混つてゐた。

「何ぼせがまれても酒なんぞ買うてやるといふことがあるものか、うちが明日草履買ふ錢に殘しといたのに、裸足で三里も五里もの道を歩いて商賣に出られるか、よう考へて見るがえゝ」

菊代は輕くなつた金入を母の手から取るが早いか、恨めしさうに炬燵の上へぶつ付けたが、お夏は氣にも留めないで笑顔をして、「われは戸外から戻ると、何ぞそれかぞれ苦情を云うてお母を困らせ居る。草履の穿代へが入りやお母でも持つて行けいよ。お母は裸足でも構やせんがの。うちはお婆に正月の祝ひ酒を呑ましたのが何よりも悦しうてならんのぢや。これでもう死んでも殘り惜しうないちうて お婆は上機嫌で、お飯も食べないで眠入つたがの。われ、よう見い、お婆の寝顔も今夜は佛様のやうぢやらうがな」

「……」菊代は返事もしないで膳を引寄せたが、蓋を取ると、意外にも汁掛け飯の山盛りにされた丼が入つてゐた。濱屋のお情とは聞かずとも分つてゐた。

「それはわれ一人で食べいよ。お母は雑炊の殘りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも欲しうないがの」

丼からの温かい米の飯の香ひや鳥の香が菊代の鼻を抉つた。お夏は娘の箸の運びを快げに耳に留めながら、正月三ケ日が楽しいほどでもなく、淋かに過ぎたことを独りで喜んで、神棚の金毘羅様のお札を心で拜んでゐた。

「今年こそお初の音信が聞かれますやうに……」菊代の心に魔が差さぬやうに、と、明日の願を祈つた上に、今夜はそれを附加へた。

夢中で鳥汁飯を平げた菊代は、寝を畑くと、急に元氣づいて、約束したお村の訪ぢを待構へて何處へでも浮れ出す氣になつてゐたが、誰一人肇を掛けて呉れるものもなかつた。で、きた今夜も興もなく家内三人炬燵を囲んでごろ寝をした。寝寝をし過ぎたせゐか、菊代は浪花節歸りの騒々しい足音に目を醒ましてからは、暫らく眠つかれなかつた。眠れないと、窓の隙間から吹込む風が身に染みて堪へられないので、母親の掛けてゐる蒲團の中へ潜込んで、頭まで埋めて抱付くやうにした。夫に逃げられてから久しく忘れてゐた人肌の温味を、菊代は今新鮮い母親の身體で思出した。

永年寒さに暑さに鍛へて來た祖母のおみちは、肩が凍るやうに冷えてゐても、夢は少しも

亂されなかつた。

三

三ケ日が過ぎ寒が明けてから、厚い氷が張つたり雪が降つたりする日が續いた。菊代は毎日薄暗い間に起きて、商品を滿載した籠を背負つて、東西の村々へ出掛けて、日暮前にはほゞ賣盡して歸るのだつたが、家に休んでゐた日よりも却つて風託がないだけでもよかつた。たまに顔馴染の出來た家へ寄つて、火鉢か焼火で龜んだ手を温めながら世間話をしたり、お茶を貰つて辨當をつかつたりすることもあつたが、大抵は一日歩き通しで、日當りのいゝ處で小休みして、川水や井戸水で喉の乾きを留めるのに過ぎなかつた。をり〳〵道連れになるお村などが、饅頭屋や駄菓子屋へ寄つても、自分だけは誘はれないで素通りした。その癪菊代は風付の惡いせゐかお世辭のないせゐか、お村などよりも安物を持つてゐながら品物の撰ばけがのろいのだつた。

七草が過ぎ飾卸しも過ぎると、處々の村々で初祭などがあつて、不景氣ながらも魚の値がよくて、骨惜みをしない漁夫や賣子は春早々可成り豊かな收入があつた。怠けてゐた漁夫も自分の村の惠比須神社の祭を済ますと、纔を例いて漁場々々へ向つた。

船の出入のあるたびに質屋通ひの用事で忙しい盲目のお夏は、今度もいくらか儲けた。年末の使賃は凡て菊代に渡して、借金拂ひなどの役に立てたのであつたが、年が明けて後のは、半ば自分の懐中にして置くやうにした。村の者が少くも一生に一度は參詣するといふ讃岐の金毘羅様へ、お夏もかねて詣りたいと念じてゐたので、五年十年も前からその路用に當てるつもりで、零細な貯蓄をしてゐたのだが、何時の間にか貯蓄は一文無しに消えるのが例になつてゐた。でも思出しては一錢二錢と祕密で溜置くのだつた。

昔は此處の濱から屢々金毘羅詣りの船が出た。今は汽車や汽船の便利があるので、わざわざ和船を仕立てて行く者は滅んどなくなつたが、それでも花の咲く季節には、たまには近村の老若男女が團體をつくつて、旅費の廉いのを取得に、時日のかゝるのも構はず、のろ〳〵と和船で港々へ寄つて四國渡りをすることもあつた。お夏はその船の出るたびに、御利益のあらたかな象頭山の御社を憧憬れた。

「菊よ、われも一度金毘羅様へ お詣りしとくと迎が向いて來るぜ。お母もわれと一緒なら船へ乗せて貰うてお詣りの出來んこともあるまいと思うとるけいどな」と、旅費の足らぬのを歎息した。

「目の見えんものがそないな遠方へ行かうなんて、お母もなか〳〵大望を持つとるんぢやな、うちは何も願を掛けることはないし、金毘羅様へも大師様へもお詣りしようとは思やせんがな」

「さう信心氣がないと、われもこの先えゝことはあるまい。家のお婆を見い。若い時から飲食にばかり身を入れて、神詣りも佛信心もせなんだから、歳を取つても樂な日は送れんぢやないか。今でもお婆はお宮の前を通つても頭を下げることはあるまいがな」

お夏は今年こそ 来年こそ と望みをかけながら、いざ船の出る場合になつて、自分に何の準備も出來てゐないのを知ると、落膽して、せめての氣休めに、參詣伸間の知合ひの老人に銭賃一つのお賽錢を託したり、お札や護符を買つて來て貰つたりした。土産に貰つた堅い板煎を有難さうにしやぶつた。

この正月にも炬燵でうと〳〵してゐる間に、またも金毘羅詣りを思詰めて、例の貯蓄を志したので、質屋の使ひが並々ならぬ楽みになつた。菊代の商賣も正月は可成りに儲けがある

ので、さして母親に求むる所はなかつた。が、漁船が出てしまつて濱が淋しくなると、お夏の用事も暇になつた。米搗仕事も結末所に奪はれて、減多に依賴者はなくなつた。で、菊代の留守中には、日一日せ健で暮らすことが多かつたが、側で寝てゐる老婆には餘りロは利かなかつた。何年もかうしてゐるので二人の間には話の種が盡きたといふ有樣で、たまに話をしても同じ事の繰返しに過ぎなかつた。殊に傷をしてからの老婆はそれを氣病にして、物の世間話などに耳を留める氣持にはなつてゐなかつた。芋でも麥飯でも與へられたものを食つては、木枕に白髮頭をのせて眠入つて、目が醒めると口の内で譯の分らぬ獨言を云つてゐた。その突拍子もない獨言がたまに耳に入ると、お夏は聲を擧げて笑つた。

ところがある日、老婆はむく〳〵と身體を起して、

「おらは今奇體な夢を見たがの」と、きつぱりした聲音で云つた。

「極樂へでも行つた夢を見たのかな」と、お夏は冷かすやうに云つた。

「おらは極樂や地獄の夢は一ぺんも見たことがないがな、われ。……おらは今菊が目の醒めるやうな綺麗な着物を着て船へ乘つとる夢を見た。濱は一杯の人だかりぢやつた。われにも菊の綺麗な身裝を一目見せたかつたがの」

「呆けたことを云はんすな、……お前が夢に見たのは、菊ぢやない、お初ぢやらうがな。お初が綺麗な身裝をして戻つて來ることなら、うちは夢でなうて起きてる時にでも見ることがあるんぢやもの」

「うんにや、おらは今確かに菊の夢を見たんぢや。何ぼ歳がよつても菊とお初との顏は見違へりやせん」と、老婆は力んで云つて、「われはどう思ふか知らんが、おらはな、菊がお初のやうに惣嫁にでもなつたら、擴歩きするよりやどれほど面白い目が見られるか知れんと思うとるぜ。永年見たことのないお金が一時に取れて、われやおらも好きなことして氣樂に暮らせらあ。あの女にしても碌でなしの亭主を持つて難儀するよりはどれほどましか知れやせん。われは菊の擴嫁のえゝ時にさう云うて見い」

「お前はこの頃もまださら言ふことを考へとるんぢやな。興醒めたこつちや。もうそがいなことは云はんすな。聞きともないから」お夏は腹立しげに云つた。娘がひよんな噂の立てられるのさへ厭うて、休みの日にはその出先を氣遣つてゐるほどなのにと、老婆の根性を憎々しく思つた。

「よしかあの女の身を賣つて、菊の身體と同じ重量の錢が手に入つたつて、代りのない菊に遠方へ行かれたら、うちやお前はどうして生きとれると思うとるのかいな。氣が狂うてもそないなことは云へたものぢやあるまいにな」

「……お初のやうに遠方へ行かさいで近所の町で勤め奉公をさせりやえゝぢやないか、菊がうんといやあ、世間にも祕密でおらが奉公口を捜して來てやるがな」

「阿呆云ひなさんな、お前が襤褸を纏れて町へ行かうもんなら、それこそ乞食かと思はれらあ。誰が相手になつて呉れるものか。お前の足が長過ぎて踏めるくらゐなら、菊に恥を掻かせに町へ行くよりや、水汲みでも使ひでもして、お前の好きな酒を買うて飲むとえゝのに」

「われはようさう云ふけいど、おらの儲けた錢は取るが早いか菊に渡しとるぢやないか。一文でも隱立てして自分の榮耀をしたことはないがの。われこそ菊に祕密で自分の使賃を隱しときながら、われ一人菊を可愛がつとるやうなことを吐し腐つて」

老婆は久振りにこんな毒口を叩いた。そして、自分や孫娘の噂話を、お夏が何時も妨げてゐるやうに一途に思詰めた。菊代が惣嫁にでもなれば、今夢に見たやうな美しい衣服が着られて、第一當人のために仕合せだ。老婆自身も米の飯に魚を添へて鰐腹食べられるし、寝酒の贅も盡せるのだ。……おらは本眞のを食になつても苦とは思はない。菊代が仕合せになるためなら、棺を持つて物貰ひしたつて自分一人の口過ぎは屹度して見せる。結句その方が氣樂かも知れん。たいこんな盲人が何時までも生きてゐるために、何かにつけて手足纏ひになつて、菊や自分の心まかせにならんのだ。と老婆は思つてゐた。で、われといふ邪魔物が死んで、おら達がもつと樂が出來るまでは、おらはどうしても死にやせん、と腹の中で意氣込んで相手の顏を見た。が、お夏は最早取合はないで笑つてゐた。

「お前は今日は仰山な元氣ぢやな。そないに元氣があるんなら、これから先も天子樣からたびたびお書を頂戴出來らあな」と、話を外したが、老婆は先きからの一つ事に暫らくこだはつて、お夏に突掛つた。

そこへ、菊代が何時ものやうに腹をびよこびよこに減らせて歸つて來ると、老婆は、「おらの云うたことを今直ぐ菊に話すぢやないぞ」とお夏に囁いて、「われのことも秘密にしといてやる」と、きよと〳〵した目付をした。そして、菊代が背負籠に殘つてゐる蜜柑を一つ炬燵の上に投げて呉れると、急いで掴取つて寝ながら食べた。

四

窓の上の濱屋の庭先には、蕗が芽を萌出した。日に〳〵彼方此方の地べたを割つて青い芽が開いて、濱屋の子供が珍らしがつて「今日はいくつ出た」と數へてゐるのがお夏の耳にも入つた。濱屋に飼つてある可愛らしい牝猫のいやらしい鳴聲も二三日前から日ましに盛んになつた。

風のない日には周圍がすつかり春景色になつたのを、お夏は總身に感じて、用がなくつても、炬燵から飛出して、近所の女房達と立話をしたり、時としては索り足で埠頭場近くへ行つたりした。岸端に蹲んで小波の音や櫓の音を聞いてゐると氣持がせい〳〵した。そして、今年も四月の末か五月の初めにはこの埠頭場から出ると云ふ噂のある金毘羅船に乘れたら、さぞ面白からうと、何十年の昔向ひの烏へ柴刈に行つて以來背て乘つたことのない船の乘心地をさまざまに思ひやつた。……元結がはりの藁で髮を茶筅のやうに結つた、蒼黑い顏したお夏の盲ひた目の前には、麗かな日光が波に碎けてゐる。蒼が輪を描いて舞つてゐる。爪の延びた足許には寄居蟲が石垣傳ひにうよ〳〵してゐる。……冬の間に繁殖した虱までも温かい日に誘はれて、彼女の肌着から匐出してゐる。

「南無、金毘羅大權現樣」と、お夏はふと海の彼方を仰いで、手を合せて拜んだ。「……」と、一心に祈願を籠めたが、差當つて痛切に何を願ふといふことはなかつた。只だ體に觸れる春らしい柔かい風や日光に心が擽かされて、神や佛が懐かしく思はれたのだつた。

「そこで何をし居りんさる？」と、たまに聲を掛けて呉れるものもあつた。

「家で寝てばかり居ると身體に毒ぢやから」と答へて、聲の主に向つて、前に淇へてゐる海の上の光景を訴いた。運送船が何艘沖に繫つてゐるとか、誰某が肥船を漕いでゐるとか教へられると、夢見るやうに霞かな春の海面を胸に描いて樂んだが、をり〳〵は教へられもしないお初の姿を海の上に浮べた。渡舟に乘つて向ひの村から直ぐそこまで戻つて來てゐるやうに思つて見たりした。……「菊は笑うて相手にせんけ

れど、お初が無事で戻つて來まいものでもない」と、自分の腦に問ひ腦に答へた。神佛の御利益で自分の兩眼が開くといふことは信じないけれど、お初が生身を運んで、生れ故郷の母親の膝へ戻つて來るといふ不思議は待設けられないではなかつた。

親類は一軒もないし、上り込んで番茶の一杯も飲んで親身な話の出來る家は村中に何處にもないので、お夏は海邊への往歸りにたまさか誰かに呼留められて立寄つても、自分の汚い身裁を憚つて、閾の外に立つて話をするか、せいぜい上り框に腰を掛けるかするくらゐで、いくら親切に云はれても疊の上へ鉛上るやうな不遠慮な眞似はしなかつた。

「菊代が無度師厄介になります」と、人の家へ寄ると、高い聲で、挨拶がはりにそれを云つた。

お夏が濱邊の春風に吹かれて、牛小屋での永い間の冬籠りの退屈を忘れてゐる時分に、菊代は籠を背負つて、雲雀の鳴いてゐる田圃道を辿つてゐた。

數藤の泉の水もぬゝ温んで、渴を醫し汗を拭ふのに快くなつた。日が永くなつたので、歸りが遲れても暗い道を通る恐れがなくなつた。朋輩と道伴れになることは稀でも、他村の者や旅の者に向うから話掛けられて一緒に歩くことはよくあつたが、見知らぬ人と取留めのないことを言合つてゐる方が、自分の身の上をよく知つてゐる人達と話してゐるよりも、菊代には却つて氣晴しになつた。……初大師詣りの途中の巫山戯ながら歩いてゐる間に交つて義ましい思ひをしたこともあつたが、殊に彼女の心を惹いたのは、古ぼけた笈摺に何か黑い字の書いてある巡禮姿の女であつた。

四十あまりの頑丈な女で、脚絆甲掛の足許軽げに歩いてゐた。巡禮には大抵連れがあるものなのに、この女は一人ぼつちであつた。

「××へ　まだ僅程遠う御座いますか」と尋ねられたのが緣となつて、峠を下りるまで道連れとなつた。

「何處へ　お詣りなさるんです」と、菊代が訊くと、

「名所見物かてら西國廻りしようと思うとります。去年は四國を八十八ヶ所無事にお詣りを濟ましましたから、今年は××まで出て汽車に乘つて、一月がかりぐらゐで彼處の札所々々を打つて來ようと思うとりますのぢや」

「お一人ぢや淋しいでせうのに」

「獨りの方が結句氣楽じですがな。歩きたいところを歩いて、疲れゝば汽車に乘るし、早く宿へ泊らうと自分の氣儘が出來ますもの。……路用は不用心だから些とばかり手許に持つとつて、行先のお寺宛で盛替を家から送らせることにしとります。本眞に世の中は便利になりましたわいな。さうしとけば、途中でお詣りがいやになつても無性氣を出して取返す譯に行きませんからの」

「でも隨分費用がかゝるんでせう」

「そりや、心掛一つでどうにでもなりますわな。かういふ服裝をして、お精進物ばかり食べるのですから、宿錢だつて並の人よりやずつと安うて濟まされます。處によつて無錢で泊めて呉れるところもありますし」巡禮はさう云ひながら、ふと菊代の籠に目をつけて、三つ四つの蜜柑を買つて、直ぐ樣それを剝いて食べながら、三十三ヶ所の寺々の名前など語つた。

菊代は峠の裾で別れてからも、夕日を浴びた笈摺姿が蜜柑の皮を投散らしながら足早に歩いてゐるのを眺みてゐたが、すると、盆踊盆の夜など、母親はじめ近所合壁の老婆たちが鉦を叩いて、哀れな聲で唄ふ御詠歌が久振りに思出された。そして、一つ二つ口の内で唄つて見ると、自分も背負籠のかはりに笈摺を掛けて、知

らぬ他の國へ行つて見たくなつた。

温かくなるにつれて、菊代は自分の家にますます厭氣が差して來た。お末やお鶴のやうに國山の紡績へ女工になつて行かうとも、あるひは下女奉公に出ようとも、どんなつらい仕事をしてもいゝから、自分の村と家とから遠ざかりたかつた。

「こんなことを何時までしてゐたつて、面白いことはない」と、母親の側に空籠を抛卸して當付けるやうに云ふこともあつたが、

「商賣が大儀になつたら一日や二日草臥休めをすりやえゝがの。おまちもさう云うとつたが、われは商賣に焦り過ぎるのが惡いんぢや。外の者に負けちや口惜しいなぞと思はいで、氣を長う持つて居れよ」と、母親は慰めて、そんな時に、菊代に頼びて力を付けてやるつもりでかねての貯蓄の一部を、五錢でも十錢でも拋出すのだつた。

「お母はお金持ぢやな」菊代はさうされると惡い氣持はしなかつた。それに、自分の手足を働かさないで、幾期しなかつた錢が、たとひ一厘でも一錢でも入ると、心の躍るやうな悦しさが感ぜられた。

「お母が普通の人のやうで、うちと二人で精一杯稼いだら面白からうのにな」

「もうさういふことを云うて呉れるな」

母親は手を振つた。

五

「菊さん〳〵……」と幾度も呼ぶ低い聲が、親子が早寢の床に就かうとしてゐるところへ聞えた。眞先に聞付けた母親は、不審げに、「異な聲ぢやな」と菊代に囁いて、「入らんせい、誰かいな」と表へ向つて呼んだ。が、返事もしないで、荒々しい足音が小川の方へ消えた。

「誰か知らん。われには分つとるんか」母親は胸をどきつかせた。

「うちはよう聞かなんだ」

「あれは通り掛けに呼んだ聲ぢやないぜ、秘密でわれを呼びに來たんぢや。用心せいよ」

「またお母が妙なことを云ひ出した」

さう云つて笑ひながらも、菊代は母親の言葉に心を動かされて、ふと眠氣を醒まして戸を開けて見た。其處には誰もゐないし、周圍を見廻しても眞暗で分らなかつた。が、先きの聲がただの聲ではないやうな氣もしたので、疑念晴らしに川端まで出て行つた。海の方から吹寄せる温かい南風がゝゝ氣持に頬や鼻に觸れた。

「降るかと思うたらお星樣が出て居る」と、拾ひものをしたやうに喜んで空を見上げてゐると、

「おい、菊さん」と呼ぶと共に、男の手が肩に觸つた。

菊代は吃驚して飛退いて、相手を見詰めた。瞬雲ではなくつて、五年前と同じ顔した繁松がにや〳〵と笑つて立つてゐた。

「お主はうちをいがいしようと思うて此處へ來たな？」聲は潜めたが、目は尖らせて體を震はせた。男の顔を掻きむしりたいほど怒りに燃えてゐた。

「まあそいがい怒らずにわしの云ふことを聞いて呉れい。譯をよう話すから。此處ぢや人に見られるからお地藏樣のところへ行かんか、わしが先へ行つとるから後から來い。えゝか。……若し來なんだら、われが家へ行くぞ」

繁松は柔しく云ひながらも、脅すことを忘れなかつた。そしてすた〳〵と行過ぎた。「誰が行くものか」と、菊代は腹の中で逃つてゐたが、「われが家へ行く」と云はれたのが薄氣味が惡かつた。以前例のあつたことで、母親へ酷く當るだらうし母親の方でもこの男を憎んでゐるから、大喧嘩が始まるかも知れないと思はれた。

それは兎に角、自分でも云つてやりたいことは溜つてゐるんだから、と、直ぐに後を追つた。

地藏樣は橋はづれの小高い處にあつて、後は小さい藪で、左右には松などが疎らに生えてゐる。五六年前に二人が最初に出會つたのは此處だつたので、お地藏樣と聞いてさへ菊代は妙な感覺を與へられるのだつた。

少し逆上せて夢のやうだつたが、知つた人に會はぬ用心して、淋しい小道を選つて石地藏の側まで來たが、男の方は何處をまごついてゐるのか、まだ來てゐなかつた。菊代は一刻も待ちあぐんで、きよと〳〵左右を見廻しながら立つたり蹲んだりしてゐた。沖には鮪釣船の篝火が闇の中にちらほら光つてゐて、岸に寄せる波は不斷よりもやゝ高かつた。

「菊……もう來とつたか。早かつたな。わしは藤屋で飯米を買うて船へ拋込んどいて來たんぢや」

下唇の曲つた目の爛れた人相のよくない紫松は松の藪から忍び足で近づいてさう云つた。

「うちはこないな處に黙圖々々しとらりやせん。聞くことは聞いて早う往なにやらんのぢや」菊代は突慳貪にさう云つたが、最早氣が緩んでゐて、「お前は船で戻つたのかな。自分の船に乘つとらんかな」と訊ねた。

「なあに、閻太爺の船に乘せて貰うてやう〳〵戻つて來たんぢや。……わしはあれから雜儀をしたぜ。三次の船で朝鮮へ行つたのはえゝが、ひよんなことから彼奴と喧嘩をして陸へ上つてから、いろ〳〵な力業をやつとつたのぢやぜ。何方向いても知らん人間ばかりの中で稼ぐんぢやから此方の海で漁をしとるやうに氣儘は出來やせん。そりやまだえゝが、わしは何とが巢つたのか、人違ひで牢へ打込まれて去年の盆時分まで丸三年といふものは牛死牛生の目に會うとつた。やう〳〵本眞の罪人が知れてから牢を出るにや出たが、着のみ着のまゝの一文なしぢやからの」

「また博奕でも打つたんぢやないかな。朝鮮から戻つた人に訊ねても、お前が牢へ入つとると云ふことは一度も聞かなんだのに。陸でえゝ仕事をして儲けとるといふ話だつたがの」

「博奕どころか、わしは狐に化されたやうな氣持で牢へ連れて行かれたのぢや。しかし、わしが牢へ入つとつたことは秘密にしとるんぢやから誰にも云ふな。無實の罪にしても體裁が惡いから」

「そんなことを人に云ふものか」菊代は肩と肩と擦合つてゐる男の顏を星明りで見詰めたが、思ひなしか、以前よりは變れてゐるやうに思はれた。「今夜からお前は閻太お爺の家に泊るのかな」

「泊めちや呉れるけいど、彼處は子供が大勢居つて窮屈だからの。わしは獨りで船へ寢てやらあ」

「これからは近所で漁をするつもりなのかい、お前。直ぐにまた朝鮮へでも行くのかな」

「わしはもう遠方は懲りた。お爺にでも使うて貰うて手繰網でも曳かうと思うとる」男は石地藏の蔭に蹲んで、懐の財布を弄んで銅貨の音をさせながら「われはこの頃は誰と一緒に居るんだい」

「極つとるぢやないか、お婆とお母と……」

「それつきりか」男はにやりと笑つて、「二人とも何時まで丈夫で生きとるなら。お母は今でもわしのことを惡う思うとらうがな」

「そりや極つとらあ、あないに老人を酷い目に會はしたんぢやもの」

この男が母親を打つたり蹴つたりしたことはまざ〳〵と菊代の記憶に浮んだ。老人二人を拋散らかして、他所へ行かうとされて、男の不人情を怒つたことも思出された。

「お母にもよう謝つといて呉れい。さうすりやわしも明日お母の好きな物を買うて訪りに行かあ」

「……」この男が村へ戻つたことが明日になつて母親に知れて驅ぎ出されるのが菊代には恐みしかつたが、來るなと斥ける力は出なかつた。そして、五年前のお地藏樣の界隈はもつと樹木が茂つてゐて、月夜にでも人目を避けるに都合がよかつたことが氣についた。吹く風に竹藪はさわついて、野良犬の聲が間近く聞えた。

「わしは久振りで陸の家の中で思ふ存分足を踏ん伸ばして寢たいぜ」

暫らく鎮つて鎌松は手に付いた泥を拂ひながら云つた。殊に風の吹いてゐる日に、搖られながら船で眠るのは、漁夫稼業をしてゐても辛氣なものだつた。

「うちはまたあの家で寢るよりや船にでも寢たいと思ふことがあるがの」

「われ、そんなことを思ふやうになつたか。わしの船だつたら連れてて寢させてやるのに」

二人は明日の晩の約束などして石地藏の濱通りへ下りた。菊代は男が指差した船の在所を此つと見やつただけで、男を振切つて一散に駆けて、自分の家の戸口まで歸つた。戸は自分が明けたまゝだつたので、母親などの寢姿が豆ランプの光で微かに見えた。

靜かに戸を締めて、氣取られぬやうにそつと枕に就いたが、すると母親は頭を持上げて出先を訊ねた。

「……寸用があつて行つとつたんぢやがの。そないに煩さう訊いて下んすな。うちは眠たうてならんのぢやから」

がみ〳〵叱りつけて置いて、菊代は直ぐに鮮をかいた。そして、夜明け前に呼起されても容易に枕を離れないで、窓の上で雀の囀り出すまでぐつすり眠入つてゐた。

「菊は今日は休むんか、大儀なら休めばえゝがの」と母親に云はれると、

「こんな天氣のえゝ日に休んで溜るものか」と、菊代は威勢よく云つて、大急ぎで食事を濟まして籠を背負つて出た。近所の者に顏を見られるのが厭さにすた〳〵と傍目も觸らずに道を急いだ。しかし村を離れると足が次第に遲まなくなつた。母親の思惑や村の人々の口の端や鎌松の今後の所行がかはる〳〵彼女の胸を悲かして、商賣のことなどに身が入らなかつた。で、負けとこはれるだけ負けて殆んど捨賣同樣にして、田の畔ででも屢々荷物を卸して足を休めて、時の經つのも忘れて考へ込んだ。……獨笑ひをして浮立つやうになるかと思ふと、自分は矢張自分一人を頼りにしてゐる盲人や老耄を大事にしてやつて、かねての覺悟通りに男に掛合はないで通さうかと思つたりした。

面白い目には會はずに、徒らに年を取つて來た菊代は、村に男の數は多うても、鎌松の外には自分などを相手にして呉れる者のないことをしみじみ感じてゐるので、唇なる の曲つた爛れ目のこの男でも、取逃がす諦めはつかなかつた。以前の男の仕打に柔しいところや手頼りになるところの此ともなかつたことはよく知つてゐるのだけれど、菊代には最早男に對して遠慮みをする氣は此ともなくなつてゐて、相手が男の身體を具へてさへゐれば、二度でも三度でも石地藏の側で會ふだけ得だといふ氣持になつた。

それにしても石地藏の側だけでは物足らなかつた。……亦母はゐてもゐなくても同じやうなものだが、盲目で耳の放い憐れな母親が家に尻を据ゑてゐるのが、どれほど邪魔になるか知れなかつた。……お夏が可哀想ぢやから無賃で貸してやると、濱屋では牛小屋をお母に貸して呉れたのぢやから、お母は不都合のないやうにと義理を思うて、一晩博奕宿に貸して呉れと頼ま

れた時にも、われがさうしたけりや、濱屋一斷つてからにせいと堅意地なことをぬかして承知せなんだ。男を連込むのも承知する筈はない」

これやあれやで胸を惱ますものの、菊代は平生に比べると、今日は村へ歸るのに張合ひがあつた。石地藏の寒藪に咲きこぼれてゐる紅い椿に目がついたり、石地藏の上に鳥の留つてゐるのが可笑しく思はれたりした。夕潮は岸を浸して、船端で米を磨いでゐる漁夫もあつた。

繁松の不意に歸つて來たために村の樣子が異つて、其處等の人々の話聲はみんなその噂かと案ぜられたが、道で擦合つた人の誰もが菊代に向つて變つた口を利かなかつた。例のやうに、「溫うなつたなあ」とか、「今日はよう賣れたかな」とか、たまに聲を掛けられるばかりであつた。

六

「待つとるお初は戻つて來ず、戻らいでもいゝものは戻つて來るし、お婆、うち等はまた酷い目に會はされるぞな」

お夏は圓太爺に救はれて朝鮮から着の身着のまゝで戻つて來たといふ繁松の名を聞いた時に溜息を吐いた。

「おらはどがいでも構はんが、繁が來て呉れりや結句賑かでよからうわい」おみち婆さんは口先で毒づかれようとも、傍で大喧嘩がはじまらうとも、繁松の飲み餘しが一杯でも飲めて、たまには魚の頭ぐらゐ食べられる樂みがあり、さうに思はれた。

「彼奴が居ると菊が今のやうに一心に働いて呉れんぞ、うちはあがいな獄道奴に食ふや食はずの目に會はされると思ふと、細引の一本は用意しとかにやならん。繁も朝鮮で牢へ入つとつたいふから最後の果にや十作のやうになるんぢやらうから、うちは氣疎うてどうもならんがめ。菊までも卷添になつて見んさい」

お夏はその有樣が目に見えるやうで身震ひした。繁松とは逆つて菊代のちやんとした亭主であつた十作が、脫營の罪科で死刑に會つたことはお夏の骨身に深く染んでゐて、菊代に男の出來るといふと、直ぐにかの死刑が聯想されて恐ろしかつた。……他村から流れて來た繁松の顏は、目の開いてゐた時分に一度も見たことはないので、最初娘の入婿の格で會つた時からして、獄門に懸る顏のやうにお夏の心には映つてゐたのだつた。そして、半年ばかり養はれてゐながらも、味まじく打解ける氣になれなかつた。

「氣疎や〳〵。男といふ者は何時お上に綾されるかも知れない」と、ある日隣の主人に話したことがあつた。

「緣起の惡いことをぬかしなさんな。惡いことさへせにや咎めらるゝ心配はないよな」

「そりやその譯ぢやけれどの、うちはどうも胸に落ちんがの」

「男は殺されるにしても、お前の家には女子ばかりぢやから安心だ」隣の主人はさう云つて笑つた。

男の子を生まいで結句仕合せかと、お夏は自分の幸福をさういふ事にでも求めようとした。

今にも恐ろしい繁松がやつて來るかと待構へて、油斷しないでゐたが、夕方まで音沙汰はなかつた。戸を開けて入つて來た足音は菊代に違ひなかつた。

「戸はちやんと締めて置けい」

「こんな溫い日は、開けとく方が明るうて陽氣でえゝのに」菊代は開けたまゝ家へ入つて、不躾よりも口數を餘計に利いた。減多に云つたことのない商賣の話をもした。

「お母、××の祝には挑の花が一面に咲いとるぞな。お母に一日見せたいとうちは思うた。もうお彼岸が來るから、今年はお母もお婆も久振

りでお墓詣りをするとえゝに」

お彼岸といへば、濱屋でお接待の手傳ひを一日して上げにやなるまいな」

「われが連れてて呉れりや、お墓詣りにでも行かあ」と、お夏は大聲でぬかして、「われは今日何か悅しいことがあるんか。桃の花の咲いとるのがそないに面白かつたのか」

「……」菊代は母親の顏を顧みると、急に陰氣になつた。

「お母は先きからわれが不愼でならんがの。お母やお婆に饑い目をさせてもえゝから、惡い奴に誑かされんやうにせいよ」

「そんな大きな聲を出して下んすな。人が聞いたら何事かと思はあ」

菊代は母親に背を向けて窓の側に立つた。濱屋の子供達は庭先で羽根飛びをして遊んでゐた。姿は見えないけれど、濱屋の姉娘の彈いてゐる琴の音が二階の方から落ちて來た。夕日は長閑に土藏の壁を照らしてゐる。

「菊はそこでどないし居るんならえ」と、庭先にゐる小さい子がふと身を屈めて窓を見下して笑顏をした。

「菊は坊ちやんの羽根飛びを見て居ります」

「わしは此處で小便をしようか。その窓まで屆くぜ」と、子供は身體を突出して前をまくつた。

すると、他の子供も寄つて來て、

「わいだつて負きやせん、見て居れ」と、身體を力ませた。

「臭い水の飛沫が窓の格子にまでも降りかゝつた。」

菊代は驚いて首を引込めて、默つて晩餐の支度に取掛つたが、實殘りの鰯の干物を惜氣もなく焙つた。生臭い煙が小屋の中から流れ出た。

「問屋の物を矢鱈に口へ入れると、儲けた錢を差引かれるんぢやから恐ろしい。向う見ずはわれしちやならんぜ」

「干物を一枚ぐらゐ、たまにや食べたつて大事ないがの、うちはどないに辛抱したつて長者になれるんぢやなし……」

「今日はわれもえらい剛い氣になつたな……」お夏は娘の氣に障つて爭ひの起るのが氣遣はしさに、繁松の名を容易に口に出さなかつた。そして娘が焙つて呉れた干物には手をつけないで、夕飯に鹽を振掛けた湯漬を食べた。

「問屋へ行つて、戻りに濱屋で風呂へ入れて貰はう」

菊代は箸を擱くと獨言のやうに言つたが、先きから隣の家の話聲に耳を留めてゐたお夏は、

「とう〳〵やつて來やがつた」と、突如に叫んだ。「來るのなら、門口で祕密に呼出したりせいで、うち等の居る前で話を極めい」と誰に云ふともなく云つた。

菊代は呆氣に取られてゐたが、ふと隣の家の女房と一緒に入つて來たのは、襁抱を着た繁松であつた。

「繁さんもこれからは此村で身を入れて稼ぐんぢやといな。よう話を聞いて元々通りにして上げなさい」と、女房は伸人氣取りで云つて、夕闇を透して皆なの顏を見廻した。

暫らくは皆な默つてゐたが、お夏が躍り出て何か口を利かうとする前に、菊代は土間へ飛下りるが早いか、すた〳〵川端の方へ駈け出した。そして、濱邊を傳つて昨夕教へられた繁松の船の繫つてゐる處まで行つた。四五艘の漁船の中で稍大きいのが、朝鮮歸りの圓太爺さんの持船だといふことは直ぐに知れた。どの船にも人のゐる氣色はしなかつた。

菊代はどうなつたかと自分の身に關つた話の決着を氣遣ひながら、岩の上に彳んで、船緣を覗つてゐる小波の音を聞いてゐた。後を振向くと、ところ〴〵に燈火がついて、海際の家でも障子を開けて夕風の吹入るにまかせてゐる。菊

代はそれ等の寒々の場や主婦の悪い品行を思出しては、「横着ものか、と自分に力をつけた。

「オー、われは此處へ来とつたんか、問屋へ行つとるのかと思つたのに」

繁松は徳利をぶら提げて、突出た石垣の端から船へ飛乗つて、「誰も居らんからわれを乗せてやらうと、岩の上へ歩板を掛けて、招いた。手を伸して捉まらせた。

伊部焼の船玉様を、正面に据ゑて、その前に酒を飾いてゐた。菊代は男が黙けたカンテラの光できよろ〳〵船の中を見廻したが、舟板は綺麗に拭清かれて、煮焼の道具もちやんと揃つてゐた。

「われはようあないな汚い家で辛抱しとつたな。臭うて〳〵わしは一時もぢつとして居られなんだ。何ぼ陸で寝たうても、あないな家には縛まれても泊る氣にやならんぜ」

「そんな無理を云はんすな。女子一人の腕で稼いどるんぢやもの、家賃の出る家に居れるものか」

「あの家からこの船へ来うたら氣かせい〳〵しようがな。わしはお母に誘ろうと思うたけれど、家の様を見てやめにしたぜ」繁松は長い間墓つてゐた陸の家の住み甲斐のないのに失望してゐた。五年前に憂愁を盡かして抱擁した盲人や老婆は一層見窄らしくて、同じ部屋に起臥するのも氣味が悪いやうであつた。

「わしは當分船住ひぢや。われも夜此處へ来て泊れ。蹴太郎さんももう四五日休まにや船を出しやせんから、當分は夜の間はわし一人が留守番ぢや。夜遊うやつて来いよ。蔦が一他人に見つけられたつて構やせんぢやないか」

「……」菊代はにや〳〵笑つた。綺麗な船の中に人目を避けて、男と差向ひでゐるなんて、何年の間夢にも見たことのない氣保養であつた。男は買つて来た酒を温めたり、魚を煮たりした。舟板をめくると、水槽には清水が湛へられて、来樽には白い米が入つてゐた。

「船乗りは陸に居るものに比べるとお大盡様ぢやぞな」と羨ましさうに云ふと、

「われはさう思ふか。さう思ふ船に乗せて連れて行つてやらうか、四國へでも朝鮮へでも渡らんか」

「ふゝん……」菊代は男の言葉が夢のやうなので眞に受けなかつた。

「われのお姉は容色よしぢやとうだが、われだつて此とびあ粧飾したら綺麗になるのに、われは稼いでばかり居つて身體を粗末にするのお惜いおぢや」

繁松は昨夕の間でよく見なかつた女の顔形を見詰めて、いとゞ変あ染みて、五年前よりも更に醜くなつてゐるのに興醒めながら、出鱈目の悦しがらせを云つたりした。そして、酒まつた酒を女に酌をさせて茶碗でぐい飲みして、女にも強ひた。菊代は興に乗つて、盞を抓みながら一口だけ呑んだ。

「繁公……」煮えた小魚を箸の先でつゝいてゐるところへ、岸の方から呼立てる聲がした。

「蹴太郎さんだ。……構やせん、一寸の間隠れとれ」繁松は慌てゝゐる菊代を船底の水槽の側へ忍ばせて、舟板を拭めて、自分は何喰はぬ顔でその上に胡坐を掻いてゐた。

「貴様はまた秘密で酒を喰つてるな。おらにも一杯呉れい」と、赤銅色した蔦さんは既に酒臭い息をさせながら入つて来た。

「たつた二合ぢやもの、もう飲んぢまつた」繁松はさう云つて、女の飲み残した茶碗へ徳利の餘瀝を掻落した。

「貴様の飲滓を頂戴するのか」蔦さんは腰を据ゑて茶碗を手にし、ちび〳〵やりながら女の持つてゐた箸で小魚を摘んだ。

菊代は生臭い息ひに悩まされて、先き飲んだ

一口の酒をも吐出した。蔦さんの威勢のいゝ薄のみはときぐれ〳〵に耳に入つたが、繁松の聲は殆んど聞取れぬほど低かつた。

「貴様は甲斐性なしぢやぜ。えゝ歳をして居りながら、女房一人よう持たいで。……牢へぶち込まれるやうな間抜けた真似をして可笑しな奴ぢや。貴様などは親はなし子はなし、何時何處でくたばらうと構はんのぢやから、命懸けのどえらいことをやつて見い。おらは貴様に来の飯を食はせて一兩二兩の酒手をやるくらゐ苦にやしとらんがの。おらの前でそがいにびく〳〵しとるやうぢや駄目ぢや」蔦さんは一杯煽飲で涎口を叩いたが、目には柔しい微笑を浮べてゐた。

「お前がかういふことをやれとぞやあ、わしは何でもやつて見らあ」

「さうか。そいぢや貴様、今から溜屋の菜圃へ行つて、分葱を一掬り盗んで来い。家の子供が見を拾うて来とるから、あれを酢味噌にして一杯やらうぜ。今夜は闇夜だから知れりやせん、塀を飛越えて入つて見い」

「阿呆ぞはんすな。分葱ぐらゐで盗人にはなりたうないがな」

「高慢なことを吐すな。……菜圃物で物足らにや、土蔵の蔵前でも切つて金庫でも盗んで来い」

「そんなことよりや、もつと氣の利いたことをして、お前を吃驚させて見せらあな」

繁松は蔦さんが容易に座を立ちさうにしないので當惑して攫き込んだ。酒はないし喰ふものはないし、じり〳〵する氣持を紛らす術はなかつた。そして、菊代の身體を動かす微かな音も耳についた。いつそ破れかぶれで舟板をめくつて、女を蔦さんの鼻の先へ引据ゑて見ようかとも思つたが、さうすると、明日から自分の食扶持にも泊り場所にも離れなければならないのが恐ろしかつた。「貴様おらの大事な船を穢しやがつたな」と、蔦さんがその目に角を立てて怒り出すのが目に見えるやうだつた。

「お蔦、今夜だけお前家に泊めて下んせ。四五日すりやまた神へ出るのに、一晩も陸で寝んと、船を着けた甲斐がないもの」

「貴様は昨日高慢な口を叩いた癖に、もう陸が懇しうなつたか。貴様も不憫な奴ぢや、女子の子が待つとるんぢやないしの」蔦さんはさうゝつたが、今急に思出したやうに、「たしか貴様は盲人の娘の家へ入込んどつたんぢやな」

「あれや此つとした悪戯ぢやがの」

「いや、貴様にや丁度えゝ女房かも知れんぜ。乞食見たいな様をしとるから誰も相手にすりやせん。あがいな女子を女房にしときや何年沖へ出とつても、留守に間違ひの出来る心配がないから、漁業に身が入つて結句仕合せぢやらうかい」

「そないに腐して下んすな」繁松はむつとした。

「まあ腹を立てるない……おらの先の女房はの、おらの留守に貧乏瓜二つで角の野郎と抱寝をしやがつた。痢病で死んだ後で知らせて呉れたものがあつたから、おらは何ぼ腹が立つてもどうすることも出来やせん。せめてもの腹癒せに、お墓を打倒して踏付けてやつたがの……それ、漁夫の女房は貧乏瓜二つぢや。えいか」

蔦さんは独りで喋舌つて独りで面白がつてゐたが、やがてひよろ〳〵起上つて、

「酒もないのに糞面白くもない。もう帰るから、貴様は後片付をして、火の氣のないやうにして後から泊りに来いや」と云残して、掛聲かけて岸の上へ飛んだ。

繁松は生返つたやうな氣持で、急いで舟板を取つて、菊代を呼んだ。が、菊代は泣叫逃して身を持上げなかつた。そして、繁松が引出さう

として伸した手を力強く突きのけた。

七

「朝鮮へでも四國へでもお前の好きなところへ連れて行つて下んせ。うちは何處へでも行くがな。今直ぐに」

やがて船底から引張り出された菊代は、陸へ上らうとはしないで、涙ながらに氣色ばんで、男に迫つた。「お前は先き何處へでも連れて行つてやると、うちに約束したぢやないか。船にやお米もあるし、水もあるし、今夜夜中に出掛ける氣にやなれんのかの。人がうちを捜しに來りや夜中でも船の下へ隠れて居らあ」

「われ、氣が狂うたんか。この船はわしの船ぢやないのに勝手に出せるものか、よう考へて見い、われが遠方へ行きたいんなら、四五日中にわしが手管を極めて、えゝ婿殿に行けるやうにしてやるから、それまで待つて居れ。急ぐことあないぢやないか」

「思ひ立つた時に直ぐに行かにや、愚圖々々してる間にや家が出られんやうになるもの。うちはこれまでに何度も一人で他所へ行つてしまはうかと思うたことはあつたけいど、お母や祖母のことが氣に掛つてどうしても行けなんだ。ちやけど今夜なら覺悟がついたのぢや。この船が出せにや、傳馬にでも乘せて連れて行つて下んせ」

「路用も持たいで何處へ行けるか」

繁松は嘲笑つてゐたが、最早女と差向ひでゐるのが煩さいばかりで何の興もなくなつた。女は男の膝を搖ぶつたり腕を小突いたりして、船が駄目なら徒歩で村を逃げようと言出して止まなかつた。

「歩いて何處へ行たつて、御縄走してわし等を待つとるところはないぜ。わしは貧乏してもまだ乞食をした覺えがないからの」男の言葉はますます冷かだつた。「われは些たあ錢を溜めとるのか」

「……」そんな馬鹿げた問ひには答へないで、菊代は、「お前さへ約束を間違へにや、今夜中にうちが路用を拵へて來るぞな」と、目を見据ゑて云つた。

「えらいなあ、誰かに借つて來るんか」繁松は眞に受けなかつた。

「誰に借るものか、誰が貸して呉れるものか。皆なしてうちを蔑視つとりやがつて」菊代は船底で洩れ聞いた岡太爺さんの言葉を憤んで、村の人々にも憎みの刃を向けてゐたが、それにつけて、濱屋の土藏だの、金庫だの、と云つた爺さんの言葉も頭の中に響いてゐた。……濱屋の土藏や物置へは、年末の煤掃の手傳ひをした時や、平生でも屢々出入りして、その樣子を彼女はよう知つてゐるのだ。

で、菊代は薄暗い船の中に坐つてゐながら、濱屋の母屋から離座敷、土藏や物置部屋の隅々まで、あり〳〵と目の前に浮べた。欲しい物は何でも心まかせに奪つて來られさうに思はれた。

「繁さん。その時になつてうち抛たらかしちや承知せんぞ。厭ぢやと云うても以前のやうに默つてお前を逃しやあせん。えゝ事でも惡い事でもお前は卷添になる覺悟になつて居らんせ」

菊代はさう云つて、寢ころんでゐる繁松に夜着を被せて、後刻を期して、突出てゐる岸の上へ飛んだ。空はどんより曇つて生溫い風が吹いてゐる。波に搖られてゐる一艘の傳馬船は彼女の目を惹いた。

時刻を忘れてゐたが、まだ宵の口なのか戸を鎖した家は少かつた。提灯を持つた老和尚や、浪花節を唄つてゐる三人連れの若漁夫などに擦違つたが、菊代から途を避けるほどの遠慮もしなかつた。皆なを敵として引受けるやうな氣持

になつてゐた。

「オ！　菊さんか。お母がお前を捜し居つたぞな。何處へ行つとつたならえ」と、ふとお今婆さんの聲がした。

「何處へ行かうとうちの儘ぢやがな」

菊代は濱通から脇道へ外れて、ところ〴〵に野菜を作つてゐる空地へ入つた。よく見廻しても周圍に人影は見えなかつた。自分の家の裏手へ廻つて、窓の側から石垣を攀ぢて濱屋の庭先へ飛上つた。母屋の隣下の雨戸は皆締つてゐたが、二階の障子にはまだ燈火が映つてゐた。

まだ時刻は早いし、何處へどうして忍入るのやら見當がついてゐなかつたので、菊代は半ば夢中で石段の脇の埃溜の中へ身を潜めた。

「お婆今そこから濱屋の庭へ誰か入つたやうぢやな」と、窓の側で物案じしてゐたお夏が云つた。

「猫か犬かが通つたんぢやらうがな」

「うんにや、確かに人が入つたんぢや。そらまだ騒がして居らあ」

お夏はさう云つて、竊かに濱屋へ知らせようとして出掛けた。

母親が下女のお松に話してゐる聲は、埃溜の中でもぞ〳〵してゐる菊代の耳へも幽かに入つた。はつきり聞取れはしなかつたが、菊代は水を浴せかけられるやうに吃驚して、慌てて其處を飛出した。母屋の潜戸が開いて、お松の持つた提灯の光は庭先を照らした。險しい石垣を無闇に飛下りかねてまご〳〵してゐる菊代の姿は、お松の寢呆眼にも見逃されなかつた。

「まあ、菊さんかな。そこでどないし居るのなら一お松はたゞ不思議に思ひながら、

「伯母さん、菊さんぢやないか。うちは今時分盜人が入る譯はないと思うとつたのに。伯母さんは寢呆けとるんぢやな」と、戸口を顧みて叫んだ。

「呆れたこつちや……」お夏はぞつとしながら庭に立竦まつた。

「菊はどうしたのぢや」濱屋の人達は皆な戸口に集つて、お松に手を執られた菊代の蒼褪めた顔を訝しげに見詰めた。

「狐にでも憑かれたんでせうぞいな」

お夏はさう言濁して、菊代の手を摑んで「さあ家へ戻れ」と引張りながら、とぼ〳〵と索り足で川端を傳つて、自分の家へ入つた。家には豆ランプさへ點いてゐなかつた。

「お母はもう何にも聞きともない。氣疎や氣疎や……」

お夏は明日の日からの、わが世の恐ろしさに戰いてゐた。この時にふと心に浮んだ妹娘のお初の影は、昨日までの思出にあつたやうな姿の何處かに生きてゐる姿ではなかつた。お嫁の被方から手招きしてゐるのだつた。背負籠の擲切や、上り口の上にある横木や、ボ魚の踏臺やが、自分のために用意されてゐるやうに、彼女の心に浮んだ。

「菊は何を泣いとるんぢや、繁と喧嘩でもしたのか、明日仲直りをして、家へ連れて來て一杯飲ましやえゝがの」老婆はさう云つて、身を起して、「おらがランプを點けてやらう。貧閻ちや仕樣がない」とマッチを索つた。

窓の外では、濱屋の主人が提灯を持つて石垣の側を彼方此方檢分してゐた。そして時々窓の方へも目をつけた。

死者生者

騒々しくつて埃もよく立つてゐるこの電車通も、街燈の點く頃からは、外目には小潮洒した涼しげな住みよさうな町として見られた。

繁陽しく繁つてしかも埃に汚れてゐる並木の櫻も、白い燈火を浴びて夕風にそよぐと、葉蔭がみづ〳〵した色を帶びた。麻暖簾を垂れた菲會所には、圓扇を弄びながら片膝を立てたりなど氣儘な身構へして、三組四組の客が思ひ思ひに戰はせてゐる。その隣の玉突場には無駄口で賑はせながら紅白の玉を轉がせてゐる。筋肉の逞しい男達が汗みどろになつて、激しい柔道の稽古をやつてゐるのが鐵格子の間から眺かれた。こんなさま〳〵な勝負事を立見しながら散歩するのも夏の夕の一興であつた。見馴れない人々も親しげに思はれた。

玉突屋から二三軒隔てて理髮店があつて、その直ぐ隣が八百屋だつた。土間を二つに仕切つた斜面に並べられた野菜や果物は、夜目には殊に色取が美しい。バナヽだの枇杷だの夏蜜柑だのの甘酸ぱいもひが唇先に滲つてゐた。魚屋や牛肉屋の汚い臭ひには自ら顰を皆けても、果物の色や香りには食慾が亦乾された。

潤池の方を本店にして此方は支店として、仕事は職人任せで、自分は監督役でをり〳〵見廻つてゐる床屋の隱居は、蒸暑い晩などには、使ひ古しの籐椅子を戸口の木蔭へ出して、隣近所の樣子を見たがら、時々は側へ寄つて來る近所の知人と世間話をしながら、屈託のない夕涼みを樂んでゐることもあつた。自分はペンキの臭い臭ひが厭だけれど、仕事場を塗變へたり、氣持の惡い風をおくる煽風機を働へつけたり、本店に劣らぬやうに支店をも綺麗に飾つて繁昌させて、次男が兵役から歸つて來ると、自慢して引渡すのを、今から思浮べては樂んでゐた。

床屋が綺麗になるにつれて、八百屋も次第に面目を改めた。際立つて變ることがないやうでも絶え間なき莖枯蔓萎は此處等の商家にも現はれてゐて、何時も店先にくはへ煙管で頑張つてゐた胡麻鹽頭で厳い顔した藥屋の老人は、忌中と書いた旗が出た後は、つひに姿を見せなくなつた。八百屋の看板の八百清といふ屋號が何時の間にか、八百信と變つてゐるのに、ふと目のつゞく散歩客もたまにはあるだらう。新しい棚が出來て いろ〳〵な鑵詰や罐詰が置かれた。以前よりも色艶のいゝ旨さうな土等物の水菓子が置かれてゐるやうだつた。代が變つたのかと思ふと、家にゐる人間は以前から見馴れた顔だつた。薄い髮を櫛卷にしてゐる顔の割に身體の横幅の廣い主婦が田舍訛りで何か云つてゐた。ひどい反つ齒で色の赭黑い小柄な下女が以前のやうに其處で働いてゐるのが殊に目についた。二十を少し過ぎたくらゐな女盛りで、派手な裕衣に紅い襷を掛けて、笑つてゐるやうな顔してゐても、生地の醜さは隠されなかつた。で、通りすがりの緣のない人からでも、をり〳〵は侮蔑の目を向けられた。

「でも一生懸命に働くと見えて、昔とは綺麗になつた。初めて見た時にやまるでお化見たいだつたが」と、床屋の隱居も獨りでさう思つてゐた。

一

八百屋の下女のおてつは影日向の差別なく素

直によく働いてゐた。妹は飯倉のあるお屋敷に奉公してゐるのだが、姉の方はさういふ處では動まりさうにないといふ母親の考へから手足を働かせさへすれば事の足りるやうな處ばかりを渡つて來た。が、おてつは何處へ行つても居たゝまれぬほどの不平を抱いたことはなかつた。怒鳴りつけられても打たれても涙の出るやうな思ひをしたことはなかつた。この八百屋でも最早一年あまりも安い給金で激しい仕事を辛抱した。家で下女の勤めをする外に御用聞にまでやられた。靈南坂の奥の方にたつた一軒飛離れた得意先の勝手口へも毎日顔出ししなければならなかつたので、雨の降る日には尻を端折つて能を抱へて、傘の重みに難渋することがあつた。見掛けは頑丈な體格をしてゐても、よく酸つぱい汁を吐いたり腹下しをしたりするので、そんな時には力が拔けて歩きづらかつたが、自分から一日でも休むことはなかつた。

「親方の加減が惡いんだから、私が代りに一人で廻つてるのよ」とぶつてゐたが、去年おてつが來た時から前の主人は青い顔して兎もすると床に就き勝ちで、買出しに行つて來ると、打つ倒れてせい〳〵息を切らしてゐた。

「借金だけやう〳〵拂つて、これから商賣が自分のものになると思つてゐると、こんな目に會ふだもの敵はない」と、主婦のおきくは零した。

「大村さんの煎じ藥が利かんやうなら、おれの病氣は當分直る見込みはないかも知れん。直らないとすりや、おれもいつそこの商賣を思切つて、誰かに讓渡して、田舍でゆつくり養生して、死ぬにしても生れ故郷で死にたいと思ふよ」

清吉がやゝもすると故郷の家と人とを話に出して、あれほど熱心であつた今の商賣を厭ふやうになつたのを、おきくは腑甲斐なく思つて、笑つて聞流してばかりはゐないで、時としては手酷しく叱りつけた。

「田舍に家や田地があるぢやなし、誰もお厭を据ゑて私達を待つてゐやしないよ。彼地へ歸つたつて、その身體で何仕事が出來やしまいしれ。第一、出て來た時の事を考へると、見窄らしい樣をして私は歸る氣にやなれないやな。千兩箱を背負つて、隣近所へ大盤振舞でも出來るやうになつたら、そりや私だつて甲州の山の中へ引込む氣にならうけれど」

「おれの病い病いが分らんから、お前は勝手なことばかり吐かしやがる。こんな商賣を何年やつたつてお大盡になれるんぢやなしさ。おれ

はこの身體ぢや大い惑は持てない。弼の湯を啜つても御先祖の土地で安穏に暮らしたいぜ。おれが足腰が立たなくなりゃ、お前だつて氣樂なことをぬつもや居られまいがな」

「なあに、お前さんが一月や二月休んでゐても、私一人で結構やつて見せるわな。自分で買出しにも行くし、車でも曳いて來らあね。どんなことになつてもこのまゝで凹みやしないよ。意地づくでもやり通さなければ私にや寝醒めが惡いだでな」

「おれは懶けるんぢやない」

清吉はつけ〳〵といふ女房の言葉を聞飽んで、自分の苦しいのが相手には分らぬらしいのを軽猜かしく思つてゐた。もつと優しくいたはつて呉れて、自分が痛みを感じた時には女房の方でも痛いやうな目顔をして呉れるのが至當だと思つてゐるのに、自分の側でさも旨さうに味噌汁を啜つたり、香煎を打つて四杯も五杯も温かい飯を食べたりしてゐるので、清吉は忌々しくなつてならなかつた。

「お前さんほど耐へ性のない人はないよ」と、これほどの病氣を無造作に思つてゐるらしい女房の心を憤つて、側の茶碗を取つて庭へ投げたこともあつた。

二

おてつは此處へ來てから間もなく、病人の不意の差込に手當をするため、主婦の命令で夜遅く隣の床屋へ湯を貰ひに行つた。最早店を仕舞はうとしてゐるところで、職人どもは酒しけにおてつを見入つた。

「どうも濟みませんですけど」と課を話すと、

「へえ〳〵幾らでも持つてらつしやい、殘りものだから」と春の高いのが茶化すやうに云つて、麦酒の空罐へ一杯鐵瓶風呂の湯を詰めて呉れながら、

「明夕夜中にも親方の加減が惡かつたのですかい。私が便所へ起きた時分にお隣ぢや燈火を點けて起きてゐたやうだつたね。主婦の聲も聞えたつた」

「私は二階に一人で寝るから我とも知らなかつたのよ」

「ぢやおれ達とお隣同士だれ。一昨年だつたか、古ひの兼さんが室借しとつた時には、夏の中は兩方で窓を開放して、よく話をして居つたよ」と、春の高いのが春の低い職人に向つて云つた。

「僕は先日の朝一寸覗いて見ただけだが、隣の二階には蒲團も敷いてなささうだね」おてつが出て行つてから、春の低いのが云つた。

「あゝ。易者の兼さんは面白い奴で、窓越しで賭なんかよくやつたものだ。角力が好きでね。なに見に行きやしないんだがね。夏場所十日間は毎晩商賣から歸ると、翌日の取組の賭が始まるんさ。此方が先へ寝てると、あくる朝起度居へやつて來て、十日間一日も賭を缺かしたことはなかつたれ。易者だつて駄目だ。始終見込を外してゐるんだから」

「どんな上手な易者でも自分の事は分らないものだとさ。……さう云へば、お隣の病人は長くは持たないぜ。胃だらうつて兼さんが云つてたよ」

「不斷粗い物ばかり喰つてゐるから病氣になるのさ。易者の兼さんがさう云つてたが、そりや酷いんだつてよ。あの主婦は慾にかけちや恥も外聞も佛はないのだからね」

「他人事ぢやない、課しも不斷の食物が肝心だあね」

二人が戸締りをして仕事場の火を消して、野猿梯子を踏んで、二階へ上ると、小僧の邦太は隅つこに小さい頭を出して眠つてゐた。微かな鼾をかいてゐた。

「僕等の床をのべてゐるから感心だよ」

「邦公、おべつかをつかつてやがるな。今から根性がませてゐていけない。君が挙固を喰はせかけたから、御機嫌を取るつもりでこんな眼餌するんだよ」

「でも可愛いぢやないか」

二人は夜晩の話の種にしても話し飽かぬほど樂みにしてゐる愛宕下の鬚染の賣女のことも、今夜は口に出さず、親方の藤口を利かないで、寝床に就くと、正體もなく眠入つてしまつた。

おてつは湯の入つた麦酒罐を主婦に渡して、うろ〳〵と介抱の手傳ひをした。が、病人の疼みは薄らがなかつた。先日から飲みつゞけてゐる田舎の漢法醫の煎じ薬は一時は病人の氣体めになつてゐたが、今夜は何の利目も見せなかつた。

「上田さんに來て貰はうかね」と、主婦は止切れ止切れに診せてゐる近所の醫者を呼ばうとしたが、

「遅いから、明日まで我慢しよう」と、病人は冷汗の浸出てゐる身體に力を入れて、齒を喰ひしばつた。

「我慢が出來りゃ、上田さんなんか呼ばない方がいゝよ。あの人に一時のがれの誤魔化しだからね。それよりやその中に評判のいゝ病院へ行つてよく診て貰つて緩くり治療することにしたらいゝだらう」

夜中に醫者を叩起してはいゝ顔をしないだらうし、往診料だの何だのと無駄な入費がかゝるのだしと、主婦のみか病人自身でも念頭に置いてゐた。

「折角煎じたのだから、もう一口飲んで御覽な」

「苦くつてとても飲めない」病人は苦い汁を鵝の延びた頸へだら〳〵と滴らしてゐた。そして、右へ左へぬたうちながら呻いてゐたが、やがて、

「おれは二階に寝たいから蒲團を持つて行つて呉れ」と身體を持上げた。

「何を云ひ出すんだね。動いちゃ惡いだらうによ」

「寝床が變つたらいくらか氣持がよくなるかも知れない」

「そんなことがあらすか」と、おきくはふと甲州訛りを出して叱つたが、病人が强ひて望むので、おてつに夜着を持たせて、自分は病人を介抱しながら二階へ連れて行つた。天井は低いし、襖除など行屑かないので、微臭ひ臭ひがして氣持が惡いだらうのに、病人は其處に寝倒れて暫らく呻いてゐた。

おてつは壁際へ自分の寝床をのべて眠つた。

「お前も寝ろよ。もう大分よくなつたから」と、病人は女房にも二階へ夜具を持つて來るやうに勧めた。

「氣が利かなくつても、おてつが來てくれてからは、おれは餘程氣丈になつてゞぜ。どう云ふものだか、おれはこの頃は夜中に目が醒めた時に、課と云ふことはない知つた人間を思出すんだ。三人でも四人でも知つた者が側に寝てゐてくれゝばいゝと思ふことがあるよ」

「病氣のせゐだか、お前さんも次第に妙なことばかり考へ出すよ」おきくは意い笑ひを浮べて、「それで二階に寝る氣になつたのかい。おてつの側に寝るのがいゝの。病氣するとそんな好奇なことが考へられるのかね」と冷かすやうに云つた。

「それはさうぢやない」病人は眞面目に打消して、不斷望んでゐることを口には出さないで、竊かに思ひやつてゐた。……一日も早く稼業を止めて、親類縁者の住んでゐる田舎へ歸つたなら、身體にもいゝし、どれほど心丈夫になるか知れないと、日ましに思慕つてゐるのだつた。

幾らも金は持つて歸れなくつても、こんなに悲つて生れ故郷を懷かしんで歸つて行く自分を、古蹴染の人達が見殺しにすりやしない、皆なして親切にいたはつてくれさうなものだ。女房だつて緑衣に氣を取られてゐるから、おれの苦痛を十分に慰んでくれないのだ……

おきくは不承々々に夜具を運んで來て、病人と下女との間に横はつて、今まで我慢し切つてゐた眠たい眼を閉ぢると、おてつと二人掛け合ひで高い鼾をかき出した。清吉は獨り目を醒ましてゐながらも、二人の寢息を手頼りとしてゐた。が、疼みが薄らいで來ると、自分の手だの足だのの目に立つほどの衰へが涙ぐまれるほど悲しくなつた。一度々々の激しい疼みに五體の肉の割れて行くのを自分で撫でて見ながら、側の二人の女の憎いほど肥つてゐるのを羨ましがつてゐた。そして、女房が田舍行を承知しないとすると、信造をあの男の望み通り此方へ呼寄せて、自分の代りにこの商賣をやらせようかと心が折れて來た。先日からおきくも頻りに望んでゐて、親切ごかしに話を持出してゐるのを、自分の手傳ひをさせてゐる間に、横取りせられはしないかと氣を廻して、何時も話を進つてゐたのだつたが、今夜のやうな心細い思ひをする時には、信造でも誰でもこの家にゐてくれる方がよかつた。人手があればおきくも、もつと自分の介抱に身を入れて見れるかも知れない。……

さう決心がつくと、直ぐにさう云つて女房を喜ばせたくて、「きく、きく」と聲を掛けながら、足を伸して女房の脛を突いた。が、熟睡に落ちてゐるおきくは何とも感じなかつた。强く突くと、足を避けて口の内で何やら寝言を云つた。同じ食物を食つてゐながら、おれが次第に痩せるのとあべこべに、此奴はどうしてかう身體の何處から何處までもぶく〳〵と肥るのだらう」と、足の指先で相手の夜着を撫でて樂んでゐたが、すると、田舍で子供の時分に、おきくが女だてもに川で泳いでゐたことが思出された、男の子に負けないやうに泳ぎも上手だつた。

「あゝ少驚した。何をするんだね」おきくはふと夢を破られて頓興な聲を出した。煤ぶつたランプの淡い光は病人の青褪めた微笑を照らしてゐた。

「お巫山戯でないよ、明日も早く起きなけやならないんだから」と云つて、おきくはくるりと背を向けて、頭を枕に落した。

「お前に聞かせることがあるんだ。……此との間起きとれよ」

「もう遺言なんか聞かないよ。私は明日の朝の仕事があるんだから、お前さんの遺言遺樂のお相手にばかりなつちやゐられないよ」

「馬鹿。お前にもつと樂をさせようと思つてるんぢやないか。おれもどちらつかずで思圖々々しとつても仕様がないから、信造を呼寄せようかと思つてるんだ」

「本當にその氣になつたのかい」

おきくは振返つて寝呆眼で病人をちらつと見たが、そのまゝ目を瞑つて快い眠りをつゞけた。清吉は飽氣ない思ひをして、今自分が云つたことを考へ直してゐたが、人手を借りないで二人で汗水滴らして稼いで、日々の上り高を計へては膝み合つてゐた昔の夜が懷かしくなつて涙が流れた。

三

信造は一月も立たぬ間に、肥桶の臭ひを落して、角刈頭のきび〳〵した目鼻立ちの、八百屋の御用聞などには惜しいほどの若者となつた。主婦に熱心に仕込まれて獨りで買出しにも行けるやうになつた。自轉車の稽古もはじめた。た

まには骨休めに近所の活動寫眞や浪花節へも出掛けたが、そんな時には主婦かおてつかが案内に立つた。

「今日は信ちやんと葵館へ行くのよ」などと吹聽して、おてつはよく床屋の職人に揶揄はれた。

「羨ましいね。あんまり見せつけるものぢやないよ」

「私ね、活動は飽き〳〵するほど見てるんだからさう面白くはないのだけど、信ちやんは田舍から來たばかりだから、そりや面白がつて見てるのよ。私ね、寝る前にはいろんなことを話して聞かせるの」

「今に二人で世帶を持つて別に商賣でもはじめるんだらう。僕等も信ちやんにあやかりたいものだね」

「人を馬鹿にしてるよ」

おてつは揶揄はれたいために、隣の職人の手の際いてゐる時には、戸口に立つて笑顔を見せたり簾を掛けたりした。

床屋と懇意になると、おてつは色の青白い目のぱつちりした可愛らしい小信の邦太が、手荒くこき使はれてゐるのを驚然に思ふやうになつた。筒袖に白い消毒衣をつけて高足駄を穿いて仕事の手傳ひをやつてゐる邦太は、二人の職人から不斷荒い言葉をかけられるばかりでなく、兎もすると、首筋を摑まへて小突き廻されたり、頬べたを毆られたりした。

「バリカンは縁で消毒だけしときやいゝよ。お前なんかが下手にいぢるとまた壞れるぜ」客の耳の穴をほじくつてゐた一人はさう云つて、横目で邦太の方を見てゐたが、やがて、「そうらね云はないこつちやない」と云ふが早いか、耳掻を持つたまゝ邦太の側へ寄つて、バリカンを取つて、「高木さんまた鄙を壞したよ。……螺旋を取つていぢつちや調子を狂はせてしまふ。癪度云つても聞かないんだな」

邦太は頭の天邊を拳骨で一つ二つ突かれた。が、彼れは目尻に微笑を湛へて、緑械の先を見入つてゐた。

そこへ、親方が秋草を生けた花瓶を持つて現から出て來ると、かの職人は口を尖らせて大袈裟に知らせた。「邦、親方に謝らないか。戯談ぢやないぜ」

「どうも濟みません」邦太は指圖通りに云つて頭を垂れた。

「此奴は少し生ちやんだからね」親方は花瓶の置場に逃ひながら輕く云つた。

「本當に强情だよ。何が面白くつて緑械いぢりをするんだね。お前達に緑械は直りやしないよ」

「本店にゐた時にも吉の奴と二人で電氣の球の中の針金を壞したことがあつたよ」親方はそんなことを云つて職人に敵を合はせてゐたが、やがて手を洗つて奥へ入つた。

高木と呼ばれた青の高い職人は先きから默つて飯剝りをやつてゐたが、仕事が濟むと、棚に置かれたバリカンの前を意地悪い目付で驗べてから、突如に邦太の頬を平手で二つ三つ續け打ちにした。先きの拳骨とは異つてピシャッと勢ひのいゝ音がした。

「馬鹿ッ。惡戯をさせに連れて來たのぢやないぞ」言葉は後から出た。

邦太は首を縮めて目をぱちくりさせた。涙が目蓋に滲出た、が、疼みが去ると元の通りけろりとして、表を通る自轉車を玻璃越しに眺めてゐた。

おてつは通りすがりにちらとこの打擲の樣を隙見したのだつた。そして、暫らく立留つて呆氣に取られてゐた。何故あんな可愛い兒を憎い目に會はすのだらう。家の主婦でさへ私を打つたり罵つたりしたことは一度もないのにと、

自分の弟の虐げられるのを見たやうな腹立たしさを、春の高い曇人に向つて感じた。

で、あくる日の午過ぎに、本店から親方が連れて來た子供を乳母車に載せて遊ばせてゐる邦太に會ふと、

「昨日はどうしたの。痛かつたらう、あんなに打たれちゃ」と慰めてやつた。

「……」邦太は小鼻をぴくつかせて、ふゝんと笑つて答へなかつた。

「あんなに邪慳にされて、お前さんは辛抱がいいわね」

邦太はこの女の言葉や乳母車の子供の放聲には氣を留めないで、電車や自動車の街上の騒々しい物音に心を取られて、のろ〳〵欅の木蔭を歩いてゐた。自轉車に乘りたいと彼はかねて望んでゐたので、自轉車を輕妙に驅せてゐる人間を屢々羨ましさうに見送つた。八百屋の御用聞にでも牛肉屋の小僧にでも、自轉車に乘れる家に使はれた方が、床屋で働いてゐるよりやどれほど仕合せであるか知れないと、彼れの子供心にもそれ一つが儘にならぬ浮世として、時々思出されたのである。

何氣なしに琴平の宮の前まで乳母車を押して行つた。嬰兒の放聲があんまり烈しくなると、邦太は手で口を蔽うて叱りつけたりした。淵いの毛を頂いたこの嬰兒が頬をくしや〳〵させて泣く有樣は、醜い眼らしいものとして彼れの目に映つた。で、勝して泣止まらせようといふ氣になれないで、自分が高木などに打たれるやうに自分もこの子をビシヤ〳〵打据ゑたいやうな氣がした。柔かい耳朶を引張つたり、鼻をいぢつたり、頬べたを抓つたり、嬰兒を玩具みたいにしてゐると、犬や猫を弄んだり、機械いぢりをしたりする時よりも、餘程いゝ氣持であつた。

で、往きにはあたりをきよろ〳〵見ながら機械的に乳母車を押してゐた彼れも、歸りには屢々珍らしさうに嬰兒のふは〳〵した肉付に指を觸れて樂んだ。斧ばれると、嬰兒も何時かへら〳〵微笑を洩らした。都の埃は立つてゐても、爽かな初秋の風は二人の頬に觸れてゐて、邦太は久振りにいゝ氣持で店へ歸つた。

「邦ちやん」と、その後おてつが會ふたびに親しげに聲を掛けるのを、邦太は一度も返事をしないで訝しげに見てゐた。そして、側へ寄りつかれると、女臭い臭ひが鼻を衝くのが厭さに、直ぐに避けるやうにした。が、時々嬰兒の守をさされる時には、今まで知らなかつた愉快を感じ出した。涕や涎を滴れた頬は汚いけれど、柔かい肉の塊りであるこの子の手でも耳朶でも頬べたでも、恣にいぢり廻し小突き廻すのが、次第に彼れに不思議な快感を與へた。で、乳母車で近所を曳き歩くよりも、抱いたり負つたり、二階などへ連れて行つたりして、玩具にしてゐることもあつた。

「守をさせに來させたのぢやないぞ」親人は忙しい時には忍び音で怒鳴つた。

四

「矢張信造に來て貰つてよかつた」清吉は、綾りの三尺を締めて、矢立と煙草入とを腰の左右に差して、出て行く信造の後姿を見入つて、頼もしげに云つた。

「さうとも。あの人はもう田舎なんぞへ歸る氣はないともない。どうしても東京で仕上げて家を持ちたいと云つてるんだから、こんな商ひでも身を入れてやつてらあね。お前さんさへ元のやうに丈夫になりゃ、どし〳〵商白い商賣が出來るんだよ。おてつなぞに廻らせといたんぢやいゝお得意は取れつこはありやしない。屋張屋ぢや先月には店の商ひを別にしても、千圓から入つたといふぢやないかね。儲が高くつても居

が立派だとあゝ盛つて行くんだもの」

「尾張屋にてつ張らうたつておれ達には及びもつかないや」清吉は興もなささうに云つた。稼業が可成りに榮えて日々の生活に障りのないのは元より有難いことだが、それよりも信造が實の弟も及ばぬやうに大切にして呉れるのが悦しかつた。「信造にしろおてつにしろ、些とも惡氣のない人間だからいゝよ」

「おてつも使ふには重寶だけれど、この頃は妙だよ」おきくは冷笑を洩らして、小唄か何か口ずさみながら洗濯をしてゐるおてつを横目で見ながら、小聲で、「お前さんは氣がつかないのかい。あの女がいやに身のまはりを構ふやうになつたよ」

「さうかい。歳が歳だから無理はないさ」

清吉は寢床の上に胡坐を掻いて、靠んだ目でおてつの方を眺みたが、信造が來てからおてつの樣子が變だと譯ありげに云はれると噴出した。

「まさか。……お前はそんなことに氣を廻す女ぢやなかつたがなあ」

「さうでないにしても、若い者二人を二階に寢かすのはよくないと思ふよ」

「だつて外に寢かすところはないぢやないか。おれ達が二階に寢て、あの二人を階下へ寢かしたつて同じことだしさ」

「お前さんは目敏いんだから、夜中にでもよく氣をつけといでな」

おきくがまことしやかに云ふのを、清吉はうんうんと素直に聞いてゐたが、さういふ色つぽいことに思ひを馳せると自分の息までが臭いやうな氣がした。

「いくら物好きでもあの女ぢやあね」と力のない笑ひに紛らせて、寢床に横はつた。

おきくは初めの中は心に掛けなかつた夜の二階から、この二三日は頻りに面白くない思ひをさゝれることがあつた。夜中にふと變な夢などから目醒めた時に、鼠の音だの寢言だのに胸騒ぎさゝれることがあつた。いくらお仲見たいな煩をしてゐたつても、若い女と男とを一つ部屋に寢かしといては、どんな間違ひが起らないとも限らないと案ぜられ出した。おてつが湯上りなどに白粉や香油をつけたりするのは厭らしくて、つい冷かしたくなつたが、おきく自身、亭主の長患ひにかまけて汚れ次第に身裝ふのを構はないでゐるのが省みられた。

おてつとは僅か五つしか歳が違はないのに、頭の髮をたゞの一度も滿足に結はないで、手足を荒らしてばかりゐるのが多少氣に掛らないではなかつた。鏡に映る自分の顔が歳よりも老けてゐるらしいのが、今更のやうに目立つた。

で、三日置きぐらゐに風呂屋へ行つたものが、隔日かあるひはつゞけて通ふやうになつた。久振りで薄い髮を洗つて髮結ひの手を借りた。

「主婦、私は一度島田に結つて見たいわ」と、おてつは主婦の頭を見詰めて、ひそかに髮の毛の濃い自分を誇つて、島田に結つたならと、自分の影を幸福に描いてゐた。

「島田にでも女優卷にでも好きなやうに結ふがいゝさ、お前さんにはよく似合ふだらうから」

おきくは揶揄つたが、おてつの髮を結ふ傍流など與へるどころか、自分のしてゐた臺所仕事も大方はおてつに働かせた。病人の肌着でも下帶でも自分のまでも、おてつに洗濯させるやうにした。汚らしいくらゐ何でもなかつたけれど、主婦が身仕舞に氣を取られ出してから、前よりも仕事が忙しくなるのがおてつにはつらかつた。

「そんなに働いてゐて、お給金がたつた一圓五十錢なの。もつと上げて貰つたらいゝぢやないかね。お前さんのやうな人を私の家でも捜してゐるんだから。正直でよく働いて呉れる女中

はなか〳〵見つからないのだよ」と、下女に出られて困つてゐる川瀬さんの奥さんが咳かすやうに云つた。

「何處へ行つたとて同じことだから、馴れた處に居ついてるのがいゝつて、お母さんが云ふんですよ」

「お給金を溜めてお嫁入の支度をしてゐるのだらうね」

「私なぞ無器量だから誰も貰つて呉れやしませんよ。一生獨りで通すつもりなのよ。その方が結句氣樂でよ御座んすわ」と云つて、おてつはへゝゝと笑つて迷ひもしなかつた。

二階に信造と寢床を並べてからは、おてつののろい神經もいくらか鋭敏になつて、今まで氣に留めなかつた周圍のことが、多少癪くも痛くも感ぜられ出した。そして、時々は信造に向つて話した。

「家の親方は病院へ入院したらいゝだらうにね。少々お金がかゝつても、早く直して稼いだ方が得だらうと思ふよ。信ちやんがさう云つて勸めるといゝわ。私でさへたまにはお腹の疼むことがあるんだから、親方はあゝ痩せるまでには隨分疼みが酷いんだらうと思ふと氣の毒でならないのよ」と、他人の疼さを感じたりした。

「なに、また直る時が來たら直らあ」信造は卒氣なく云つた。日が經つにつれて、おてつなぞと親しく口を利きたくなくなつてゐた。二階へ上るや否や、寢床へ入つて直ぐにぐつすり眠るやうにしてゐた。

「でも出來るだけのことはして上げたらいゝだらう。親方はこの先き長かあないやうに私には思はれるよ。親方が死んだらこの家はどうなるのか知らん」

「どうなるのかなあ。おい等にや分らないが、死ぬるなんて縁起でもないことを云ふなよ」

「さうしたら信ちやんがこの店を貰つて、商賣をするんだらう。親方が先日主婦にさう云つとつたもの。信造に此家を讓つてお前は田舍へ歸れつて、先日遺言見たいなことを云つてゐたよ」

「おい等は一生八百屋稼業をやるために東京へ來たのぢやないや。へゝんだ」と、信造は相手を見下げたやうな目付口付をして、戯れに威張つて見せた。

凜々しい口調や體格はおてつを刺戟して昂奮させた。「本當だわ。お前さんは八百屋の御用聞なんかにや勿體ないわ」と、心からさう思つて云つた。「ぢや、何になるつもりなの」

「藥屋や質屋の番頭さんも坐つてばかりゐるんぢや氣づまりで厭だし。……おらあ先日から自分に似合つた東京の商賣を氣をつけて見てゐるのだが、自動車の運轉手になりたいなあ」

「だつて危いぢやないの。人でも殺して御覽なね」

「おいらあ自分で自動車に乘れる身分にやなれつこはないんだから、せめて運轉手になつて東京中乘廻して見たいなあ。伸夫は御免だし、自轉車もあんまり面白いものぢやないや」

「信ちやんも酔狂な人だよ。もつと地道な商賣をしようとは思はないのかね」

ふと興に乘つて二人の聲が高くなつたが、すると、階子段の方から尖つた聲が聞えた。

「騒々しいぢやないかね。階下には病人が寢てゐるんだよ、分らないのかい」

階子段を中途まで上つてから呼んだおきくは、それだけでは飽足らなくて、階上まで上つて行つた。二人は寢衣のまゝ立竦んでゐた。おきくは迂散臭い目付で男女を見比べたが、おてつのにや〳〵笑つてゐる顔付は小癪に觸つて溜らなくつて、

「さつさと寢たらいゝぢやないかね。朝いくら呼んでも早く起きもしない癖に」と、つつけんど

んに云つた。

「ぢや目醒し時計を私の枕許に置いといて下さいな。主婦より早く起きますから」

「生意氣お云でないよ。……お前は像計なお喋舌なんかしないで、自分のすべきことをちやんとしさへすればいゝんだよ」

おきくは相手が自分の前で恐入つてゐないのが、この時無闇に腹立たしくて、「默つて寢ろつたらお寢よ」と、おてつの肩に手を當てゝ押倒すやうにした。先きから夜具を被つて目を閉ぢてゐた信造は、おてつがどんと寢倒れる音に薄目を開けて顧みたが、すると、主婦が此方へ怖い目を向けてゐたので、慌てて寢返りをした。

「階下には病人がゐるんだから、些とは遠慮してをれ」と、おきくは念を押して階下へ下りた。

夜が更けたと云つてもまだ終電車の通るには餘程間があつた。隣の床屋の職人は二人で俄かに思立つて、邦太に言含めて置いて、家を忍び出た。「少しの間だから成るべく起きとれよ」と吩咐けて、八百屋のと向ひ合つた二階の窓を開けさせてゐた。

市中であつても蟲の音が彼方此方に聞えた。邦太は窓に凭れて居睡りをしながら、月に一度か二度は吩咐けられろ眠な役目を守つてゐたが、隣の二階の物音には何となしに聞耳を立てた。

「喧嘩をしてゐるんだな」と面白がつたが、後はひそ〳〵話になつて靜まつてしまつた。

五

書問はさうでもないけれども、夜になつて亭主の側に寢てゐるのを、おきくは日に〳〵味氣なく思詰めた。惡いと云ひながらも時々起きて店先へ出たり、信造などに指圖したりして、商賣に氣を紛らせてゐた頃は、その中には全快して、働き手揃ひで稼いで店も擴げる話などして、まだしも頼もしかつたが、寢床に就きつきりになつたこの頃の亭主の窶れた顔からは、將來の望みは何一つ得られなかつた。醫者も首を傾げてゐたが、とても助かる見込みがないとすると、東京へ死にに來たやうな亭主の不運が可哀想でならなかつた。せめて生きてゐる間だけは好きなやうにさせて大事にしようと思つてゐたが、眞夜中などに譯の分らぬことをくど〳〵云はれるのには つく〳〵惱まされて、早くこんな思ひから逃げられたらと、死ぬものなら早く死ねと、むごい思ひが頭を擦めることがあつた。

胸が締めつけられるやうで、吃逆上げる苦しさを覺えた時には、病人はよく「南無阿彌陀佛」を續けざまに口にした。それが不明瞭な力のない聲で呟かれた。

「から云つてゐると、いくらか氣が紛れる」と云つてゐた。

「何か外の事を云つたらいゝぢやないか。陰氣でいけないよ」と、おきくが顔を顰めると、

「外の事を云ふ氣にはならないよ。南無阿彌陀佛だと御利益があるかも知れんぢやないか。お前も神佛を拜んで呉れ。女でお前のやうに信心氣のないものはないぜ」

「家にや神棚もお佛壇もないから拜まうたつて拜めないよ。南無阿彌陀佛なんか聞いてても哀れでいけないから、何餐こんな病氣ぐらゐと元氣を出して御覽な。その方が幾度いゝよ。お前さんは病氣に負けるからいけないのだよ」

「お前は病氣をしたことがないからそんな思遣りのないことが云へるのだ」

泥色をした亭主の恨めしさうな口振りはおきくにも凄かつた。その長くのびた爪で此方の胸へ飛びついて來さうに思はれて身震ひした。

「お前さんが望むのなら金毘羅樣へお百度でも踏むわよ。水垢離でも取らあね」

「さうして呉れるかい。明日の日にでも金毘羅様へお詣りして呉れ」

「あゝ」おきくは氣休めに受合つたものの、眞西日に神佛へ祈願するやうなしをらしい心になれなかつた。東京へ來た當座一度遊びがてらに羽田のお稲荷様へ詣つて、商賣繁昌を祈つて御供物を頂いた時には、何となしに御利益があるらしく思はれたが、かうも衰へた死相を帶びた亭主の病氣が、神佛の力で癒らうとはどうしても信ぜられなかつた。

「おれは後一年でもいゝから丈夫な身體になりたいぜ。おれの壽命が盡きとるのならお前の壽命を一年取つておれの壽命に足しをして呉れ。お前は長生をするだらうから、一年ぐらゐおれに讓るやうに金毘羅様にお願立てをして呉れ」

「あゝいゝとも、二年でも三年でも」

「おれの云ふことを戯談にするんか」女房がいゝ加減にあしらつてゐるのを知ると、病人は心細くもあり腹立たしくもなつた。

「だつて困るぢやないかね。私の壽命を切取る譯にや行かないしさ」

「お前に親切氣がないからだ」

「そんな無茶を云ふもんぢやないよ。私は一日働いて眠くつてならないのに、かうして夜中に起きてるんぢやないか」

おきくも我慢しかねて荒々しく云つたが、すると、病人の窪んだ目には涙が溜つた。

「眠いくらゐが何だ。おれは今夜にも死ぬるかも知れんのに、お前は眠いくらゐがそんなにつらいのか」

「……」

おきくは例のやうに御機嫌を取らないで、頑なに口を噤んで目を背けてゐた。そして、病人が殊更めいた衝ない聲して善切らぬことを言出すのを聞いてゐられなくて、ふと寢床を離れて容衣に細帶を締めたまゝ、臺所口から廻つて表へ出た。終電車も餘程前に通つた後で、周圍は寂靜まつてゐた。

薄着には冷た過ぎる夜風に吹かれてゐると、胸の蟠りが融けて生返つたやうな氣持がした。月は東京のやうな市街にでも照つてゐるといふことを今初めて感じたやうに空を見上げて不思議に思つた。……おきくは病人の臭い息のしないところでのびゝと手足を伸ばして心まかせに休息したかつた。

「主婦、どうしたんです」蹲んでゐるおきくの後から、突如に聲がした。

「おや。今時分何方へ？」

「へゝゝゝ。……御病人は些とはよくなりましたかい」

「相變らずで困るんですよ」

「そりやいけませんね」

床屋の職人は二階を仰いで邦太を呼んだ。雨戸は開いてゐるのだが、寢込んでゐるのか返事がなかつた。例なら一人が連れの屋車に乘つて隣の廊へ飛びついて、窓から二階へ入るのだが、今夜は主婦に見られてゐるので、さうも出來なかつた。

「仕様がないなあ」と嘆いて、「邦、……邦公ッ」と聲に底力を入れて呼んだ。

女の所へ遊びに行つたのだなと、おきくは興がつて見詰めてゐたが、私が二階から呼んで見ませうよ」と云つた。

「お氣の毒ですがさう願ひませうか」

「どういたしまして」おきくは笑ひ〳〵云つて、「でも、朝まで家を空けないでちやんと歸つて來なさるから感心ですね。引留めたでせうに、さぞ」と呟つと揶揄つた。

「そんなんぢやありませんよ」

「お二人とも色男だからね。油斷は出來ないよ。……ちよんの間の蹤れ遊びつて面白いもの

ですつてね」

「主婦も口が惡いや」

おきくは珍らしく戯談口を叩いたのでいゝ氣持になつて自分の家へ入つた。そして、病人が何か云つてゐるのを見向きもしないで、いそいそ二階へ上つて雨戸を開けて、「邦さん」と二三度呼立てた。はては、屋根へ踏出して隣の窓の障子を開けて呼んだ。

「落ちたら大變だ。泥棒見たいだね」と、二人を見下して云つた。

邦太は眠呆眼をこすりながら窓から顔を出した。おきくは、「左様なら」を云つて、雨戸を鎖したが、眠氣が去つて頭は冴えてゐた。先きからの物音にも夢を破られないで、おてつや信造は正體なく眠つてゐた。階下からは「おきくおきく」と呼んでゐたが、その聲を聞くと、おきくは階子段を下りるのが厭で濟らなかつた。階下の電氣の光を受けて、上り口が明るいばかりで、二人の寢姿はよく見えなかつたが、信造の男らしい深い息を聞いてゐると、そのきび〳〵した逞しい身體が闇の中にも描き出された。

おきくは素り足で二階を被方此方と歩いてゐた。二人の寢床の中へ割込んで眠りたかつた。

「おきく、お前は何をしてるんだよ」階下の聲におきくは眉を顰めて舌打ちした。返事をしないでゐると、暫らくしてふと上り口に亭主の顔が現はれた。階子段に足音の前觸れもしなくつて出抜けだつたので、おきくはぎよつとした。見馴れた亭主の顔がまるで亡者のやうだつた。

「先きから何をして騒いでゐたんだ」

病人はのそ〳〵上つて來たが、おきくが何か云はうとしても言葉が口から出ない前に、信造の足に躓躓いてばつたり倒れた。

「危い……」

おきくは思はず叫んで、病人を抱いて、ぢつと寢てればいゝのに。私は夜遊びから歸つた床屋の若い衆に賺まれて小附さんを起しに來ただけだよ」と、邪慳に云つた。

「そりや餘計なおせつかいだ。外へ出たり二階へ來たり、おれが物を云つても返事もせんぢやないか。おれが寒い日をしても、今に今死んでも、お前は何とも思はんのだな」

「もう澤山だよ」

おきくはこの瞬間、亭主でも何でもない只の亡者に取付かれてゐるやうな不氣味さを覺えて、持つてゐた手を離したが、すると、病人は獅噛みついて、髮の毛をも掴つて、「出て行きたきや出て行け」と怒鳴つた。

「何をするんだよ、この人は」

おきくは我武者に相手を突放した。寢床の側の騒ぎにやうやく目を醒ました信造は、譯が分らないので夢を見てゐるやうな氣で、マッチを擦つてランプを付けた。胸をはだけて腿も露はな夫婦のしどけない様は滑稽だつた。おきくから譯を聞いて、病人を慰めながら階下へ連れて下りたが、おきく自身容易に下りて行かなかつた。

「吃驚したよ。おいらの腹の上へ打倒れたのだもの」

信造は思出すと可笑しくつて溜らないやうに、おきくに向つて云つて、元の寢床へ藻掻込んで、「姉さんも早く階下へお出でよ」と急立てた。

「さう追立てなくつてもいゝぢやないか」おきくは不承々々に階下へ下りた。そして、物をも云はずに夜具を引被つて、直ぐに空鼾をかいてゐた。

六

「今日は」と、床屋の職人に朝夕の挨拶するたびに、おきくは意味ありげな笑ひを送つてゐた

が、先方ではあまり取合はなかつた。そして、職人達は、いけ好かない主婦として蔭口を利いてゐたが、おてつから夜中の取組合ひの話を聞くと、それを誇張して考へて、寄つて來る近所の若い者に笑ひ話の種として吹聴した。

「主婦は毎晩二階へ匐つて來るのかも知れないぜ。お前さんは用心してゐないと信ちやんを取られるかも知れないぜ」と、職人はおてつを揶揄つたりした。

「いやな事云ふもんぢやないよ。信ちやんが聞いたら怒るよ」

おてつは眞に受けなかつたけれど、いゝ氣持はしなかつた。先日の晩の夢現で見てゐた驚きも、さう云はれて見ると、疑ひを容れられないでもなかつた。信ちやんに聞く譯には行かないが、これから寢たふりをしてそつと樣子を見てゐようと企てた。

で、例は日を瞑りさへすれば直ぐに眠入られるのに、その夜は思詰めた一心から、夜明け前まで眉を喰締めて起きてゐた。かうして起きてゐると、夜の長いことがおてつにもつく〴〵感ぜられて、信造の前後不覺に寢てゐるのが不思議でならなかつた。階下も靜かで何時まで立つても人の來る氣色はしなかつた。

天井で鼠の荒れる音や、彼方此方で吠える犬の聲を聞きながら、夜中といふものはこんなにも寂しいものかと思つて、耳を澄まして退屈な時を過した。

あくる日おてつは居睡をしつゞけた。午過ぎに靈南坂のお得意へ品物を屆けて來た歸りには、どうにも我慢出來なくて、道傍のお寺の石段に腰を卸して、一しきりぐつすり寢入つた。揺起されて目を醒すと、巡査が前に立つてゐた。たゞ注意されただけで叱られもしなかつたが、頭を下げてお詫びをして家へ急いだ。

「何處をまご〳〵してたんだよ」主婦に御突を喰はされたので、時計を見ると、短い針が最早四時を廻つてゐた。

二晩つゞけておてつは眞夜中まで睡を我慢したが、つひに堪へられなくなつた。病人の苦しさうな聲は時々聞えても、何時もよく眠る信造の側には別に異常はなかつた。で、安心して平生の通りに快い眠を樂んだが、しかし、以前よりは多少目敏くなつたのか、眞夜中にふと何かに脅かされたやうに目の開くことがあつた。

「信ちやんや主婦に暗いことは些ともない」と、おてつは床屋の職人に向つて、一度躍起となつて辯護した。

「戯談だよ、そんな事のある譯はないやね」と、職人は笑ひ〳〵謝つた。

が、この戯談半分の噂も何時となしに、信造の耳に入つたので、信造は驚いた。根も葉もないことを云はれるのも口惜しかつたし、殊に病人に對して氣の毒でならなかつた。

で、「相談がある」と云つて、おきくを二階へ呼んで、

「姉さん、おいらは暇を貰うて故郷へ歸らうかと思つてるけんど」と少し顔を赧くして云つた。

「甲州の方に急用でも出來たのかい」

「おいらは矢張田舍で働いてゐるんが氣樂でいいと思ふよ。東京は口が煩さいでな」

「お前さんのことを誰か惡く云つたといふのかい。何だね、そのくらゐのことでさ」おきくはぼんやりある事を思つて笑つた。

「姉さん知つてゐるんですか。他の事とは異つて厭なこつたからな」

「お前さんも氣が弱過ぎるよ。おてつとどうかうつて、誰かに揶揄はれたのだらう」

「あの女なんざ」信造は吐出すやうに云つた。

「姉さんだつて知つたら厭になるに違ひないや」

信造が遠廻しに微見かすのを、おきくは興ありげに聞いてゐた。「馬鹿にしてるよ」とにつたり笑つて、

「あまり馬鹿げて怒られもしないぢやないかね。そんな詰らないことを氣にして田舍へ行つちまふつてことがあるものかね。却つて變に思はれるわね」

「おらあ大將の病氣を心配して、御利益がありや盧鬚ちでも髮鬚ちでもするくらゐに思つてるのに」

信造は昂奮して云つたが、相手が噂などにさして驚いてゐないのを見ると、彼れの若い心にも多少の安易が得られた。

「初めから來て呉れなきや兎に角、今になつてお前さんに出て行かれちや、この商賣は今日が日から止めつちまはにやならないよ。それに、私でさへ見窄らしい樣をして故郷へ歸るのは死んでも厭だと思つてるのに、お前さんは此方で何も出かさないで、のこ〳〵歸つて行く氣になれるのかい」

さう云はれると、信造は自分が輕はずみに過ぎたことや意氣地なしに見られることが恥かしくなつた。そして、主婦と差向ひでゐるのが極まり惡くなつて目を外した。今まで夢にも思つてゐなかつたことで心が濁らされた。

「一本當に力になつてお呉れな。私はどうしてもやり通すつもりだから、信ちやんに味方になつて貰はにや困るよ」おきくは含羞んでゐる信造を見守つて、「病人は無理ばかり云つて私をいぢめるし、信ちやんにまで愛想をつかされちややり切れないよ。……他人がどんな噂を立てようと關はないぢやないかね」

「……」信造は話を外すために、病人は東京の評判の醫者に診せて、入院したのがよければさうしたらいゝぢやないかと、生眞面目に注意した。

「私も以前よくさう云つてゐたのだけど、當人が病院へは行きたがらないんさ。上田さんの見立てぢや、どうしたつて助からないらしいから、當人の云ふやうにして樂に息を引取らせたいと私は思つてるんだよ。あの身體ぢや傳に乘れりやしないし、ぢつと寢かしとくのが何より藥なのさ」

「癒る見込みはないのかね」

平生をり〳〵話合つてゐる病人の容體話は、つまり同じ言葉の繰返しであつて、何方にも以前ほどの熱心は消えてゐた。

私は半歳の餘も介抱してゐるんだもの。根も盡きやつたよ。こんなお役目はもうそろ〳〵切上げて貰ひたいものだね」

「主婦、親方が呼んでゐますよ」

おてつの聲におきくは又かと厭々座を立つたが、信造は居づらい席から救ひ出されたやうな氣がした。

が、頭に雲が懸つたやうで、それからは病人や主婦の顔を平氣で見てゐる譯に行かなくなつた。二十二のこの歳まで女といふものを知らなかつた信造には、噂を立てられただけでも啻ならぬ身の上の事件だつた。

七

主婦と一つ膳で食事をしてゐる時でも、病人の看護をしてゐる時でも、信造は目に〳〵無邪氣さを失つてゐた。そして病人の窶れた姿を見てゐると、理由のない恐ろしさが感ぜられた。痩んだ鈍い眼で見られるのが凄かつた。病人は、

「おれは頭を剃りたいから床屋へ連れて行つて呉れ」と、信造を招いて云つた。

「動いても惡くなけりや連れてつて上げるけれど」

「なに、惡くなつても構はん。おれはくる〳〵

坊主になりたいよ」
「さう伸びてゐちや氣持が惡いだらうな。一分刈りにしたらいゝだらう」
「いや、おれは髪が伸びて煩さいから刈りたいのぢやない。坊主になりたいんだよ。佛様のお弟子になつたつもりで居りたい」
胸苦しいをり〳〵南無阿彌陀佛を唱いてゐたためかと、信造は可笑しく思つて、頭を剃つて氣が晴れるものならそれもよからうと同意して、肩を貸して土間まで連れて來た。店先には明るい日が差してゐて、そこらに並んだ色さま〳〵の水菓子や野菜物は、病人の目にくら〳〵と映つた。
「大丈夫かい」
信造はさう云つて、下駄を穿かせようとしたが、骨と皮になつた足は下駄の重みにさへ堪へられなかつた。表を通りながら此方を顧みて顰を顰めた者もあつたが、そこへ歸つて來たおきくは、
「何處へ行くんだね」と血相變へて叫んだ。そして信造から譯を聞くと、「お前さんにも呆れるよ。病人が何と云つたつておいそれと外へ連れ出すつてことがあるものか。轉んで怪我でもしたらどうするんだよ」と、二人を叱りつけて、病人を抱へて元の寢床へ運んだ。
「床屋なぞへ行つて病氣が惡くなつて御覽なね、私の所爲にされるよ。これだけ氣をつけてるのに、お前さんを粗末にしたやうに思はれちや割に合はないからね」
「ぢや、お前がおれの髪を剃つて呉れんか」
「私に剃れるものかね。何を云ふんだよ。坊主になるなんて縁起でもない。もつと氣分がよくなつた時に床屋の若い衆に來て貰つて刈つて貰へばいゝぢやないか」
「どう云ふ譯だか自分でも分らないが、おれは坊主になつたら氣が安まるやうに思はれ出したのだ」
病人は今結つて來たらしい女房の髪を見入つて、「お前に親切があるんなら、おれと一緒に頭を剃れ。お前が尼になつて其處にゐて珠數をつまぐつてて呉れゝば、今にでもおれは安心して死ねるのだぜ」
「私が尼になつたらよく似合ふだらうね」おきくは危く噴出さうとしたが、白目を寄せて見上げてゐる相手の顰を見ると、自ら笑ひは留つた。「坊主頭ぢや店へも出られやしないよ。人が狂人だと思ふよ」
「狂人と思はれるのが何だ」
病人は恨めしさうに云つた。自分の心持がどうしても女房に呑込まれないのが無念しくて、手も顰も足もぶる〳〵震はせた。……狂人と思はれるのが何だ。髪を切るのが何だ。……自分のこの術ない手頼りのない氣持は長年連れ添ふ女房にも分らないのだ。
「お前は髪を結つたりして、それが面白いのか」
執念く詰られるのに答へやうもないので、おきくは店の方へ出て行つた。そして、來合はせた客に向つてお世辭などを云つてゐたが、病人はその快活な聲を聞きながら、先き久振りに出て見たいろ〳〵に色取られた店の様子を思起してゐると、ます〳〵心が焦立つた。昔馴れた自分の店でも遠い處にある珍らしい世の中のやうで、其處に立働いてゐる女房や信造やおてつが妬ましかつた。枕許の障子の裾の方に差してゐる光のしよんぼりしてゐるのに引替へて、表通の秋は眩いくらゐに燦いてゐたやうに彼れには思はれた。
で、病人はひとり憫れむやうに殊更に呻いてゐたが、ふと兼匂の側の剪刀が目につくと、寢床から飛出して取つて來て、耳朶の上までも延びてゐる髪の毛を滅茶々々に切り散らした。

「主婦、大變だよ」所から起いて見たおてつの叫び聲に、おきくは驚けて來て剪刀を奪取つた。氣が狂つたのかと見てゐたが、病人は頻りに髪の毛を掴んで、もつと切つて呉れと强請んだ。
「仕様がないね。ぢや、床屋に來て貰はうよ」と、おきくはおてつに吩咐けた。
春の高い方の職人が道具箱を提げて來るまでに、寢床のまはりは大急ぎで掃除され、散らかつたものも片付けられ、病人の寝衣も取替へられてゐた。得度の式でも始まるやうに、信造も寢床の側に鹿爪らしく控へてゐた。
職人は病氣見舞の無駄口を暫らく利いてから、皆なで評議の上で、一分刈りにすることにした。信造は病人の身體を支へたが、垢臭い、脂臭い、齒屎臭い臭ひに鼻を外した。
冷たいバリカンが頭の皮に觸れるのはいゝ氣持であつた。前に振り落される長い髪を見てゐると、長患ひの自分の惨みをまざ〳〵と見せられてゐるやうに病人は感じて涙をこぼした。
「私はまたこのくらゐ髪の延びるまで生きちやゐまいよ」
「なあに髪なんざ直きに延びますぜ」職人は大急ぎに片付けながら、年の内に店の普請をする話などをした。
「これで薩張りしたらうね」と、女房の持つて來た鏡に自分の映るのを、病人はちらと見たが、惨いやうに鏡を押退けて横になつた。
「綺麗な坊さん」と、おきくは笑つて店の方へ出た。
「南無阿彌陀佛々々々々々々」と、今は苦痛を紛らすためでなくて心から念佛を唱へてゐると、清吉の胸にも少しの間俗慾を離れた安らかな諦めが得られた。そして暫らくはすや〳〵と眠入つた。
「あんなことを云ふやうだと、もう死に時が來たのだよ」と、おきくは火鉢の側で一服吸つてゐる信造に云つた。
「大將は幾つだね」
「丁度だよ。こんなに早く弱るのは働き過ぎたからだらうよ。露月町に某公してゐた時分には、其處の主人が肺病で寢たつ切りだつたのだつて。さういふ譯で店が潰れたのだから、碌にお給金も貰へないで、手ぶらで甲州へ歸つたのだらう。あの病氣は露月町で傳染つたのかも知れないと私は思ふよ」
「だつて、肺の病氣が腹に傳染るつてことはあるまい」信造は主婦の無智を腹の中で笑ひながら、「姉さんは大將と一つ違ひだつたね」と、來た時よりは小濶洒して女振りが上つたと思つて見てゐた。
「私なんかもうお婆さんだわよ。身體一つを資本であがいてゐるんだもの」と、おきくは甘つたれた聲を出した。
「なあに歳よりは若いよ」
「信ちやんもお世辭が旨いよ」
だけど、身裝ふりなんざどうでもいゝ。うんと極がなければならない。私はさう思つてゐるから、信ちやんも若い女なぞに目を移さないで、お金を儲けることに一心になつてお呉れと」おきくはとろけかゝつた心を引締めて眞顔で云つた。
「東京の若い女はなか〳〵油斷がならないから浮かり迷はないやうにおしよ」
「おいらもそんな馬鹿ぢやない」
信造は先日から主婦の日頃や言葉付やいろんなもので、絶えず好奇心を刺戟されながら、何事もなく過ぎてしまふのを抵抗しく感じてゐた。そして、眞心から病人の介抱をしてゐるらしいのを見ると、一寸厭な氣がした。
「南無阿彌陀佛」

病人の幽かな寝言に、二人は目を見合せて微笑した。

八

信造は最早おてつを優しく扱はなかつた。下女見たやうに指圖して時々は荒つぽく叱り飛ばしたりした。おてつはそれを氣にしないで云はれた通りに働いて、「信ちやん」と呼掛けて遠慮のない話を仕向けたが、快い返事は得られなかつた。活動寫眞や寄席などへも信造一人で出掛けることはあつても、一緒に連れて行かれることはなくなつたので、おてつは何よりの樂みを失づた。それどころか、主婦が言付けたのか、當人が望んだのか、信造は階下へ夜具を持つて下りて、二階では寝なくなつた。

「親方が何時死ぬるかも知れないからだらう」と、おてつは獨合點をしてゐた。

「若い者を同じ部屋に寝かしとくのは爲にならんとお前が云つたから、信ちやんに階下へ寝て貰ふことにしたのだよ」と、おきくは病人に言譯した。病人はそんなことを云つたかどうか覺えてはゐなかつた。信造が傍に付いてゐて呉れるのは一時心丈夫であつたが、若い者の太い寝息が寝へた神經の悩らひになることが多かつた。

「おれが夜中にでも急に息を引取るやうな事があるかと思つて、用心に信造を此處へ寝かしとくのだらう。それならさうとはつきり知らせて呉れ。おれも覺悟をしなきやならんから」

「さうぢやないと、よく譯を云つてるぢやないか」

「……おれは當分靜かな處にゐたいよ。夜中に目を開けて見てると、信造の大きな身體が目障りになつて仕樣がない」と、病人は目の前を手で拂退けるやうな眞似をした。

「ぢや、見なければいゝぢやないか。電氣を消しといたらいゝだらう」

「消したつて駄目だ。元の通り信造を二階で寝させて呉れ。側にゐなくてもあれが二階にゐると思へばおれは手頼りにしてゐられるのだ」

「そんなに人間が邪魔になるのなら、私だつて此處にゐちやいけないだらう。私も二階の隅つこででも寝てゐようかね」

さう云つて笑つてゐるおきくの顏を、病人はぢつと見入つて默つてゐた。（女房のがつしりした身體や荒つぽい寝息が目に觸れ耳に觸れてゐればこそ、淋しい夜中でも怖い物に魂を浚つて行かれないのだつた。疼痛が激しくて念佛の效目もない時には女房の五體を唯一つの身の置き場所でもあるやうに、その膝に身體を投げかけ、その腕に縋り、その肩に縋りついて呻くのだつた）

以前のやうにむづかつて無理を云つて、物を投げつけでもしさうな氣振を見せる勢ひが最早なくなつてゐて、昨日今日はやゝともすると、憐れを乞ふやうに相手を見据ゑるのだつたが、おきくには默つてゐる夫の心の中などはどうでもよかつた。今生の義務として時刻が來れば無理にも藥を飲ませたり、背を擦でさすつたりしてゐたが、相手が默つてさへゐれば、その苦痛は何とも感ぜられなかつた。そして、信造をおてつの部屋から離して自分達の側に置いてゐるといふことは、病人のためよりもおきく自身のためにどれほどの心の安易が得られたか知れなかつた。

「信ちやん、お前さんは眠づらいのかい」おきくはある夜夜具の中でごそ〳〵音を立ててゐる信造に聲を掛けた。

「あゝ。……」

「どうしたのだい、お前さんは暇つても起きないくらゐの寝坊だつたのに」

「どうもしないけど、……」

「矢張おてつの側の方が寝工合がいゝのかい」と、おきくは一寸揶揄ひながら笑つた。

「馬鹿云ふなよ」

信造は怒つたやうに云つて主婦に背を向けた。そして空鼾を掻いてゐたが、一捻りで倒れさうな骨と皮との病人を汚いとも思はないで、看護してゐる主婦の樣子を見てゐると、自分が關り物になつてゐるやうな氣がしないではなかつた。病人の寝床の惡臭は實際以上に被れの鼻を衝いた。……六本木の活動寫眞で見た怪談の光景が夢ともなく現ともなく彼れの頭に浮んだ。

「お前さん手を貸して呉れ」……ぐつと喉佛を壓へると手脚へもなかつた。

ふと薄日を明けると、明るい電氣の下で主婦は病人の側にすや〳〵と眠つてゐた。何だか聲がしたやうだなと思つたのは病人の聲だつた。

「信造……」

「苦しいのかい」

「おれは今さう思つてゐたのだが、おれが死んだら、おきくが何と云つても お前は故郷へ歸れ。……」幽かな聲で云つてゐるのがこれだけは聞取れた、がその後はよく耳へ入らなかつた。

「あゝ、おれも田舎の方が呑氣でいゝと思つてるよ」

信造は相手の顏を見ないで答へた。

八百屋の看板の書替へられたのは春になつてからだつたが、自轉車の赤い文字の「清」が消されて「信」となつたのは去年の秋の末頃だつた。

信造がどうしても階下では寝ないで、おてつ一人が階下に寝るやうになつたことを、おてつ自身床屋へ來て話した。「信ちやん」といふ馴々しい言葉は彼女の口から出なくなつた。

「お前さんはまだ此方に奉公してゐるつもりかい」と職人が訊くと、

「何處へ行つたつて同じことだから居馴れたところにゐるつもりなのよ」と、おてつは答へた。

そして、おてつは御用聞やら臺所仕事やらで相變らず忙しかつた。二人の汚れ物の洗濯までしてゐた。

農民藝術

私は地方語を好まない。しかし、私は地方語を驅使して地方人の生活を深刻に描寫し得る自信はないので、企てもしないが、日本にその國民の過半を占めてゐる農民の生活の眞相を描いた文學の出て來ないのは不思議に思つてゐる。長塚節氏の「土」はいゝものらしいが、その外には、大したものがなささうである。

この泥臭い氣の利かない感じの惡い地方語でも、大天才の手にかゝつたら、生々として來て、我々の心が捉へられるやうに響くのであらうが、時々目に觸れる田園小說の田舍言葉の羅列の如きは、たゞ薄汚いばかりのやうで讀むに堪へない。

（「文藝評論」の「感想片々」より）

心中未遂

一

いよ〳〵今日となつた。

おすゑは最早うつかりしてはゐられない。昨日までは、何か急にいゝ事が湧いて來て、泰公話も自然立消えになりはしないかと當てにして、神や佛を一心に念じてゐたのであるが、それも空頼みになつてしまつた。いよ〳〵今日からは、子供の顔も見ないで日を送らなければならぬ。知らぬ人の間に交つて馴れない勤めをしなければならぬ。

おすゑは鞄當を抱いて勤工場へ出掛けて行く妹を見送つてから、暫らく火鉢の側に首垂れて黙いでゐた。平生なら容易に行火を燃れない母親も、今朝は早く起きて、何をするともなく、一室きりの家を彼方此方覗り廻つてゐる。壁一重の隣の家で子供の暴れてゐるのが、床に響いてゐる。

「長島町へは一寸頼出ししといた方がいゝだらう。默つてゐて、後で知れると、彼處でも氣を悪くするだらうから」と、母親は勧めたが、おすゑは、

「私、もう彼處へは行きたくないよ」と、角立つた言葉で答へた。

おすゑは母親の言葉を煩さがつて、返事をしないでゐた。長島町の旦那の世話でミシンの術を習つたのだけれど、今から思ふと、それが身の仇になつてゐるかも知れない、苦勞してあんな事を覺えなければよかつた。と、おすゑは今その旦那に對して恩を感ずるよりも、むしろ忌々しく思つた。「身に一つ藝があれば、一生喰外はないものだと、旦那はよく云ひ〳〵してゐたけれど、當てになりやしない。いくら男に負けぬやうに稼いだつて、こんな羽目になつちまつて」

おすゑはこれまでの自分の苦勞を顧みると、自分で自分が働くはしかつた。世間にこれほど苦勞した女が外にあらうかと思はれた。夫婦共稼ぎで身代を仕上げるつもりで、身粧も闘はなければ、碌に物見遊山に行つたこともなかつた。

寒くつても暑くつても、洋館へ生地を取りに行つたり、筒袖で夜業をしたりしてゐた。……それが何になることか、夫が鞄大町の女狐に誑かされに行く資本になつたばかり。食べるものも食べないで買つたミシンの實械さへ、何時の間にか無くされて。……

おすゑは一年この方妻も見せない夫の事を思出してゐると、神經が高ぶつて、心が燃立つやうだつたので、ふと今日の場合を忘れて、恐ろしい夢を見ながら、齒軋りしてゐたが、その中鳳の家の時計が九時か十時かを打つたので、夢から醒めたやうに周圍を見た。

「もう叔母さんが迎ひに來る時分ぢやないかね」と、母親が云つたが、その言葉はおすゑの胸には釘を打たれたやうに響いた。

「もう浮かりしてられない」と、おすゑは身を起して、「ぢや、私が湯に入つて來るよ」と、大人しく母親に告げた。

見ると、よく眠つてゐると思つてゐた朝吉は、パッチリ目を開けてゐる。「お母さん、朝は先きから起きてるんぢやないの」と、不平らしく云ひながら、急いで抱起して、乳を與へた。

そして、「お前もお湯に連れてつて上げようね」と背負うて出た。朝吉はウ、〳〵と喉を鳴

らしながら、素直に母の背に縋付いて、大きな澄んだ目を張つてゐた。その目もその口も可愛らしくて、譯を知らぬ人には、人形のやうだと褒められたこともあるが、さう云はれるたびに、おすゑは穴へでも入りたいやうな氣になつた。

朝吉は人形のやうに魂がないのである。口も一つ利けないのである。去年の春腦膜炎で死に掛けたのを、注射の力でやう〳〵命拾ひをしたものの、この先き五六年の壽命も六ケ敷いと、醫者から無慈悲な申渡しをされてゐる。どうせ人並になれぬ身體なら、强ひて長生をさせたいとも望まない。たとひ五年が三年に縮まらうとも、それは諦めてゐる。殘惜しいとは思ひはしない。だけど、どうせ短い命なら、息のある間は見窄らしい服裝をさせたくない。粗末な物を食べさせたくない。そして、母の懷で靜かに息を引取れるやうにしたいものだ。明日から預つて呉れる筈の里親が、いくら親切であらうとも、子煩惱であらうとも、他人の側で死なせたくない。……

おすゑはさう思詰めると、いつそこのまゝ朝吉を連れて、人の氣づかぬ遠い處へ逃げて行つて、調へでも海へでも飛込みたいやうな氣になつた。うか〳〵湯屋の前を通過ぎて、一二町當てもなく歩いた。そして、去年の夏の晩、ふとした事から變な氣になつて、子供を背負つて、涙に萎れながら海岸通を行きつ戻りつしてゐる中、巡査に見咎められ、驚いて家へ駈戻つたことなど思出してゐた。

ふと、目の前に始終病兒の藥を買ひに行く藥屋の看板が見えたので、おすゑは思はず足を留めた。何だか其處を通つて店の者に見られるのが厭だつた。それに、薄着の肌と素足とに觸れる風が急に寒く感ぜられて、頭りに嚏が出さうになつた。首を捻向けると、思ひなしか、朝吉の顔も寒さに慄へてゐるやうであつた。

と見ると、おすゑは急いで後戻りして湯屋へ入つた。知人も來てゐないし、子供連れも來てゐないのに安心して、ゆる〳〵二人の身體を洗つた。朝吉が兩手で湯桶を叩きながら喉を鳴らしてゐる間に、おすゑは取留めのない考へに耽りながらも、身體中殘る隈なく磨上げた。頬は次第に紅味がさして、胸にも手にも吸かい血がめぐつたないやうに見えた。

ふと、入口から母親が顔を出した。「先きからなぜ來て待つてるよ。此處にゐるんならいゝけど、外へ廻つてるんぢやないかと思つて」と身體に似合はぬ大きな聲を出した。何時になく長湯を怪んで迎へに來たのだつた。

「さう？　直ぐ歸るよ」

おすゑは歸つて叔母の顔を見るまでに、よく自分の量見を極めて置かねばならぬと思つたが、さて異つた考へも浮ばなかつた。只胸がわく〳〵するばかりだつた。

歸ると口數の多い陽氣な叔母に急立てられて、化粧をして衣服を着替へた。里親の來るのを待つことさへ許されないので、朝吉を母に渡して、後髪を乘かれるやうな思ひをして汽車に乘つた。

「用事があつたら、何時でも私の家へ電話を掛けな。今度のことは私が引受けたのだから、決して心配おしでないよ。この先決してお前さんを困らせるやうなことはしないんさ」と云つて、叔母は茶屋泰公の心得などを話した。

が、おすゑは身を入れて聞いてはゐなかつた。大森まで連れて行かれて、櫻の花や南天の實で白く赤く色取られた繪のやうな高樓を仰いで、「彼處だよ」と叔母に教へられた時は、「まあ綺麗な家だわね」と、思はず云つて、夢見るやうにうつとりした。あんな家で自分のやうな者が勤ま

るだらうかと氣遲れもした。

二

かうしておすゑは、自分では確と覺悟をしたとも覺えぬのに、何時の間にか極屋の女中の一人となつた。日常りの惡い陰氣臭い賤町の路次裏で、手足を黑くして根限り稼いでゐた先日までの事を思ふと、自分でも不思議であつた。見るもの聞くものが珍らしくて、此處にゐる人や遊びに來る人の心の中が分らなかつた。皆な苦勞がなくつて、お金の自由になるのが不思議に思はれた。そして、おすゑはお祝儀を頂くたびに極り惡い思ひをした。

廊下に立つと、遙かに海の方までが廣々と見下されて、煙を曳いて見えつ隱れつする汽車の響きが强く聞えた。あの汽車に乘りさへすれば、間もなく濱へ歸れるけれど、とおすゑは屢々汽車の行方を心で追つて、煙や音が消えると、淋しい思ひをしながら、曇々しい周圍を顧みた。庭の枝に釣した鈴は微かに動いてゐて、快い匂ひは鼻を掠めた。美くしい顏の男がしどけなく醉つて、藝者の肩に縋つて、笑話をしながら向ひの廊下を通つた。咲盛つた梅の花を隔ててその樣を見てゐると、さながら芝居を見てゐるやうだつた。

「おすゑどん、新二號でお呼びですよ」と、下の廊下から、丸顏の女子が仰向いて、金切聲で叫んだので、おすゑはやうやく、我れに返つた。小聲で返事をしてバタ〳〵と駈付けて、小高い新二號の障子を細めに開けて、「御用を伺つた。

無骨な顏した若い男と、年增女と差向ひで澄してゐたが、女の方が輕く首を曲げて、「ちよいと横になりますから、お床を伸べて下さいなに」と、事もなげに云つた。

が、おすゑはその意を呑込みかねて、「お床を伸べるので御座いますか」と問返して、もじ〳〵してゐた。

「さうですよ」と、女は流し目に見て、險しい調子で簡單に命令した。

おすゑは思はず顏を赤らめた。そして、極りの惡い思ひをして、客から顏を背けて、恐る〳〵寢床を敷いて障子を締めた。逃げるやうに階段を下りて、何處へ行くともなく廊下を傳つてゐると、長逗留をしてゐた二人の支那人の一人を今送り出して來たおのぶが、擦違ひさま酒臭い息を苦しさうに吐きながら、「貴女に電話よ。牛込からだつて。早く行つてらつしやい」と促した。

電話は牛込のさのやといふ待合にゐる叔母からであつた。自分の家に變事でもあつたのかと氣を廻して、胸騷ぎをしながら急いで聞いたが、叔母の聲とは思はれぬやうな聲で、不埒な話が繰返された。幾度聞直してもよく分らないので、側にゐた朋輩に代つて聞いて貰ふと、その用向は何でもなかつた。「……明日叔母の家のお客樣が二三人連れで遊びに行くからいゝ座敷へ御案內して大切に扱つて呉れ」と云つて、「よく辛抱おしよ」と附足したさうである。

「承知しました」と、おすゑは自分で電話口へ出て答へて、「叔母さんどうぞ來て下さいな」と懷かしさうに云つたが、その答へは聞えなくて電話は切れてしまつた。

朋輩にはそれ〴〵惡意な客があるらしいのに、おすゑにはまだ一人として顏馴染がないのだから、叔母の話のお客でも自分の名を差して來るのが悅しいやうだつた。で、帳場へ通して、いゝ座敷を空けて置くことを頼んだ。

一つ用事が濟んでも、次の勤めには氣が付かないので、やゝもすれば廊下に立つて、ぼんやり何處ともなく見詰めてゐた。そして、朋輩に呼立てられては、俄かに慌て出した。まだ番頭さへ覺え切れない座敷へ迷ひ〳〵顏を出しては、

不器用な相手して、自分の持場の五六組を大方送り出してしまふ頃には、ランプが部屋々々に配られて、花の色も見分けがたくなつた。客を見送つて行く提灯が、後の薄暗い丘の方へ小さく動いた。晝間の混雜も大風の跡のやうに靜まつて、今朝から酒びたりで暴れてゐた梅の間の客も、ぱた〳〵醉倒れて、鼾ばかりが洩れてゐる。

最初からひつそりしてゐて、あまり女中の手を煩はさなかつた新二號の二人連れも、そろそろ歸支度をした。おすゑは賑かな座敷よりも、靜かなこの二人に一層心を惹かれて、近くの廊下を通る折には、わざと足音を忍ばせて、耳を澄ましてゐたのだつたが、今前後して廊下へ出て來る二人の樣子を、薄暗い處から見ぬ振りで見詰めてゐると、女の顏は初め見た時よりも、もつと醜くて厭味に思はれた。そして、男の顏は潔々しくて輕もしさうに見えて、今日此處へ來たどの客よりも、心に適つたやうに思はれた。で、女の方が遠慮氣もなくて、何だか横柄らしいのが小面憎かつたが、それよりも、何故この男がこんな厭な年上の女なんぞと一緒に來たのかと、歯痒くなつた。この男になら、どんないゝ女だつて思付くだらうに、何處がよくつて、こんな女なんぞに……と、おすゑはこれまでにない多額の祝儀を女の手から貰つて、石段の下まで見送つた後も、伸の音の消えるまで、その方へ心を留めてゐた。

「あのお客樣は何でせう、變だわね」と、廊下の柱に凭れて小聲で何か呟ひながら醉を醒ましてゐるおのぶに訊くと、

「先月の末だつたかね、雨の降る寒い日に一度來たことがあるの。その時は私の番だつたの。中々調子のいゝ人でせう」

「でも、隨分氣六ケ敷さうな人ね」

「さうでもないよ。顏は何だけど、薩張りした面白い人だよ。この前は私も暇だつたから、お酒のお相手なんぞして、いろんな話をして笑つて、隨分面白かつたわ」

おのぶはさう云ひながら、おすゑを相手にせぬやうに、背を向けて歩き出した。おすゑは立入つて二人の身の上を訊きたかつたけれど、輕く口を利きかねた。

三

雨戸は鎖されて夜は更けた。微かに震へてゐる木の葉の音や、風鈴の音が、おすゑの耳には淋しく浸入つて、便所へ行くのさへ恐かつた、寢床に就く前に、買つた祝儀を勘定して、財布の中へ收めたが、思ひの外に金高は多かつた。これでは月五圓の里扶持や母と、妹との暮らしの足しぐらゐ造作なく仕遂げるらしい。矢張叔母さんの云つた通り、割のいゝ稼業に違ひない。かうと知つたら、もつと早く泰公に出ればよかつた。あんな苦勞ばかりしないで濟んだのに……と、獨り思耽つて元氣づいてゐたが、すると、母や妹にも此方の事情を知らせて、安心させたくなつた。

で、朋輩が梅の間の藝者の惡口や、明日の陽込の噂などしたから、寢床へ入つた後で、おすゑは一人寢衣のまゝ枕許で、眠い目を擦つて、覺束ない筆を運んでゐたが、暫らくして不意に手紙の上に打伏して、吃逆泣きをし出した。

「どうしたの、おすゑさん」と、直ぐ側に寢てゐるおきよが、頭を持上げて訊いた。「どうしたのさ。何處か加減が惡いの」

おすゑは胸を押へたまゝ、はつきりした返事をしなかつた。

おのぶもおとくも、眠入らうとした目を開けて、樣子を見ると起上つた。そして左右から「どうしたの〳〵」と、次第に側へ擦寄つて、氣

遣はしさうに柔しく訊いた。が、おすゑは極りが悪くて、容易に打明けないで、泣聲を我慢してゐたが、涙のみ湧出て頬を傳つた。

一本當にどうしたのさ。云はなくちゃ分らないぢやないの、人にばかり氣を揉ませて」おのぶはやがて慳貪な口を利いた。側を離れて寝衣の袖を揉合せ、首を縮め眉を蹙めて見下した。

「お腹が痛いんだらう」と、おとくは欠伸を噛みながら云つた。

「濟みません〳〵。私、乳が張つて來て仕様がないんですの」

おすゑはかう言譯して、目を拭つて頬を上げた。目の縁は赤くなつて、萎れた頬は誰れの目にも痛々しく見えた。

「乳が張るつてどうなるの」と、おのぶは不思議さうに相手の胸のあたりに目をつけたが、年上のおとくは、自分でそんな覺えがあつたやうに、乳の張つた時の氣持の惡さを言葉を强めて話して聞かせた。そしておすゑに勸めて、茶碗の中へ絞り出させた。

「乳呑兒を他人に預けてゐちゃ、氣に掛るだらうね」

「でも、よく思切つて打遣つて來られたのね」

「おすゑさんの除氣にしてるのも無理はないわね」

互ひにこんな事を言合つて、その兒の事やおすゑの身の上を、根掘り葉掘り訊出した。おすゑは自分の取を曝すやうな氣がして當惑した。で、明らさまに話るまいとしたけれど、親切づくで問はれるのに默つてもゐられなくて、止切れず止切れに、目の惡い老母や人並でない朝吉や、づぼらな前の夫の話をした。朝吉が啞で白痴であることだけは隱して、夫の病氣を受けて、生れながらに目を病んでゐると話した。「いくらお金が入つても、今の中にいゝお醫者に見せて、目だけは療治させようと思つてゐます。若しか潰れでもしたら、一生棒流しますからね」と云ひながら、自分の話を憐れつぽく感じて、新に涙を滅いだ。

その素振と話の事柄は、手易く女達を動かして、聽手は皆貰ひ泣きをした。おのぶは袖袢の袖を濡らすほど泣いた。同情の言葉は一時小止みなくみんなの口に上つた。

「だから、私は一生結婚なんぞしないわ」とおのぶは深く感じたやうに云つた。「そんな目に會はされるよりや、一人でゐる方が幾らましだか知れないわね」

「私も本當にさう思つてよ」と、おきよも相槌を打つた。

「私、朝ちやんとかに會つて見たいわ。も少ししして暇になつたら、一日此家に連れてらつしやいな。皆なして大事にして可愛がつて上げるわ」

「おすゑさんのことを思ふと、私達は涙が當るわね。自分で稼いだだけ自分の好きなことに遣つて。……私、これからもう無駄なお錢は費はないよ」誰れかが殊勝らしく云つた。

「おすゑさんは大人し過ぎるからいけないんさ。御亭主がそんな不始末をするんなら、思切り仕返しをしてやればいゝのに。私だつたら默つて勝手な眞似をさせときやしないよ」誰れかがつけ〳〵云つた。

一しきり、皆ながそれ〴〵に喋舌つてゐたかと思ふと、やがて欠伸まじりで物云ふ力も衰へて、誰れからともなく、何時の間にか皆な寝床へ入つてしまつた。

おすゑも役から、冷たい夜具の中へ入つて身を縮めた。暫らく朋輩の寝言や歯軋りの音に累はされて、眠もやらず衝なさうにしてゐたが、すると、浴室の後の篠の中に捨てられた犬の子が、コツ〳〵音をさせては、泣聲を立ててゐるのが、氣味惡く耳についた。

四

その翌日は穏かに冷たい春雨が降つた。折角の日曜も雨のために振りの客は少かつたが、廣間では日本橋の銀行の連中六十人からの大宴會があるので、朝から可成り忙しかつた。義太夫の師匠まで、襷掛けで廊立の手傳ひをした。

おすゑも氣を詰めて立働いた。そして、二時頃やうやく配膳の濟んだ時分、帳場から氣立たましい聲でおすゑの名が呼立てられた。昨日の電話の人達が伸を連られて來てゐるのである。

今までの混雜に紛れて忘れてゐた叔母の知らせを思出して、慌てて玄關の方へ下りて行つた。洋服や和服の四人連れが賑かな話をしながら、其處に立つてゐて、皆なの目がおすゑの顔に向けられた。

おすゑはこんな場合に相應しい言葉が口から出なくつて、ドギマギしてゐたが、折よく彷にゐたおきよに、「新五號へ御案内したらいゝでせう」と指圖をされたので、默つてその方へ導いた。

「一昨日君の叔母だといふ人から、君のことをよく聞いたよ。勤まるだらうかつて叔母さんは心配してたよ。……どんなだい」と、客の一人が、坐るが居いか、顔を見詰めて訊いた。

「些とも馴れませんから」と、おすゑは低い聲で答へた。廊下へ出たが、今聞いた言葉は、この頃雪で聞いたことのない愛情のある懷かしい調子を帶びて耳に殘つた。そして、姿形も四人の中でその男が際立つて勝れてゐるやうに思はれた。

で、叔母の樣子をよく訊いたり、叔母への言傳をしたり、この人になら打解けた話も出來さうだつたが、外の人達が怖られた。「あの人一人遊びに來たのならよかつたのに……」

二度目に、お誂へを何ひに行くと、皆なが合つてゐた。おすゑは自分が顔を出すと、皆なが自分の方ばかり目を付けるやうな氣がして、窮屈だつた。そして、自分の目の向け處に困つたが、かの柔しさうな男が乘出して、穏かに口を利いて呉れたので、その人に向つて、お好みを訊いた。特別の註文をする人は外になかつた。名前を三浦といふらしいこの人が、一座の兄分で、何もかもこの人まかせといふ風に見えた。

「お酒は成るべく早く」と、三浦は後から聲を掛けた。

おすゑは廣間の側を通りながら、そつと覗くと、其處には最早酒が廻つてゐて、座も入亂れ、騒がしい間に三味線の音もしてゐる。大勢の客の顔付や服裝が、それ〴〵に異つてゐるのを見比べてゐると、中々に面白いので、暫らく立つて見てゐたが、すると、盃の取次をしてゐるおとくが、ふと振返つて、意地惡い目付で此方を見た。

おすゑは慌てて行過ぎた。後で小言を云はれさうなのが氣になつた。「貴女は成るべく廣間の方を手傳つてお呉れよ」と、おのぶに云はれても、「えゝ」と返事したばかりで、其處へは寄付かなかつた。自分の持場だけでも忙しくて暇がないやうな風をして、何處へ行くにも廣間の側を避けて遠廻りした。

酒が出て料理が揃つても、新五號の客は座敷山藏もしないし、皆な靜かだつた。客同士で議論めいたことを言合つたり、女話をしたりしても、女中に向つてはさして戯談を云はなかつた。

おすゑは勤めよかつた。そして、默つて、お酌をしながら、客の話に耳を留めてゐた。三浦、倉賀、大井、田川、四人の名前も自ら分つた。

「今だから話すけれど、それに違ひないんだ」

と、口髭の濃い顔の角張つた大井が、紅くなつた目元に笑ひを含んで、勢ひのいゝ調で云つた。「今あの女は庄司と一緒にゐるんだよ。先日庄司のお袋が來て、譯を話して、貴下に申譯がないから別れさすやうにするつて云つてたけど、僕は初めから庄司に黙して何とも思つてやしない。あんな奴に付纏はれて馬鹿な奴だと思つてる……」

「いくら君が呑氣だつて、まさかさうでもあるまい」と、三浦が話を遮つた。「そして、庄司の事件は何時頃のことなんだい」

「一昨年の暮時分だよ。その時は彼奴が自分の給料ぢや、とても下宿屋の拂ひも出來ないから、おれの家に同居しとつたんだが、おれは富士見町へばかり行つてて、滅多に家にやゐなかつたしね。庄司は只の一晩だつて遊びにや出ないで、家にばかり寢てるんだから。……どうも火事のあつた晩に出來たらしいよ。あれは十二月の五日だつたよ。おれは相變らず留守だつたが、夜中に近所に火事があつたんだ。あの時二人が目を醒まして騒いだに違ひないが、乾度その時に關係が出來たんだ」

「それはどうだか。君も中々空想を逞しうするね」

「あの細君は廻覽文庫か何かに入つて、よく小說を讀んでたから、小說で感情を刺激されたのかも知れない。僕等にも時々小說の批評を聞かせたりしてゐたよ。だけど庄司はよく平氣で君の家にゐられたね」

「彼奴は愚圖だからさ」と、大井はさも卑むやうに云つて、二人が續いて家を出て行つたからおれも氣が付いたのだがね。……最初に噂が氣分が惡いから、大崎の姉の家で二三日保養して來ると云つて出て行つたきり、二三日立つても歸らなかつたが、さうすると、一週間ほどして、庄司の奴も荷物を持つて老の下宿屋へ引越して行つたんだよ。大晦日前だし、金に困つてることが分つてるのに、變だなと、その時どきつと胸に轟いたね」

「で、君は庄司に向つて何とか云つてやつたかい」

「いや、何も云やあしない。彼奴が出て行きや、話相手はないし、おれ一人家にゐたつて詰らないから、戸を締めて出ちやつたよ。そのまゝ拂ひも何も打ちやつて、三ケ日が濟むまで方々うろついてゐたんだが、その時だよ、泥棒にやられたのは、……金目のある物は一つもなかつたけど、茶碗だの、井だの、家所道具を一切毛布にくるんで持つて行きやがつた。おれも一寸情ない氣がしたよ。女房はゐないし、飯を食はうにも茶碗はないし、どうしようかと獨りで考へてたが、仕方がないから、思切つて、その日に空つぽの箪笥や火鉢や、ありつたけの物を拵賣りにして、表札ももぎ取つて、宿無しになつちやつた。……結句その方が氣樂だつたね」

「どうだか」と、今まで口を噤んで、矢鱈に看を突つついてゐた倉賀が首を上げて、「あの時は君も鬱が溜いやうだつたぜ。庄司の話は今初めて聞くんだが、その爲だね」

「なあに」と、大井は力んで相手の言葉を跳返して、「おれも持餘してゐたんだから、丁度よかつたのさ。……ところで、仲人が來て別れ話が極まると、おれは賞に入れてゐた彼女の衣服をすつかり出して、姉の家へ送返してやつたからね。えらいだらう」

「君にしちや感心だね。だけど、今一緒にゐる女よりや、前の細君の方が戀しくはならんかね」と、三浦が眞面目で訊いた。

「さうでもないさ」大井は事もなげに答へたが、ふと口を噤んで、飲みさしの盃を執つた。

「何でもあの頃、君が指ケ谷町の結婚紹介所へ女房の候補者を捜しに行つたといふ噂があつたが、本當かい」

「なあに、あれは惡戯さ、いろんな女が來てゐて面白いちふから、愚弄ひ半分で行つたんだよ」

「ぢや、本當に行つたんだね。まさかさうぢやあるまいと思つてたのに」

皆なが冷かすやうに笑ふと、大井は悄げた目を屢叩きながら、頻りに酒を飲出した。

おすゑは彼方此方と酌をしながら、一座の話に聞惚れて、大井といふ男の身の上を、さも珍らしいことのやうに興を覺えてゐたが、「おすゑさん、ちよいと」と、障子の陰から呼立てられたので、詮方なく座を外して行つた。

「竹の間で先きから呼んでよ。もうお立ちになるんだらう」と云つて、おのぶは擦寄つて歩きながら、「忙しい日には、一つのお座敷へさう長く付いてゐなくたつていゝんだよ。構はないから打ちやつといて、外へもちよい〳〵廻つてお呉れよ。四人もゐるのなら、藝者でも呼んだらいゝだらうにね。……あの人達は何をする人？見たところ皆な頑固な人らしいわね」

「さうねえ」おすゑはかの四人の樣子が、家にゐた頃の知合ひの保險會社の社員に、何處か似てゐるやうな氣がしてゐたのだが、若し見當違ひをしておのぶに笑はれはしないかと思つて、口に出しては云はなかつた。

竹の間の御用を濟まして、直ぐに前の座敷へ行つて見ると、もつと續いて聞きたかつた大井の身の上話は止んでゐた。大井は手枕をして足を投出して寢入つてゐる。おすゑは枕を出して寛かに頭を安めさせた。足許へは掻卷を掛けてやつた。

「この男も和に似合はん罪のない奴だよ」と、三浦は寢顔を見下してから、おすゑを見上げて、「一寸その男の首筋を見て御覽。今でも乾度悲がついてるよ。女に喰付かれた大事な形見なんだよ」

「へえゝ」と、おすゑは呆れたやうに首の方を覗みたが、側へは近寄れなかつた。

すると、倉賀と田川とが左右から大井の襟を寛めて、首筋を覗いたが、悲の跡は最早見付からなかつた。

「色男の勳章もなくなつてるよ」

皆なが笑ふのに誘はれて、おすゑも面白さうに笑つた。そしてふと打解けた氣分になつて、「貴下方はさのやへよく入らつしやるんですか」と訊いた。

「なに、よく行くこともないんだがね。少し譯があつて、僕はあの家とは懇意にしてゐるんだよ」と、三浦が答へた。「叔母さんには隱分世話になつたよ。一昨日の晩も氣晴しに、二三時間話しに行つたのだが、その折一日拵見にでも行きたいと云ふことから、つい君の話が出てね。是非この家へ遊びに行けと云はれて、皆なを誘つて來ることにしたのさ」

「折角入らつしやつたのに、雨天で生憎でしたわね」と、おすゑは鄭々しく云つたが、氣の利いたお世辭は口から出なかつた。叔母に向つて、自分の事をよく傳へて貰ひたい、待遇が惡かつたと云はれたくないと思ひながら、客を快く遊ばせる術は分らなかつた。

燈火のつく前に四人連れは傘にも乘らないで、冷たい雨の中を出て行つた。門の外で大井は「握手しよう」と云つて、おすゑの手を握締めた。

五

晝間は絶え間なく動いてゐるのと、さまゞの客の話を聞いたり、樣子を見たりしてゐる

のが珍らしいのとで、心が紛れてゐるけれど、夜になつて部屋々々が靜かになると、手鞠りのない思ひに沈んだ。そして、賑かな朋輩同士の中へは入れなくて、一人除物のやうになつてゐた。

足が棒のやうになつて、根の疲れた身體を溫泉に浸すのは、此處にゐる一つの役德で、外のお湯とは違つて身體の心までも溫まるので、叔母の云つた通り、弱つてゐる身體には何よりも藥になるやうだが、朋輩と一緒に入るのは氣が引けた。おきよなど口の端たない手合ひに愚弄はれるのが厭だつた。

母屋から隔たつた湯殿では、皆なが遠慮氣もなく勝手な口を利き合つてゐるので、おすゑは一人暗い處へ寄つて、默つてそれを聞いてゐた。首を振つて小さい聲で義太夫を語る者もあつた。

「私、今年は夏まで此處にゐて、お師匠さんにみつしり復習つて貰はうかしら。どうせ習ひかけたくらゐなら、人中へ出て語れるやうになりたいよ」と、おきだは語り止めてから云つた。

「お前さんは聲がいゝからだからね」と、酒臭い息を吐きながら、湯氣の中にだらしなく横はつてゐるおきよが冷かすやうに云つた。「私なんぞ、今月一杯くらゐでこんな家は御免だよ。早く東京へ歸りたいよ。……どうせ奉公するにしたつて、東京の方がいくら勝しだか知りやしない。……今年こそ止さうと思つたのに、花の間だけ助けて呉れつて、無理に連れて來やがつて。……思切つて赤坂へ行けばよかつたのに、お母さんが義理立てしたために、いゝ口をふいにしちやつたよ」と云つて、「あゝ口惜しい」と、興な聲で叫んだ。

「誰れだよ。狂人のやうな聲を出してさ」と、窮に入つて來た一人が、湯氣の中を透かして見ながら嘆をした。

浴槽の中で眠さうに欠伸をしてゐるものもある。五ひに耳打ちしてタス〳〵笑つてゐるものもある。皆なの聲が止切れると、寂とした夜の空に、犬の聲が響渡つた。

「おや、おすゑさん其處にゐたの。ゐないのかと思つたら」と、ある一人が振向いて聲を掛けた。「そんな隅つこにゐなくつたつていゝだらうにね。默つてて人の內所話を聞いてるなんて、餘程人が惡いよ。……默つてる人が一人でもゐると、何だか氣が差して厭なものだよ。……さあ此方へ入らつしやい。お湯を汲んで上げるから」

「えゝ、有難う。私、もう上がるんです」おすゑは身體を縮めて、逃げるやうに朋輩の側を潛つて、手早く着物を着けて、湯殿の外へ出た。

が、直ぐには女中部屋へ入らないで、吹きさらしの渡廊下に立つて、雨の降れかけた暗い外を見てゐた。そして、皆なが湯から出て、女中部屋へ入るのを待つて、後から隱いて入つた。

次の室の柱時計が一時を打つた。今まで嘆舌つてゐたのが、早くも寢息を吐き出した。口の中で香をさせたり、聞取れぬ讒言を云つたりした。起きてゐるのは、昨夕書き殘した手紙を書きつゞけてゐるおすゑと、他所行の羽織を縫つてゐるおよしとばかりであつた。おすゑは昨夕までは長く勤めるつもりで、母や妹へ安心させるやうな手紙を書かうとしてゐたのだが、今夜はどうしてもそんな氣になれなかつた。むしろ勤まりさうでない不安を訴へたくなつた。

「今時分東京へ電話が掛るでせうか」と、田舍訛りにおよしに訊くと、

「あゝ、掛けられるでせう」と云つて、およしは針を止めて、「何處へ掛けるの。叔母さんの家？」

「いゝえ、私、今何處へも掛けるのぢやない

の。」「すぐ訊いただけなの」

「が、叔母とは何時でも電話で話が出來るといふことが、多少力になるやうに思はれた。東京は此處から近いんだから、その中一日暇を貰つて、叔母のゐるさのやといふ家へは遊びに行きたい。……どうせ他人の中で氣兼苦勞をするほどなら、東京へ行けばよかつた。……」

おすゑは叔母に相談して、朝吉を東京で里子にやつて、自分も東京で奉公したらと、これまでつひぞ思付きもしなかつたことを考へ出した。で、さうなつた後を夢のやうに考へてゐると、氣が逸つて、今夜も落着いて細かい手紙は書けなかつた。

六

空が晴れると、日の屆くかざり窟早春景色であつた。枝を渡つてゐる雀の聲も陽氣に響いた。羅巾掛けをしてゐる冷たい手も、冴えた日に柔しく溫められた。穴のやうな路次裏に住んでゐたおすゑの目には、廣い畠の中に働いてゐる農夫の妻も非常に違つた生活をしてゐる人のやうに見えてゐたが、その農夫の野良仕事が晴れた日には淺ましいほど愉快げに見えた。

「あんなにして課れに氣兼ねもしないで働いてゐたら、氣が清々していゝだらうに」と思つたりした。

空高く風が舞つてゐて、子供が凧遊を駈けてゐる。

おすゑは拭掃除を濟ませると、朋輩と代り合つて髮を結つて、身繕した。最早正午近くなつて、チラホラ客の姿も見えた。電話も東京から掛つてゐたが、暫らくしておすゑの名が呼ばれた。

「叔母さんかしら」と云つて、急いで行つて見ると、「誰れだか男の人だよ」と、おきよは受話器を渡した。

ぢや、あの客だらうと、おすゑは三浦や大井の部を思出しながら、受答へしたが、先方の聲を聞くと變な氣がした。二三度聞返して、それと知ると、おすゑは目が眩んで耳が鳴つた。

「ぢや、さうします。私の方から行きます」と、おどゝ〳〵しながら丁寧な言葉で答へて、直ぐに電話の側を離れた。朋輩が此方を不審げに見てゐるのが面羞くて、洗場所を求めて便所へ入つた。

「この頃おれも東京へ來て、いゝ仕事にありついてるんだ。お前の方で忙しくて出られたければ、おれの方から其處へ訪ねて行かう。……」と、かう夫の聲がしてゐたのに異ひなかつた。穩かな調子だつたし、會つた上でよく譚を話すと、これまでの事を詫びるやうに云つてゐた。そして四谷の何處とか、今の居所をも教へた。

おすゑは逆上せた耳でぼんやり聞取つたことを、ぢつと思出してゐたが、夫に會ふにしても此處へ來させたくはなかつた。若しも今日か明日、不意に妙な服裝をして來られでもしたらどうしようと思つてゐると、落着いてはゐられない。

で、叔母に電話を掛けてよく相談したかつたけれど、さうすれば明ら樣に家の者に知られるのが恐ろしかつた。何とか用事を拵へて半日でも暇を貰ひたいと考へながら、とても主人の前に出て云ひ出せさうではなかつた。手紙で叔母に訴へるにしても、手紙を書く暇はないし、急の間には合はない。

おすゑはその日自分の名を呼立てられるたびに、夫が來たのではないかとビク〳〵した。そして、客の前に出てゐても、客の話などに氣をつけてはゐられなかつた。どうかして、電話のあたりに人のゐない折に叔母と話をしたいと思つて、隙を見てゐたが、悄らしくもその側には幾度誰れかがゐた。おすゑはその人達を自分

の敵でもあるやうに心の中で睨んだ。

この日の客の中には、若い書生さんがあつた。角帽を冠つて本綿袴を着けてゐる。一人で池上の方を散歩して来たと云つて、座敷へ案内したおすゑに向つて、懐つこく本門寺の話などした。

「君はよく知つてるだらう、近くだから」

「いゝえ、まだ一度もお詣りをしないんで御座いますよ」

「直ぐ其處に見えてるのに。……一日少し早く起きて行つて御覧よ。いゝお寺だよ」

書生は頻りに話の種を造らうとして、絶え間なくいろんなことを喋舌つた。女中の名を訊いたり、おすゑの身元調を始めたりした。去年此處で仲間の宴會をしたことがあると云つて、

「おきよさんといふ人はまだこの家にゐるかね」と、やうやく知合ひの女中の名を考へ出して訊いた。

「え、居りますです」

「ぢや、手が際いたら一寸此處へ遊びに来るやうに云つとくれよ。僕は去年酔つぱらつて、大變あの人に迷惑を掛けたんだよ」

おすゑは座を立たうとしながら、日数の多いこの客の言葉の容易に切れないために、立つ機會がなくて、無圖々々してゐたが、

「今おきよさんを寄越しますからと云棄てて、やうやく出て行つた。そして、馬鹿正直にわざわざおきよを捜して、湯殿の側でお客の言葉を傳へた。

「いえ。私そんな人は知らないよ」と云つて、おきよは直ぐに行く風はなかつたが、暫らくして、おすゑが膳を持つて行くと、おきよは何時の間にか廊下に立つて、梅を見てゐる書生さんと、べちや〳〵話をしてゐた。

「御酒を召上がるんですつて」と、おきよは指圖した。

「僕は飲むといけないんだが、おきよさんが勧めて仕方がないんだよ」と、書生さんは此方を顧みた。

「持つてまゐりませうですか」と、おすゑは迷つて、生真面目に訊いた。

「私に任せてお置きなさいな。いくら貴下が酔つたつて、私がちやんとお家へ送つて上げますよ」と、おきよは書生さんに向つて云つて、自分で階下へ下りて行つた。

おすゑも二三度お銚子の取次をしたが、おきよは屢々その座敷へ顔を出して、酒の相手をしては長く側に坐つてゐた。義太夫を唸つたり、戯談を言つたりしてゐた。

「この方は貴女を大變褒めて入らつしやつてよ。大人しくつて容色がいゝからつて。……その上にまだいゝ事があるんですつて」と、笑ひながらおすゑに向つて、「だから、私貴女に著らせようと思つてるの」

「本當にさう云つてゐたんだよ」と云つて、客は何を思つたのか、袂を索つて名刺を取出して、おすゑに渡した。

おすゑは恭しく頂いたが、名刺の表をよく見もしないで、帶の間に挟んだ。そして、引留められるまゝにおきよの後の方に坐つてゐたが、おきよは頻々しく客の煙草を取つて吸ひながら、微酔ひの上機嫌で、自分の惚氣話をしてゐるのだつた。小石川の華族様のお屋敷に奉公してゐた時分に、其處の若様に付纏はれて困つたといふ話をして、客は身を入れて聞いてゐる。

「君もその人が好きだつたのなら、いゝぢやないか。何も逃げるには及ばないだらう」

「今になると、さう思ふんですけれどね。……だけど、私その方が可哀想で、とても決心が出来なかつたんですの。いつそ私がお暇を貰つて

愛をかくした方が、後々のお爲になるだらうと思つて、その方が學校へ行つて入らつしやる留守に急にお屋敷を出たのですわ。……それつきりお目にも掛れないし、手紙を一度差上げることも出來ないんですもの。情ないでせう。私、初めの間は人に隠れて泣いてばかりゐましたよ。泣いて〳〵泣飽いた揚句に、自棄になつて、どうでもなれつて勝手放題に日を暮らす氣になりましたの。甘しくもないお酒でも、その時分から無理に飲むやうになつたのですわ」

目頭に感情を籠めてさう云つてから、おすゑを顧みて、「私が女の癖によく飲むからおすゑさんは呆れてるわれ」

「そんなこもはないわ。私もお酒が頂ければいゝと思ふわ」おすゑは微かに答へた。そして二人が面白さうに盃の取りやりをしてゐるのを見てゐた。書生さんの酔つた目元はます〳〵可愛らしくなつた、英語まじりで何か分らぬことを云つては、獨りで快活に笑つたり、おきよと二人で唄つたりした。

「僕は今夜此處へ泊らうかね、さう極まれば安心して飲めるから」と、興に乗つて云つた。

おすゑは二人に指圖されて、お銚子の通ひをしてゐたが、自分が座を外してゐる間には、話聲が酔かになつてゐるのに氣を留め出した。廊下に立つて、夕日が障子の襖を紅つてゐるその座敷を、遠く見詰めてゐると、いろ〳〵のことが空想されて、おきよの素振が忌はしくなつた。

暫らくして燈火が點いてから行つて見ると、書生さんは一人倒れて眠つてゐた。おすゑは火を直しながら、その寝顔を見守つてゐた。ふと思ひ出して、貰つた名刺を出して見ると、入江といふ名前だつた。

入江さんと名を呼んで揺起したかつたけれど、それだけの碎けた氣持になるのさへ躊躇された。で、自ら目醒めるのを待ちながら、膳を片付け酒の雫を拭ひ、座敷の中を綺麗にした。客はます〳〵心地よささうに深い寝息を吐いてゐる。

「泊るつもりか知らん」と思ふと、おきよの今までの様子が變に氣になつて默だつた。で、階下へ下りがけにおきよの方に目を付けたが、おきよは蹙み深い顔をして、厳しい新客を離れの方へ案内してゐた。

「おすゑさん、お話に入らつしやい」と、ふと後から呼掛けられたので、振向くと、長逗留の支那人が褞袍を着て、手拭を持つて、湯殿へ行くところであつた。

「張さんはお一人でお退屈でせう」と云ふと、

「私明日東京へ遊びに行きます。貴女は行きませんか」

「一緒に連れてつて下すつて。……本當に連れてつて下さいな」おすゑは周圍に朋輩のゐないのを見て、甘えるやうな様子をした。

「私、二三日東京に泊つて来ます。貴女は泊ること出來ますか」と、支那人は微笑して側に寄つた。

「えゝ、泊つて關ひませんとも。東京になら幾日でもゐたいんですわ。だから連れてつて下さいな。張さんのやうな親切な方に連れてつて貰ひたいんですよ」

おすゑは例にない艶葉な調子で云つたが、やがて自分が言過ぎたのに氣附いて、笑顔で支那人に挨拶して側を離れた。

慨しく鳴る呼鈴に答へて、行つて見ると、書生さんは夢から醒めて欠伸をしてゐた。「遅くなつた。直ぐ帰るよ」と、懐の時計を出して見て云つた。

「お泊りぢやないんですか」と、おすゑは訝しげに訊いた。

「いや、泊らない方がいゝよ」と眞面目で云つて、「近々に、も一度戻くり來るよ。今度來る時には何か土産を持つて來ようね。君は何が好き？」

おすゑは只笑ひに紛らせて答へなかつた。そして、帳場へ下りて勘定書を持つて來ると、書生さんは衣服を綿直して、待を拭けて待つてゐた。

「おきよさんは何をしてる？　一寸呼んで貰へないかね」と、掌ひを濟ませてから云つた。

おすゑは承知して座敷を出たが、おきよの居所を捜さうとはしなかつた。多分離れにゐるのだらうと思ひながら、それを幸ひに會はさないで歸してやらうと思つた。そして、受取を持つて座敷へ出ると、

「何處にゐますのか、幾ら捜しても見付からないんですよ」と、誠しやかに云つた。

「櫻だね、外へは出りやしないだらうにね」と、客は物足らなささうだつたが、押して會はうとも云ひかねて歸りかけた。

おすゑは庭下の小徑の側まで見送つて別れを告げようとしたが、書生さんは別れともなささうにして、

「せめて、その大通まで送つてお呉れよ。急に淋しくたつていけないから」と、縋むやうに云つた。

おすゑは否みかねて、素直に並んで歩いた。左右はもう薄暗かつた。後を見上げると、小高い梅屋の部屋々々の燈火が闇の中に光つてゐる。おすゑはこのまゝ汽車まで行つてしまひたい氣がした。

路傍の小溝を緣取つた小徑が淋しさに幽かな音を立ててゐる。ふと二臺の俥が擦擦をして爽て、二人の間を分けて梅屋の方へ過んだ。

「これから彼處へ泊りに行くんだね」と、書生さんは羨ましさうに云つて、「僕は其處から停車場まで歩足で行かう。寒くなつたから」

「でも汽車にお乘りになれば、お宅まで直ぐですわね」

「あゝ。新橋へ着いたら、また一杯やつて、銀座をうろついて家へ歸るんさ。東京はまだ宵の口で賑かだよ」

大通へ出ると、活潑に別れを告げて、書生さんは足早に歩き出した。おすゑは暫らく立留つてゐた。

つてその足音を見送つてゐた。

上りか下りか、汽車の音が闇を破つて耳に響いた。おすゑは人氣のない路傍に一人で立つてゐると、今に横濱へでも東京へでも行きたかつた。謂集縺い朋輩の中へ入つて、辛苦しい夜を送るよりも、今夜一晩でも親しい身内の側で、氣樂に眠りたかつた。電話で嚇かされた夫に到する恐怖は次第に消えてゐて、今ひよつと此處へ會ひに來て呉れゝばいゝにと、知人の懇しさに堪へられたかつた。

二臺の俥は客を送り送んで歸りかけた。おすゑはそれに乘つて停車場へ行かうかと幾度も心が迷つた。

七

翌日の正午近くなつて、かの支那人は東京行の支度をして、わざ〳〵おすゑを呼んで、「貴女は一緒に行きますか」と、眞面目に訊いた。

「行かれたら後から參りますわ」と、おすゑは小聲で答へて、相手の柔しい目付が自分の顔に注がれてゐるのを見てゐた。愛を綺麗に拂つて、顔もよく磨いて油臭くなくて、支那人らしい眠らしさは感ぜられない。外套を後から掛けてやると、支那人はポケットから名刺入を取出して、名刺の裏に自分の泊る東京の旅館の名を書いておすゑに渡した。

おすゑはそれを明日貰つた書生さんの名刺と一緒に大切に仕舞つた。そして、出た後の支那

人の部屋の掃除に取掛つたが、ふと浮いた氣持になつて、聞慣えの赤坂のサハリを口の内で唄つた。

三浦だの入江だの、あの支那人だの、いろ〳〵の若い男に自分が柔しくされることを思ふと、嬲陶しかつた心も一時晴々した。……緣のない人にでもあんなに親切にして貰へると、おすゑは今初めて自分の身に價値がついたやうに思つて、著けてゐた身體も伸々した。

が、すると、自分を粗末にして酷い目に會はせた夫に對する怨みが、これまでに增して強く胸に込上つた。身分めいゝ男前も立派な人にさへこんなに可愛がられる私を、今更取返しのつかない憐れの者にしやがつてと、口惜涙を浮べた。そして、會ひさへしたら、かうもあゝも云つてやると、今までの自分の苦勞を心の中で數へ立てた。

さう思ひながら、再び紙帶を執つて、梅の枝の影の映つた障子を睨つてゐたが、やがて、羨込む目を受けて輝いてゐる机の上の鏡立に目がつくと、その前に屈んで、自分の顔を見詰めた。わざと笑つて見たり、乾いた下脣を反して見たりした。こんなに春季淳が多かつたか知らんと、今初めて氣がついたやうに氣にかけた。

庭では離れの客が寫眞器械を持出して、彼方此方寫してゐた。女中や男衆を呼んでさまざまの姿勢をさせて寫しなどしてゐて、おすゑが廊下へ出ると、手招きして、仲間に加はらせようとした。が、一度も寫眞を撮つたことのないおすゑは、自分の姿がどんなに映るかと危まれて、いくら勸められても、思切つて前へ出て行くことが出來なかつた。そして朋輩の樣子を羨ましさうに見てゐた。

やがて、寫眞騒ぎが濟んで、庭に集まつてゐた大勢もばら〳〵に散つた。「貴女も寫しとけばいゝのに」と朋輩に云はれて、おすゑは後悔しながら、一人後から食事に行きかけると、食炊きのおしまが側へ來て、「先き貴女に電話が掛つたよ。寫眞を撮つてると云つたら、また後で掛けると云つてたよ」と知らせた。

「さう？」と軽く云つて、おすゑはおしまから顔を背けた。取次いで貰つた纏をも云はないで、無愛想な顔付をして行過ぎた。

待つてゐた電話は夕方まで掛つて來たかつたが、その間におすゑの心は絶え間なく動搖した。どうしていゝのか、確かりした決心は何時までもつかなかつた。只此處で夫に會ふ氣にはどうしてもなれなかつた。ふと其處へ夫の妻が現はれて、主人や朋輩の目に觸れたらばと、思つただけでも恥かしくて、むつとしてゐられなかつた。ともすれば、胸騒ぎがして身體が慄へた。

おすゑは夕方までに、何の考へもなしに屋々女中部屋へ入つた。そして、行李を開けて自分の持物を改めた。財布を帶の間に挾んで座敷へ出たかと思ふと、また元の處へ仕舞つたりした。

日が暮れると、幾度も時を見て裏門の坂道へ出てゐたが、おとくは「今日いやにぼんやりしてるのね。どうかしたの」と訊いた。

「いゝえ」と事もなげに答へたが、おすゑは悪い癖を見破られでもしたやうに相手の目が眩しかつた。

八

晩の混雜も一先づ片付いて、女中共も氣樂に息の吐ける時分、おすゑは夕中で裏門から大通へ出た。思ひ出す決心をしたのではなかつたが、家の中に落着いてはゐられなかつた。そして、通で俥を見つけると、考へる間もなくそれに乘つて、停車場へ向つた。時々後を顧みては

伸を急がせた。

切符を買つて上り列車に乗込むまでは、大罪を犯したものやうに恐ろしくて、行先も不安だつたが、列車が動き出すと、温かい思ひが胸に湧いた。兎に角叔母にさへ會へば始末は付けて呉れるだらうし、東京でなら誰れに遠慮もしないで、夫に會ふことが出來る。東京でなら朋輩を憚らないで朝吉に會ふことも出來る。東京には自分に柔しいあの支那人なども行つてゐる。……

で、おすゑは手頼りになる人々の中へ入つて行くやうな氣持で東京の市街へ踏込んだ。牛込のさめやといふ家を尋ねて行く途々、叔母に告げるべき體裁のいゝ言譯を思案しながら歩いた。

「その石垣の横手を上つて行つた突當りの家です」と教へられたので、指差された石垣に沿つて行くと、さめやの軒燈は直ぐ目に映つた。

狭い道の左右には、同じやうな小さい家が並んで、梅屋のやうな構へへの大きな家は一つもなかつた。おすゑは叔母のゐる家が思つたより見窄らしいのに驚いた。これなら、いくら田舎でも梅屋などに勤めてゐた方が幅が利くと思ひながら、暫らく玄関手口に立つて、家の様子に耳をとめた後に、障子から言葉を掛けた。

「何方？」と答へて、戸を開けて顔を出したのは叔母のおきくであつた。戸の蔭に身を寄せてゐるのを、軒燈の光で看取なく見分けて、

「まあ、お前どうしたのさ。どんなに心配してゐたか知れないよ。先き梅屋から電話が掛つて、私吃驚しちやつたよ」と、聲に力を入れて、

先ず通されたので、おすゑはおど〳〵して、言葉も口から出なかつた。叔母は一足外へ出て來て、おすゑの顔を見詰めたが、「兎に角家へお入りよ。こんな處で立話しも出來ないから」と、愚圖々々するおすゑを家へ引入れて、玄關脇の、子供が一人でゐる部屋へ連れて行つた。

「彼處に居づらければ、手紙で一應私に知らせて呉れゝばいゝのに。出抜けで吃驚しちやつたよ。一體どうしたのさ」

問詰められると、おすゑは涙ぐんだ。自分の浅慮な仕業が恥かしくなつたが、外に尤もらしい口實は思ひ付かないので、夫の電話の事を、さも嘘文句を聞かされたかのやうに大袈裟に話した。……「勇吉があの家へ來て若しも無法なことでも云出したら、私は構はないけれど、主人にも濟まないし、叔母さんの御迷惑にもなりやしないかと思つて、私心配で仕方がなかつたんですの」

「何て氣が小さいんだらう、お前さんも」と叔母は笑つて、「それつぱかりのこと何でもないぢやないかね。あの男だつて、自分から厄手に別れてて、今更文句をつける譯もなからうしさ。此方からこそ話をつけて子供の養育料ぐらゐ取つてやつていゝんだもの。……居所が分つてれば、私が出掛けて、幾らでも出させるやうにして上げるよ……」

兎に角今から梅屋へ歸れはすまいから、今夜は此處へ泊つて、明日の朝の内に歸ることにすればいゝ、一人で歸るのが厭なら、私が隨いて行つて言譯をして上げる、今先方へ電話で知らせとくから、安心して茶の間で家の老婆さんと話でもしといでと、叔母は獨合點で極めた。そして、茶の間へ誘つて行つて、主人の老婆に引合はせて、一夜の宿を賴んだ。偶か四五日の間にも汚れ目が脱けて、持前の容色が引立つたおすゑを、自分の妹として人中へ出すのが悦しかつた。

が、おすゑは老婆に向つてはき〳〵口は利けなくて、容易に火鉢の側へも寄れなかつた。叔母が電話で梅屋の主人に丁寧に言譯をしてゐる

のを洩聞きしながら、最早再び彼處へ行けるものかと思つてゐた。たとひ、叔母が述れて行つて呉れるにしろ、そんなづう〳〵しい眞似は私には出來やしない。……と、自分の處置を案じて萎れてゐた。

「さう怒つてやしないよ。只ね、家が忙しいんだから、明日早く歸つて呉れつて」と、叔母は安心したやうに云つて、「お前も一晩斷つて來ればいゝのに。私はまた吃度濱が戀しくつて歸つたことと思つたから、電報を打たうかと思つてゐたんだよ」

「どうも濟みませんでした」と、おすゑは畏つて頭を下げた。その樣子が叔母の目には子供染みてゐて可笑しかつた。

「でも居づらくはないんだらうね。濱にゐて、芸仕事をしてゐるよりや餘程氣樂だらう」と、力を付けたが、

「えゝ」と、おすゑは曖昧に答へた。

「まあ二三ケ月辛抱しといで、その中には私にも考へがあるから」

叔母は家の者に少しも遠慮する風はなかつた。そして座敷はひつそりして、さして客が來てゐさうには思はれないのに、二階へ上つたり電話口へ立つたり、緩くり話をしてはゐなかつた。一一寸手傳つて貰ほうかねと言つて、持込まれた井を膳に載せて、おすゑに渡した。

おすゑは窮屈に坐つてゐるよりは、手助けでもする方が却つて氣樂だつた。指圖された通り階子段を上つて、話聲のしてゐる右手の部屋へ入つた。痩せこけた貧相な男と、鼻の低い藝者とが、不審さうに此方を見た。おすゑは顔に愛嬌を浮べて、叮寧に膝を置いて、直ぐに引下つたが、襖の外へ出ると急かに冷笑した。

よく見ると、まだ二つ三つ部屋があるらしいけれど、どれも狭い粗末な部屋としか思はれない。こんなだととても梅屋ほどのいゝ客は來ないだらうにと、叔母が何時までも此處に勤めてゐるのを怪んだ。そして、周圍の客の氣色に耳を留めながら、階下へ下りかけると其處へ叔母が忙しさうに上つて來て、小聲で用事を言付けた。

おすゑは叔母の後に隨いて、奥の室へ入つて寝床を伸べたり、方々の戸締りをした。どの部屋にも一人の男と一人の女とがゐた。

「この近所の家は皆なこんな稼業をしてゐるんでせうね」と、階段を下りながら訊いた。

「あ、この通は皆な持合だよ」

「隨分どつさりあるんだわね」

茶の間には目の大きな小娘と若い女中とが、戸外から歸つてゐて、夜食の支度をしてゐた。おすゑは食事の伸間入を勧められるのを斷つて、叔母の情で、一人先へ寝床に就いた。

夜は更けてゐるし、身體は疲れてゐるし、床に就くと、强請めた氣が一時に飛んで深い睡に陥ぢた。誰れかに呼起されたやうな氣がして目を醒ますと、最早薄明るくなつてゐた。側には叔母と、も一人の女中とが、正體なく眠つてゐる。おすゑは異つた人と寝てゐるのを不思議さうに見廻して、昨夕梅屋を抜出てからの事を夢のやうに思出した。裏門を出て淋しい野徑を辿つて、ふと目に付いた伸に乗つたことを思ふと、自分が狐に抓まれてゐたやうな氣がした。

で、あれほどの家を譯もなく出て來た輕卒が後悔されたが、「……だけど、もう彼處へは行かれない」と溜息吐いて、叔母が何と云つて勧めようとも、足を向けまいと覺悟をした。東京にゐたつて、五圓の里扶持ぐらゐ稼げないことはないと、自ら恃む氣にもなつた。

戸外には物賣りの聲がし出した。次第に人通りも繁くなつた。冴えた朝日がいゝ氣持に噴間を洩れた。すると間もなく、次の間から老婆が聲を掛けて皆なを呼起さうとした。おすゑはそ

れに答へて、叔母を抱起して、自分も起上つた。雨戸を繰開けると、瓢に觸れる朝風は底冷たかつたが、空はよく晴れて、何方を見ても春めいてゐた。

おすゑは田舎の梅の散りかけてゐる話などしながら、甲斐々々しく朝の用事を手傳つた。客は皆歸つて、座敷の障子は開放された。夜具や座蒲團は縁側に持出されて日に干された。其處らが片付くと、叔母は、温かい窓際に寄つて息休めをしてゐるおすゑに向つて、今思出したやうに、

「さあ、これからお湯へ入つて、直ぐに出掛けることにしようね。愚圖々々してるともう正午だよ」と促した。

「さうねえ……」おすゑは浮かぬ顔をしてゐたが、やがて、「叔母さんにお氣の毒だから、私一人で行きますわ」

「一人で？」叔母は意外に感じた。「今日はお天氣がいゝし、私も梅見がてら一日遊んで來たいんだよ」

「でも、何だか濟みませんわね」

「何故？……私は此とも構はないよ。お前さんのことは私が引受けて來てゐるんだから、これから、よくなつて呉れさへすれば、私は此ともに骨惜みはしないよ。……せめて梅の間だけ彼處で辛抱しといでな。外へ行かうたつて、さうはいい家があるもんぢやないからね」

から柔しく云はれると、おすゑはます〳〵叔母に逆ひかれた。自分の望んでゐることは一言も口に出せなかつた。そして、叔母の手で引摺られて、梅屋の閾を跨ぐことを思浮べると心は滅入つてしまつた。

「來月になつたら、一日お暇を貰つて、一緒に濱へ行くことにするから、それまで我慢しといでな。朝吉のことは些とも心配することはありやしない」と、叔母は相手の滅入つた態を見つけたやうに云つた。

「……私ね。折角東京へ來たんですから、次手に買物をして行かうと思ふんですがね。……それに一二軒寄つて行きたい家もあるんですけど……」

「そんなことは今度にして、今日は早くお歸りよ」叔母は口早に打消して、急立てて湯屋へ連出した。

そして、途すがら、若し前の夫が會ひに來てどんな甘いことを云はうとも決してその言葉を眞に受けるな、浮かりして馬鹿な目を見ないやうに氣をつけよ、と、柔々と說聞かせて、

「またあの人に掛り合つちや、これまでの苦勞が何にもなりやしない。お前さんにもよく分つてるだらうねゝと念を押した。

「えゝ」と、おすゑは首肯いた。

「お前さんは若いんだもの。隣町の裏長屋で燻つてゐるには及ばないんさ」と、叔母は横濱へ來るたびに喫かすやうに云つてゐたことを繰返した。

湯屋には幾人も顔者が行つてゐたが、叔母の瓢を見ると、左右から皆親しさうに言葉を掛けた。

九

叔母は身支度を濟ますと、一度梅屋へ電話を掛けて貰いて出掛けた。通へ出ると手土產の菓子折を調へた。おすゑは後に隨いて電車に乘ることは乘つたが、素直に向うへ行く氣にはなつてゐなかつた。そして、電車が意地惡く駛せるにつれて、心は目眩しくして焦立つた。

ふと思切つて、叔母に打明けようとしたが、叔母の平氣な目瓢を見ると、今更ら云出す機會はなかつた。で、新橋に着いて、切符を買つて、待合室に休んでゐる間も、さして口は利かないで、話をし向けられても平氣ない返事をするば

かりだつたが、不羈の氣性を知つてゐる叔母は深く怪みもしなかつた。

發車時間も迫つて來た。おすゑは最早一刻も躊躇されなくなつた。自分の生死の別れる瀬戸際に立つてゐるやうに、只恐ろしさ脈はしさに戰いたが、すると、ふと智慧がついて、

「私、一寸便所へ行つて來ますわ」と云つて、慌しく待合室を出た。叔母が何か云つたけれどそれは耳に入らなかつた。

混雜の中を分けて、後をも見ずに、ひた走りに走つた。息を切らし〳〵餘程の道を逃延びたと思ふ頃立留つた。そして周圍を見ると、幸ひに叔母の姿は見當らなかつた。が、往來の人は不思議さうに此方を見てゐた。おすゑは思はず首垂れて、胸を鎭めて當てもない道を靜かに歩んだ。

方角も分らないし、これから自分が行くべき處も分らない。……おすゑは思ひあぐんだ果に、電話で聞いた夫の居所を、唯一の手頼りにして、思出さうと一念を凝らしたが、あの時狼狽へてゐたので、四谷と覺えてゐるばかりで、詳しいことは記憶に殘つてゐない。訪ねるには手蔓がない。

でも、差當つて身の置場はないので、おすゑは四谷を目當てにして道を取つた。歩き慣れると電車に乘つた。此處が四谷だと教へられて、見付で電車を下りて、あたりを見廻し〳〵歩き出した。すると、横顔や後姿の夫に似通つた男が頻りに目に付いたが、よく見ると、どれも赤の他人だつた。

ぽか〳〵と温かい日の中を、いろ〳〵の人間がぞた〳〵通つてゐる。おすゑは若しも夫に行會はないかと當てもなく歩いてゐる中、身體は汗ばんで心はぼんやりして來た。そして、暫らくの間は只機械のやうに足を動かしてゐた。

どの町を通つたのか氣付かぬ中に、再び場端に出た。見覺えのある神樂坂の方が直ぐ目の前に見えた。おすゑはわれとわが心を强ひて落着けて、路傍に足を休めて、この後の處置をよく考へようとしたが、何處も人目が繁くて、相趣しい休み場所は見當らない。

で、誠れかに急立てられるやうな氣持で更に歩み出した。公園ぐらゐありさうなものと、目の届く限りを捜したが、そんなものは何方にもないらしくて、行つても〳〵只電車や俥や雜多な人間が、絶え間もなく通つてゐる。

おすゑは詮出したくなつた。……叔母には一生會はす顔はないし、外に知人のゐない東京では、差當つた寄公口の世話を頼む處もありはしない。……おすゑは朝吉の里扶持の出道も杜切れてしまつて、最早浮ぶ瀬のない身になつたと思ひ詰めてゐたが、すると、この上一刻も東京などにゐる氣はしなくなつた。こんな土地に一人でゐるのが心細くなつて、「生きるも死ぬるも朝吉の側へ歸つてからのこと」と、極めると、今までどうかして東京で手蔓を求めようとした間かな心の力も弛んで、一途に横濱の家へと急がれた。

新橋へ來て切符を買ふ前に、朝吉への土產に餡でも買つて行かうと思つて、金入の中を檢べると、中には名刺が二枚畳み込んであつた。入江といふ書生さんのと、張といふ支那人のと。

おすゑはふとこの二人の瓢立や、柔しい言葉を思出して、廣い東京を顧みた。

十

汽車を下りた時は、長い日も暮れてゐたので、おすゑは家へ歸るのに都合がよかつた。路灸近くなると、近所に氣を配つて、薄明い處を選んで通つた。足音さへも忍んだ。そして、自分の家の前まで來ると、戸の側に凭寄つて內の樣子を伺つた。母の聲も妹の聲もしてゐない。母

に甘えてゐる子供の聲が隣の家から洩れて來るばかりである。

妹はまだ勤工場から歸つてゐないのか知らんと疑ひながら、結句妹のゐないのを喜んで、そつと戸を開けて入ると、意外にも親子の妻が直ぐ目についた。

「あゝ、姉さんが」と呼んで、妹は呆れた顏して立上つた。その聲に驚かされて、行火に頭を押付けてゐる母も顏を上げて、目を瞬めて此方を見た。

「どうしたの、姉さん。さつき叔母さんが來て、そりや大變だつたよ。私達もどんなに心配したか知りやしない」と、妹は忙しく言葉を續けた。

おすゑは叔母といふ言葉を聞くとぎよつとした。「そして、叔母さんはどうして？」と、やうやく問返した。

「東京へ電話を掛けとくつて、今し方郵便局まで行つたところなの。……姉さんが今夜此方へ歸つて來なければ、鉄太へ願つて捜して貰ふなんて、叔母さんも大變心配してゐたよ。……でも、まあよかつたわね」

母親も行火から匐ひ出て、炉の前に躙り寄つてくど〳〵訊き出した。が、おすゑは自分の仕業について、母や妹も安心さすやうな詳しい話はしなかつた。

「叔母さんは怒つてゐるだらうね」と、訊いて、最早何處へ行つても、叔母の手をのがれられぬのを覺悟した。

「いゝえ、些とも怒つてやしないよ。只姉さんが無分別なことをしたければいゝがと、そればかり心配してゐたよ」

「私、叔母さんには本當に濟まないことをしちやつた」

おすゑは悲しさうな聲でかう云つたが、叔母がさして怒つてはゐないのを知ると、心が稍〻まつた。で、火鉢の側へ寄つて、消えかゝつた火を熾して、冷たい手を翳した。あたりをよく見ると僅か四五日の間に家の中が一層汚れてゐるのが目に立つた。こんなだつたかと疑はれるほど、疊は赤茶けて、壁には塵埃が出來てゐる。そして物の饐えるやうな厭な臭ひが鼻を襲つた。おすゑは夫に離れてから一年あまりこんな家で暮らしてゐたことを思ひ浮べ出したが、すると、

「そら、叔母さんだ」と、妹が悅しさうに叫んで、上り口へ駈けて行つたので、おすゑも思はず振返つた。

叔母は些しも邪慳な顏付をしてゐなかつた。

「お前さんも隨分人困らせをするぢやないかね」と、一言恨みがましいことを云つただけだつた。

差向いて坐つて、新橋で吃驚したことから、今までの道筋を口輕に話した。そして穏かにおすゑの腹の中を探れた。茶屋泰公が厭なら厭で、この先どうするつもりか、確かりした量見がついてゐるのかと問詰めた。

「私、泰公が厭ぢやないんですけれどね」と、おすゑは涙ぐんで、「梅屋へだけはどうしても行く氣になれませんの。……」

「ぢや、早くさう云へばいゝのに」と、叔母は事もなげに云つて、「外の家なら勧める氣はあるんだね。……お前さんは陰氣だから、あんた騒々しい家には性が合はないかも知れないよ。馴れてれば何でもないんだけどね」と、暫らく考へてゐた。それを機會におすゑは、

「私、同じことなら東京で泰公したいと思ふんですがね」と云つて、叔母に見棄てられまいとして、そのいゝ返事を待焦れた。

が、叔母はすぐに快く引受けては呉れなかつた。相手の心を危むやうな口振であつた。どうせ今夜の終列車で歸ればいゝのだからと、嚴

くり話を極めることにした。そして、甚なに喬麥を客つて、笑ひ興じながら箸を執つた。

「お前はあれから何處へ行つてたい。活動でも見てゐたの？」

叔母の言葉は冷語のやうにおすゑの耳に響いた。で、

「いくら私が馬鹿だつて、そんな氣樂な眞似が出來るものですか。どうして叔母さんにお詫びをしようかと思つて、そればかり考へたんですわ」と、眞面目に言譯した。

「さうだらうね、お前のことだから。……だけど、今の若さでそんなに物を苦にしてゐちや壽命が縮まつてしまふよ。あんまりづう〳〵しい女になつても困るけれど、くよ〳〵してゐたつて、何處からも御褒美が出りやしないんだからね。若い内に些とは面白い目をしなきや詰らないと思ふよ。それも人によりけりだけど、お前さんなんぞ氣の持ちやう一つでこれからいくらもいい月日を送れるんさ。……梅屋へも被處の主人と牛込の家とが懇意だから、私が無理に頼んで上げたのに、お前のやうだと私も張合が抜けちやつたよ」

叔母は調子に綾をつけてこんなに云つてゐたが、何となしに東京の戀しくなつてゐるおすゑの心には、それが一々强く響いた。梅屋で默つて聞いてゐた朋輩の身の上話や、いろ〳〵の東京の客の浮いた話を思出してゐると、その方へ心は流寄せられた。何時までも此處で暮らして、長島町の伊豆屋へ僅かな給金でその日稼に出て行くのは、甲斐性がなさ過ぎるやうに思はれた。それにこの前被處の旦那に相談もしないで、梅屋へ行つたのだから、旦那も嵯度氣を惡くしてゐるだらうと案ぜられた。

で、叔母の方から勧めるのを心待ちにして、叔母は母や妹を相手にして、外の世間話をし出した。櫻が咲いたら一日花見に出掛けるやうにと、妹と約束したり、この秋の父親の法事には是非此方へ來て立派にしたいと云つたり、獨りで座を賑はせた。おすゑの瓢に掛つた。

「梅屋へは私が二三日中に行つて、謝を云つて、荷物は直ぐに此方へ屆けることにしよう。おすゑさんもよく考へてお置き」と云置いて、煙草入を收めて立上つた。

おすゑは物足らぬ思ひをして、俥車場まで見送つた。

「今度東京へ來るやうだつたら、よく疊情をしてお出でよ。辷潤に出て來ちやお互ひに困るからね」と、別れ際に意味ありげに云つた。

十一

翌日朝早く、おすゑは土產物を持つて朝吉に會ひに行つて、久振りに乳を呑ませたり抱いてやつたりした。午後の半日は、隣近所の人から隱れるやうにして、陰氣な家の中で行火に當つて、寢てばかり暮らした。母親に云はれても、つい角立つた返事をした。碌々食事をもしなかつた。そして、うと〳〵しながら夢とも付かず、三浦だの入江だのの瓢形を空に描いてゐた。すると、これまで覺えなかつた異樣な快感が肉體にも傳はつた。最初夫に嬲かされた折の有樣さへまざ〳〵と浮んで心に迫つた。

目を瞑つてゐれば、果もなく快い心持が續いて、いろ〳〵の男に可愛がられ、いろ〳〵の男と自由に好きな話をしてゐられるのであれば、目を開けて汚れた部屋で手足を動かす氣にはなれなかつた。

おすゑは假寢から昏睡に陷つた。そして不氣味な夢を見つゞけてゐた。獣のやうな瓢をした胸毛の濃い荒くれ男に追廻されて手籠にされさ

十二

翌日の、その晩のことを思へば、夜明はあまりの早さに驚いた。一度目もしないで寝たのだから、もうとても寝られないだらうと思つてゐたのにと笑つて、慶太郎よく眠つた。

「此方に泊まつて居ればよかつたのに」と云つて、おすゑは自分の部屋の隅に枕を敷いて見かした。

「霜分手帯をつけてゐるとお笑れたと、夜明はおすゑに耳打ちして、もう一人の女は郷分で電話を出すことになつてゐるから、霜分その代りになつて勤めて笑れと云つた。

おすゑは夜明と二人で朝飯をくのが恥しかつた。

「見たことのない人ばかりの中に、一人の主婦の様に扱はれて、恥がまるで、直ぐに夜明の指図を受けて甲斐々々しく立ち働いた。

北一家の内の親戚の子も時々顔出して聞かされた。

「若し夜明は此頃京橋で母と暮してゐて、老婆は何もしなくつてもいゝのだけれど、住み慣れたこの土地を離れたくないと云つて、この婆様だけを置けてゐることや、今のところ娘さんと夜明一人で切り廻してゐることなどが分つて来た。おすゑと云ふ小娘から、京橋から遊びに来ては、金切り屋を出して小間しやくれたことを聞かつた。

「…梅屋の主人にはやつぱり申訳相立ち難くば卵に安心なされたく、婆様、さてお前に縁の考へはいかが相成候や。若しも内に適地にて勤めたしと願み居り候はば、とくと決心して来春早く勤めるつもりにてお出でやらるやう夜明も注意申し候。さすれば何分は霜分にて取り計ひ申すべく、若し何時までも卵の地にて暮らさるゝことに御座り居らば、二三日中にお断り申すべく候へば、主人急遽郷に遊ぶ事下されたく候、何其今よりしき勤めの口は無之候へども、お御縁の慶祝と家に於て、霜分霜分家にて手助けをなし下さるまでは何卒都合宜と存じ候。主人も左様に申し居り候。兎に角よく卵考へ上卵に返信相成りたく待ち居り候…」

おすゑはこれを読むと俄かに浮き立つた。母は嬉しそうに呼び起して、手紙の文句におまけをつけて話をして、明日の朝直ぐに出て行くことに決めた。

そして、母は嬉しがるのを頭から打ち消して、

「私はこれから縁を持て直して、三三九度をさせて、彼方で世帯を持つて、お母さんや卵さんを引き取つて行くことにしようと思ふよ」と、珍しくひどいことを言つた。

夜中に寝返りをクシナを動けては起上つて、すると寝もないのに家の中をまゝ〳〵としてゐた。

「梅屋のやうに早り過んで来たのお相手をすることがないのは嬉しかつたが、その代り面白い冷いた話を聞くこともないし、嫌な人のない代りに、老婆やお米の二人相手に毎日暮すことはならなかつた。皆人りだつてとても相手にしようとするものになりさうではなかつた。

「今夜階下にゐた女の中はこの頃此処へ来たのかい。一寸いゝ女だね。あの女はどうかなら一人かいと、ある老人の客が云つてゐるのが、おすゑの耳に入つた。

「きらでもすれえ、貴様下ならいゝでせうよ。まあ常人に流つて卵一度なきいなと、夜明は笑ひながら話してゐた。

「人を馬鹿にしてゐるよ。」とおすゑは心で唱つて、その座敷へ行くと、わざと無愛想にした。

二日目三日と立つ間に、遠方に遊び来ても来て、多く少く客の名前をも覚えた。一寸ぐらゐ夜明が家にゐなくつてもさうまごつかなくなつた。

三三九度の夜明が勤定を済つてゐる客の家を老婆に送つてゐる留守の間に、おすゑは老婆に変を訴えてやつてゐた。がさつな女では利かないと云はれて、思切つて大きくしたが、丈が低くて肩を切り、くのを見てゐると、自分の方が助つて身を縮む様に感じた。

「嬉しいでせうねえ」と、同情して言へば、

「嬉しくなくつちゃ利かないよ。私の年齢はもう四十になつてゐるから、金が中々貯まらないんだよ」と、云ひながら、老婆は前を噛み締めて我慢してゐる。

身体柱にも三日にも痩せてしまふと、老婆はきも快さうに思を吐いて、「お前も時々客を選ぶといゝよ。私が動を下きして上げるから」と、今夜にもきらしさうだつたので、おすゑは恐れて逃げ出した。

と、そつと格子戸が開いて、静かな座敷に奥の留守に愛人客に来られては、と案じながら出て見ると、客は梅屋で見たことのある人だつた。

「君は此方へ来てゐるんかね」と、客も気がついた。

おすゑは三階へ客を通して、真夜の座敷へ通すまでに、やう〳〵客の名前を思出した。「霜分は酒ばかり飲まんでしたわれ」と、調々くしく背広を脱げた。

「君が此度にわたしのようとは思はなかつた。三浦はこの頃此処へ来たかい？」

「どうしてか。私は四五日前に来たばかりですから、何方にもまだお目に掛かりませんのですよ」

おすゑは梅屋で会つた四人連れを思出した。一座の中で一番大人びて明るい方だつた三浦が、特に親密はれてゐた大井の如何にも「酒屋」は上く心に残つてゐたが、この人の非は、ぼんやり思出されるばかりだつた。でも、酒を知られてゐるだけに心が解けて、梅屋のあの日の話をたしてゐると何となく懐かしかつた。「お前、来は？」と聞いて、客を叩かうとしても、夜が明けさうだから、客は叩いて、「お前、来は？」と云つて、命令調は強く客中をくつた。そして、座を立たうとするおすゑを引留めて、夜通を出て来た霜分を聞いたり、三浦や大井の身の上を話して聞かせたりした。

「夜明さんのコレは来るかい」と、ふと指を突出した。

「コレつて何です」と、おすゑは怪んだ。

「何だ白ばくれて。…酒屋の娘丈、来るだらう」

「あんな事云つていらつしやる」

おすゑは戯談として聞流したが、倉賀は、ちや、君はまだ知らないんだね。よく氣をつけといで、今に遊びに來るから」と、誠しやかに云つた。

が、そんなことがあるものかと、おすゑは些しの疑ひも起さなかつた。最早日暮も幾個から退いて、そろ〳〵晩の支度をせねばならぬ頃となつたので階下へ下りて行つた。倉賀は緩くり遊んで行くつもりで、食物を誂へて酒をも言付けた。

叔母は丁度歸つて來たところで、衣服を着替へてゐた。倉賀の名を聞くと、「三浦さんの途中ではこの人が一番誠かなんだよ」と云つて、「とん子さんを掛けて〻」と訊いた。そして、忙しさうにおすゑに晩の指圖をしてから、二階へ上つて行つた。

お光は鳥の土産を拵つて、泊りがけで遊びに來て、老婆の酒を見るや、「私、お腹が空いて空いて仕様がないの。紀ノ善のお壽司を御馳走して下さいな」と强請んだ。

おすゑは叔母の留守の間に樂をしただけ、何かしら身體が忙しいのに、傍でお光がはしやぎ廻るので、忌々しく思つた。少し窘めたらよさそうに思ふのに、老婆は商賣いほど甘かつた。

「こんなに我儘で贅澤で、末はどうするんだらう」と、自分がこのくらゐの年頃から、苦勞ばかりして誰れにも大事にされたことのないのを思合はせて、妬ましかつた。そして、壽司の殘りを小皿に取つて與れても、心で逆ふつもりで、手を付けなかつた。

「遠慮深いわね。遠慮してちや人間は損よ。……おすゑさんは叔母さんとは丸で性分が異ふわね」と、お光は小聞しやくれた口を利いた。それがおすゑの耳には癪く響いた。

灯が入ると、一度に三組も客が來て、座敷は寒がつてしまつた。おすゑは戸惑ひして、屢々叔母の小言を喰つた。倉賀は馴染のとん子を歸した後も、まだ愚圖々々してゐたが、おすゑの袖を見るたびに呼入れて、さも話したいことが溜つてゐるやうな口吻で話した。

「まだ手があかないんかね。何時もこんなに忙しんかい」

「いゝえ、さうでもないんですよ。今夜のやうなことは私が來て初めてですの」

「……僕は一つあの後の大井の話を緩くり君にして聞かせたいんだけど」と云掛けて、「も少し待つてるから、手が暇いたら僕を神樂坂まで送つてつて呉れないか。今夜は豫目だから眠かだよ」

「中々遊びに出しては呉れないでせう。とん子さんを連れて入らつしやればいゝのに」

「いや、彼奴と歩くのは御免だよ。家鴨のやうな態をして歩きやがるからね」と、倉賀はさも厭さうに眉を顰めて、「叔母さんに聞いて御覽。僕とならいゝつて云ふから」

「えゝ……」

おすゑは隣座敷で鳴つた手の音に答へて出て行つた。そしてその客を送り出して、ふと外を見ると、淡い月が道を照らしてゐる。横町の拔道をぞろ〳〵通つてゐる人の姿は見えないで、足音や話聲のみ聞えた。おすゑも倉賀に付いて皆なの行く方へ出て見たかつたので、邪氣ない氣持でそつと叔母に許しを乞うたが、叔母は首を振つて、「今夜はいけないよ」と、沒義道に斥けた。

意地惡く今夜は忙しかつた。倉賀の側へ行つて斷つて、二言三言話して來ると、帳場には坊主頭で瘤のデカ〳〵光つた愛嬌のある男が、煙管を指先で器用に廻しながら、老婆を相手にべら〳〵喋舌つてゐる。

「一寸大急ぎで行つとくれ」と、叔母はおすゑに囁いた。

「あの人は誰れ？」と訊くと、

「新聞だよ」と答へて、叔母は考へ〳〵、「三人藝者の名を差して、

「あの人は決して同じ女を二度呼ばないんだから……」

「まあ厭だ」おすゑは呆れたやうに云つて、輕薄なその男を怖らしさうに見やつた。そんな男に買はれる藝者を憐んだり、羊んだりしながら、二三軒廻つて歸ると、新聞はお光を前に置いて、爪彈きで「緣かいた」を唄つて聞かせてゐる。首で拍子を取り〳〵「巫山戯て唄つてゐれど、その聲は震ひつきたいほどによかつた。

新聞は間もなく歸つた。おすゑは例にない氣忙しい思ひに疲れて、ガツカリした。夜食が濟むと、老婆もお光も寢床へ入つた。叔母は手早く跡始末をして、立膝で煙草を吸ひながら、眠たさうなおすゑを見詰めて、

「お前も何時までこんな事をしてもゐられまいね。もう厭になつたらう」と、相手の心を索るやうに云つた。

「私些とも厭だなんて思つてやしないわ。さう見えて？」

おすゑは强ひて自分の辛抱氣を見せて喜ばせようとしたが、叔母は意外にも、「こんな家に永くゐたつて仕方がないよ」と呟いた。そして、「一度よくお前に話したいことがあるんだがね」と、意味ありげに云つた。

「話したいつてどんなこと？」

「さう急ぐことでもないよ」

おすゑはそれを聞きたがつて焦れたが、叔母は進んで何も云はないで、話を客の噂に移しながら、寢支度をした。

「でも、倉賀さんは隨分惡口言ひだわね。叔母さんには落語家の情夫があるんだなんて、酷いことを云ふのよ」と、おすゑは笑ひ〳〵何の氣なしに云つたが、すると、叔母は厭な顏をした。

「芸妓にも私の情夫があるんだよ。どうだらうと大きなお世話さ」と、角立つた厭しい口調で云つて、枕に就いて背を向けて口を噤んだ。

おすゑは變な氣がしたが、やがて、忌はしい疑ひが萌すと共に、云はでものことを口に出した自分の方が疎りが惡くなつた。

叔母さんも倉賀さんの云つた通りなのだらうか。四十にもなつてゐるこの叔母でさへさうなのだらうか。……おすゑは只一人手頼りにしてゐる人が手頼りにならない緣に思はれた。

「皆なさうなのだ……」おすゑは燈火を消して、叔母の側に敷かれた夜具の中へ息を殺して入つた。更け行く夜に堪へがたい淋しさを覺えて獨り涙ぐんでゐた。

夜が明けると、叔母の樣子は不斷と少しも異つてはゐなかつたが、それでもおすゑの心には妙に隔てが出來た。以前よりも一層素直に指圖通りに働いてゐても、呪んだ口は決して利かなかつた。

横濱からは、妹が覺束ない筆で音信を寄越したので、皆なが無事に暮らしてゐることは知れたが、此方から月末までにどれほどの金を送られるかと、自分ながら不安心だつた。里親へは成るべく十分の心付けをして置きたいのだけれど、浮かりすると、練めただけの仕送りも危まれた。

三月も最早片手で數へられるほどの日數を殘してゐるばかり。おすゑは櫻の咲く町へ着て出られるやうな衣服一つ持つてゐなかつた。

叔母は一度云掛けて止めたことを、二三日立つてもパツキリ話さなかつた。只永くこの家に勤めてゐても先の見込はないらしいことを折に觸れては微めかした。だが、叔母が他所行の衣服を襲ねも持つてゐないことはおすゑの目に留つてゐる。幾年も此處に勤めてゐるために、隨分お金も溜めてゐるらしいと、横濱の親類で

噂してゐたのに。……

十三

二日置いて倉賀がまた遊びに來た。靜かに雨が降つて薄ら寒い晩であつた。おすゑはこの人になら氣兼をしないで、いろ〳〵の噂の聞かれるのを喜んだ。方々の土地を浮かれ歩いてゐるこの人達の氣樂な暮らしは、言葉の端々から美しい夢のやうに描かれた。「今夜は暇らしいから、おれが叔母さんに斷つて、君を寄席へ連れて行かう」と、倉賀は云つた。

「私、東京の寄席へまだ一度も行かないんですよ」

「さう云つておすゑは、此方の寄席で今どんな事をしてゐるのかと、乘氣になつて訊いてゐたが、ふと叔母が小聲で呼んでゐるのに氣付いた。で、叔母が立つてゐる小暗い處へ出て行くと、「今勇吉さんが來たから、お前さん階下へ下りちやいけないよ。――此處にはゐないことにしてゐるんだからね」と、顰を掻寄せて囁いた。

「さう？」と、おすゑは言葉は落着けたが、身體は震へた。

「お前さんは會はない方がいゝの。私がよく話をしとくから」と、叔母は獨りで呑込んで、私が呼ぶまで來ちやいけないよ」と念を押して階下へ行つた。

おすゑはおど〳〵しながら、階子段の側へ來て、耳を澄ました。物音に紛れて話は少しも聞取れないけれど、折々男の聲が聞えた。何を云つてゐるのか、どんな風をして來てゐるのか、自分も其處へ出て行つて、長い間胸に溜つてゐる事を思ふさま云つてしまひたくなつたが、叔母に遮られてゐるので下りる譯に行かなかつた。叔母の上手な口先で夫が說伏せられゝば、最早一生夫に會ふ道は絕えてしまひさうな氣がして、叔母の巧手な仕打が恨めしかつた。……

と、やがて襖が開いて、臺所の階子が開いて、男の出て行く氣色がした。おすゑは階子段の側の障子を細目に開けて、見えない夫の姿を雨の中に見送りながら、懷かしい思ひを寄せてゐた。

「素直に歸つたよ」と、叔母は急いで上つて來て知らせた。「お前さんが見付からなくつてよかつたよ。幾度も來られちや煩さいからね」

「今何をしてゐるんでせう？」

「なんにもしてゐないらしいよ。此方にゐても思はしくないから、二三日中に濱に歸るんだつて。……私、うんと窘めてやりたかつたけど、汚い服裝をして萎れてるから可哀想でね、あんまり酷い口も利けなかつたよ。おすゑの居所を教へて與れつて云ふから、自分が棄てて出た女の居所を聞いてどうするんだと云つてやつたら、只一言おすゑに會つて謝りたいんだつて……」

叔母はさう云つて笑つた。おすゑはもつと立入つて訊かうとしたが、そこへ倉賀が出て來て、「何をこそ〳〵立話をしてるんだい」と近寄つたので、叔母一人を殘して、自分は階下へ下りた。玄關脇の自分達の部屋には煙草盆と茶盆とが出してあつた。それを片付けながら、ふと見ると、字を書いた小さい紙片が落ちてゐる。「四谷左門町×番地久本たね方」勇吉の名がその下へ書かれてゐる。おすゑは拾上げて慌てて袂の中へ入れた。梅屋の電話口で聞いた住所が確かに此處だつたと、今やうやく思出された。

「寄席へ行きたきゃ行つといで、少し早目に歸りさへすればいゝから」と、叔母は二階から下りて來ると勸めた。

「私、さう行きたくはないの」と、おすゑは卒氣なく答へた。

「何故さ。今日のやうな暇な晩に行つといた方がいゝだらう。折角連れてつてやらうつて人があるんだし。……」叔母は煩さく勸めて、「面白い話を聽いて少し笑つといで。氣が滿々していい保養になるよ。今夜はお前さんによく話したいことがあるんだけど、それは歸つてからでいいから」と口早に云つた。

おすゑは氣乘りがしなかつたが、皆なに勸められるのを拒むことが出來なくて、倉賀に隨いて行くことにした。

倉賀は戸外へ出ると、「寄席も詰らないから、何か食べに行かうぢやないか」と、相手の氣を惹いたが、おすゑにはそんな役目たいことをする元氣はなかつた。倉賀が傘を並べて歩きながら絕えず親しい話を仕掛けるのを聞外しては、空々しい返事をした。

「君はいやにぼんやりしてるね、どうかしたのかい」と、倉賀に怪まれた。

「さうでもないんですけど」と、おすゑは言淀んで、ふと目を上げて今通つてゐる途の左右に心を留めて、「私、近々にあの家を出ようと思つてますの」

「そして何處へ行くんだい」

「……」

「外へ行つたら僕に知らしとくれよ。僕は其處へ遊びに行くから」と、倉賀は笑つて、「叔母さんに仕込まれると、おすゑさんも人間が異つて來るだらうね」

二人の妻は屢々往來の人に顧みられた。おすゑは若い男と連立つて歩くのは珍らしいので、人目が眩しかつた。寄席へ入つても隅の方を選んで座を占めたが、知合ひの藝者が此方を見て會釋した。

高座では上方辯の落語家が、不人情な女郎とのろい男の話をし出した。女の心を試さうとして死ぬる約束をして縊の際まで連出したが、女は巧い言葉を考へた。……同じ場所から一緒に身投げしたらあの世で逢へぬと聞いてゐる、同じ時刻に場所を選へて死なうではないか、南無阿彌陀佛の聲を合圖に、私はあちらの岸から身を投げますと、女は後をも見ずに監出した。……そして、間を隔てて男にこの世の別れを告げながら、念佛の聲と共に大きな石を自分の身代りに投込んだ。……

聽手は腹を抱へて笑つてゐたが、おすゑは可笑しいよりも、女が憎らしくて男が可哀さうに思はれた。落語家の巧みな言葉や身振で、夫が女郎に迷つて騙されてゐる樣子がまざ〳〵と見せつけられた。そして、ふいと話が切れて、拍手の中に落語家が引下つてからも、その男と女との後日の成行が眞面目に考へられた。

引續いて支那人の曲藝や、白粉を塗立てた小娘の手踊りなどがあつたが、倉賀はさして興もないらしく、「もう歸らうか。君はまだ聽いてゐたいのかい」と訊いた。

「私、もう澤山」と、おすゑは高座のお道化た身振りに最後の目を向けて立上つた。

倉賀は直ぐにさのやへ歸らうとはしないで、勸工場へ入つたり、ビヤホールへ入つたりした。おすゑは素直に引廻されてゐたが、やがて酔ぶ地になつた倉賀は、手を執つて寄掛つて、さのやの近くなると、「今夜僕は獨りで泊るから、夜中に僕の處へお出でよ。いゝかい待つてるよ」と囁いて、女の肩を搖つた。

おすゑは戯談としては聞けなくて、顰を顰くした。男の手をすり拔けて家へ駈込むと、叔母は機嫌のいゝ顰をして迎へて、

「面白かつたかい」

「えゝ」と、曖昧に答へて、おすゑは冷たい手を火鉢に翳した。倉賀の世話は叔母に任せて、自分は二階の座敷へ妻を見せなかつた。

倉賀は獨りで泊ることになつたらしい。とん

子は貰ひが利かないし、外の女を呼ぶ樣子も見えなかつた。おすゑは外で囁かれた言葉を思出しては、胸を騒かせてゐた。叔母の命令で仕方なしに茶を持つて上つたが、相手の顏は見ないやうにして逃げて來た。

雨は降るし客は少いし、早目に寢ることにして、叔母と二人女中部屋へ入つた。が、叔母は直ぐに寢ようとはしないで、おすゑを前に引据ゑて、「私はお前さんのためを思つて云ふんだから、そのつもりで聞いてお呉れよ」と、改まつた口吻で、かねて云はうとしてゐた話の緒口を披いた。

「勇吉さんとはとても見込みはないんだし、若い女が一人ぢや世は渡れないんだからね。それにお前さんは厄介者を背負つてゐるんだから、誰れか確かりした後立てがなくちゃ何事につけて心細いよ」と云つて、暫らく言葉を切つてから、「私が話したためぢやないけれどね、老婆さんにでも聞いたのだらうよ。お前さんの身の上をよく知つてゐる、そんな女なら世話をしてやらうつて云ふ人があるんだがね。……きうすればちやんとした家を一軒持たせて貰へて、お前さんの望み次第で朝吉を側に置きたければ連れて來たつて構はないんだよ。こんな家に奉公してゐるよりや、その方がどの位勝しだか知れないと思ふがね。私にしても時々遊びに行ける家が出來て樂みだし、お前さんも好きな處へ遊びに行かれるしさ」

まあ緩くり考へて返事をせよと、叔母は口では云ひながら、座を動かないで、相手の顏を見詰めた。目付で返事を迫つてゐた。

が、おすゑはこの意外の話に驚いてゐて、どちらとも答へる力はなかつた。

「その人は田舍の人だから、年中此方にゐるんぢやないの。只れ、此方に來てゐる間宿屋暮らしは窮屈だから、氣立のいゝ女があつたら、一軒を借りて置きたいつて、かねてさう云つてゐるの」

叔母がかう話を續けたので、おすゑの心にもその男の姿形が浮んで來た。それは一度この家に泊つたことのある上州の商人で、大抵の藝者では納らないと叔母の零して居た、五十近いお客であつた。するとおすゑはこんな男の世話になれよと、平氣で勸めてゐる叔母の顏が怖く見えた。で、手を合せて許しを乞はぬばかりに、

「私はとても人樣の御機嫌は取れないんですから」と哀れげな聲を出すと、

「お前さんも男で苦勞してゐる癖に、何時までも子供のやうだね」と、叔母は微笑して、「機嫌を取るも取らぬも、その人は滅多に此方にやみないんだよ。不斷はお前さん一人で、好きなやうにして暮らされるぢやないかね。これで朝吉でもなければ、また相當な處へ片付いて、其稼ぎで世帶を持たうつて事もあらうけれど、あの子があつちや一寸ズケ數からうよ。それに、もう生娘ぢやなし、地道に世を渡つて苦勞してゐたつて詰らないぢやないかね」

生娘ぢやなしと云つた叔母の言葉は、おすゑの耳に鋭い錐のやうに應へた。「私なんぞ生きてゐたつて仕方がないんだわ」と、ホロ〳〵落ちる涙を袂で蔽うた。

「何だよ、氣の弱い」と、叔母は笑ひ〳〵叱つて、「面白い目を送るのも、厭な思ひをして目を暮らすのも、人間は氣の持ちやう一つだよ……お前さんのやうに何時も引込思案をして、いゝ運が向いて來かけても取逃してばかりゐちや、後で後悔しても追付かないよ」

「……ですけど、世間の人の眞似は私には出來ないの。こんな性分ですから」

「損な性分だね」と、叔母は、嘲るやうに云つたが、直ぐに柔しい調子で、「そんな事はどちらでもいゝとして、二三日中には彼方へお金を送らなくちゃなるまいよ。朝吉の方へもお母さんの方へも……」

「私此間からその事ばかり考へてゐるの」と云ひかけて、おすゑはふと叔母に助けを乞ふのが厭な氣がしたので、「だけど、私一人でどうかしようと思つてるわ」と、言葉强く云ひ切つた。

話はそれで杜絶えた。叔母は明日の日もあると、おすゑを促して寢床に就いた。

おすゑの高ぶつた神經には、いた〳〵しい朝吉の妻や、田舍の商人や、夫の妻が今其處にゐるやうにまざ〳〵と思出されてゐた。「もうかうしてはゐられない」と、ふと首を持上げては、きよろ〳〵闇の中を見廻した。

帳場の柱時計は一時を打つた。便所へ行くのか、階子段に客の足音が響いた。その音を聞くと共に、おすゑの心に薄らいでゐた倉賀の言葉が、再び生々と浮上つた。力强く胸に迫つて來た。……あの足音は倉賀の足音で、一度云つた言葉を數談にしないで、宵から眠らずに待つてゐるのではなからうか。……自分に思ひを寄せてゐる男を待呆けさせて夜を明かさせては清まない。……と、おすゑは溜息吐いた。

正體なく眠つてゐる叔母の側を拔出て、階子段を傳つて、廊下の電燈を消して、奥の座敷へ入つて行く。……おすゑはその有樣を空に描きして、快い胸の鼓動を覺えてゐた。倉賀の手に縋りさへすれば何でも聞いて貰へる。皆んなに意地められて術ない思ひをしてゐる私を庇つて貰へる。……

おすゑは厭苦しいこの暗い部屋を出ようとして、ふら〳〵と身を持上げたが、足は進まなかつた。そして、暫らくして、薄明るい燈火の側で膝と膝とを擦寄せて、倉賀の顏を仰ぎ見たが、「何か訴へてゐたが、氣がつく容易に明けさうではない。氣立たましい言をさせて猫は鼠を追掛けてゐる。

おすゑは氣が疲れ果てて、最早物を考へ込んで苦んだり樂んだりする力は失せた。今は只夜の明けるのを待遠しがつて、いら〳〵するばかりだつた。

牛乳配達の俥の音が通つて、老婆の嗄拂ひが聞え出すと、おすゑは早くも雨戸を開けて、雨雲の消えた明かな例景色に面を觸れてゐた。海日を開けて此方を見た叔母は、何かブツ〳〵云つてゐたが、再び枕を仕直して眠つた。おすゑは叔母の寢顏を顧みて、世にも忘はしい小憎らしい人であるやうに蔑視んだ。

雀は庭先に囀つて、朝日は障子に冴えた光を投げた。おすゑは叔母の手助けなぞして働く氣はなかつたが、老婆に解を掛けられると不斷の通り襷掛けで、甲斐々々しく身體を動かした。

と、そこへ倉賀が二階から顏を洗ひに下りて來た。「氣持よげにニコ〳〵して、「一人の方が却つてよく眠れるよ」と、誰れに云ふともなく云つた。そして、おすゑが後で茶を入れて二階へ持つて行つても、昨夕の事は忘れたやうに何とも云出さなかつた。

おすゑには倉賀の心の底が分りかねた。いろいろに考へ直してゐたが、さうする中に、倉賀は色も香もなく歸つてしまつた。飄みになる言葉一つ後へ殘さなかつた。

十四

朝の用事が片付くと、叔母は一人で湯へ行つた。おすゑは叔母の留守の間にとそ、自分の量見を極めねばならぬやうに、心が急かれたので、前後をとくと考へる暇もなく、一寸其處

まで買物に行つてまゐります」と老婆に斷つて、羽織を引掛けて出た。夢中で坂下まで歩いて、此處から電車に乘つた。夫の居所は書置して置いた紙切を出して見なくても、突でよく覺えてゐる。

耶蘇に訊いて下りた處は、先日歩き廻つた處だつた。幾度も人に訊いてその家を捜してゐる中にも、若しや叔母が後から追駆けて來はしないかと氣が氣でなかつた。分り難い路次裏をまご〳〵して、やうやく「久本」といふ表札を見當てた時には、悦しさに胸が震へた。何となしに安心して、夫に會つた後のことなぞ碌に心に浮ばなかつた。

「二階にゐますよ」と、子供に乳をしてゐる主婦が存在な聲を出して顧みた。

垢の付いた古い着物や、さまざまの古道具が上り口を塞いでゐる。おすゑはそれを避けて通つて、階子段に足を掛けたが、上り切るまでには可成りの時がかゝつた。隅へ身を滑ませて、そつと覗くと、毛布にくるまつて寢ころんでゐた男は、窶れた顏を持上げて此方に目を据ゑてゐた。

目と目とを見合すと、おすゑは思はず顏を背けて、上り口に坐つた。

「お前も大層變つたぢやないか。今は何處にゐるんだい」暫らくしてから云つた男の聲は哀れつぽく響いた。

おすゑは直ぐには答へないで、顏を背けたまま涙ぐんでゐた。

「東京へ出て來てからは、お前も些とは氣樂になつたらう」と、男は續いて云つたが、それが皮肉に聞えたので、おすゑは顏を上げて正面に男を見て、

「何が氣樂なの。……氣樂だなんて、私一日だつて氣樂な思ひしたことはありやしない」と涙聲で云つた。そして、かねて胸にまつはつてゐた恨み言が一時に込上つて來たが、氣强かつたあの頃の影もない嶮〳〵しい男の有樣を見てゐると、つけ〳〵と云ひたい事も云へなかつた。自分の所行を詫びてゐるやうに男の目はしを〳〵してゐる。

「私、東京へ來たくつて來たんぢやないわ、一日もこんな處にゐたいとは思つてやしないわ」

「それはさうだらうが、今は何處に奉公してるんだい。おれはお前が梅屋に奉公してるつて此間伊勢崎町の兼公に聞いたから、電話を掛けたんだぜ。その時來ると云つときながら、何時まで待つてても來ないから、わざ〳〵訪ねて行くと、もうゐないんだもの」

「だつて、私、不寳だから吃驚しちやつて、電話の話がよく聞えないだもの。……だけど、四谷と云ふことだけはうろ覺えに覺えたから、東京へ來ると、幾度この邊を捜したか知りやしないわ」

「おれはまたお前がおれを怖がつて會はないんだらうと思つた」男は淋しい笑ひを浮べてさう云つて、毛布と枕とを隅の方へ投げやつた。

おすゑは帶を入れたこともなささうに埃の積つた部屋を見廻して、こんな處にごろ〳〵してゐて何をしてゐるんだらうと怪みながら、別れて後の話が男の口から出るのを待つてゐた。

この人にしてもあれからいゝ事はなかつたのに違ひない。自分達を困らせた報いがない筈はない。「この頃になつて私の有難味が分つたらう」と思ふと、いくらか胸が透くやうだつた。

男は押入から煙草の袋を捜出して、粉煙草を煙管に詰めながら、「お前はさのやにゐるんぢやないんか。叔母さんの話だと、お前は東京にはゐないつて云ふことだつたが、幾度あの人の指金で、身體の埒りを付けようとしてゐるんだなと、おれは感付いたよ。……どうせおれは

自分の厄手な事ばかりしといて、今になつてお前と元のやうにならうなんて、そんな圖々しい事は云へた義理ぢやないんだからね。云つたからつて誰れも信用するやすまいしさ。だから、何處かいゝ處があつて、お前が仕合せな身になるやうなら、それに越したことはないと思つてるんだ。……叔母さんの口振りが何だかそんな風に取れたが、さうぢやないんかい」と、落着いてポツリ〳〵云つた。

「あんな人の云ふ事が何で當てになるものかね。私あの人のためにどれほど迷惑したか知れないわ。騙して東京へ連れて來といて、私些ともいゝ事はないの」

おすゑはさう云ひながら、ふと叔母が今にも跡を追つて來るかも知れぬと案ぜられ出した。

「私、今日も叔母さんが行つちやいけないと云ふのに、隱れて來たんだから、此處で緩くりしちやゐられないよ。此處捜しに來るから」

「なに、構はないさ。おれの處へ來たつて叔母が惡圖々々云ふ譯がないぢやないか。おれの方でこそ文句を云つてやらあ」

さつきとは打つて變つて、男の聲には力が籠つてゐて、おすゑも氣丈夫に感じたが、叔母を離れたその後の身の始末を思ふと、流石に心細かつた。

「私ね、自分は死なうと生きようと、どうなつても構はないけれど、朝吉だけは飽しい思ひをさせたくないの。滿足な身體はしてゐないし、長くつて二年か三年の壽命だと云ふから、その代り生きてゐる間、心殘りのないやうに大切に育ててやりたいと思つてゐるの。あの子を打遣らかしとくやうな不人情な心になれたら、私東京なんぞへ來てまご〳〵してゐやしないよ」

「さう云はれると、おれも面目ないが、しかし、おれも遠方へ行つてさん〳〵苦勞して來たんだぜ。この一月に東京へ來てからは、性根を入れて眞面目に稼いで、先の見込みが立ち次第、ちやんとした服裝でもして、久振りに濱へ歸らうと思つてゐたのさ。一年の餘も立つてるんだから、お前達の身もどうなつてることやら分らないし、浮かり手紙をやつても吃驚させるばかりだと思つて、おれが自分で會ひに行くまで居所も知らさないつもりだつたよ。……ミシンの方ぢや仕事の口が目付からなくて、當座の口過ぎに、此處の主人の手助けをして古道具の賣買をやつてゐたんだが、運が惡くなつちや仕方がないもんだ。上方で病付いた脚氣がこの頃またぶり返して、毎日ごろ〳〵してるんだ。……久振りでお前に會ふのにこんな樣で會ひたかあなかつた」

「ぢや、今は丸つきり遊んでるんだわね。病氣は醫者に診て貰つてるの」おすゑは次第に他人の事として平氣ではゐられなくなつた。

「さう心配するほどでもないんだ」と男は云紛らせたが、「しかし、働かないで他人の家にゐるのはつらいものだぜ。厭な顏もされんけれど氣が引けて、病氣よりもその方が餘程つらいよ」

そこへ、主婦が上り口から、顏を出して、茶盆を置いて、女の後姿を竊見した。勇吉は主婦を呼んで、馴々しい口調でおすゑに引合せた後、階子段の側へ出て、誰れか來ても留守を使はせるやうに主婦に耳打した。そして女下駄をも隱させた。主婦は首肯きながら勇吉と顏を見合せて微笑した。

最早飯時になつてゐるので、勇吉は何か御馳走をしようと云出したが、おすゑはそれを遮つて、自分で使ひに立つた。手近の蕎麥屋へ行つて、主婦の分をも誂へて、代は拂つて來た。次手に鼓鳥を一つ買つて來て男に與へた。亂れた部屋を片付けて、一年あまり手一つで暮らして

来た自分の家の事を話をしたら、久しぶりで浅草向ひの食事をした。男が二々身を入れて聞いて笑ひ入れるので、おすゑは話しても話しても飽きまたかつた。

「だけど、お前も此方へ来てから陰いたと見えて、見違へるほど綺麗になつたぜ」と、男はふと話を逸らつて、目鼻立ちを云つた。

「眼だよ、冷かしたりして、私に不気味で話をしてゐるのに」と、おすゑは目を擦つたが、口元には微かな笑ひを浮らした。

男は枕に横になつて、息の通ふほどに顔を近づけてゐる女の面を見つめて、「おれだつて本気だね。……で、何だい、もうあの家へ帰らないつもりなのかい」

「帰らうたつて帰れりやしないよ。二度と叔母さんの顔は見たくもいつもりで出て来たのだもの。私だと何だあの人が恐いよ」

「やや、これからお前はどうしようと云ふんだい」

「だから相談しようと思つてるんだわ。……どうしたらいゝと思つて？　今日にも横浜の方へ戻らかゝらなきやならんのだし」

そう云つておすゑは、男の口から洩れる答えで、自分の運命が纏まるやうに、只管待ち構へてゐた。男は「そうだなあ」と考へるしぐさをしつゝ云つただけで、さして考へてゐる風もなく、一途に横浜の横浜を思いてゐるだ。

「私、渡世に帰つても、まだ伊豆屋の仕事をして貰へるかどうだか分からないのよ」と、おすゑは心細げに云つたが、男は、

「そうか。婆ア連の老巧も口は先ばかり巧いけど、腹は強欲だからね」と、だるい、厭そうな答えをしただけで、口を噤んだ。

おすゑは張合ひがなかつた。男の様子が如何にも気力が抜け盡きてゐるやうに思はれたが、すると自分の心も減入り込んだ。思ひの外に男の方から折れて出て、背中の邪魔な鬱もたいのに長谷川の問題の根もみも忘れて、我れから懐つこい話に乗るつてゐるだけれど、よく思ひ直すと話した甲斐は たかつた。……で、おすゑも口を噤んだ。

帯屋の中は寂とした。日盛りは暑いが、風呂に解れる風は涼しくて来た。直ぐ窓の下ではザブ ザブ洗濯をしてゐる主婦達が、隣の家へ向かつて盛んに所帯話を、仕掛けてゐるのがはつきり聞こえた。他の話を聞くともなく聞いてゐたが、すると、男は不意に身を起した。

「やゝ、寝ぼけの世話にならないで、も一度寝ぶ

に出たらどうだい」男の見据えた目にも解に力が入つてゐた。一緒を云つて帰ぬめば此處の主人が、来合せを見つけて突れるよ。お前も早く思立つて東京へ来たほどなら、一つ奮起する気になつたらどうだい。お前にも通じが通じくて、おれのためには随分苦労をさせたのだが、いつそ苦労の負欠の手に、朝晩寄せるお袋のために、もう一苦労する気にやなれないか。お前も何時までこんなちやないよ。身を糧の加減が少しよくなりさへすれば、今度こそ完身になつて稼ぎいで、お前に恩にも報ひをさせたいと思つてるんだ。今まで困らせた埋め合せをしなければ、おれも寝覚めが悪いやな。……だから、もう少しの間だから、お前は口を慎つて、他所で勉めると いふ気になつて突れんかね」

情愛を含んだ口調でから説かれると、おすゑの心には悲しいやうな悩ましいやうな感情が波を打つた。特にたゞ助けるためにならば、自分の手足を縛れた眼はないと、夢心地で思ひながら、「そりゃあ内の者のためになれば、私だとんな決心して我慢で通用したんじやないの」

「お前にその決心がありさへすりゃ、主人も相談して見るがね」と云つて、男は何か考へるくなに出て、「男の見据えた目にも解に力が入つてゐた。一緒を云つて帰ぬめば此處の主人が、来合せを見つけて突れるよ。お前も早く思立つて東京へ来たほどなら、一つ奮起する気になつたらどうだい。お前にも通じが通じくて、おれのためには随分苦労をさせたのだが、いつそ苦労の負欠の手に、朝晩寄せるお袋のために、もう一苦労する気にやなれないか。お前も何時までこんなちやないよ。身を糧の加減が少しよくなりさへすれば、今度こそ完身になつて稼ぎいで、お前に恩にも報ひをさせたいと思つてるんだ。今まで困らせた埋め合せをしなければ、おれも寝覚めが悪いやな。……だから、もう少しの間だから、お前は口を慎つて、他所で勉めると いふ気になつて突れんかね」

情愛を含んだ口調でから説かれると、おすゑの心には悲しいやうな悩ましいやうな感情が波を打つた。特にたゞ助けるためにならば、自分の手足を縛れた眼はないと、夢心地で思ひながら、「そりゃあ内の者のためになれば、私だとんな決心して我慢で通用したんじやないの」

「お前にその決心がありさへすりゃ、主人も相談して見るがね」と云つて、男は何か考へるくな

り、階子段にまで乗出しを掛けたりした。明今しも、開けて、汚れたシャツや股を引張り出して洗濯した

なかつた事だつた。

十五

おすゑは此處へ泊ることに極めると、押し入れを

夫と二人で東京の他人の二階で、からしで打合せ話をしてゐるのは、夢のやうだつた。夢にも見

欲ら後三日だからね。氷会の口があつたつて、お前いくらか持つてるんだい」

「持つてる訳がないわ。婆ア連から貰へるものも叔母さんが預つてるんだし」と云つて、おすゑは「矢張り叔母さんが、今月の一杯は居に

るればよかつたけど」と、溜息を吐いた。

「そう気を落さなくつてもいゝよ。おれがよく主人に相談して見らる。……兎に角、話が纏まるまでは此處へ泊つてゐればいゝんだから、自分の家へ帰つたつもりでゐるがいゝ」

「……この家でも厭に思ふだらうね」

「何故？　他人を引張り込んだのやあるまいし」

「だけど……」おすゑは自分で厭な気がした。

夫と二人で東京の他人の二階で、からしで打合せ話をしてゐるのは、夢のやうだつた。夢にも見

なかつた事だつた。

十五

おすゑは此處へ泊ることに極めると、押し入れを開けて、汚れたシャツや股を引張り出して洗濯した

は平ぺったい沙の上で男の姿勢を見ながら、今日からの身の上を考へて見た。此處にるたいにはるたいけれども、食料をも收めないで二人が能く余にたつてゐると思ふと、今朝の朝餐を考へて、不安で食べられさうでは なかつた。宝石も食料もちやんと揃つて、心配をなくしたいにも、自分の周に布には絹沼までの代用貨くらるしか殺つてゐないい。……海豹（海つたとさうでいふ者でもなければ、幾度も逃げて帰つては母親の手前が恥かしい。

おすゑは獨りでそんな事を考へてゐるのが堪へがたくなつて、男を揺起した。

「私ほんやりしちやゐられないわ。どうしたらいゝだらうね」と、何度かに行きかねてゐるやうに云つて男の横顔を突きめた。そして、暫くになりさうでない時少の部屋を眺む樣になつた。

「此處の主婦が世話をして呉れるつてどんな處？」

「一寸利口な人でしてね。おれはあまり望をましくもないんだ。五十や六十の爺は直ぐ貧して呉れるといふんだけど……」と、男はそも氣の乗りのしないやうに云つた。

「そんなに貧して呉れて？」おすゑは信じ上がれないやうに云つた。

「しかし今のおれの身になつて見て呉れ。お前はまだ心の持ちやうで暮けんこともないが、おれは今に今稼がうつて稼げやうはないし、一人ぼつちでこんな處に沈んで居るんぢやないか。どうかしてお前達に安心させる身分になつて、これまでの罪ほうぼしをしようと思へばこそ。そんな氣もなければ、おれはとつくに海で死んでもくゝつて死んでまつてらる」

「お前さんも死にたい氣になる事があつて？」と、おすゑは男の言葉に驚りついた。……一死ぬる氣があるんなら、一緒に死んで呉れなくつて」と涙浮いた調子で云つた。

「おれこそ何なに淋しい樣ばかり掛けて来たんだから、何時死んだつていゝけれど、お前は若い樣ばかりして、今死んちや詰らないぢやないか」

「いゝえ、私死ぬのは嫌よ。は思はない。田舎へ行つて奉公したり、知らない人達の中へ出て働かされて苦しむよりや、死ぬる方が幾倍楽だと思つてるでよ。お前さんが一緒に死んで呉れるなら、今直ぐにでも死んでよ。此處も他に為あなたいの」

「能度だね。その時になつて氣遣れはしないだらうね」

おすゑは男の膝の上に顔を伏せたまゝ泣き伏いた。そして、このまゝ、つと力を奪ひ殺されても何で構ひはないと覚悟をしてゐた。息が絶えたなら、何で幾分か楽に成れる樣に思へて行けさうな氣になつて、うつとり夢の見心地になつてゐた。

「おゝ、こんな所を主婦に見られたら愛に思はれるぜ」と、男は階子段の方に氣をつけながら、おすゑを起して囁いた。「死ぬるにしても、今此處で死ぬ日やしないぞ。明日まで待つて居れ、おれが楽を買つて来るから。……いよ〳〵死ぬと決まれば、おれもこの世の心殘りのないやうに始末をつけときたいし、お前だつて楽の者に暫く慰きくらるはしたきやなるまい」

おすゑは聞いてゐたが、何なに心配したやうな顔付で男を見た。「おゝ、今日一日だわね」と、やがて涙聲で云つて、今まで忘れてゐた樣に、男の手を見た。

「なにそうちやない」と、男は力強くして、「そんな心配はないが、何にしろ明日一日行くんだからね。……貧は主婦の楽がが出る樣の何と思て、かで料理屋を出してゐるんで、若し遊ぶなら、主婦が口を利けば少しの無理は聞いて貰へるんだ。楽がは、その樣な者といふのが今朝来た楽公人を寝し に来てゐるさうだから、誤まれて行けようと思へば、今日に今日でも若が遊ばないことはないんだがね。……しかし、お前にも田舎へ行く氣にはなれたいだらう。上手利なら貧で呉れや僅か三日間で行かれるんだけど」

男は涙の溢れ勝ちに、動めるやうな口調でかう云ひながら、物思ひはしげな女の楽を振かから目を放さないで、「今のために、お前が直ぐか に主婦から よく聞いて見るといゝよ」

「だつて、私そんな事は言へたくないわ」と、おすゑは顔を紅くして、「あゝ厭だ」と溜息を吐いた。知り人のゐない心細い田舎へ行く氣にはとても なれなかつた。

「おれも無理に勧めたかないよ。しかし、今の場で行くだから、お前が我慢して行く氣になつたら、おれも早く工夫をよくして、郷谷の付近に新しい田舎なだと不自由な代用貨が流通がひに行つてやるぞ。田舎なだと不自由な代用貨が流通がひ

ら思はないの？」と、男に迫つた。

男は相変らず無もなくつて、傍の女を背を撫でて慰を上げさせた。「おゝ、今の話を止めにすればいゝやなかつた。おれが何とか考へて、明日の話をすることにしよう」と宥めると、

「そんなことが出来て？　氣安めを云つて駄目よ」と、おすゑは甘えるやうに云つた。

「しかし今のおれの身になつて見て呉れ。お前はまだ心の持ちやうで暮けんこともないが、おれは今に今稼がうつて稼げやうはないし、一人ぼつちでこんな處に沈んで居るんぢやないか。どうかしてお前達に安心させる身分になつて、これまでの罪ほうぼしをしようと思へばこそ。そんな氣もなければ、おれはとつくに海で死んでもくゝつて死んでまつてらる」

「お前さんも死にたい氣になる事があつて？」と、おすゑは男の言葉に驚りついた。……一死ぬる氣があるんなら、一緒に死んで呉れなくつて」と涙浮いた調子で云つた。

「おれこそ何なに淋しい樣ばかり掛けて来たんだから、何時死んだつていゝけれど、お前は若い樣ばかりして、今死んちや詰らないぢやないか」

「能度だね。その時になつて氣遣れはしないだらうね」

おすゑは男の膝の上に顔を伏せたまゝ泣き伏いた。そして、このまゝ、つと力を奪ひ殺されても何で構ひはないと覚悟をしてゐた。息が絶えたなら、何で幾分か楽に成れる樣に思へて行けさうな氣になつて、うつとり夢の見心地になつてゐた。

「おゝ、こんな所を主婦に見られたら愛に思はれるぜ」と、男は階子段の方に氣をつけながら、おすゑを起して囁いた。「死ぬるにしても、今此處で死ぬ日やしないぞ。明日まで待つて居れ、おれが楽を買つて来るから。……いよ〳〵死ぬと決まれば、おれもこの世の心殘りのないやうに始末をつけときたいし、お前だつて楽の者に暫く慰きくらるはしたきやなるまい」

おすゑは聞いてゐたが、何なに心配したやうな顔付で男を見た。「おゝ、今日一日だわね」と、やがて涙聲で云つて、今まで忘れてゐた樣に、男の手を見た。

「なにそうちやない」と、男は力強くして、「そんな心配はないが、何にしろ明日一日行くんだからね。……貧は主婦の楽がが出る樣の何と思て、かで料理屋を出してゐるんで、若し遊ぶなら、主婦が口を利けば少しの無理は聞いて貰へるんだ。楽がは、その樣な者といふのが今朝来た楽公人を寝し に来てゐるさうだから、誤まれて行けようと思へば、今日に今日でも若が遊ばないことはないんだがね。……しかし、お前にも田舎へ行く氣にはなれたいだらう。上手利なら貧で呉れや僅か三日間で行かれるんだけど」

男は涙の溢れ勝ちに、動めるやうな口調でかう云ひながら、物思ひはしげな女の楽を振かから目を放さないで、「今のために、お前が直ぐか に主婦から よく聞いて見るといゝよ」

「だつて、私そんな事は言へたくないわ」と、おすゑは顔を紅くして、「あゝ厭だ」と溜息を吐いた。知り人のゐない心細い田舎へ行く氣にはとても なれなかつた。

「おれも無理に勧めたかないよ。しかし、今の場で行くだから、お前が我慢して行く氣になつたら、おれも早く工夫をよくして、郷谷の付近に新しい田舎なだと不自由な代用貨が流通がひに行つてやるぞ。田舎なだと不自由な代用貨が流通がひ

「いゝえ、私死ぬのは嫌よ。は思はない。田舎へ行つて奉公したり、知らない人達の中へ出て働かされて苦しむよりや、死ぬる方が幾倍楽だと思つてるでよ。お前さんが一緒に死んで呉れるなら、今直ぐにでも死んでよ。此處も他に為あなたいの」

「能度だね。その時になつて氣遣れはしないだらうね」

おすゑは男の膝の上に顔を伏せたまゝ泣き伏いた。そして、このまゝ、つと力を奪ひ殺されても何で構ひはないと覚悟をしてゐた。息が絶えたなら、何で幾分か楽に成れる樣に思へて行けさうな氣になつて、うつとり夢の見心地になつてゐた。

「おゝ、こんな所を主婦に見られたら愛に思はれるぜ」と、男は階子段の方に氣をつけながら、おすゑを起して囁いた。「死ぬるにしても、今此處で死ぬ日やしないぞ。明日まで待つて居れ、おれが楽を買つて来るから。……いよ〳〵死ぬと決まれば、おれもこの世の心殘りのないやうに始末をつけときたいし、お前だつて楽の者に暫く慰きくらるはしたきやなるまい」

おすゑは聞いてゐたが、何なに心配したやうな顔付で男を見た。「おゝ、今日一日だわね」と、やがて涙聲で云つて、今まで忘れてゐた樣に、男の手を見た。

「なにそうちやない」と、男は力強くして、「そんな心配はないが、何にしろ明日一日行くんだからね。……貧は主婦の楽がが出る樣の何と思て、かで料理屋を出してゐるんで、若し遊ぶなら、主婦が口を利けば少しの無理は聞いて貰へるんだ。楽がは、その樣な者といふのが今朝来た楽公人を寝し に来てゐるさうだから、誤まれて行けようと思へば、今日に今日でも若が遊ばないことはないんだがね。……しかし、お前にも田舎へ行く氣にはなれたいだらう。上手利なら貧で呉れや僅か三日間で行かれるんだけど」

男は涙の溢れ勝ちに、動めるやうな口調でかう云ひながら、物思ひはしげな女の楽を振かから目を放さないで、「今のために、お前が直ぐか に主婦から よく聞いて見るといゝよ」

「だつて、私そんな事は言へたくないわ」と、おすゑは顔を紅くして、「あゝ厭だ」と溜息を吐いた。知り人のゐない心細い田舎へ行く氣にはとても なれなかつた。

「おれも無理に勧めたかないよ。しかし、今の場で行くだから、お前が我慢して行く氣になつたら、おれも早く工夫をよくして、郷谷の付近に新しい田舎なだと不自由な代用貨が流通がひに行つてやるぞ。田舎なだと不自由な代用貨が流通がひ

「だけど、もうあの人には會ひたくない」と、おすゑは最早知人の誰れにも會ふまいと思つた。主婦にも顔を見られないやうに、言葉を掛けられぬやうにと避けて、階下へ下りるにも抜足した。

財布をそのまゝ男の手に渡して、食事は外から取寄せることにした。一刻も男の側を離れるのが心細くて、男が立上るたびに慌てて縋付きさうにしたが、男は毒藥を買つて來ると云つて出て行つた。

おすゑは母親や叔母に宛てた遺書をつくらうとして、紙片を前に置いた。が、どう書かうかと思つてゐる間に、心は外へ逸れて、書馴れぬ六ケ敷い文字などとても書けなかつた。只離れにも會はないで、今夜死に果てる自分の身の上を思ひ詰めてはうつとりしてゐた。

男は容易に歸つて來なかつた。おすゑは待ちあぐんで居ても立つてもゐられない氣がした。臆かな窓の外へ顔を出すのが怖いやうなので、そつと障子を細目に開けて覗いたが、見ても見ても夫の姿は現はれなかつた。打ちやつて逃げたのかとも疑はれたが、夫の憂れた顔付や元氣のない言葉を思浮べると、疑ひは直ぐに打消された。「あの人にしても、生きてゐたつて仕方がないのだ。死にたいのに違ひない」と、男の心も自分と同じやうにのみ思はれた。

一刻々々時の立つほど今夜の迫つてゐるのが身に染みて、外から聞える物音も次第に凄いやうに耳に響いた。

午砲が鳴つて間もなく男は歸つて來た。手に持つてゐた「何處の藥屋でも嬰に思つて賣つて呉れないから、懇意な醫學書生の處へ行つて、騙して貰つて來た」と云つて、女の前に置いた。

「これで死たれて？」と、女は怖々藥罐を手に取つて、水のやうに透通つた藥を不思議さうに見詰めた。これを口に入れゝば直ぐに舌が爛れさうに思はれて、見ても口の内が痺れるやうだつた。が、

「私ぐつと呑むよ」と、強い決心を見せて、「これで二人分だわね」

「さうだとも。半分づつ呑むんだ。」覺悟してゐるんだらうな」男は藥罐に目をつけながも、底氣味惡い聲で念を押した。

「何故そんなことを訊くの」と、おすゑは責めるやうに云つた。が、ふと恐ろしいものに襲はれたやうな氣がしたので、急に力を付けた。

「おれは結句死んだ方が氣樂だけれど、お前は來公しようと思へば、前借もとつさり出來るし、身内の者も安心させて自分もいゝ月日が送れないことはないんだから。……」と、男が云掛けると、

「私もうそんな事は聞きたくないの」と、おすゑは耳を塞いで首を振つた。そして、男の口から、絶え間なく情愛の籠つた哀れな話を聞かされて、日の暮れるまで泣きつゞけてゐたかつた。

温かい靜かな春の日は容易に暮れさうではない。おすゑは意地惡く日につく藥罐を見まい見まいとつとめた。

男は寢そべつて、呑氣らしく煙草を吸ひながら、默つて何か考へてゐた。

毒婦のやうな女

一

その翌日は雨が降頻つたので、事によつたらと座興半分に云つて息込んでゐた七面山登りどころではなく、見殘してゐる名所舊蹟の參拜をも止めて、陸路を俥や乘合馬車で歸ることにした。

「なんなら、もう一晩此處へ泊つて行つたつて構はないんだがね。外を出歩かなくつても、按摩でも取らせて休んでりやいゝぢやないか、近所が靜かだから緩くり寢てゐられるだらう」と、新七は宿の勘定を濟ませて歸支度をしながら、まだ氣遂をしてさう云つたが、おかつは同意しなかつた。

「一度極めたんだから、遂はないで早く立つことにしませう。遂ふと決して後がよかないんですから」と云つて、自分で俥の催促をした。

髱を卸した俥の中に一人で身を置いてゐると、おかつは何となく氣輕になつて、むしろ雨天を喜ばしく思つた。……富士川下りの乘合船や、紅葉の色づいてゐる鷹取山や、癩病患者の療養所になつてゐるといふ深敬病院など、昨日鮒澤を出てから一日がかりで見て來たさまざまな事物が旅馴れない彼女には、みんな珍らしかつたのであつた。身延詣での記念として何にも優つて鮮かに心の中に殘つてゐるのは、仁王門の構内で見たある若僧であつた。

昨夕は食後の腹ごなしと土産物の買入れのために、新七に誘はれて、山の夜風の身に染みる寒い淋しい町を散歩して、仁王門のほとりまで行つたのであつたが、信心氣のないおかつも、雲の往來が繁くて三日月が忙しさうに出たり隱れたりしてゐる山の端を仰いで、畫間案内者に聞かされた經師の開山の業績を思出してゐると、この世ならぬ靈場へ來てゐるやうで、この頃ひそかに思ひつゞけてゐる濁つた思ひも、一時清められて、あの狂人じみた剛扇太鼓の騒ぎも笑へないやうな氣持がした。

仁王門の内は參詣人の捧げる蠟燭の光で明るくて、調子を合せて太鼓を叩いたり拍子木を叩いたりしてゐる婆さんや爺さんの顔がハッキリと見られた。どれも皆な田舍くさい頑丈な人たちで、振動かしてゐる手にも力が籠つてゐた。口々に唱へる七字のお題目も彼女の母親などがよく口にしてゐる南無阿彌陀佛の聲に比べると遙かに勢ひがよかつた。見てゐる間に、二十をあまり越してはゐないらしい、若い僧侶が入つて來て、取澄ました聲で事々しい說教をしだした。彼女の立つてゐるところとは距離が遠かつたのでよくは聞取れなかつたが、お宗旨の有難さを說いてゐるには違ひなかつた。

おかつは、あの若さで鹿爪らしいお說教なんかをしてと、人柄に不似合なやうに思ひながら、風にゆらめく蠟燭の火影に照らされて、夢のやうに浮出てゐる若僧の袈裟姿を見てゐたが、その柔和な蒼白い顔は次第に彼女の心を蕩けさせた。あのまゝ木か石に彫つたらいゝ、佛樣が出來ると思つたりして見詰めてゐたが、あのまま珠數を持つて、若い盛りを佛樣への御來公をのみ勤めて、淋しい山の中で過させるのは惜しいやうにも思はれた。可愛らしく動いてゐる唇で、婆さんや爺さんの埃の溜つた耳へ、佛の御利益なんかを說かせるのが惜しかつた。

「寒くなつたからもう歸らう」と、新七に云はれ

て、ふと振り返ると、新七の下びた帽子がこの時は尖端際に立つて彼の女の目に映つた。何だつてから頻に、ゲチ〳〵のやうな目をしてゐるのであらう？

目もやおかつは仲の中で、かの若い男の表情を思ひ出した。未来に和やかな地に遊んだ時を思ひ出した。未来へ行けるにしても、あんな山奥で不味い物を食べてゐるのでは部らないといふ気にはならないのであらうかと思ふにつれて、自分が甲斐のやうな命町で、変化けてゐられるだけの裏面で、いゝ点迄てのなさそうな日を続けてゐるのが、いよ〳〵淋らしくなりだした。今度に財産を蹴けて貰つたら、自分丈の一祝を時が出せるやうになるのだからいゝ縁合を見つてお前に会ひたいとき〳〵思つてゐると、昨夕も新七は云つてゐたが、おかつは最も男丈の父親や母親に会つてはじまらない事を有き過ぎがらなくなつてゐた。今度は自分の心はおかつの方から暫にらくも離れてはゐなかつた。女の息の接ぎ深さをも絶えず耳に留めてゐた。

「ちよつと本気をお見せよ」と云つて、女の手から紫色内記を取つて、昨日見た寺院や石段の意匠を設けのある場を開けて見せ、

何度なく見まで、彼の女の跡を追つてゐるやうに、窓地恐ろく耳に響いた。

飯盛屋のある鍋町の前で、仲から下りると、丁度度に来合わせた馬車が出掛かつてゐるところであつた。

おかつの方へ注がれるのを、おかつは気がつを掛けることが出来たが、先ず谷の日が無意識に代に頭しに貰つた身の運命内記を開けて、何定となしに文字の上に目を落してゐた。雨戸繰の格子戸に幼げられて外には見えず、耳も殆んどの音も聞き慣めながら川を下つた時のやうな楽みは得た。雨戸繰の隙から新しい鄙の匂ひを嗅げるので、雨戸繰の隙から川は知らず、

新七は向こう側の客の相手になつて、世間の噂や新しい客の客を話題にしたりしてゐながら、つた。女の息の接ぎ深さをも絶えず耳に留めてゐた。

「ちよつと本気をお見せよ」と云つて、女の手から紫色内記を取つて、昨日見た寺院や石段の意匠のある場を開けて見せ、

紫色内記を開いて見せ、

新七は向こう側の客の相手になつて、世間の噂や新しい客の客を話題にしたりしてゐながら、

「今度は何定なく鍋町の方へ向つて駆けてゐるのであつた。乗客を跳ねて飛ばしてゐる馬車が、前後左右の人を驚かして、大騒ぎの様子が人々の目に来たことを感じた。

「この本気は度々お陽さんへ変つて上げるといゝね。お余り旨過ぎだけど、何で呼つかみ身の運命の事を問ひてゐるなぞつたから」

「お陽さんには相応の値段でも買つた方がいゝの。この本気は私がお詣りした記念に貰つて置きませうし」

「それもよからう。値段の決る心でやつて来たんだからな。おれの親密なぞも無石なる心の方がだが、それでも身の運命といふと、主こゝれをも有難がつてゐるよ。外の土地へ遊びに行くよりも今度のやうなお詣りを楽しんでゐるだらうから、沿道中が面白い」

「何でも来て甲斐があつた鍋町なのさ」

「今日舟だの馬車だのと、まどろこしい思ひをしてお詣りしたんだから、値段の利益がなければ鍋町に合はないわね」

おかつは何時なく鍋町に変化の方を眺いたが、すぐ宿十二川迄の流れと、軒並の流い屋がちらと見えた。那辺に繋んに打たれてゐる舟は、その間の方へ向つて駆けてゐるのであつた。乗客を跳ねて飛ばしてゐる馬車が顔に振して、大騒ぎの様子が人々の目に来たことを感じた。

「鍋町の方へ向つて駆けてゐるのであつた。乗客を跳ねて飛ばしてゐる馬車が顔に振して、大騒ぎの様子が人々の目に来たことを感じた。

「鍋町の方へ向つて駆けてゐるのであつた。乗客を跳ねて飛ばしてゐる馬車が顔に振して、大騒ぎの様子が人々の目に来たことを感じた。

「鍋町の方へ向つて駆けてゐるのであつた。乗客を跳ねて飛ばしてゐる馬車が顔に振して、大騒ぎの様子が人々の目に来たことを感じた。

「この頃は二の町通りを重いものを抱んだ事力が多く通るから、通りがえらく壊れてゐる」と、他人の客も四方子を合せて、「若い衆さん、縁をつけてお呉くんな。ひつくり返されでもしちや溜んねえからな」と、高い帳面で云つて笑つた。

「あんまり馬を責めるのもよくねえだ。馬にだつて鞭があるから、どんな拍子でおはれ出すきんとも限らねえ」

左右の人々たちのそんな話を聞いてゐると、おかつはます〳〵恐ろしくなつた。渡しが恐くて崖から落されでもしたらどうしよう。自分丈はこの何度頃恐い渡しに見込まれてゐるやうでならないから更危かしいと、不安な思ひに胸を騒がせてゐた。

ある立場で長い こと馬車が留つてゐた間に、おかつは厠を借りるために舟の茶屋へ寄つた。そこは川底に繋んだ舟しのいゝところで、向こうから来る渡し舟に雨を凌いでゐるのが厠の中から見えた。要を見を背負つて帝をぼけてゐる田舎女がこの激しい雨にも激しい流れにもめげないで、笑けたやうな不気味な顔をしてゐるのを見て、おかつは臆病な自分の心をふと顧みた。厠から出ると、縁台の隅から腰を突き出して茶屋の方を見た。

黙めてゐた新七が、手に招きしながら「早く〳〵」

思ひをして野の道を横切つて、鍋通り事の次に所まで辿りついた時には、下駄も足袋も泥まみれになつてゐた。泥を洗ふ暇もないので、泥足のまゝで乗つたが、かうなればもう自分の見たいになつて頭も衣服も髪はなくなつて、べた〳〵した顔に掛へドカと腰を折ゑて乗客人の注意に不様な姿を曝して憐らなくなつた。

「日延様の御お願に障つたことがあつたと見えて、ひどい目にも会はされた」と嘆くと、

「だからもう一日彼の越にゐればよかつたのだ。せめて鮫洲でも晩まで遊んで来れば よかつたのに、お前があんまり急ぐからいけないのさ。早く帰つて仕方がないぢやないか」

新七は よく〳〵の思ひで田舎で来た旅行が、雨のために不首尾に終つたのを恨めしく思ひながら、悪態つぽい口を利くと、

「一日延したつて明日の天気が常でになりやしませんからね。それに昨夕は嬉しな夢を見たもんだから、一時も早く帰りたくなつたんですの」

「どんな夢？」

「夢の話なんぞ止しませう」

おかつは先きとは打つて変つた快活な口調で、身の延の山の秋の色や沼の女の中の白い絹くさい

脈味たらしい顔や、乗合舟にゐた婦人の事などを話して男を喜ばせたが、この旅を最後として自分だけで永久に甲州の土地を離れようと、ひそかに決心を強めてゐると、何にも氣づかないでゐる男の樣子が恐しく見られた。彷徨者の反對にもめげないで自分を庇つて、寵愛を續けて來て哭れた男に對しては、いくらおかつのやうな女だつて、深い事情もないのに俄かに不實な考へを起すのを、自分ながら快く思つてはゐなかつたが、すでにさうなつたのをどうすることも出來なかつた。今まで氣づかなかつた醜さが男の鼻にも口にも現はれだした。

よぼ〳〵の老婢が留守居をしてゐる假住ひへ着くと、おかつは流石に安易を覺えた。近所の風呂へ入つて來て、坐り馴れた長火鉢の側に坐つて、鳥鍋で夕餐の膳を執つてゐると、生活の安樂に未練が殘つて、明日の日にも此處を立たうとした意氣込みが衰へだした。緣があつてこんな土地へでも來ることになつたのだから、逢はないで甲府の人になつて宮部の妻として一生を終らうかと氣を取直して、男の心を突つくやうな口は利かなかつた。

「昨夕お前の見た變な夢つて、一體どんなのだい？」と、新七が氣にかけて訊ねると、

「人の夢なんぞ執念深く訊くもんぢやありませんよ。歸つて來ると何事もなかつたんだから、私すつかり安心しちやつたの」

「お前は時々出拔けに脅かすからいけない」

新七も安心した。そして、宵の間に兩親や兄のゐる櫻町通の店へ顏出して來ることにして、食事が濟むと滿腹の腹を撫でながら、「別段用事はあるまいから、今夜は早く歸るよ」と云つて座を立つた。

おかつは獨りでゐる間には退屈醒ましに絹刺をしたり手習をしたりしてゐるのであつたが、今夜は疲れてゐるので、長火鉢の側へ枕を持つて來て横になつてゐた。すると、隣の二階から聞馴れた蓄音機の琵琶唄がガヤ〳〵と響いて來た。川中島の合戰に引續いてお絲りの石童丸が唄はれた。

「あれにも飽き〳〵したよ。彼處でやる蓄音機には氣の利いたものは一つもありやしない。それにあんまり使ひ過ぎるから機械が壞れたと見えて、いやな音を出すぢやないの。たまには新しいのを仕入れて來たらいゝだらうにね」と、鐵瓶に水を差しに來た老婢の方へ目をやつて云つたが、老婢は何の感じもなささうに、

「左樣ですね」と氣なく答へた。

「あんたは昨夕一人でゐても淋しかなかつたの、おつるさんも遊びに來なかつたの」

「いゝえね、誰れも來りやしません。宵に早くから戸を締めて寢ました」老婢はさう云つて、臺所の方へ行きかけたが、ふと後戻りして、思出したやうに、

「さう云へば今朝旦那の兄さんがこの家の前を通つてゐなさつた」と、聲を潛めて云つて、「私が御掃除してゐる時に、家の前に立つて此方を見てる人があつたから、誰れか知らんと出て行つて見ると、もうゐなくなつたんですけれど、どうも櫻町の若旦那のやうで御座んした。朝早く何處へお出でなさつたのか……」

「老婢さんは櫻町の方をよく知らないと云つてゐたぢやないの。どうしてそれが分つたの」

「先日おつるさんと一緒にお使に出た時、途中で櫻町の若旦那に會ひましたんです。おつるさんが指差して、あの人が此方の旦那の兄さんだよと敎へて呉れましたから、一心に見ときました」

「さう？　どんな人なの。此方の旦那樣によく似てるんですか」

「そりや御兄弟だから似ていらつしやるんですよ。御立派な方ですよ。色の白い目の大きな、

それで此方の旦那樣よりも骨が高いやうに思はれました」

老婢の言葉が例になく熱を帶びてゐたのを、おかつは不思議に思ひながら、

「そんなに立派な人なの？　だけど、あんたは目が薄いから、ちよつと見たくらゐぢやよく分らないでせう。なんだか當てにならないわね」

「ぢや、おつるさんに聞いて御覽なされ。私の目がいくら惡くつても、闇夜ででもなければ、人樣の顏ぐらゐよく分りますさ。それを疑ひなさるんなら、姉さん御自身に櫻町のお店の前を通つてよく見ていらつしやればいゝ」

「さういきり立たなくつてもいゝわよ。……御立派でも貧相でも、お色が白くつても黑くつても、どちらでもいゝことなんだからね」

「でも、おつるさんはあの若旦那のことを褒めちぎつてゐますよ。主婦と連なつて歩いてゐなさる所を見ると、若旦那がいとほしくなるなんて云つてゐますよ。私は主婦は一度も見たことと御座いませんけど、あの若旦那に釣合ふやうな女は、こんな土地にや一人もないだらうと思つてゐますんです」

「また老婢さんの惡口がはじまつた。あんたの口にかゝつちや甲府も藁無しだけれど、この近所にもいゝ女がゐないこともないわね。佐渡屋の主婦もあか抜けがして意氣な妻をしてゐるし、角の洋品店の娘さんも齒はみそつ齒だけど目が何時も笑つてるやうで愛らしいぢやないの」

「なんだな、あのくらゐな容色が」と、老婢はせせら笑つて、「あのくらゐな女は、東京なら軒並みにゐますさ」

「まさか」と、おかつは口では云つたが、腹の中では老婢の言葉に同感してゐた。そして、「あんたはこの土地にぞうつとゐる氣になつてるんでせう。たび〳〵惡口は云つてゐても」と訊くと、

「それは姉さんがゐたさるのなら、何時までも御厄介になつてゐたいと思つてゐますけどな。……成らうことなら、まだ足腰の自由が利くうちに東京へ歸りたいと思つてゐますのです。あなたはまだ御存じないけど、甲府の冬の寒さつたらそれは格別なんで御座いますよ。私のやうな痩せつぽちの老人には隨分に應へます」

「さうでせうね。四方が山ばかりなんだから」

よぼ〳〵の老婢でさへ都を懇しがつてゐるのが、おかつには可笑しかつた。で、一しきり二人で東京の話を何といふことなしにしてゐたが、暫らくして老婢が必所の方へ行くと、おかつはふと思立つて、手習机を火鉢の側へ持つて來て、東京の母親へ寃てた手紙を書きだした。いろ〳〵な譯から親子の伸ばいゝ方ぢやなかつたけれど、久しく別れてゐると、流石に懷かしいこともあつたので、筆を採ると、あれもこれも書きたいことが胸の中に叢がつた。手習を斷んで字が上手になつたところを見せてやりたいといふ氣にもなつた。先づ身延詣でをしたことから、山々の秋景色の美しかつたことを書いて、それから最近の自分たちの生活の平穩無事なことを書いて、「喜んで下さい」と、浮かと書續けたが、

「喜んで下さいも變だ」と、自分の筆の跡を見詰めて馬鹿々々しい氣がした。お母さんの方でもそれほど氣樂な生活をしてゐるのならもつと小遣錢を寄越したらいゝぢやないかと云ふだらうが此方のお寺詣りだつて、人に羨ましがられるほどの面白いことぢやないのだもの。

「東京が懇しくなりました。氣の合つた話相手もないのに、こんな田舍の町に小さくなつてゐるのは心細くなりました」と、書いて見たが、それはお前の勝手ぢやないか、誰れも無理に勸めたのぢやなしと、母親の方で云ふだらうし、

自分も母親や兄弟に弱々しい心を見せたくはなかつた。

で、いろ〳〵に書惱んだ挙句に、おかつは、書きかけの手紙は反古にして、新に、簡單な時候見舞を述べて、櫻の餅を贈届ける次第だけを書いた。櫻の餅は小包にした。そして、風呂へ出掛ける老婢に託して、郵便局へ持つて行かせた。

三

横になつて默つてゐると、次第に疲れが出て來て、このまゝグツスリ眠入つてしまひたくなつた。せめて今夜だけでも新七が櫻町の本宅の方に泊つて此方へ歸つて來ないで、自由な獨り寢をさせて呉れゝばいゝがと、おかつはそれを羨望つての肝心な望みとしながら、ウト〳〵してゐた。降頻る雨の音が彼女を眠りに誘ふばかりで、外には物の音はしなかつた。老婢は何時ものやうに長湯をして容易に歸つて來なかつた。

戸の開く音がしたやうだつたので、おかつはふと假睡から醒めて、頭を持上げたが、誰れも入つては來なかつた。「老婢さん」と聲を掛けたが返事がなかつた。夢だつたのかと思直して再び枕に就いたが、何だか氣になるので、戸口へ出て見ると、老婢が軒先に立つて誰れかと話をしてゐた。おかつが顔を出すと同時に、その影のやうな人間は、「左樣なら。お大事に」と、四十を過ぎた女のやうな聲を出して、傘を傾げて行つてしまつた。

「あの人は誰れなの。御近所の人？」と訊ねると、老婢は口の内で曖昧な返事をして、茶の間の方へ急いだ。そして火鉢の側へ坐つてから、

「あの人は元八日町の塚本さんのお店で御飯炊きをしてゐたんだけど、この頃は娘がいゝ所へ縁付いたから、其處へ手傳ひがてら掛人になつて行つてるんでせう。お湯屋の前で行會つて久振りに話をして見ると、此方樣の事もよく知つてゐるのに驚いちやつたんです」

「立話が隨分長かつたのね」おかつは老婢の方からこそ餘計なお喋舌をしたのであらうと察して、皮肉な目を向けたが、老婢は氣にもしないで、

「塚本さんでも臺所の方の人手が足りなくて困つてるんださうですよ」

「それで、あなたに助けに來て呉れと云つたんぢやないの」

「いんね。さういふ譯ぢやありませんです」

老婢の言譯は暗かつたが、おかつはどうでもしろといふ氣になつて追窮はしなかつた。いかにも大儀なので、今夜は寢床をも老婢に延べさせて、新七に構はないで枕に就いたが、すると、老婢も湯上りのいゝ氣持でコクリ〳〵居眠をしだした。

そこへ、雨を冒して歸つて來た新七は、重苦しい思ひに屈託して、冴えない顔をしてゐた。おかつは早寢の言譯をしながら枕を離れなかつたが、新七が直ぐに寢室へは來ないで、長火鉢に寄りかゝつて煙管をいぢりながら默つてゐるのを、不斷と違つたこととして變に思つて、

「あなたはどうかなすつたの。櫻町で變つたことでもあつたんですか」と訊ねた。

「さうでもない」

「ぢや何を考へていらつしやるの」

おかつは打遣つて置く譯にも行かなかつたので、寢衣の上へ羽織を引掛けて火鉢の側へ寄つた。そして、茶を入れて、濃いのを自分でも飲んで、たるんだ目蓋に力を入れた。

「私の事でまた六ケ敷いお話があつたんでせう」とおかつはわざと微笑を浮べて輕く云つた。

「格別六ケ敷い話つてこともないが、親類の奴

がみんな碌でなし分らず屋なんだからね。この土地の習慣で親類が巾を利かせて餘計な差出口をしていけないんだ」

「そのことはたび〳〵あなたから承つてよく分つてますさ。今夜のお話を隱さないで聞かせて下さいな。驚きやしませんよ」

女が平氣でゐるのに新七は力を得て、「傍で愚圖々々云へばまた東京へ出掛けるまでのことさ……だけど、折角親爺の方で頼けてやるつていふ身代を棒に振つて他國へ行くのも辛抱氣がなさ過ぎるからね。どうせもう少しの間の辛抱だから、蟲を殺して待つてるんだね。そのかはり此方の物になつちまへば、大つぴらで何をしようと勝手だ譯さ」と、自分で慰めるやうに云つて、「それで明日の日にでも親爺がお前に會ひたいと云つてるんだから、お前もそのつもりでゐてお呉れよ。おれが店へ出てる間に、自分だけこの家へ來て會はうと思つてるらしいから、何時來られても構はないやうに、油斷しないでゐてお呉れよ。不斷云つてる通り、親爺は極端な質素好きで、今風な贅澤は非常に嫌つてゐるんだから、そのつもりで身づくりをしてゐてお呉れよ。質素な風をして家の中をキチンと整頓させて、働くことには骨を惜まないつていふ樣子を見せれば、親爺はそれで滿足するんだ。六ケ敷い註文はない、至極簡單なものなんだ」

「でも私には大役ね」

「なに、親爺やお袋はおれの云ふことを信用してるんだから大丈夫さ。親類の奴が誤解してるからいけないんだが、此方で誠心さへ持つてれば、親爺だつてさう世間態ばかり苦にすりやすまいよ」

身を堅めてこの土地で店を出すことに極まりさへすれば、相當の資本を出して貰へるし、二人しかない兄弟の一人として、財産の分前も少くはないことを、新七は何時ものやうに女の心を引立てるために話した。一人だけあつた娘が年頃になつて死んでからは、一層二人の子供に執着して、弟の新七を膝下から離して他郷で何時までも學問などさせて置くには堪へられなくなつた父親の氣休めのために、新七も一先づ小さな商人にでもなる氣になつてはゐるものの、末永くこの田舍町で過す覺悟をしてゐるのではなかつた。

「今のやうに兄貴の下で働くんぢや張合ひがないが、自分が主になつてやる日にや商賣もなかなか面白いもんだよ」

今更珍らしいことではないが、新七の說明を聞いてゐると、おかつも財産家の妻になつて、兄妹や知人に對して肩身の廣くなることに心が動かないことはなかつたが、一心を籠めてこの幸運を取逃さないやうに努める氣にもなれなかつた。

長い一生新七に連れ添ふことの懶さが感ぜられるのをどうすることも出來なかつた。靜かな茶の間で男と差向ひで、將來のいゝ事を聞いたり聞かされたりしてゐながら、樂しい夢心地にはなれないで、しまひには返事をするのも大儀になつてしまつた。

「今日はいろんな目に會つた。そのせゐだか、一日が大變長かつたやうに思はれてよ」

おかつがさう云つて欠伸をすると、新七もそれに誘はれて欠伸をした。

翌日新七は、前夜注意したことを、も一度繰返して、日々の勤務としてゐる櫻町の本宅（印傳の大問屋）へ出掛けた。初めの間おかつは角帶に前垂の商人姿を外套で包んで、古い鳥打帽子を被つて出て行く男を見送るたびに、いたいたしく思つたり可笑しく思つたりしてゐたのだつたが、この頃は男の樣子がスツカリ田舍商人らしくなり切つたのが不愉快に見えだした。

「本當に櫻町のお父さんが訪ねて來るのか知らん」と思ふと、自分の境涯が顯みられて心が引締つて來たが、素直に男の指圖に從つて、父親を待つてゐるのが馬鹿らしい氣がして、田舍の頑固親爺の御機嫌なんか取るには當らないと、譯の分らぬ不平の鬱くれをそんなことに對してでも洩らすつもりで、わざと身裝をつくろつて待つてゐることにした。

空が綺麗に晴れて山々の眺めは美しかつた。おかつは無駄足を厭はないで藝者町の風呂屋まで行つて朝湯に入つて來て、丹念に化粧に取掛つた。此方へ來てからも時々結つて、彼女には似合つてゐるとおつるから云はれてゐる女優髷にわざと結つた。

「姉さん、申兼ねますが、ちよつとお時の家へ行かせてお呉んなさい。午餐前に幾度歸つてまゐりますから」と、老婢は願んだ。

「あゝいゝとも」

おかつは快く許したが、老婢が昨夕の立話に釣られて給金のいゝ處へ行かうとしてゐるのを察して、「よぼ〳〵の癖に何て慾が深いんだらう。此處を止めたら東京へ行きたいと云つてゐた口の下から直ぐあゝだから呆れてしまふよ」と、鏡に映る自分の顏に向つて呟いた。

銀瓶に湯を沸らせて、茶や菓子の用意をもして待つてゐたが、時が立つにつれて、新七の云つたことを眞に受けて、訪ねて來る譯のない人を待つ氣でゐたことが馬鹿らしくなつた。こんな時におつるさんでも遊びに來れば、折角おつくりした甲斐があるのだがと思ひながら、退屈晴しに格子の間から表通を見てゐた。往來の人々に目をつけて、服裝や顏形をひそかに批評してゐたが、暫らくして、ふと格子戸が開いて「御免」といふ聲がした。

さては父親が來たのかと驚いて、おかつは氣取つた返事をして慣ましやかに障子を開けたが、土間に立つてゐたのは老人ではなかつた。新七の兄の幸吉であることは一目で察せられた。

「櫻町から來たんですが、上つてもいゝですか」

幸吉は極りの惡さうな顏して云つた。

「さあ、どうぞ」

おかつは茶の間を通つて奥の座敷へ客を導きながら、弟とは似もつかぬ兄の水際立つた日鼻立をウットリ目の光へ浮べてゐた。

「いろ〳〵お世話になりまして」と小聲で挨拶して、お茶や菓子器を運ぶのに手間取つてから、闘心側に小さくなつて首垂れてゐたが、生れてはじめてかういふ男に近づいたといふ意識は、彼女の胸を湧立たせてゐた。

「あんたにはもつと早くお會ひせにやならん筈だつたのだが、出拔けに此方へ上つてもどうだらうかと思つて、御無沙汰してゐました。……東京からこんな田舍へ來て暮らすのは不自由でせう」

「いゝえ、別段不自由な思ひはいたしません。……ですけれど、毎日何もしないで遊んでゐちや冥利が盡きるやうに思はれてならないんで御座いますわ。老婢さんなぞお斷りして自分で家の事をしたいと始終思つてゐますのですけど」

「あんた一人で留守番してゐちや淋しいでせうから」

幸吉は彼女の親の住所や兄妹の身の上について訊ねたが、それは通り一片の話題としたばかりで、深い意味を含んだ質問ではなさうだつた。おかつの方でもいゝ加減に調子を合せてゐた。そして、相手の方で肝心なことを云ひ出しさうにしては控へ〳〵してゐるのに氣を留めながら、肝心な話を待ちあぐんでゐたが、やがて、

「私はたとひこの土地で一生を暮らすことになつてもよろしいんですけれど、私が此方へまゐつたために、お宅の皆さんに御迷惑を掛けちや濟みませんから、何時でも東京へ歸らせて頂くやうに新七さんにお願ひしてゐるんで御座いますよ」と自分の方から切出した。

「あんたの方からさう云はれると話がしよいんだが、私の家にはいろ〳〵込入つたことがあつて、結婚どころではない幾細なことでも當人の一存は容易に通らないことになつてゐるんです。何もあなたに難癖をつけて彼此云つてるんぢやないから、その點は誤解しないやうにして頂きたいんだが、たゞ最初に親の許しを得ないでこんなことになつたのが、一概に新七の不始末になつてゐるんです。普通の家なら何でもなしに收まつて行くんですが、私の家は例外に面倒なんで困るんですよ。……無論落度は新七の方にあるんだから、あんたの孝へはよく承つて、私どもの方であんたに對して盡すだけのことは十分に盡す氣でゐるんです。だから腹藏なく、あんたのお考へを私に明して下さい。私が責任をもつてあんたの面目を潰さないやうにしたいと思つてるんですから」

幸吉が言惰さうに云ふのを、おかつは遊び半分に聞いてゐた。今から一月も前であつたら、そして相手が幸吉でなかつたなら、持前の負けん氣を出して、一手切金でも出せばいゝと思つてゐるのか、金づくでどうでもなる私ぢやない。田舍者のくせに人を見くびるな」と、芝居染みた啖呵を切るか、それとも泣崩れてこの色懇に執着するところなのだが、今の彼女はそれほどには心を取亂さなかつた。

「新七さんはあなた方にどう云つていらつしやるんでせうか」

おかつは落着いてさう云つて、顏を上げて相手を見詰めた。濃い眉や高い鼻が凜々しい男らしさを現はしてゐたが、近づきがたいやうな怖い男でないことは先きからの話振りによつて分つてゐた。少し含羞んだ眼差は弟とよく似てゐながら、見てゐると身震ひされるやうな色氣をもつてゐた。

「新七の心はあなたにはよく分つてるでせう。あれは譜を吐く男ぢやない。あれが兩親や兄や親類の者の信用を得ようと思つて、毎日居へ出て來て仕事に身を入れてゐるのを見てゐると、私も兄として不憫でならないんです。兩親だつて新七の心は酌んでゐるんだが、表立つてあなたと結婚させることはどうしても出來ない譯になつてゐるんです。あれはまだ店の事はよく知らないから、自分の家が可成りの財產家でもあるやうに思つてるんだらうが、私どもの商賣は見掛けばかりで、財產なんぞあるものぢやない。この家で別世帶を今まで續けて來るために、あれも隨分苦しい算段をしてゐるやうです」

幸吉はさう云つた後で、ふと調子を變へて、「それとも、あんたはどんな貧乏暮らしをしようとも、大びらに新七の妻として世間が通れなくつても、一生弟に別れないといふ覺悟をしてゐなさるんですか」

「兄さんは何故そんなことを仰有るんですの」と、おかつはふと氣色ばんで、「私が悲得づくで新七さんに附纏つてゐると、お宅の皆さんは思つていらつしやるんですわね。私はそんなさもしい量見を持つてやしませんから、それだけは八ツキリ申上げて置きます」

幸吉は慌てて打消した。「私が今日出拔けに此方へ上つたのも、兩親や新七には内所なんで、私の一量見であんたの考へをよく知つときたいと思つたためなんだから、氣を惡くしないやうにして下さい」と云つて、座を立ちさうにした。

「私なんだか館に落ちませんから、もつとハツキリしたお話を承りたいと思ひますの。私がこれつきり新七さんにお目に掛らないで、今日の中にでも東京へ歸ることにしましたら、それでお宅の皆さんは御安心なさるんでせうか。新七さんも私も將來を樂みにして、かうして伸よく暮らして居りますのに、藪から棒に、お前たちは遠ざける望みはないんだからさつさと東京へ歸れと仰有るのは、あんまり酷過ぎるやうに、私には思はれるんで御座いますが。私はとに角、新七さんがそんなにお手輕に戀仲を裂かれて平氣でいらつしやれるやうな方だつたら、これまで皆さんに御心配を掛ける譯がなかつたぢやありませんか」

おかつは、幸吉といふ人は若い男と女との仲についてはちつとも察しのない人、こんな役目を以て來るには不似合な人、商賣にかけては腕があるのか知らないけれど、色戀の道には暗いに極つてる人、人のいゝ人に違ひないと獨り極めにしてゐた。しかし、損害賠償として相當な金を取つて東京へ歸るにはこんな人を相手にした方がいゝかも知れないと、今の男に厭いた果に頗りに萌してゐた冷酷な戀念も持上らないではなかつたが、幸吉の顏を見てゐると、甲府といふ土地にも俄かに愛着の思ひが起つて、戀得を棄ててもつと辛抱してゐたくなつた。

幸吉は烈しい事を云つて、弟の氣を挫かないやうに兩親が遠慮してゐることや、身延詣りを快く許したのも、それを最後にこの家を疊ませるやうにと思つたためであることなどを話したが、そんな話もおかつの心を脅かすよりも、彼女の氣だるい身體を刺戟して、生々と今日の日を見させた。幸吉の聲音は、言葉の意味が何であらうとも、彼女の耳に色つぽく聞えだした。

……兩親に同意して二人の仲を裂く下心をもつて來たのやら、弟思ひで二人の仲を憫んで來たのやら、どちらだつておかつは關はなかつた。そして、却つて自分の方から、

「新七さんに自棄を出させないやうに氣をつけて下さいましな。今日兄さんのいらしつたことも內所にして置きますから」と云つて、「後々のことは私後でよく考へて、あなたに御返事いたしますわ」と、淡白に云つて相手を喜ばせた。

四

昨夕の寢醒めに思出したりしてゐた、身延詣の若衆の青褪めた品のいゝ浮世離れのした顏は、幸吉の俗人らしい生々した顏に蹴押されて、おかつの胸の中から淡く消えてしまつた。長い間無焦れてゐた男にめぐり會つたやうな氣持で、おかつは幸吉の顏形を何時までも目の前に浮べては弄んでゐた。二人きりの兄弟でありながら、何故あゝも違つてゐるのであらう。氣が弱くて人がよくて、物分りのよくなささうなところは兄弟よく似てゐるらしいのに肝心な顏形は何故あんなに雪と鼈とほどに違つてゐるのであらう。若しかすると腹違ひなのかも知れない。

おかつは自分が東京でふとした事から馴染んだ男が、兄の方でなくつて弟の方であつたことを忌々しく思つた。簽の引損ひか、博奕の賽の目の出損ひのために、長い間の樂みをふいにしたやうな口惜しさが感ぜられた。

幸吉が行つてから間もなく、歸つて來た老婢は遲くなつた言譯をクド〳〵としてゐたが、おかつは取合はないでゐた。

「今日はどなたかお客樣でも入らつしやつたんでせうか」と、老婢は訊れた。

「誰れも來るものかね」と、おかつは無愛想に答へて、自分一人の夢を見てゐた。

「でも、姉さんの御樣子が違つてゐますもの」老婢は、何時もながら自分が外から歸つて來る

と、さも待受けたやうに迎へて外の樣子を訊ねたがるおかつが、今日はちつとも取合はないのを變に思ひながら、「かう申しちやお詔ひのやうに思ひなさるでせうけれど、頭髮をそんな風にしていらつしやるのが今日は特別によくお似合ひなさるんですよ。それに何かいゝ事の前觸れでもあつたやうに日本晴れの顏してゐなさるんですもの」

「さう、奈つてもいゝわね」と、おかつは悅しさうに云つて、「老婢さんは目が薄い〳〵と云つてゐながら、人の事にはよく目が利くから油斷が出來ないのね。お客樣は來なかつたけど、いい音信があつたんですよ」

「それ御覽なさい。……東京から郵便がまゐりましたのですか。東京からだとお手紙でも珍らしう御座いますね」

「さうね」おかつは快い笑ひを洩らして、「私今日は綺麗になつて？　不斷よりはちつとはいい女に見えて？」と甘えた口を利いた。そして、何時も美しいのに、今日はこと更美しく見えると、老婢にお世辭を云はれるのが、例のお世辭と思ひながらも悅しかつた。

おかつは午髮後の常例となつてゐる午睡もしなかつた。退屈凌ぎと修養のために、新七からも勸められて日々少しづつでも努めてゐる手習や紹介にも、今日は手をつけないで、長火鉢の側や、冴えた日の差してゐる緣側で、ボンヤリしてゐた。新七と親しくなつた時分の有樣や、その前に掛り合つてゐた男のことが、目の前に浮いたり消えたりした。手輕に掛り合つて左程の思ひを殘さないで別れて來た二三の男については、今思出しても悔いも恨みも懷かしみも殆んど感ぜられなかつたが、最初ある知合ひの惡婆に易々と騙されて、頭の禿げた豚見たいな男に偖かな金のために、無垢の身體を汚されたことだけは、思出すと口惜しくてならなかつた。

「勿體ないことをした」と、自分の美しい肌を粗末に取扱つたことが、悔いても〳〵足らないのであつたが、いよ〳〵窮した時には、豚のやうな爺さんを訪れたら助けて貰へさうな氣がして、知らず〳〵心の底では手輕りにしてゐるのであつた。

「あのお爺さんは私を猫か犬かのやうに寵愛して、いろ〳〵の事を敎へて呉れた」おかつは、それを思ふにつけて、新七の無邪氣な戀の次第を連想したが、弟と性質は似てゐるらしい幸吉をも、同じ手順で馴染を深くして行かれさうに思はれた。

美しい女として自分の顏が幸吉の目に映つたに違ひないと思はれて悅しかつた。

「老婢さん、櫻町の若旦那の主婦さんといふのはどんな方なんでせうね」と出抜けに訊ねた。昨夕ちよつと聞いたのであつたが、あれだけでは物足らなかつた。

「おつるさんのお話では、主婦さんは御容色人ぢやないさうですよ。何しろ在所の方ですからね」

「在所といつて何方だらう」おかつは、身延詣りの途中の村々を思出した。雨の中を嬰兒を背負つて渡舟に乘つてゐた健氣な田舍女を思出して、それを幸吉の主婦ででもあるやうに、幸吉と並べて見たが、さうしてゐると、田舍女の主婦が嫉ましかつた。さういふ田舍女に滿足して睦じく暮らしてゐる幸吉の心根が尙痒かつた。……いくら身代を延ばしたつて、その主婦を有難がつて色戀も知らずに若い時を過して、何がいゝことがあるのであらう。

日暮近くなつて、隣家では例の蓄音機を鳴らしだしたが、今度は聞飽いた琵琶歌や勸進帳の外に、「行こか戻ろかオーロラの下を、ロシヤは北國果て知らず」といふ哀れつぽい流行唄が唄は

れたり、陽氣な馬鹿囃子が鳴つたりした。おかつはそれ等の唄に調子を合せて唄つてゐたが、哀れつぽい唄には涙のこぼれるほどに哀れになり、陽氣な唄には踊りだしたいほどに陽氣になつた。

「老婢さん、今夜は御酒を取つて來て下さいな。それから蒲鉾の三人前も誂へて置いてね」と、勿よく云ふと、

「御酒を召上るんですか、お珍らしい」と云つて、老婢も悦しさうな顏した。

「みんなして飲みませうよ。且那樣も時々は酔つた顏でもした方がいゝのよ。あんただつて時々は寢酒の欲しさうな顏してゐるぢやないの」

「姉さんは口が惡い。……此間は煮物のお酒の殘りを、勿體ないから頂いただけなんで御座いますよ」

「老婢さんは正直ね。……私のお母さんが寢酒を飲みたがるんですよ。だから、私もちつとは御酒が頂けるんでせう」

老婢が使に出た後で、おかつは夕化粧をしてゐたが、そこへ、新七は靜かな足音をさせて歸つて來た。

「お歸んなさい」と云つて、おかつは振返つたが、新七は昨夕と同じやうに屈託に曇つた顏をしてゐた。本宅で何事か彼れの氣に掛かることを云はれてゐるに違ひないと、おかつは察してゐたが、兄の訪問については、彼れの方から言出さないかぎりは默つてゐることにした。

「お前は今日は氣持がよさうだね」と、一層見まさつた女の顏に、新な愛着を感じながら云つた。

「毎日働いでゐたつてはじまらないんですもの」と、おかつは甘つたれた聲音で云つたが、彼女の機嫌がいゝのは新七には何よりも悦しかつた。

「本當にさうだね」と、彼れは憂りの拭はれたやうな目をした。

「お夕飯には久振りにお酒をつけることにしたのよ。いゝでせう」

おかつはいゝ匂ひのするクリームや練白粉や香油などを手の平で擦でたり、鼻だの頬だのと彼方此方の皮膚につけたりするのに、云ひ知れぬ樂みを覺えてゐたので、暇にまかせて鏡臺の前を長い間離れないでゐた。すると何時の間にか新七は鏡臺近く躙り寄つて鏡の中を覗きだした。「あなたにもつけて上げませうか」と、一度男の顏を化粧してやつたことがあつたので、新七が今もさう云はれたさうにしてゐるのをおかつは察しながら、今はそんな戯れを樂む氣にはなれなかつた。

鏡に映つた男の顏は愚らしく淫らしかつた。

「私今夜おつるさんを誘つて町を散歩して來ようと思つてゐるの」と、わざと云ふと、

「約束してゐるのかい」と云つて、新七は直ぐに不快な目をして、「お前はあの女とうまが合ふんだね」

「だつて私にはこの土地に女のお友だちは一人もないぢやありませんか」

「それはさうだが……」新七は自分は今親しい友人の一人もないのを苦にしてゐないのにと思ひながら、「僕はいつそ東京へ行つちまはうかな」と云つた。男の言葉は呻いてゐるやうにおかつの耳に響いた。

「あなたの辛抱氣のないのには呆れてしまふ。昨夕あんなに云つてゐなすつたのに。私そんな氣まぐれは大嫌ひさ」

「だつて、昨夕と今日とは僕の境遇が違ふんだからな」と、新七は聲を落して、親爺の仕向け樣次第で、僕はどんな酷い決心をするかも知れないよ」

「ぢや、何時まで經つても私はお宅の方の信用が得られないから駄目なのね。私さへ此處にゐなければ、あなたは御大家の御次男で文句はないんでせう」

おかつは他人事のやうにさう云つて、それよりも自粉の乘加減に一層興味を惹かれてゐるやうであつた。

「おれは明日から店へは出勤しないよ。早く自分の店が出せないくらゐなら、この頃やつてることは無駄骨なんだから。……兄貴や兄嫁に侮蔑されたかないからね……」

「兄さんと喧嘩したんですか。詰らないぢやないの。あなたは素直にさへしてゐれば、ひとりで財產が殖けて貰はれるんぢやありませんか」

たび〳〵繰返してゐる財產の話が出ても、一月前のやうに、あるひは四五日前ほどにも、おかつの方で熱心に話に乘つて來ないのが、新七には低調しくてならなかつたが、相手の冷淡さを責めるのは躊躇された。「三分一でも四分一でも、お父さんの丈夫な内に頂けて貰はにや損よ」と、以前のやうにおかつに嗾けられなくなつたので張合ひが拔けた。

老婢の知らせで、二人は支度の出來てゐる食卓の側へ寄つたが、新七に二ケ月あまりを過したこの隱家をやがて立退くための別れの酒宴のつもりで盃を手にした。側にゐる女の晴々した顏を見るにつけても、今日の午後本宅の奥座敷で兩親や兄が顏を揃へて評議した時の有樣を明らさまには話されなかつた。

「何をさう思案してるんですよ。店を分けて貰へないことなの」おかつは揶揄ふやうに云つたが、今朝幸吉が此處を訪れたことがどれほどの利目があつたのかひそかに知りたく思つてゐた。幸吉が訪問を隱してゐるらしいのも不思議であつた。

「お前さへ覺悟すれば僕は何處へでも行くよ。さうなりや外の思案は入りやしないんだ」と、新七はふいと眞面目になつたが、かう眞面目になられたのに、おかつはゾッとした。何處へでも行くよなんて云ふのが、甲府に來る前の新七の言葉を、おかつの記憶に呼起させた。一緒になら死んでもいゝと、どうかすると思つてゐるらしいのが恐ろしくつて、揶揄つてなどゐられなかつた。話を外して、老婢をも呼んで酒を振舞つたりして氣樂な世間話をして紛らせてゐた。

五

新七を煙たがつて、彼れが家にゐる時には、成るべく遊びに來ないやうにしてゐるおつるが、格子窓の外から「今晩は」と聲を掛けると、おかつはそれをいゝ機會にして、座を立つて、家の中へ招いて、買物を兼ねて遊びに出掛ける道連れに誘つた。

「あなたはいらつしやらないでせう」と云つて、新七を家に殘して、おかつは不斷着に銘仙の羽織だけ引掛けて、おつるとともに外へ出ると、

「私、今夜は櫻町の方へ行つて見たいの。連れてつて頂戴な」と云つて新七の本宅をはじめて、外からでも見ようとした。

「あなたはお店の皆さんをよく御存じなんでせう」おかつは相手が平生遠慮して本宅の内輪の話に觸れないやうにしてゐるのを察してゐながらさう云つた。

「お顏だけなら皆さんを知つてますわ。」

「ぢや、あなたと一緒にお店へ寄りでもしたら、私つてことが皆さんに分るわね」

「だつて、彼方では姉さんを知つてらつしやるんでせう。大且那だつて若且那だつて、疾くから姉さんを知つていらつしやるんでせう」

「ほんとに。私江潤だつたわね。……どなたにもお目に掛つたことがないから、知らん顏してお店へ買物に行かうと思つてゐたのに、當て

が外れちやつた」

疾くから顔を知られてゐるのは意外であつたが、それにつけても、甲府といふ土地が一層狭苦しくなつたやうにおかつは感じた。「此方では知らないのに、先方にだけ知られてゐるのはいやなものね」

「でも、姉さんはお店の若旦那にはお會ひになつたんでせう」

「……」おかつは、「いゝえ」と答へかけたのを危く思直して、「おつるさんはどうしてそれを知つてらつしやるの？」と、事もなげに云つた。

「だつて今朝お宅へお入りになつた方の後姿が幸吉さんのやうでしたから」

「私あの方に叱られたのよ。彼處の人はみんな堅苦しさうね」

「さうでせうか」

おつるは信じない口吻であつた。櫻町の本宅の方へ足を向けてゐながらも、おかつは最早間が悪くつて、はじめの興味は殺がれてゐた。彼女の住居の近所とは違つて、櫻町あたりは都會らしく明るくて賑かで、いろ〳〵な夜店も出てゐた。おかつは久振りで雑沓の中へ足を踏込むと、東京の夜が懇しくて淵らなくなつて、新七一人が男でもあるやうに自分の身體を彼れにまかせてこんな土地へ來たことの慕間さが、新な悔いとなつて胸に浮んだ。町の左右の商店や飲食店や見せ物などについて、おつるが知つてゐるかぎりの説明を絶えず聞きながら歩いてゐたが、おつるに對して何となく打解けられなくなつて、その言葉の端々をも邪まに聞きがちになつた。

「宮部さんのお店はそこですよ」と教へられると、足を留めて、電信柱に身を隠して其方を見詰めた。間口の廣い立派な、見るから身代の豐からしい店であつた。頭の廣い老人が眼鏡を掛けて書付を讀んでゐた。

「さあ行きませう」と、おかつは詰らなささうに云つて後へ戻つた。

「何時も若旦那がお店へ出てゐるのに、今夜はどうしたんでせう」とおつるが云つたが、おかつの耳には冷かしのやうに聞かれた。で、平生なら、蕎麥でも汁粉でも奢るところなのだが、今夜は何處へも寄らないで、買物もしないで眞直ぐに家へ向つた。

「ステキな女だ」と、擦違ひに若い者から聲を掛けられると、自分がすべての男の目を惹いてゐるやうな誇りを覺えた。

おつるの家の前でおつるに別れると、おかつは自分の家を目の前に見ながら、薄暗い通へ道を外して、暫らく當てもなく歩いてゐた。明日から出勤しないと云つてゐる新七に、寝ても醒めても附纏はれるのは、思つても氣味が悪かつた。

よく知らない町を歩いてゐるうちに、ふと先き通つた賑かな處へ出て來たので、おかつは再び宮部の店の方へ行つて、横目でソッと店の中を覗きながら通過ぎた。すると、老人の坐つてゐたところへ、幸吉が代つて坐つてゐて、小僧を相手に話しながら笑顔をしてゐたのが、おかつの目に留まつた。此方へ氣がついたら、幸吉がどんな顔をするであらうかと、おかつはだらけた好奇心に驅られて、も一度店の前を通つた。幸吉も今度は此方を見たに違ひなかつた。通過ぎて電信柱の藍から見ると、幸吉の樣子は先きとは違つてゐた。口を噤んで澁つた顔付をしてゐた。

澁い顔をして見せたつて怖かない、顔や姿こそ違つてゐても性分は弟と同じことなのだらうからと、おかつは可笑しく思つて、親しく幸吉に近づける手段を空想しながら、今度は足早く家へ歸つた。

新七はまだ醉ひの醒めきらない顔して、火鉢の側で仰向けに寝てゐた。

「たゞ今」と、氣取つた聲で云つて、おかつは櫻町の本宅を見て來たことを話した。

「なんだつてそんな處へ行つたの？」

「だつて、おつるさんが連れて行つたんですもの。あの人はお腹の中にいけないところのある人ね。私これから成るべく懇意にしますまいよ。とんだ迷惑を掛けられるかも知れないから」

「だから僕が不斷さう云つてゐたのに」

しかし新七は、今の場合おつるの事などはどうでもよかつたので、重ねて訊返しはしないで、今まで獨りで考へてゐたことを、粘つこい口調で話しだした。今夜中に必要な物を纏めて置いて、明日早く何處かへ行つて妻を隠さうといふのが、彼れの詰りの企てであつたが、おかつは、「私さへ辛抱してゐれば此處にゐたつていゝぢやないの。私があなたを喚かして他所へ連出したと思はれるのはいやですからね」と、熱心を粧つて、眉根に皺を寄せて云つた。

「誰れの口から知れたのか新聞にまで出されたから、なほいけなくなつたんだよ」

「新聞に？　どんなことが出たのか讀んで見たいわね。あなたはその新聞を持つていらつしやらないの」おかつは自分の事が生れてはじめて新聞に出されたのに興味を感じたが、新七は明らさまにはその記事を語らなかつた。

「僕は家の者や世間の奴から馬鹿者にされたつて構やしないが、お前は僕が零落したつて愛想を盡かしやすまいね。お前のお母さんにももつと氣樂な生活が出來るやうにして上げると約束してあるんだけれど、當分約束を果す見込みはなささうだ」

「そんな不景氣な話はお止しなさいよ。氣が滅入つちまふわ」

おかつは男の煮えきらないクド〳〵した話のお相手になつてゐると息苦しくなるので、露骨に、

「私の情愛が薄くなつて、はじめの間ほどにあなたを大事にしなくなつたと思つて、いろ〳〵に氣を廻して心配していらしやるんでせうけれど、私は現在あなた一人を手頼りにしてるんぢやありませんか。あなたの外に私の掛り合つてる男が一人も半人もある譯ぢやないし、こつちへ來てからは外の男の人とは口を利くことさへもないんですからね。念のために老婢にでも訊いて御覽なさい」

「僕はそんないやなことを思つてお前を疑つてやしない」と、新七は口を尖らせた。

「ぢや、それでいゝぢやないの」

それ以上に、自分から何を欲しがつてゐるのかと、おかつはこの男の物足らないらしい口吻を奇怪に思つた。最初に熱染んだ爺さんに仕込まれた色慾の手管に新七の滿足しないのが不思議であつた。

「いやねえ、あなたは。涙を落したりして」

「お前は泣くことなんかないだらう」

「だつて、泣く譯がないのに泣けやしないわ。……口惜しくつて夜つぴて泣いたこともありますさ。あなたはまだそんな思ひをしたことないでせう。……私とあなたとが、浮世の義理かなんかで別れなければならない時が來たら、その時こそお互ひに思ふ存分に泣きませうよ。今から泣いて見たりなんぞしないでさ。見つともないから」

子供を綾すやうに云つて、おかつは手巾で男の目を拭つてやつた。新七は默つて綾されてゐたが、次の室でほどき物をしてゐた老婢が入つて來ると、つと起上つて、生眞面目に坐つた。

そして、

「老婢はお時の家へ行くのなら、今から行つて

泊つて來た方がいゝだらう。明日の朝早く起きられちや騷々しくつて却つていけないから」と云つて、おかつに向つて、先き老婢に急用があるといつてお時が迎へに來たことを話した。

「でも、泊りがけで行くほどのことはないんでせう」

おかつは今夜は二人きりで夜を過すのが何となく不安に思はれたので、老婢を離すまいとしたが、老婢は新七の勸めを幸ひに、泊りがけで行くやうに頼つて手早く支度をした。

よぼ〳〵の老婢でもゐなくなると、俄かに家の中が寂しくなつた。身延の宿で二人差向ひで川の音を聞きながら過した先日の宵の寂しさよりも、一層氣味の惡い寂しさがおかつの心を震はせた。新七とはその前に掛り合つた二三人の男と別れた時のやうに、手輕に別れる譯には行かないのは、今はじめて氣のついたことではないが、今夜は相手の顏を見てゐると、早晩自分の身にふりかゝつて來る災難が、嫌め彼女の神經に傳はつて來るやうであつた。「この人は死ぬるまで私を離さない氣でゐる」と思ふと、男の執念に自分の今後の幸福が暗闇にされさうで、櫻町の親戚などの計らひで穏かに別れの道がつきさへすれば、自分に惡い名をつけられることなんか、どちらでも構はない氣になつた。

寢床に就くと熟睡を裝つてゐたが、不思議に目は冴えて容易に眠つかれなかつた。時雨の音さへ聞えて、人里離れた遠い處にゐるやうであつたが、すると、自分でも譯の分らない寂しさ詰らなさから、涙が枕に傳はつた。……をり〳〵夜半の寢醒めに、どうかすると涙のこぼれることがあるのを、喜問は思出しても馬鹿らしくて、誰にも話したことはなかつたので、寢返り一つしても氣がつくほどの新七も、いまだに氣づかないでゐるのであつた。

六

「本當に今日は櫻町へいらつしやらないの」

翌朝おかつは非難するやうにさう云つて、雨戸を開けて澄んだ秋空を見上げた。老婢のかはりに拭掃除から朝餐の支度までも自分一人の手でしなければならないのが煩はしかつたが、新七は缺勤の覺悟は堅く動かさないで、そのかはりに毫所まはりの用事を自分から先に立つてしだした。今日にも立退くと云つてゐた家の土間を掃いたり、四つ御ひになつて縁側に雑巾を掛けたりした。

が、何時もの出勤時刻が來ると、新七も落着かなくなつた。暫らく躊躇いて勤めてゐたのに、無斷で一日でも休んだなら、角立つた話のあつた昨夕の後ではあるし、本宅の方で打遣つて置く譯はない、樣子を見に誰れかを寄越すに違ひないと案ぜられたので、病氣にかこつけて缺勤を届けることにした。その使には近所のおつるを頼むことにして、おかつが流し元で食器を洗つてゐる間に、無斷で裏口から出ておつるの家へ行つた。

「オヤ、珍らしい、おつるが何時もお世話になりまして」と、家の側の溝で大根を洗つてゐたおつるの母親は、慌てて衣服を掻合せて、洗ひ物は打遣らかして、家の中へ入つておつるを呼んだ。

新七は用事だけを云つて、直ぐに歸らうとしたが、親子に頼りに引留められて、せめてお茶の一杯でもと歡顏されたので、上り框に腰を卸した。

おつるがお茶を入れてゐる間に、母親は細身の煙管と煙草の袋とを持つて來て新七に勸めて、「老婢さん」と「姉さん」との名を先づ持出して、隱かな氣樂な三人暮らしを羨ましさうに褒立てた。

「あなたのお世話であんな手ごろないゝ家が借りられたのだが、近々にあの家を出るかも知れませんよ」と、新七は話しの行きかかりで、うかと云はずともものことを云つた。

「それはまあ」母親は迂散くさい目をして、「櫻町のお宅の御近所へでもお引越しになるんで御座りますか」

「いや、さうぢやないです。……僕なんかは一寸先きは闇見たいなもんです」と、新七はまたうかと云はずともものことを云つた。

「あなた樣がそんなことを仰有つてなるもんですか。お兄さんもこの頃はあなた樣のお宅へ入らつしやるやうぢや御座いませんか。ハンデお舍ひになつて此方の姉さんの御氣性が分りさへすれば、お兄さんのお心も融けるに極つてゐると、私どももさう申してゐるんで御座ります」

「兄貴は一度もこつちへ來たことはない筈だが……」新七は獨言のやうに云つて、おつるの方を顧みた。

おつるは親まれた使に出掛けようとして、土間へ下りたところであつたが、新七の瞼しい目付を氣遣ひながら、「お母さんは當推量でいろんなことを云ふからいけないよ」と言つて、急ぎ足で外へ出た。

母親は娘の注意に氣づかないのか、そんなことには頓着しないのか、「此間中からたび〳〵お兄さんをこの邊でお見掛けしてるんで御座います。お二人きりの御兄弟だから、お案じなすつてお出でになるんだらうと思つてゐましたんです」

「さうですか」

新七は不愉快な思ひを顏に現はさないやうに努めながら、口輕く暇を告げて家を出た。兄が此方の家の閾を跨いだことは一度もない筈なのだが、しかしおつるの母親が根も葉もない揚へ事を云ふ筈もないと、彼れは判斷に迷ひながら、裏口からそつと自分の家へ入つた。

おかつは手紙を書いてゐたが、知らぬ間に歸つてゐる新七の屈託した顏を見つけると、「吃驚しちやつた。……あなたは默つて出て行つて默つて歸つて來るからいけない。何か旨しい物を買ひに行つてゐたんですか」と云ひながら書きかけの手紙を靜かに疊んだ。

新七は自分の邪推のためよりも、むしろ迂濶な問ひを出して女の感情を害ねるのを氣遣つて、ちよつと躊躇したが、默つて濟ます譯には行かなかつたので、「この頃兄貴が訪ねて來たことがあるのかい」と訊ねた。

「え、入らしつてよ、昨日の朝」と、おかつは即座に事もなげに答へて、何故今になつて言出したのかと、突然の問ひを訝りながらも、空呆けてゐると、

「矢張本當だつたのか」と、新七は呟いた。そして、おつるの母親から聞いたことをそのまゝに話した。

「あなたは何だつて不斷いやがつてたおつるさんの家へいらつしやるの？　櫻町へのお使ひなら俥屋でも誰れでも私が頼んで上げますのに」と、おかつは忌々しさうに、ツケ〳〵と云つた。おつる親子に對する昨日までの親しみを根こそぎ無くしてしまつて、「あんな人の云ふことを信用するやうぢやあなたも駄目。輕薄なお喋舌家だから、時の拍子でどんな出鱈目を言出すか分つたもんぢやない。……第一、兄さんは昨日の朝ちよつと顏出しなすつただけぢやありませんか」

「兄が來たなら來たで、お前もおれに隱さなくつてもいゝだらうに。兄貴も昨日そんな話はしなかつたよ。……ぢや、親類のかはりになつて兄貴がお前に舍ひに來たんだね。お前は兄貴の氣に障るやうなことは何も云はなかつたらうね」

「私、餘計なお喋舌はしませんよ」

「來るのなら親爺が來て呉れゝばよかつたのに、兄貴が會ひに來たからいけないんだ。兄貴は自分の女房につゝかれたりして、はじめからおれたちに好意を有つてやしないんだから」

新七は、夫婦の間の世間話の種にするつもりで、兄がわざ〳〵此處の樣子を見に來たのだらうと云つて、兄の訪問の祕密にされてゐたことについての不平を、おかつの方へは向けないで、兄の方へのみ怨みを寄せた。心の中に多少疚しかつたおかつは、煩さい詰問を受けないのを喜んだが、幸吉夫婦が寢物語に自分の噂をしてゐると思ふといゝ氣持はしなかつた。

せめて甲府から、二里ほど距つた積翠寺溫泉へでも行つて、當分身を隱してゐようと新七が云ふのを、おかつは上の空で聞きながら、今日明日に迫つたやうに思はれる自分の身の處置を考へてゐたが、考へてゐると、分別くさい身の處置どころか、わざ〳〵甲府三界まで鬼か佛かに引張られて來たのを緣に、思ふ存分の事を仕遂げて見なければ、腹の蟲が收まらないやうに慾念が燃え立つた。「身延へお詣りして來ると、直ぐに新七さんと別れを急ぐ氣持になつたり、幸吉さんに會へたりしたのも、佛樣のお導きかも知れない。そんなに人の思惑を苦にしておいでなら親爺が來て呉れゝばよかつたのに、兄貴が會ひに來たからいけないんだ。兄貴は自分の女房につゝかれたりして、はじめからおれたちに好意を有つてやしないんだから」と、おかつは調子づいて自分の慾念に綱びてゐた。

「積翠寺とかへはあなた一人でいらつしやつちやどう？　私は身延で慇々してゐるんだから旅は御免ですよ」と云つて微塵動ぎもしない氣振りを見せた。

そこへ、櫻町から歸つて來たおつるが麥を見せて、頼まれた事を果した返事をすると、おかつは、「お使賃に何かお奢んなさいよ」と新七に云つて、自分は奥の室の机に向つて書きかけの手紙を書きつゞけた。

それは幸吉へ宛てた手紙であつた。「……御親切なお言葉はおろそかにはいたしません。昨日一日いろ〳〵に考へまして、お宅の皆さまのお計らひに背かぬやうに、私の身の極りをつける決心をいたしました。緣のある者緣のない者、人間わざではどうともいたし方のない定まり事と思はれますから、私は皆さまのお計らひにおとなしくおまかせして、自分の强情はは通さないことに決心いたしました。つきましてはあなた樣にお目に懸つて、最後のお指圖を頂きたいと存じますから、おいそがしいでせうけれど、至急にお目にかゝれるやうにして下さいまし。新七さまには内しよにして置きますから、左樣御承知の上よろしくお取計らひ下さいませ」

おかつはかう書いて封筒へ收めて袂へ入れたが、胸の鼓動を禁じ得なかつた。乘合馬車の窓から覗いて見た富士川の姫際のやうな危い處を動いてゐるやうな氣がした。自分の夢のやうな望みが遂げられないで、手紙の文面通りにスゴスゴこの土地を立退かされるやうになつても變なものだがと、おかつは何方向いても不安な影が身に迫るのを覺えたが、そんな甲斐性のないことでどうなるものかと自ら顧ました。「ビクビクして尻込みしたつて奥齒が落ちて來る時にや來るんだから、思ふ存分やつて見なければ誠さ。一目見た時から、この人になら命かけてもと思つたのだもの」

おかつはかう思ひながら、新七が自分で茶を入れて、珍らしくおつるを持成してゐるのを見てゐたが、ふと、

「私これから郵便を出しに行くから、大手に旨しいお茶受けを買つて來ますよ。お二人でゆつくりお話をしていらつしやい」と云つて座を立つた。

手紙を直ぐにポストへ入れるのは流石に躊躇されたので、伸夫か誰れかを使にやらうと考へたが、傍の目に觸れないで、幸吉に手渡しするのは六ケ敷さうだつた。たとひ手紙がうまく屆いたにしても、新七に知られないやうにして幸吉に會はうとするのは手順が困難であつた。幸吉の方で氣を利かせて呉れゝばいゝが、手紙の文面を上べだけで讀んで頓間なことをして呉れたら、折角の心を籠めた思付きも妙なことになつてしまはうと氣遣はれたが、さう氣遣つてゐても果しがないので、思切つて運まかせで、手紙をポストへ抛込んだ。

こんな時に老婢やおつる親子が心から自分の味方になつてゐないことが不便に思はれた。

おかつが廻り道して、風月堂で西洋菓子を買込んで家へ歸つた時には、火鉢の側に新七一人例の屆託した顏をしてゐて、おつるの姿は見えなかつた。

「あなたは大變伸がよささうに話をしていらしつたのね。不思議ですわね」と云ふと、

「あの女の顏を見てると滑稽だよ。横からだとさうでもないが、正面に見てると隨分しやくれてるからね」

「今日はじめて氣がついたの？」

おかつは空々しくさう云つて、火鉢の側を避けて奥の間へ入つた。心が咎めるといふほどではないが、男の顏を見たり言葉を聞いたりしないでゐたかつた。

幸ひに新七が散髪に出掛けたので、彼女は一念を籠めて手紙の成行を見詰めてゐることが出來た。冴えた日の差してゐる緣側には隣の白猫が遊びに來て、細い目をして此方を見てゐた。

今のおかつには、幸吉といふ美しい面影を他所にしては、この甲府の土地に一刻もゐる氣はなくなつてゐたのだつたが、燃立つてゐる一念に冷たい水をぶつかけるやうな物があたりにウヂヤ〳〵してゐるのが小憎らしかつた。老婢でもおつる親子でも迂散くさい目を此方へ向けてゐるのが、おかつの大望に取つては、今から小煩さい邪魔物になつてゐた。……白猫は細びを含んだ目をして柔しい鳴聲を立てた。おかつはその聲に惹かされて知らず〳〵緣側へ出て、白猫を抱上げて綾してゐたが、さうしてゐる間に誰れもゐないといふ感じが、これまでとは違つて彼女を誘惑しだした。

おかつはふと猫の子を抛出して、自分の持物の中の大切なものを撰出して一つの行李に纏めたりしてゐたが、するとそこへ歸つて來た老婢は、改つた挨拶をして、「申上げにくいんで御座いますが」と、今日中に暇を呉れと言出した。

「爲方がないわ」と云つて、おかつはそれ見たことかと、自分の豫想の中つたのをひそかに誇つて、「あんたは塚本さんへ行く氣なんでせう」

「あんた忙しいお家へは行きたかないんで御座いますけれど、おまきさんが自分のかはりに、せめて十日でもお店の臺所を助けて上げて呉れ、自分がお引受けして奉公人を搜してゐるんだけれど、どうしても見つからないからと、手を合せて頼まれますので、斷り切れないんで御座いますよ」

「そんなら行つてお上げなさいな。私の方はどちらでもいゝんですから」

おかつは、くだ〳〵しい言譯を繪ける老婢の方を見向きもしないで、持物の整理をしゝた。老婢も自分の押入を開けて、いろんな物を風呂敷や行李の中へ掻集めてゐた。おかつはあらまし片付けてしまふと、突立つたまゝ皮肉な目で老婢を見ながら、

「あんたは旦那樣のお許しがなくつても出て行くつもりなの？」

「姉さんにお願ひして置けば宜しいぢや御座いますまいか。どうせ旦那様にも御挨拶してから、お暇はいたしますけれど」

「でも、老婢さんは旦那様が連れてらつしつたんぢやないの。私にはこの土地の様子がちつとも分らないからつて。あんたに出て行かれちやこんな小ぼけた世帯でも、私のやうな無性者には持ち切れないかも知れないけど、それでも旦那様はいゝと仰有るでせうかしら」おかつは揶揄ふ氣で云つた。

「こちら様では私のやうな者はゐてもゐなくても同じことぢや御座いませんか」

「でも、老婢さんがゐなくなると、後が淋しくなるわね」

おかつはわざと哀れっぽい口調で云つた。下女をかれて臨し目付のつもりで雇つてゐながら、新七め方で給金以外の心付をすることもないし、おかつ自身も、はじめから老婢を好いてゐたいので、屢々物惜しさうな謎を掛けられても知らん顔して、餘分な施しをしたことはなかつたのだが、暇を願ひ出た今の場合になつて、おかつはこの老婢でも自分の味方に引込んで置きたいやうな氣持になつた。よぼ〳〵のくせに、少しでも給金のいゝ方へと目がくれて、寒い時節をひかへて忙しい家へ来公しようとするやうな悲の深い老婆を手懐けるのは造作もないことのやうに思はれた。

「あんたは東京へ歸りたいと、先日の晩云つてゐたぢやないの。歸るのはお止めにして此方に長くゐつく氣になつたの？　私は都合によつたら近い中に東京へ歸らうかと思つてるんですがね」

「姉さんお一人で？」

「私一人だが、旦那様も御一緒だか、それはまだ決らないんだけど、どちらにしてもあんたには一緒に行つて貰ひたいと思つてたんですの。だけどあんたが塚本さんへ御奉公することになつたのなら爲方がないわね。私の當てが外れちやつた」

「東京へ連れて歸つて頂ければ、私何よりなんで御座いますがね、姉さんは急にお立ちになるんですか」

「何時立つことになるか、日取りはまだハツキリ決つてやしないけれど」

「私の方では塚本さんにお義理がある譯ぢや御座いませんから」

老婢は東京へ行けるのなら、何時でも塚本の家から暇を貰つて來るからお伴をさせて貰れと熱心に頼んだ。おかつはこのよぼ〳〵の老婆の氣遣ひを可笑しく感じながら、相手の心を惹くやうな返事をしてゐた。

七

老婢は新七が歸り次第、兎に角暇を貰つて直ぐに出て行くつもりで、身支度をして待つてゐたが、新七が歸つて來ない先に、幸吉が入つて來たのには、老婢もおかつも驚かされた。手紙がそんなに早く屆かうとは思はれなかつたが、しかし、あの手紙の文面を胸に持つて幸吉が訪ねて來たやうにおかつには思はれてならなかつた。

「新七は加減が惡いんですか」と、幸吉は二人の何方に訊ねるともなく訊ねて、上り框に腰を掛けた。

「床屋へまゐりました」と、おかつは明らさまに答へて、「もう歸つて來ますでせうから、お上んなさいまし」

「いや病氣でたけりやいゝんです」

幸吉は家の中を見廻した後で、おかつの顔に目を落したが、間が惡さうに直ぐに目を外して、

「親爺が來ると面倒だから、私が代りに様子を

見に來たんですが、大した病氣でないのなら安心です。今日一日は休んで明日は店へ出勤するやうに云つて下さい」

「承知いたしました」おかつは慎しやかに通り一片の受答へをしたが、ふと、ウツカリして大切な時を取逃してはならないと腕を波打たせながら、「新七さんはお勤めにいらつしやるかどうか分りませんわ。私が勤めたつて無駄ですから兄さんが御自身でお勤めなすつて下さい」と云つて、老婢に向つて、「御苦勞だけど、あんた一走り床屋へ行つて旦那さんにさう云つて下さいな」

「いや、呼びに行かなくつてもよろしい。唯私が來てさう云つとつたと新七に傳へて下さればそれでいゝんです」

幸吉がさう云つて、直ぐにも歸りさうに腰を浮かせたので、おかつは慌立つたが、手足ののろい老婢は成るべく使歩きを免れたい算段をしてゐるのか、幸吉の顔を見ながらぢつとしてゐた。

「早く行つて頂戴ね」と、おかつに急立てられて、老婢はやうやく土間へ下りたが、迂散くさい目で二人を見かへつた。それがおかつにはいやに癪つたかつた。

「昨日あれからよく考へて、先きあなたに宛てて郵便でお手紙を差上げました。私のやうなものでも一心籠めて書いたのですから、兄さんお一人でよく讀んで頂きたいんです。何處へでもが。兄さんの御返事次第で、私が甲府にゐるもゐないも、一生の事が決るんですわ」

おかつは老婢が聞の外へ出ると、さう云ひながら心の中では神や佛の加勢を祈つてゐた。白々しい顔して煙草なんか吸つてゐても、これ程に思つてゐる私の事を何とか思つてゐるに違ひないと、獨り秘めにして慌びれないで、

「櫻町のお父さんや御親類の方には どう思はれても構ひませんけれど、兄さんにだけは私のお腹の中を聞いて頂きたいんです。何處へでもお伴いたしますから、あなたの御都合のよろしい處へ私を連れて行つて、私が申上げたいことを十分に云はせて下さいましたと調子に艶をつけて云つた。

「昨日であなたの心持は私にはよく分つてるんです。世間でどんな噂を立ててゐても、私はあなたが新七を騙したといふことは信じはしません。どう決りがつからとも、あなたの顔を潰すやうなことは私が受合つてしないから、その點だけは安心しといて下さい」

「そんなことは私どちらでもいゝんですの。昨日お目に掛つた時とは私の量見も異つてゐますのです。それで、兄さんにお手紙を差上げてその御返事を頂いてから、この土地にゐるともゐないとも決心するつもりで、御返事を待つてゐるんですわ」

「どんな手紙かしら。私の一存で御返事の出來るやうなことなんですか」

幸吉が不安な好奇心に動かされてゐるのを、おかつはいゝことにして、

「私の申上げることは兄さんは十分に聞いて下さるでせうけれど、私にしては生命定めたんですから、こんな處でお話する譯にはまゐりませんわ。何時に何處へ來いと仰有れば私間違ひなく其處へまゐります。仰有つて下さい。私のためにいろ〳〵御心配を掛けたんですから、御迷惑でもこのお願ひも聞いて頂きたいんですの」

「しかし、ちよつと困つたなあ。……手紙で返事しちゃいけないですか」

「新七さんに番はれなければ死ぬるの何のといふやうな馬鹿なこと云つて、あなたを困らしやしないかと心配していらつしやるんですか。そんなことを考へてゐるほどなら、兄さんに御

相談なんぞいたしやしませんわ。無教育な女の私が皆さんに悪く云はれながら、默つてこの土地を立たうと決心してゐるほどなんですもの。兄さんも私が是非とも申上げたいと思つてることを聞くだけでも聞いて下さつても、お人柄に障ることはあるまいと思つてゐますのですが」

「……よろしい。ぢや、晩餐後鹿匠町の慶造の家へ行つとつて下さい。私が歸りにさう云つて置きますから」

「でも私お宅のお知合ひの家はいやで御座いますわ」

「だつて知らない人の家であなたに會ふのも困るからね」

「ぢや道を歩きながらお話してもよろしいんです。ハヲキリ時間を極めて下されば、私太田町の公園へ行つて、日朝様のお堂の前でお待ちして居りますわ」

おかつは日朝様のお堂の前で頬掛けをしてゐる風をして待つてゐようと空想しながら、幸吉を誘きつけると、幸吉は躊躇しながらもやうやく納得した。

「あゝ悦しい」おかつは思はずはしたない聲を洩らして、「ぢや、その時何もかもお話しますわ」と云つて、時間の打合せをした。幸吉の方でも此方を何とか思つてゐればこそこんな頼み事を承知したのだと竊り極めにして、夢心地で相手の顔を見てゐたが、此處へ新七に歸つて來られて、兄弟の間に面倒な話の取りかはされるのを豫想すると、ふといやな氣がしたので、

「兄さん、今夜私に會つて下さるのなら、今は新七さんにお會ひにならないで歸つて下さいませんか。昨夕お宅でどんなことがあつたのか存じませんが、新七さんはあれから不機嫌で爲様がありませんの。兄さんには何を言出すか分りませんから、今日はとのまゝ知らん顔で歸つて下さいまし。後で私がいゝやうに言つて置きますから」と、先き自分で引留めたことは忘れたやうに云つた。

幸吉も此處で弟に會ひたくはなかつたので、短氣を起さないで今日一日はゆつくり休息するやうにとの言傳を頼んで忙しげに出て行つた。

おかつは身延詣での御利益があつたのか知らんと、まことしやかに佛様を崇める氣になつたが、男を惹く力が自分に備つてゐるのを誇るやうな氣持もした。あの人は新七に會ふよりも自分に會ひたさに來たのぢやないか、それに違ひないとふと思當つて獨りで微笑まれた。

「お客様はどうなさいました」歸つて來るとさう云つて怪んだ老婢の問ひには答へないで、

「老婢さん、私今どんな人相をしてゐて？運が向いて來さうに見えて？」と、出抜けに訊ねた。

「いゝお話をお聞きなすつたの。姉さんは昔からいゝ運にばかりお會ひになつてるぢや御座いませんか」

「戯談お云ひなさい。今こんなにして暮らしてるのはちつともいゝことないぢやないの。だけど明日の日にも私に幸福が向いて來たら、あなたにもお裾分けして上げますよ。緣があつたらばこそ、見ず知らずのあなたとこんな土地で二月も三月も一緒に暮らすことになつたんだから、これから先も懇意に附合つて頂戴な」

おかつは老婢に對して頻りに別れを惜しやうな口を利いた。そして、「旦那様には秘密よ」と云つて、紙幣を包んでやつて、洗ひざらしの足袋をも添へてやつた。——もつとやり榮えのする物をやりたかつたのだが、持物の豐かでない彼女には、外によささうな物が見つからなかつた。——でも、老婢は意外な賜物として頂いて喜んだ。

やがて床屋から歸つて來た新七は、兄のゐないのに拍子抜けがしたが、結句それをいゝ事にした。老婢が眼をぱちぱちふのを快く許してやつて、「此方から出すとなりや、相當の事をしてやらなけりやならないんだが、婆さんの方から出て行くといふんなら了度いゝよ」と後で云つた。

「あなたも商人の子だから勘定高いのね」と、おかつは冷かして、「誰れとでも別れたいと御自分で思つた時には、先方からさう云つてくれた方が、あなたのために都合がいゝんでせう」と、冷かに云ふと、新七は顔を赧らめて、

「さういふ譯ぢやないよ……」と、自分が吝嗇でない言譯をしだした。

「でも、あなただつて私だつて、金持になつたら吝嗇になるかも知れないわね。遣ふためのお金だから、惜まないでドシ〳〵遣つたらよささうに思はれるけれど、持つて見ると、出惜みをするやうになるんでせうね」

おかつは努めて相手の話に相槌を打たうとしながら、日の暮までの待遠しさにいら〳〵して時々はトンチンカンな返事をした。

「口では手强いことを云つてゐても、まさかおれたちを見殺しにすることも出來ないんだね」と、新七は兄の訪問をも自分の都合のいゝやうに解いて一時の氣休めにして、昨夕のやうに揚句に配はしなかつた。かねての希望通りに財産の分配をされる時を空想して、さうなつた時には惜しげもなく遣つて見せるやうな口を利いて得意な色を見せたりした。

「あなたが財産家になつたら、おつるさんに帶の一筋も買つてお上げなさい。物を欲しがつてる人に物をやるのは張合ひがありますからね」おかつは冷かしてやるつもりで言つた。

「老婢でもゐなくなると淋しいわね」おかつはやゝもすると返事もしないで、空に物を思ひながら口を噤んでゐる言譯にさう云つたが、新七も何とたく淋しかつた。

「さう云へばさうかも知れないね。……今度下女を置くやうだつたら、もつと小綺麗なのを雇ふんだね」

その日は夕餐を早目に濟ました。そしておかつは食後風呂へ行くと云つて家を出掛けたが、出かけに何の氣なしに振返ると、新七は淋しさうに立上つて此方を見入つてゐた。その顔が暫らく彼女の目先にちらついて無氣味であつたが、湯屋の戸を開けるまでには目から消えてしまつた。

約束の時間のことを考へながら身體を洗つてゐたおかつは、餘洽があつても心が急がれたので、不羅の長湯に似ず、今夜は慌しく切上げて、火照つた顔を夜風にさらした。公園へ着くまでには、星が見えだして、細い月も冴えた空に照つた。身延の山の夜がふと彼女の胸に浮んだ。公園の片隅にある三階建の料理屋には賑かな人影が見えて三味線の音もしてゐたが、日朝様の方は薄暗くて燈火も點いてゐないで、たゞ蟲が鳴いてゐるばかりであつた。

おかつは周圍に人のゐないのを幸ひにして、薄暗い方へ道を探りながら、湯屋で貰つた釣錢を賽錢として投げるつもりで手に握つてゐた。が、お堂の前へ着かない前に、木蔭から出抜けに人影の現はれたのに驚かされた。黑い帽子を目深に被つて外套をも着てゐたので分らなかつたが、近寄つてからよく見ると、それは幸吉であつた。おかつは既に心ゆし合つてゐる仇人に會つたやうな氣持がして、打解けた微笑を洩らした。幸吉はわざと生真面目な態度を持して、

「私はあなたと約束したから來ることは來たんですが、こんな處に長くまごついてゐる譯にはい

行かないから、用事だけを早く云つて下さい」と云つて、あたりに目を注いだ。

「用事を云へと仰有られちや私困りますわ。……私の手紙はお讀み下さつたんでせうが」

「見ました。……」幸吉は池の方へ向つて歩きながら、「手紙には私の指圖によつてどうとも決めるといふやうなことが書いてあつたが、私も横柄づくの指圖は出來かねるんです。成るべくならあなたにも新七にも傷がつかんやうにして納りをつけたいと思つてるんだから」

「お互ひに何時までも煮え切らんことを云つてゐてもはじまりませんわね。私は兄さんの權柄づくのお指圖を受けたいんですの」

おかつは池のほとりのベンチを見つけると、自分から先きに腰を卸した。そして、手に提つてゐた袋は池の中へ抛込んだ。私を嫌つてゐたければこそ此處まで來たのであらうのにと探つたく思ひながら、

「でも、私に會ひによく此處まで來て下さつたわね。私の願ひが叶つたんですわ。昨日兄さんにお目に掛つた時から、私は今までのおかつぢやありませんの、生命を棄てても、義理も人情も棄てても、といふ氣になりましたの。みなたも今朝訪ねて來て下すつた時から、さういふ私の心を、ちやんと察していらつしやるんぢやありませんか」

「私にはあなたのいふ事がよく呑込めないが」と、幸吉は慌てながら、女の方から目を外して、

「新七を棄てるといふことなんですか」

「新七さんに關係したお話は、今夜は一口も仰有らないで下さいね。命に掛けて無焦れた私の思ひを察して會つて下さつたんだから、今夜といふ今夜死んでも滿足だと私思つてゐますの。私、今は甲府といふ詰らない土地にゐるやうな氣はいたしませんの。……私、兄さんのお指圖で地獄へでも監獄へでも行けと仰有れば喜んでまゐりますわ。どうにでもして下さい」

さう云つた女の熱い息に驚いたやうに幸吉はつとベンチから立上つた。

「全體あたは私をどうしようと云ふんだね。此方ぢや眞面目に聞いてゐるのに戯談を云つちやいけないね」

昂奮してさう云つた幸吉の脚の慄動は、おかつの神經にはよく響いた。

「戯談か戯談でたいか、兄さんのお腹の中ではよく分つていらつしやる癖に。私のやうな馬鹿な女にでも、これだけの事を云はせといて、恥を搔かせないやうにして下さい。兄さん、後生ですから」

「私は新七の兄だからね。そんなあなたの話を聞いとる譯には行かない」

「新七さんとは別れゝば赤の他人ですわ」

おかつが泣崩れるやうにさう云つた時には、幸吉は足早く池のほとりを離れてゐた。おかつは待つて呉れと聲を掛けようとしながら、聲を閉ぢた。そして、幸吉の後姿が闇の中に消えるまで、ぢつとして見送つてゐた。

「なんて卑怯な人だらう」

おかつは相手を憎むやうに心の中でかう叫んだ。折角心を籠めて待設けてゐたこの最初の密會が色も香もなく卒氣なく終つたのが口惜しかつたが、幸吉の心の底は見透かされるやうだつたので絶望の惱みは感じなかつた。眞直ぐに家へ急ぐ氣にはなれなかつたので、當てもなく彼方此方の町を歩いてから、おつるの家の前へ出ると、外から聲を掛けた。

「私の家へ帰びにいらつしやらない？　私、今一人で公園まで散歩して來たところなの」

「お一人で？」と、おつるは障子の間から顔を出して、「老婢さんは急にお暇を頂いたんですつてね。お困りぢや御座いませんの」

「老婢はお宅へお寄りしたんですか」

「いゝえ。私、先きお宅の前を通りがけに聲を掛けましたの。あなたのお帰りが遅いつて新七さんは心配していらつしやいました」

「さう？」

おかつは、何時かのやうに湯屋へ迎へに行つてゐやしないかと思つて、今さらものやうに煩さく感じた。うるさく待つてゐられるところへ歸つて行つて機嫌を取つたりするのがいやだつたので、無理におつるを誘出して、一緒に家へ連れて行つた。

夜の公園の寂しい有樣を語つたり、日朝樓へ顔を掛けたことを語つたりして、自分の後暗い所行を言紛らせて、おつるを相手に賑かに宵の内を過した。そして、今夜はどうしても新七と二人きりで夜を過すのが厭だつたので、いろいろに說勸めて、おつるを泊らせることにした。新七だけを奥の室へやつて、自分とおつるとは茶の間に寢床を並べることにした。若しも幸吉が今夜の事を彼れの妻や兩親や、あるひは新七にまでも明らさまに知らせたならばと、ふと氣遣はれて、眠りかけた目も醒まされたが、それは彼女に取つては瞬間の迷ひに過ぎなかつた。……弟によく似てゐる兄ではないか。不意打ちに吃驚したやうに一度は氣强くあゝ云つたものの、どうせ腹の中は分つてゐるのではないか。

おかつは幸吉がその妻と添寢しながら、今夜の事を想出しては眠りかねてゐる有樣を想像して、「私を跳ねつけて見たつて、今夜いゝ夢は見られやしないだらう」と、目の前に描出した男に向つて冷かすやうに云つたが、おかつ自身も夜つぴていゝ夢は見られなかつた。

八

翌日の午過ぎまで櫻町から何の音沙汰もなかつたので、あの事については幸吉の腳一つに歎められてゐることを察して、おかつは意を安んじた。そして、自分の不所存の詫言をして、氣持よくこの地を立ちたいから是非會つて呉れと書いてやつて、も一度幸吉を何處かへ引出さうかと企てゐた。

「今日はちよつとでもお店へ顔出ししていらつしやいな」と、時々思出したやうに新七に出勤を勸めてゐたが、新七は出勤どころか、自分一人だけでは一歩も外へ出まいとしてゐた。おかつの方で不平らしいことさへ一言も云はなくなつたのが、彼れには却つて氣拂りになつてゐた。早晩別れなければならぬやうな破目になりかゝつてゐるといふ豫感は頻りに彼れを脅かしてゐた。

「家でボンヤリしてゐても詰らないぢやないの。ちよつとでも出ていらつしやいよ。お父さんの氣に入るやうにしといた方が、あなたのためにも私のためにもいゝんですからね」と、おかつは嗾かしても新七が動かないのがもどかしくて、

「ぢや、どうでもなさい。末を楽みにしてどんな辛抱でもすると、あなたが不斷云つてゐたのは嘘だつたのね」と拗ねて見せたが、女に拗ねられるのに弱合ひを覺えた新七は、その言葉に縋つて、いろ〳〵の口說をはじめた。

何時もと同じやうな詰らない愚痴として、おかつの耳は慣まされた。男は何故こんな詰らない愚痴ばかり並べるのが面白いのか知らんと、無理にも悅しがらせの一言も云へなくなつて、欠伸の出かゝるのをやうやく嚙殺してゐたが、そこへ櫻町の小僧が新七を呼びに來たので、彼女も油斷してゐなれなくなつた。

「まだ加減が惡いからもう一日休むと云つといて呉れ」と、新七は小僧を歸して、「また兄貴でもやつて來るだらう」と皮肉のつもりで云つたが、

おかつは受答へをしないで奥へ入つて夜具を出して横になつた。伸所日には不貞腐れと見えるやうな態度で、新七の云ふ事する事の相手にならないで、強情に自分一人の思ひに耽つてゐた。著しも幸吉が癪にも卑怯にも裏切りでもしようなら、その時こそ負けてはゐない、此方から身を投出して宮部の一家に小つぴどく恥をかゝせてやる。孫でもない男に長い間自分の身を任せた果に、ケチをつけられて、スゴ〳〵この土地を去るやうでは甲斐性がなさ過ぎる。腹が癒えない。新七の寶意や情愛が何の足しにもなるものか。

家の中は靜かであつたが、ふと首を曲げてそつと目を開けて見ると、新七は茶の間で肱枕して足を曲げて假睡をしてゐた。寒さうで寢息も微かであつた。

おかつは喉が乾いてゐたので、新七の眠つてゐるのを幸ひに起上つて、鐵瓶の湯を呑んだが、湯は生温くて、長火鉢には火の氣もなかつた。

そこへ、櫻町からの使が再びやつて來たが、するとおかつは新七には知らせないで、自分で土間へ下りて、小僧を寒手の庭先へ連れて行つて本宅の樣子を訊ねた。

「今直ぐに一緒に連れて來いと大旦那が仰有つたんですから、此方の旦那にさう仰有つて下さい」と小僧は手强く云つた。

「ぢや、今起しますから待つていらつしやい。お宅の若旦那は昨夕もお店へ出ていらしつたの？」

「えゝ。昨夕はおそく歸つて來ました」

小僧が好奇心に驅られた目でおかつの顏を見ながら、氣輕な返事をするので、おかつは老人夫婦や若主人夫婦の氣風やこれ等の人々に對する店員の氣受などについて、

「主婦と若旦那とは仲がいゝかと訊ねると、小僧はニヤ〳〵笑つた。

「待つていらつしやい」と云つて、おかつはふと思出したやうに家へ入つて、小紙幣を鼻紙に包んで來て、使賃として小僧の手に握らせた。この小僧にしろ老婢にしろ、僅かな金を悦しさうにして受けるのを、おかつは見るにつけて、もつと金が自由になつたら、かういふ人たちの手に搦いてやつて、自分の思ふやうに皆なを使つて見たいと考へたりした。

「あなたに親みたいことがあるんだけど聞いて下すつて？」と、懷つこさうに云ふと、

「へゝえ」と、小僧は無邪氣な笑ひを浮べた。

「ぢや、待つてゐて下さいな」

おかつはふと思ひついて、家へ入ると急いで机に向つて、「昨夜は申譯のないことをいたしました。お許し下さいませ。もはや皆さまにお目にかゝるも恥かしく、いつそ自殺しようかと存じましたが、一言あなたさまにお詫びして、許すとのお言葉を頂きませんと、この世に思ひが殘つて死ぬにも死なれぬやうに思はれます。おしつけがましく、何とも申譯は御座いませんが、昨夜と同じ時刻に同じ處へお出で下されて、私に會つて下さいませ。一分間でもよろしいのです。私の一生の望みはこれ一つで御座いますから、人ひとりのあの世の迷ひを救つてやるとおぼしめして是非聞きとゞけて下さいませ」と書いた。

これだけ書くにも案外手間取つたので、心が焦立つたが、幸ひに新七の眠りは醒めなかつた。おかつは針の先で小指の先を突いて、自分の名前の下を血汐で染めた。

「これを祕密で若旦那に上げて下さいな。たゞ默つて渡せばいゝんですから、誰れにも見せないやうにね」と、手紙を小僧の内懷へしつかりと挾んで、「あなたのお名前は何と云ふの？」と訊ねた。

それから新七を搖り起すと、新七も不承々々に行く氣になつたが、おかつは不隨意の出勤の時とは違つた他所行の晴着を出してやつて、「今日は度胸を据ゑて確かりした口を利かなきゃ駄目ですよ」と力を添へた。

「僕は大丈夫だ。直きに歸つて來るから、お前は何處へも出ないで、火でも熾して待つといで」

新七は寢呆氣顏しながら快活にさう云つて、小僧と一緒に出掛けた。

いよ〳〵こんな家に退屈して安閑としてはゐられない時が迫つて來たのを感じて、新七が歸つて來るまでに覺悟を極めなければならないと、おかつは昂奮して頻りに心が急かれたが、しかし昨夕の所行についての悔悟の念はちつとも起らなかつた。むしろ、破滅なら破滅でよかつた。どうせ一度は免れることの出來ない新七との別れ際の爭ひをも表立つて爭ふのも結句いゝ氣持のやうであつた。獨角力は取れないために、煤つて煮切らないで、而自くもない愚圖ついた生活のお附合をしてゐるよりは、摑み合ひの喧嘩別れでもした方がよささうであつた。

幸吉は昨夕おそく歸つて來たと、使ひの小僧の云つた言葉も、彼女は自分の都合のいゝやうに解いて、「私の云つたことが氣になつて、夢中で方々を歩いてゐたのだらう」と親もしく思つてゐた。

立つてゐるおかつの頭の上にふと電氣が點いた。時計は止つてゐたが、日の暮れかゝつてゐるのに氣づくと、おかつは昨夕のやうに外へ出る身支度をした。どんな破目にならうとも世を憚つて腑甲斐なくコツソリ逃げだす氣は最早なくなつてゐたので、自分の持物を新七の留守の間に持出したりなどしなかつたが、自分の手許にある金は財布に渡へ込んで表の戸を引寄せただけで外へ出た。

おつるの家の外には遊びに行く處のない彼女は、また風呂へ入つて時を過した。新七の前へどういふ話が持出されてゐるかと自分が櫻町の炙の室に忍込んで立聞きでもしてゐるやうな氣で、石蟲を片手に、茫然とした樣子をして耳を澄ましたりしてゐたが、「入らつしやいまし」と、直ぐ側で聲を掛けられたのに驚いて目を据ゑると、櫻町の家族の孤は湯氣の中へ散つて、おつるの母親のダブ〳〵した身體が彼女の鼻先で場所を取つてゐた。

「すヤ、ちつとも存じませんで」

おかつは惡い人に見つかつたと、いゝ牽先でもないと思ひながら、一しきり愛想のいゝ受答へをして、母親よりも先へ湯から上つた。

公園の入口まで行くと、おかつも流石に危かしいやうな思しいやうな氣がして、ふと足が留つて遲みかねたが、でも、スゴ〳〵家の方へ後戻りして、新七の歸るのを待つてゐたつても、別にいゝことのあらう筈がなかつたので、ふとした氣おくれを振拂つて昨夕のところへ押進んだ。昨夕此方の魔力にかゝつて來た幸吉が今夜あの手紙に率かれて來ないつてことはないと、おかつは疑はなかつた。

昨夕詰りそこねた目朝樣のお堂の前へ行つて、蹲んで見上げたが、お堂の中には燈火一つ點いてゐないで、陰氣で薄汚さうであつた。身延の仁王門の側で見た時のやうに此處では佛樣も拗げには見えなかつた。おかつは賽錢を闇がりの中へ拋込みながら、參詣人のたいかういふお堂の中こそ、魔鬼に都合のいゝ處だと不意にさう思つたが、さうすると、湯汚い陰氣なお堂の中も懷かしく見られ出した。昨夕のやうに星が冴えて、弱々しい蟲の音も足下から聞えた。

昨夕と同じ時刻になつたことはあたりの樣子で知られた。おかつは階段の側に蹲んだり立つ

たりしてゐる間に、知らず〳〵佛樣に向つて熱心に祈願を籠める氣になつた。佛の御利益を聽いてゐた身延の若僧の妻も、彼女の祈願に力を添へるやうに目の前に浮上つた。待焦れてゐる自分の思ひが佛の助けによつて幸吉の心に通つて、此處へ寄つて來るやうにと口の中で祈つてゐた。珍らしくも兩手を合せて目を閉つて祝づいたりした。

側に何まれて本尊の御姿は見えなかつたが、暫らく閉つてゐた目を開いて見拵ゑると、お堂の正面には幸吉の姿が、まざ〳〵と現はれた。驚く間もなく直ぐに消え失せたが、おかつはそれを佛の示現のやうに感じて、改めて眞心から合掌禮拜した。燈火も人影も見えないお堂のあたりが、色つぽい不思議な霧場となつて彼女の心を蕩けさせた。風は動かないで冷々した空氣は彼女の湯上りの肌の溫みをさました。料理屋の方からは木の門を淸つて三味線の音が微かに聞えて來た。

おかつはいくたびか足音の近づくのを耳にしては欺かれてゐたが、やがて、人影が間違ひなく此方へ近づくのを見つけて夢から醒めたやうに目を見張つた。人影は黑々と立留つたり、あるひは横道へ外れたりするので、おかつは半信半疑で、正體を見つけるつもりで、自分かも歩出して、木蔭に身をかくしながら星の光で相手の擧形の分るところまで近寄つた。

正體を一目見たおかつは、足下に蛇を見つけたやうに驚いて思はず後退りした。ボンヤリしてゐる薄暗い人影も、血眼になつて彼女を搜してゐる新七の面相を彼女の心に呼起させた。

おかつは後退りして、違つた道を求めて急いで公園を出た。後を氣にしてたび〳〵振返りながら、暫らく當てもなく歩いてゐたが、心が次第に鎭まるにつれて、幸吉が手紙の祕密を弟に告げたのぢやないかと疑はれて、その卑怯な所行は悔々しく思はれた。

佛樣の御利益も何も滅茶々々になつたので、おかつはガッカリした。眞心を籠めたつもりの願の邪慳に壞されたことが一途に悲しくなつて、誰れとも爭はうとする力が拔けて、こんな土地に一日もゐたゝまらないやうな氣になつてしまつた。

「どうにでもなるがいゝ」とおかつは弱々しく自分の心に向つてさう云つた。そして、新七の歸つて來るのを待つて、彼れの心まかせに最後の處置をつけて、自分一人で今夜にでも東京へ立てるものなら立つことにしようと考へながら、フラ〳〵と家へ歸つた。表の戸は開けつ放しになつてゐた。

火の氣のない火鉢の前にぢつと坐つて待つてゐると、新七の思惑などはどちらでもよくなつて口惜し涙が何度なく流れた。

新七が歸つて來たのは暫らく立つてからであつたが、先き出て行つた時とは見違へるやうな蒼褪めた力のない顏をしてゐた。「お前は何處へ行つてゐた？」と、咎めるやうに云つたが、女の身に異常がなかつたのに安心してゐることは言葉にも顏付にも現はれた。

「私、此處にぢつとしてゐたつて詰りませんからね」と、おかつは當てつけるやうに云つて、相手の鞭の下りるのを待つてゐると、

「僕は何が何やら分らなくなつたよ。親爺や兄貴には相變らず眞面目で首を絞められるやうな意見をされた上に、今日は變な事を云はれたのだが、それは別の話として、家へ戻つて來ると、お前はゐないしね。一人でゐると、あれやこれやと考へられて氣持が惡くなつたから、昨夕お前が公園に行つたとおつるに話してたことを思ひ出して、僕も氣晴らしに公園の方へ散歩に出掛けたのだ」と、新七は努めて靜かに云つて、おかつの方へ目を注ぎながら口を噤んだが、おかつは沒表情のまゝで聽かりした受答へもしなかつた。

「さうすると公園で僕が誰れに會つたと思ふ？……僕は吃驚したよ。……」

「へえ……」ふとおかつの目はきらめいた。思はず訊返さうとしながら、言葉を嚙殺して、相手の問はず語りを待設けてゐた。

「日朝樣のお堂の側をまご〳〵してゐる男があつたから、何の氣なしに側へ寄つて見ると、それが兄貴だつたよ……少し前に氣持のよくない事を聞かされた後で、思ひも染めんところでまた出會つたんだから、僕は變でならなかつたが、兄貴の方でも吃驚しとつたよ。……お前は何とも思はないのかい」

「それが私にどういふ關係があつて？」

「僕には今日の事がみんな腑に落ちないんだよ。兄貴も氣が變してならないから散歩してゐるんだと云つて、僕を誘つて田圃の方を歩いて、歸りには汁粉を奢つて奥れたんだが、その間に僕の腑に落ちないやうなことをいろ〳〵話してゐたよ。この間中とほ人が違つたやうに、兄貴は親身にいろ〳〵な事を云つて奥れたが、途中で別れてから考へて直すと、親身な話でも以前のやうにそのまゝにや受取れなくなつた。二人きりの兄弟で、子供の時分から大した仲たがひをしたことなしに大きくなつて來たんだが、この頃はどういふものか一人しかない兄が本當の兄のやうに思へなくなつたんだよ。兄貴の事を考へるといやあな氣がするんだ。今日に限らず不斷でも僕の爲を思つていろんな事を云つて奥れてゐるんだらうが、……」

新七はつゞいて云はうとしたことを直ぐには云出しかねて、澁い顏して口を噤んだが、おかつも浮かりした口を利いて藪蛇になるのを恐れて默つてゐた。火の氣のない火鉢の側に差向ひで默つてゐる間の靜陽しさつたらなかつた。新七さへ公園へ行かなかつたら、望通りに幸吉に會はれたのだと思ふと、おかつは新七に對してどうかしなければ腹が癒えないやうに焦立つたが、我慢して目を伏せてゐると、

「兄貴はこの頃僕等に對して嫉妬心をもつてゐるんだと、やがて新七は言ひづらさうに云つた。

「さう？　可笑しいわね」

「そんなことは思つても不愉快だから思ひたかないんだけれど、どうもそれに違ひないよ。お前は感づいてやしないのか。二三度兄貴に會つたんだから、話の中に自然に思ひ當ることがありさうなもんだがなあ」

「分らないわ、あなたの仰有ることは。嫉妬と云つて何を嫉妬するんです」

「そんなことを立入つて口に出して云ふのはいやだ。考へるのもいやだ」ふと氣色ばんでさう云つた新七の聲は震へてゐた。そして、努めて心を鎭めながら、

「おれは今夜の中にでもこの土地を立ちたくなつたよ。お前もどうせ此處にゐる氣はなくなつてゐるんだらう。後の始末は後で考へりやいゝんだから、一刻も早く他所へ出て行かうぢやないか。此處にかうして居つちや先が恐ろしいやうに思はれてならないんだ」

「私と一緒にゐると恐ろしいことがあるんですからねえ」と、おかつは無感興な返事をして、「ぢや、私がゐなければいゝんでせう」平氣なく云つて、長いこと坐つてゐた火鉢の側から立上つたが、すると、新七は今まで壓へ〳〵してゐた疑惑の憤み怨憑の思ひを最早、自分の心一つに收めかねて、われ知らず立上つて、おかつの後に立つた。

「お前は僕に苦痛を與へるつもりなんだな。僕を苦めといていゝ氣になつてゐるんだな。……それなら僕は云ふぞ。お前は利益のためには僕

等の家庭を亂してもいゝと思つてるんだらう。僕と一緒になつて得になる見込みがないと分つたら、どんな手段でも取る氣になつてるんだらう。僕は傍で何といはれても、今までは御前を疑つてなんかゐなかつたのだが、先きからのお前の樣子で自分が馬鹿だつたことが分つて來たんだ」

新七の目に涙の溜つてゐるのをおかつはふと顧みたが、直ぐに顏を背けて、

「何とでも仰有いよ。私が得をするためにどんなことをしたんですかねえ」と空々しく云つた。そして、かねて別にして置いた風呂敷包を開けて、他所行の衣服を出して着替へようとしたが、まかり間違へば、打つたり蹴つたりぐらゐされるかも知れないと覺悟して待つてゐたが、それつきり荒い言葉も聞かれなくなつたのを却つて無氣味に感じて、そつと振返ると、新七は後に突立つたまゝ目を据ゑて此方を見入つてゐた。それが、怒つてゐるといふよりも、見惚れてゐるといふやうにおかつには思はれたので、これならいゝと安心して、手早く衣服を着替へて、

「私、これから母の處へ行つてよく相談して來ますからね。留めないで下さいね」と、輕く云つて部屋を出掛けた。夜行で東京へ行くかどうするか、まだ極つてゐなかつたのだが、とに角それを口實にするのが穩當だと思つたからであつた。

「此間から僕が誘つた時には、母親なんかに會ふのも詰らんやらに云つてたぢやないか。一人で東京へ行く氣になつたのか」と、新七は前を遮つて云つた。

「だつて、私は母にでも相談するより外は誰れも親身な話相手はないんですからね。私に邪魔をしないやうにして下さい」

「ぢや、どうでもしろ。……こんないやな思ひを殘して別れてもお前は何ともないんだね」

新七が怒夢に襲はれてゐるやうで、藻掻きながら手出しはしかねて、ぼんやりした目で女の動作を見てゐる間に、おかつは心忙しく出て行つた。後から追駈けられるのを氣にしながら、横町から横町へ外れて、暫らくして後を顧みて、新七らしい影の見えないのにやうやく安心した。

案外無事に済んでよかつた。こんなことなら、今まで詰らない我慢をしてゐるには及ばなかつたと、おかつは締めから解かれたやうで晴々した。それに、幸吉の心の中さへ疑ふ餘地のないやうに知れて來たのに、安手で東京へ歸れる筈はなかつたので、是は無意味に停車場の方へ向ひながらも、幸吉を呼出す工夫を凝らしてゐた。

老婢がこの土地へ來たはじめに足がかりにした義理の姪にあたるお時の家は、停車場の近くにあつた。おかつは鰹節や果物などを惜かばかり店先へ置いてあるその家の前に立つた。そして男兒を抱へて店先へ出てゐるお時に向つて、急用があつて塚本さんの家にゐる老婢にちよつと會ひたいんだが呼んで來て貰へまいかと頼んだ。「東京へ歸るかも知れないんですからね。さう云つて下さいね。老婢さんと約束してることがあるんだから」と言添へた。

お時はじろ〳〵おかつの樣子を見ながら、嬰兒を背負つて、奥にゐる誰れかに店番を頼んで出て行つた。おかつは明るい處を避けて片蔭に身を潜めて、旨く事の運ぶやうにと念じながら、表の人通りを見てゐた。停車場の近所であつても人影はまばらで、この頃明るい賑かな町にあこがれてゐた彼女は、何處へ行つてもこの市中には自分の心を牽くやうな處のないのを今更のやうに感じて、どんないゝことがあるつもりで、新七なんぞに誘はれてこんな土地へ來

たのだらうと、出京間際の自分の氣まぐれな考へを思出したりしてゐたが、ふと新七に遊びない若い男の影が目の前を横切つたのに驚かされた。脇目も觸らずに足早に歩いてゐた。

「何といふ煩さい人だらう。私を追つて停車場へ行つてるんだ。男のくせに見つともない」おかつは自分が直ぐに停車場へ行かなかつたことを喜んで、用心のために表から見えない處へ身を潜めた。

平生の新七の挙動から推して、彼れがあわてて狂人見たいに彼女の行方を探廻ることはおかつには明かに分つてゐたが、今はそれを苦に病むほどに恐ろしくはなかつた……もう私の身體をあんな男の自由にさせるこつちやない。あの人の親切くらゐは、私ほどの女が二月あまりもこんな土地で弄び物になつてゐたので、十分過ぎるほどに返禮してゐる。

自分ゆゑにこの田舍の町に一騒ぎの起ることも、むしろいゝ氣持で想像された。そして、大きな騒ぎか小さな騒ぎか、騒ぎの起るのを覺悟してゐると、氣に振りが出來て、人には無理無體と思はれさうな紛擾も難なく遂了されさうに思はれた。

「老婢さん、お氣の毒でしたわね」と、蹲んでゐた時、傍の處から立上ると、忙しく息を吐いてゐた老婢は、

「何時お立ちになるんですか。今夜のことぢや御座いますまいね」

「都合で今夜立つかも知れないわ。それについて、あなたにお願みしたいことがあるんですがね」

おかつは低い聲でさう云つた。そして、おお時に視線などを借りて急いで手紙を書いて老婢に渡しながら、幸吉を宮部家の代表者として會つて置く必要のあることを囁いて言含めをした。

「成るべくお店の人に目立たないやうに、あなたが若旦那に直かに會つて、これを渡して御返事を聞いて來て下さいね」

「はい」

老婢は力のない返事をした。下女として雇はれてゐた間でさへ使歩きは大儀だつたのに、わざ〳〵呼びつけられて可成り遠い處へ使にやられるのは不平であつたが、その大儀さうな風に氣づいたおかつは、

「成るべく急いで行つて頂戴な。そのかはりお體は十分にしますよ。東京へ行つたら幾度あなたを呼んで上げてよ。……塚本さんとこは仕事が樂ぢやないでせう」と、人情のありさうな口を利いた。

「お禮なぞどちらでもよう御座いますが、東京へは連れて行つて下さいましよ」と、老婢は俄かに悦しさうな顏をした。

「歩くのが大儀なら近所まで俥に乘つていらつしやいな」と、おかつは無理にいくらかの金を押付けた。そして、老婢が急ぎ足で行くのを見えなくなるまで見送つてゐたが、お時に勸められて、家の者の寝室になつてゐる二階へ上つて休んでゐることにした。すでに敷かれてゐる寝床をわざ〳〵片付けられたりするのを、おかつは氣の毒に思ひながら、新七と親しむ前に東京のある家のこんな二階である男と出會つてゐたことを遠い昔のことのやうに思出したりしてゐたが、一人になつて薄つぺらな座蒲團にキチンと坐つて待つてゐると、一刻々々が長く待遠しくて堪へられなかつた。

お時は溜茶を入れて來て、お愛想に世間話を持出したが、話が新七の事に觸れるので、おかつは返事をするのに苦んだ。老婢を雇入れたのもお時の世話だつたので、お時の亭主は以前宮部家へ出入りしたこともあつたのだから、おかつは油斷してはゐられなかつた。

「櫻町の大旦那はそりや堅いんですからね。新七さんにもお氣の毒で御座いますよ」と、お時は的の外れた同情をしておかつが一人で東京へ歸るやうな破目になつたのを憐むやうな口を利いた。

私もこんな見窄らしい田舍の主婦に氣の毒がられるやうになつたのか知らんと、おかつは擽ったい氣持がした。

餘程立つてから戻つて來た老婢は、帶子段を上るや否や、先方の返事を傳へる先きに、「姉さん今其處でお宅の旦那樣にお會ひしましたよ。私、何も申上げませんでしたけれど」と、さもおかつの心を呑込んでゐるやうにキョト〳〵してソッと云つた。

「さう？　何處へ行つたんでせう」おかつは空呆けてさう云つたが、驚きをかくす譯には行かなかつた。

「お前は何處へ行くとお訊きなすつたから、ちよつとお時の家へとお答へすると、歸りに寄つて行けと仰有いました」

「へえ。……」おかつは煩ささうに云つて、「それで櫻町の方はどうだつたの？」と、老婢ののろさを癇癪がつて訊ねると、

「若旦那樣はお居の火鉢の側で青い顏して俯向いていらつしやいました。お手紙を差上げると驚しなすつて、今夜はおそいから、話があるのなら明日にでもして呉れといふ御返事でした。そして大變慌てていらつしやいました」

「明日にしろつたつて、私はもうこの土地には家がたいぢやないかね」おかつは、老婢の所爲でもあるやうに思はず氣色ばんで突つかゝつたが、「あなたが出て行つた後で、私もあの家にはゐられないことに極めてるのよ」と後で詫を和げて云つた。

「こんな寒しい處でもおよろしければお泊んなさいましな。私がお時にさう申して置きますから。……姉さんもこのまゝ東京へ歸んなすつちや詰らないでせうから、櫻町のお家で道をつけて下さるまではこの家にでも泊つて待つていらつしやいましな。私もお役に立たなくつても卽用があれば何でもいたしますよ」と、老婢は意外にも快く引受けるやうに云つた。

「えゝ、有難う」おかつは老婢の心は見え透いてゐながら、何となく心許なくなつてゐる今の場合、さう云はれるのは有難かつた。「あなたにはまたお世話みしたいことがあるんですけど、今夜はもう歸つて下さいな。遲くなつたらお家へ惡いでせうから。私もお暇しませうよ」と、座を立ちかけると、

「姉さんは御病氣なさらないでこちらへお泊んなさい。その方がより御座いますよ。姉さんは今夜からお時の家にいらつしやるつて、櫻町の若旦那にさう申上げといたのですから。若旦那にお會ひになつて話がつくまで此處をお動きにならない方がよろしいと思ひますよ。……私はおつるさんにも塚本さんの方にも、どなたにもあなたが此方にいらつしやることを話しませんから。東京へお立ちになるまで、安心して何日でも此處にいらつしやいましよ」

「ぢや、老婢さんは若旦那にいろんなことをお話したのね」

「私の方から申上げた譯ぢや御座いませんけれど、若旦那がお店の角まで私に隨いていらしつていろんなことをお訊きなさいますから。……それは姉きんのことばかりお訊きになつたんぢや御座いませんです。實はおつるさんが櫻町の若旦那には大變な執心なんで御座いますから」

老婢は自分の餘計なお喋舌を言紛らすために、おつるのことまで持出したが、おかつはおつるなどに對して嫉妬を起すにはあまりに自ら恃むところがあつた。むしろ嘲笑ふやうな氣持で聽

いてゐた。

度胸を据ゑて此處に泊ることに極めて老婢を歸してから、おかつは階下でお時や初對面のお時の亭主を相手に、就眠前の暫らくの時間を過したが、幸吉夫婦の話が出ると、疎いやうな刺戟を感じた。幸吉の妻の平たい肥つた諸ら顏が、自分が何處かで見たことがあるやうに明かにおかつの腦に映つた。そして、その女に對して嫉妬の思ひのむら〳〵と起るのをどうすることも出來なかつた。……今夜は自分のところへ來る筈の幸吉が、自分の事を忘れてはゐないに極つてゐるのに、氣驕れして、そんな配偶のところに今まで通りに添寢するのを情無く思つてゐた。

卑怯な人、腑甲斐のない人と、おかつは男つてものみんなそんなのか知らんと、勝手に蔑視みながら、直ぐにも逢せられさうな望みの容易に達せられないことの癪惱しくて、幸吉に對する戀しさは、夜の明けるまでどうしてぢつとしてゐられるかと思はれるほどに燃立つた。

二階へ上つて蒲團に横はつて、枕に就いた時には、表の戸も鎖されて、外の足音にも夜の更けたことが知られた。汽車の音が耳近く聞えてから永第に遠くへ消えてしまふのが、おかつの心を何となく哀れつぽくさせて涙をさへ浮べさせた。無理にでもこの戀を遂げなければど荒れてゐる彼女の心もふと縋められて、かの豚ぶとりの老爺のことが思出された。無垢な自分を最初に弄んだ憎い爺さんだけれど、親切なことは親切なのだから、此方から泣きついて助けを乞うたら見殺しにはすりやすまい。「どうせ滿足に世が渡られる身ではないし」無理な色慾には諦めをつけて、お爺さんの處へ行つてあの後の身の上話でもして、思ふさま泣いて見ようかと、おかつはふと心靡くなつたりした。涙に濡れた枕紙に頰を押付けて寢苦しい思ひをしてゐる間に知らず〳〵眠入つたが、彼女の夢の中に忍込んで來たのは、幸吉でも第七でもなくつて、豚のやうに肥つた頭の禿げた老爺であつた。お爺さんはニコ〳〵した顏してやつて來た。

老爺に枕を投げると同時に、おかつは目を醒ましたが、夢の中でいやらしかつた爺さんの擧動は、醒めてからも目の前にちらついて、おかつは寒衣を脱いで振拂きたいやうな氣持がした。

餘夜中過ぎになると、俄かに冬が來たやうに、寒い空氣が薄い夜具の隙間から彼女の肌を冷やつの、「九」を見て、

九

一番の汽車に乘る客が外を通つてゐる頃であつた。戸を叩く音と呼起す聲に、明け方の眠りを醒まされたおかつは、自分に關係したことで、誰れかが訪ねて來たのに違ひないと思はれたので、腦を緊かせながら聞耳を立ててゐた。雨戸の隙間は薄明るくなつてゐた。お時が寢乘けた寢事をして、愚圖々々してゐる間に、手早く衣服を着けながら、戸外の音聲に耳を澄ませてゐたが、やがてお時と話しだした客の聲には見覚がつかなかつた。自分に會ひに來たのぢやないと思直すと寒いのに早くから起きてゐたつて仕方がないので、再び寢床へ入りかけたが、すると、話聲が切れて、お時が梯子段を上つて來たので、おかつは先きよりも一層はげしく胸騒ぎをさせた。

宮部さんの御親戚の方が、あなたにお目に掛りたいつて入らしつたんですが、お通し申してもよろしいでせうか」と、お時は側へ寄つて小聲で云つた。

「御親戚の方ですつて？」おかつは氣抜けがしたやうにさう云つて、ちよつと間を置いて、「私、宮部さんの御親戚の方にはお會ひしたくないん

ですから、お斷りして下さいな」と、キッパリ言放つた。

「若且那の叔父さんに當る方なんでせう。ちよつとでもお會ひになつてお話をお極めになつたらいかゞでせう」

「いゝえ、私その方にはお會ひしたくないんですの。お氣の毒ですけど、斷つて下さいな」

「さうで御座いますか」

お時は不機嫌な顏をして下りて行つた。おかつは張合がなかつた。寢衣に着替へて寢床へ入つて、目が差すまで、も一眠入りするつもりになつてゐたが、階下では朝の支度やら子供の泣聲やらで騷々しくなつた。鐵道馬車の音も聞えだした。ふと壁一重の隣の二階から、拍子木の音に和して南無妙法蓮華經の聲がかしましく聞えだしたので、おかつは自棄見たいな朝寢が出來なくなつて、夜具を片付けて階下へ下りて顏を洗つた。化粧道具さへ持つてゐないのが不自由であつたが、自分の荷物を取りに行く譯には行かないので、お時の鏡を借りて頭髮だけ梳きつけてゐた。眠不足のためか、いやな夢に惱まされたためか、疲勞が目顏にあらはれてゐるのが、おかつ自身にもよく分つた。

「主婦さん、老輝さんの縁で此方の御厄介になつたのですけど、御迷惑なら直ぐにお暇しますよ」と、殺から此方を見てゐるお時に云つた。昨夕は一晩泊るのさへ多少氣がひけてゐたのであつたが、最早さういふ些細なことに神經を病むには及ばないと度胸を据ゑて、自分の力一ぱい幸吉の家に取付いて離れない覺悟を極めて、どうかなるまで此處に寢起をしてゐようとした。

「主婦さん、私、櫻町の若且那の幸吉さんにお目に掛つて、私の顏の立つやうにして頂いて綺麗にお別れすることに約束をしてあるんですからね。幸吉さんの外の方がいらしつたら、お斷りして下さいね。若しも新七さんが訪ねて來ても私は此方にゐないつて云つて下さいな。お世話になり次手に、それだけは堅くお賴みしますわ」

「承知いたしました」お時は相手の手强い言葉に呆れて、押して忠言めいた口は利きかねた。

「私のやうな者をかくまつて置いては宮部さんのお家に濟まないと思ひなさるのなら、さう云つて下されば何時でもお暇しますよ」

「姉さんをお泊めしたつて、宮部さんの方で私どもにお小言を仰有る氣遣ひは御座いませんよ」

お時が車下してさう云ふので、おかつは思上つて、自分が彼等の目上の者で、些少の金でもやつて彼等を自由に指圖するのが當然なやうに思つたりした。

「新七さんが來たら私は他所へ行つちまつたと云つて下さいな。大事なお顏ひなのよ」と、おかつは念を押して、お時が一も二もなく命令に從ふのを見て、ひとりでに自分の部屋と決つた二階へ上つて身を潜めた。そして、幸吉に宛てて同じやうな呼出しの手紙を書いた。「……明日といふ日は待遠しくてなりません。今日の中に私の身もあなたのお身の上もどうなるか分りませんのですから、一ときも早くお目にかゝれるやうにお願ひいたします。人間はいつ何時じゆ命が切れるか分らないですもの。私は心がせかれてなりません」と、今の今心底から思はれて仕方がないことを書添へたが以前の手紙とは違つて、今度のは上べも底もない露骨な色文みたいになつてしまつた。

おかつは躊躇しないで、お時に賴んでその手紙をポストへ入れさせた。一日を待暮らすのは容易ならぬ辛抱の入る譯だつたが、おかつの昂奮した心は、退屈する暇のないやうに忙しかつた。新七の屆託してゐる顏や、血眼になつて捜廻つてゐる顏なども、彼女の目の前に渦を卷いた。

おつるが訪ねて來たのを、知らないと云つて歸したと、お時は二階へ知らせに來て、「何だか言ひにくう御座んしたけれど」と、諂を吐くことの苦しさを洩らした。

「おつるさんにはなほ更會ひたくなかつたんですの。よく斷つて呉れましたわね」

おかつはお時の手柄を褒めそやすやうにさう云つて、おつるの言つた事を訊糺した。新七が外に手頃な相談相手がないから、據なくおつる親子に縋つたことが、おかつにはよく察せられた。

時々窓を開けて富士を眺めたり汽車の煙を眺めたりしたが、午過ぎまで一歩も外へは踏出さないでゐたおかつは、お時一人が内職のやうにやつてゐる商賣のあまりに暇過ぎるのに氣づいて自分が店へ出て看板になつてやらうか、さうしたらもつと繁昌するだらうと醉興な空想を起してお時にその考へを洩らして、この商ひのことを訊ねた。

「品物がよく賣れゝば商賣は面白いものらしいわれ。私もこの土地にゐて何か商賣をはじめようかしら」と云つたりして價値のあるものの見窄らしい商品棚を覗き見などしてゐたが、鐵道馬車の煽り立てた埃風に包まれて店頭に立つた客は、ふと見ると、勢のない顏した幸吉であつた。

「オヤ入らつしやいまし」と、お時は悅しさうに云つて迎へて、「汚いですけれどもお二階へお上んなすつて」と、おかつに代つて案内した。

お時が無沙汰のお詫などしてゐる間に、おかつは幸吉の落着かない素振や落着かない返事に注意してゐたが、お時に行かれた後で何と云つて口を切つていゝかと氣遣ひされて、一人でゐた間の決心も鈍つて、明るい光が眩しかつた。

「なにか御用で御座んしたらお呼びなすつて下さいまし」と、お時が座を外した後で、底深い沈默が二人の間に澱んでゐたが、

「私は緩くりしちやゐられないんだから、あなたの望みだけ早く云つて貰ひませう。あなたが此處にゐなさることは新七にも秘密にしてあるんだが、私に宛ててあゝいふ手紙をたび〳〵寄越されちや非常に迷惑するんです。親戚の者を代りに來させても會つて貰へないから、私が責任を持つて來にくい所を無理に此方に來たんだから、そのつもりで話をして下さい」

「なぜそんなことを仰有るの？……私の心の中は分つていらつしやるくせに」おかつは相手の角張つた造り文句がいやになつて、笑ひをこぼしながら馴々しく云つて、「此間の晩公園でお目に掛つた時には、大層お怒りなすつたけれど、私はあなたのお心の中はよく分つてゐますから、そんなに失望はいたしませんでしたの。本當に失望したなら、今まで生きてゐてこんな土地にウロ〳〵してはゐませんわ。……でも、よく訪ねて來て下すつたわね。頗さく申上げた甲斐があつたと思つて悅しくつてなりませんの。……早く望みを云へと仰有つたつて、かうしてお目に掛ると口へ出してはなんにも云へないんですから勘忍して下さいましな。お互ひに心の中が分つてゐればそれでよろしいぢやありませんか」

おかつの媚びを含んだ眼差は幸吉を戰かした。自分の破滅を恐れたやうに思はず後退りして、「あなたのやうな人こそ毒婦と云ふんだらう」と、聲を震はせて云つた。顏にも血の氣を失つた。「こんなことは自分一人で穩便に始末しようと思つて、誰にも云はないで、昨夕は一晩中考へたくらゐなんだが、あなたの方で無理强情に私の家庭を亂さうと思つてるんですか、

私は家の者や世間に對しても迷惑するから、お時を呼んで立會つて貰つて、自分の潔白を明して置かう」と云つて座を立ちかけた。

おかつは引留めもしないで、夢でも見てゐるやうな目をしてぢつと見上げてゐた。

「お時さんなんかを證人にして、それであなたの潔白が通つて、この先何時までも安心してゐられるんでせうか」と、やがて、彼女でない誰れかが彼女の口を借りて云つてゐるやうな辭で、おかつは氣拔けのした調子で云つた。

立ちかけながら暫らく立上りもしないでゐた幸吉は、「私はもうこれきりあなたに會はないからさう思つてゐて下さい。あなたは無論新七には會ひなさるんだらうが、あなたのためにもなるやうに、相當な人を入れて話をつけることは承知しといて下さい」と云つたが、その言葉には力がなかつた。手廚へがないので梯子段の方へ向ひながら躊躇してゐたが、おかつは夢から覺めたやうな目を向けて、

「それで事が濟んだと思つていらつしやるの？これからも、お家の中が穩かで目が逃れると思つてらつしやるの？　男の人は卑怯にしてれば世の中が仕合せになるんですかねえ。あなたは何が怖くてビク〳〵していらつしやるのか知れないけど、私に會はないと仰有るのなら、私これきりお目に掛りやしません」

「それであなたはこれからどうするんです？此處にゐるんですか」

「私はこれから新七さんの家へ歸りますわ。私の荷物も置いてあるんですもの。新七さんは私が歸つて行きさへすれば、昨夕からの心配は忘れて生返つたやうに喜ぶに極つてゐますわ」

おかつは暫らくしてゐる幸吉を侮蔑した目で見ながら、「梯子段から下を覗いて、「主婦さん、若旦那はお歸りになるんですつて」と叫んだ。

幸吉は逃げるやうに出て行つた。

おかつは暗くなつてから、二度と足踏みすまいと思つてゐた新七の假宅へ歸ることにしてゐたが、幸吉が行つた後間もなく、老婢が麥を見せて、せか〳〵息を吐きながらその後の新七の事を慌しく知らせた。

「私と姉さんと相談づくでお家を出たやうに、若旦那は思つていらつしやるんです。だから私が姉さんの行先を知つてゐるに違ひないつて、私をお責めなさるんですよ。云はなければ私をどんな酷い目にでも會はせて白狀させると思つていらつしやるんだから怖くつてなりません」

「ぢや、正面にさう云つたらいゝぢやないの」と、おかつは事もなげに云つて、「私これから家へ歸るところなんですからね。心配しなくつてもいゝの」

老婢は呆氣に取られてゐた。やがて、新七の氣の立つてゐる所へ不用意に歸つて行く危險を說いたりしたが、「大丈夫ですよ」と云つて、おかつは取上げなかつた。見たところは雪と墨とほどに美醜の差別はあつても、氣心は同じい幸吉と新七との顏を彼女は目の先に浮べて見詰めてゐた。

人さまざま

秋の末から春先きまで、熊望のいゝ貸別莊に住んでゐた高山夫婦は、借受けの期限の切れたのを機會に、一先づ大磯へ引上げることにした。

立際には、家主の狡猾と因業とをまざ〳〵見せつけられたので、大磯といふ土地全體について不快な感じを起させられた。天氣も惡いし、荷物の整理にも豫想以外に手間取るので、一日延ばして、翌朝發くり出立したいと考へ直した。私たちは、何の氣なしに家主に向つてさう云つて許しを乞うたのであつたが、家主は、「それは困ります」と頭から拒絕した。他の借手に契約をしてゐるので、その人が明日にも東京から來るかも知れないから、それまでに家の掃除をしたり、破損したところを修繕したりして體かなければならないと云ふのであつた。明日の一番で立つと云つても愚圖々々云つて聞入れなかつた。

「一日でも期限が延びれば半月分家賃を取るのが土地のきまりだと、此間家主が云つてゐました」と、まつ子が云つた。

さうなると、彼等は一刻もその家にゐるのがいやになつたので、とに角大急ぎで荷づくりをすることにして、偶然來合せた知合ひの土地の女にも手助けを頼んだ。運送屋の人夫をも雇つて來て、やうやく日暮前に停車場へ荷物を送り出した。後片付は手傳ひの女に頼んで、彼等は心當てにしてゐる發車時間に遲れぬやうに急いで出掛けてゐると、家主は手傳ひの女を通じて、まつ子に憂の修繕費を要求した。炉燵の火で燒焦がしたところがあるので、辨償しなければなるまいと、まつ子も思つて居たのであつたが、數日前家主に知らせた時には、「まあ仕方がありません」と、家主自身寛大な口を利いてゐたのであつた。

忙しい間際に爭つてはゐられないので、高山は要求された一枚分の疊代を拂つたが、あまりに慌々しかつたので、「そのかはり急替へをしたら、今の疊は手傳ひの人にやつて下さい。それから、井戸の釣瓶だの物干竿だの、私が買つた物は一切あの人にやることにしときますから」と云つて手傳ひの女にも後で持つて行くやうに云つて置いて停車場へ急いだ。

食卓とか、洗ひ物の臺とか、その他大工に誂んでわざ〳〵拵へさせた萬盛つた物は、打遣つて置くのも惜しいし、預け場所を捜す暇もなかつたので、方法のつくまで假りに運送屋に置いて行くことにした。

汽車に乘ると、夫婦は一安心した。

「大磯の宿へ泊つて、明日の朝ゆつくり立つてもいゝんだが、大磯といふ土地はつく〳〵いやになつたから、一刻も早く離れた方が氣持がいい。二度とこんな土地へは來ないよ」

高山はさう云つて、細雨のしめやかに降つてゐる窓外を眺めて、滯在中後れの散歩の日あてになつてゐた小千疊や海岸の松林に別れを告げた。まつ子は身心の疲勞でガックリして殆んど口を利かなかつた。根を据ゑて落着ける家がなくなつて、あちらこちらと轉々としてゐる浮草のやうな生活は、彼女には詰らなく思はれた。

二人とも、朝牛乳を飲んだばかりで、午餐も食べてゐないので、汽車に乘ると頻りに疲勞を感じだして大船へ來るのを待ちかねて鰯飯を買つたが、さて箸を採ると、まつ子の方はむかつい

て十分に腹を滿たすことが出來なかつた。

彼等はつまりは、東京へ出て空家捜しをしなければならぬと思つてゐたが、今はとに角まつ子の故郷であるK市へ行つて、彼女の父母の家に寄寓することにしてゐた。彼等は近年其家を旅から旅を渡る際の中繼ぎのやうにしてゐて、雜多な書籍や衣類や世帶道具などを預けてゐるので、季節の移りかはりには、衣類の預けかへをして來なければならなかつた。で、まつ子は云ふまでもなく、高山も一年に一度くらゐは其家へ立寄つて、數日あるひは數週を過すのを例としてゐた。其家を根城として、近傍の山河渓谷を見て歩いたり、あるひは溫泉に宿したりすることもあつたが、海岸に生れながらへあるひはそのためにか、海の眺めよりも山の眺めを好んでゐる彼れは、甲州の山地に親むたびに清新な刺戟を受けて、愉い眠りから醒めるやうな氣持がした。輕井澤の高原に住んでゐた間に屢々そんな氣持がした。富士の晩秋の裾野を旅して、精進湖畔の見窄らしい宿に泊つて、雨中の半日、宿の窓から紅葉の山を見詰めてゐた時、寂寞の靈氣が周圍の山の底にも、彼自身の心の底にも動いて、廓寥焦躁の煩惱も一時擦消されるやうな氣持がした。鱒澤から富士川を下つて身延の靈域に辿り着いて、獨り御草庵の遺跡に立つて、蒼鬱たる樹間から、暮れかゝる空を仰いだ時には、宗教心に乏しい、ことに日蓮宗の如きものを好まない彼れでも、宇宙に動いてゐる尊いものの前に跪きたいやうな氣持がした。

（常に住の住家である里へ下ると、直ぐに昏亂して、一日の安き心もなく、心に何の光をも見られないのが不斷の彼れの習ひではあるが）

彼れは、半年足らずの固定した大磯の住居に飽果てて、春の光の差す頃となつた山の色を見たくなつて、荷物の整理をかねて、K市へ向ふのを喜んでゐたのであつたが、今度はその外の俗用をも有つてゐた。それは、數年來行惱んでゐたまつ子の弟の緣談が纏つて、三月中には結婚式を擧げるといふ知らせに接してゐたので、彼等夫婦もその席に列しようと志してゐたのであつた。高山は數年前止むを得ない譯で、妹の結婚のために柄にない世間的の斡旋をして、堅めの盃の席へも披露の席へも、親代りに出て行つたことがあつたが、その他には、幾人かの弟の結婚の時にも、親戚の結婚の時にも、孤を出したことは一度もなかつた。葬式にはたび〳〵列席しても婚式の式場へ行くことを彼れは好まなかつた。しかし、まつ子の弟の良三には荷物の處分などについてたび〳〵面倒を掛けてゐるのであるし、世間並の習慣を何よりも大事に思つてゐる良三の父親は、嗣子の婚禮には、親戚一同の列席を切望してゐるらしくもあつたので、高山の豫定の日程には、良三結婚式出席と、大きく書記されてゐたのであつた。まつ子は先日東京へ日歸りで行つて來た時に、三越へ寄つて祝ひの品を買調へて來た。話の種の少い夫婦の間には、今度の緣談の決るまでのイキサツや、結婚後の青木家の變化の豫想などが屢々話題に上つてゐた。

「今度こそあなたともお別れ見たいなものだ。これから後は、今までのやうな詰らない戯談を書いた手紙の遣取りは出來なくなります」と、まつ子は感傷的な氣持で書いた葉書を良三に宛てて送つたりした。

「氣樂にN市へ遊びに行けるのも、これが最後見たいなものだぜ。今度も式の前は何日泊つてゐてもいゝが、式が濟んだら直ぐにお暇にしなければならないよ」と、高山が云ふと、

「さうですとも。私もこれからは今までのやうに浮かり親の家へ行けなくなりますよ。良三の家になつてしまふのですから」と、まつ子も云つた。

「おれたちの荷物だつて、何時までもこの家へ厄介を掛けとく譯には行くまい。第一書物なんかおれにはどうでもいゝんだからな。今度の機會にどうかして始末をつけたいものだ」

「諸道具が邪魔なら、箪笥なんかはおれの方で買つてもいゝつて、お父さんは云つてゐるのだけれど、それもちよつと變ね」

「親爺さんがお前のために自分で選擇して買つて呉れた物を、自分の方へ買取るといふのも變だが、おれが邪魔物あつかひして、いくらにでも賣飛ばすといふから、勿體ないと思つてゐるのだらう」

「世帶道具が邪魔だなんて、私の家にはいくらの道具があるものぢやない。大抵の家にはもつといろんな物がありますよ。あなたが女の身になつて、家の用を足してゐたら、道具のない不自由さが分るのだけど」

「おれは昔自炊してたことがあつたが箸と茶碗と土鍋と七輪とくらゐで簡單なものだつた。今でもどこかの山へ入つて自炊して見たいと思ふこともあるよ。こゝらが親に似てゐるのであらうが、おれは煎餅蒲團にくるまつて寢てゐようとそんなことは平氣だ。先日もAさんが訪ねた時に、行李の上に鞄を載せて机代りにしてゐるのを見て、どうも簡單なものですなあと、驚いてゐたつけが、おれには紫檀の机なんかは無用な長物だよ」

「そんなことは自慢になりやしないわ。生活は豐富に氣持よくしようと心掛けなければ働く張合ひがないぢやありませんか。文明の利器を利用して、無駄な勞力や費用をはぶいて、氣持よく暮らすのが賢い人のすることなのよ」

「それはさうだが、おれは、一度生れかはつて、はじめからやり直さなければ生活を愉快にすることは出來ない。K市の親爺さんなぞには、古い因習だか何だかが、佛か鬼かのやうに頑の中に取付いてゐるのだが、おれにはそれと違つた佛か魂かが、頭の底に巣をくんでるから、もうどうしようもないよ」

「形容はどんなにもつけられるでせうけれど、生きてゐる間は今からでも生甲斐のあるやうに暮らさなければ損ですよ。……私だつて、もつと、いろんなことを知りたい。あなただつてまだ老い朽ちた歳ぢやなし、もつと世の中のいろんなことを知らなきゃ損ぢやありませんか。……私のお父さんはあんな風に、良三たんかのことばかり考へて、二十五にもなつた男が、ちよつと散歩に出るとか、活動寫眞を見に行くとかするのさへ、心配して、容易に許さないくらゐなのですけど、それが子供のための幸福だか何だか分りやしません。私だつて、女學校を卒業した時に、學校の成績もまあ〳〵惡い方ぢやなかつたから、先生にも勧められるし、自分でももつと學問したいつていふ氣になつて、女子高等師範へ――その時は、女子大學とか英學塾とかいふやうな學校はお友達の中で評判になつてゐなかつたの――入りたいと思つてお母さんに頼んで、お父さんに云つて貰つたことがあつたの。さうすると、お父さんは私を呼寄せて、何といふ不量見だと血相變へて怒つたんです。親に逆ふつて氣は微塵も持つてゐなかつた時分だから、泣寝入に諦めて、裁縫でも習ふ氣になつたのだけれど、今になつて考へると、女だつて出來ることなら、學問をした方がよかつたの。今更後悔したつてはじまらないけれど、女も獨立して生活して行けるだけの藝は、身にそなへてゐなければ、安心して世が渡れないとしみ〳〵思はれることがありますよ。親や兄弟の人情を手頼りにするのは心許ないことだと私も思ふやうになつたんです。良三だつてお嫁さんが出來たり、子供が出來たりすると、次第に人間が變つて來るでせうし、それがまた

本當なんでせう」

「おれだって何時死ぬるか分らないしね」と、高山は云つた。

子供の無い上に世間の狭い彼等の心や目や耳は、互ひに探偵のやうに相手の上に注がれてゐた。

子供の無い上に世間の狭い彼等は、ことにまつ子は、日常心を紛らすすべがなかつた。そして、睡眠時以外には、生きてゐる人間として絶えず動いてゐる彼女の心は、自然と夫の一言一行の上に注がれた。日に月にさらしてゐるうちに、夫の人となりについて、彼女自身の解釈が、自らつくやうになつてゐた。世間の人は何と云つてゐようとも、當人が自分をどう吹聴してゐようとも、夫は手垢りにならない人、詰らない人、お坦つちやんで利己的な人、何かしら秘密を持つてゐる人、こんな人、あんな人と、彼女の心では思はれるやうになつてゐた。夫が以前云つてゐたことと、この頃云つたことと矛盾してゐるのに氣がついたり、夫が知つたか振りで嘘言したこと――たとへば、××なんかは將來見込みのない人間だと、夫がひとり極めにしてゐたことが外れて、その××なんかが盛んな人氣を取るやうになるのを見たりすると、夫の言葉にも信用が置けなかつた。夫がをり〳〵常識外れの不思議な事をするのも、彼女に取つては面白く感ぜられなかつた。

東神奈川から八王子行の汽車に乗替へると、その薄暗い粗末な列車にはスチームが通つてゐないので寒かつた。二等車には、彼等の外に色の白い官吏風の男と、古いトンビを着た、髯は荒いが、眉の薄い、青肥りのした田舎くさい老人とが入つて來た。汽車が動きだすと、老人は誰れに云ふともなく、此間中から寒氣がぶり返したことを歎息したり、不景氣がひどいのに旅費の減じないことを訴へたりしてゐたが、やがて若い男に向つて、

「あなたはどちらまでお出でになります」と、丁寧くしく訊ねた。

「八王子までです」と、若い男は簡單に答へた。

「八王子も生絲がいけなくなつたので、町を通つても、一二年前のやうな活氣は見えなくなりましたね」

「さうでせう」

「失礼ですがあなたは、横濱の會社へでもお勤めになつていらつしやるんですか」

老人があまりに馴々しいので、若い男は顔を曇らせて、「まあさうです」と答へたが、老人は相手の無愛想なんぞは氣にも留めない風で、

「私は倅が今度濱の××會社へ奉職することになりましたので、今日樣子を見てまゐりました。あたたも御存じでせうが、櫻木町の停留所の近くに新築されて、なか〳〵立派な會社になりました。社長さんにもちよつとお目に掛りました。百萬といふ資本を運轉する人はちがつたものだ。自然と紙幣が具はつてゐますな。倅は昨年××大學を卒業してから暫らく東京の結護士の家に勤めてゐましたが、法律いぢりはいやだつて當人が申しますから、昨年限りで暇を貰つて今度のところへ出ることにいたしました」と、話は續けたが、若い男はもう返事をもしなくなつた。老人は煙草を出して火を點けた。そして、相手恐しさに高山の方へ目を向けて、一二言問ひを掛けた。

高山は、煙草を持つた老人の左の指が曲つて自由な働きを缺いてゐるのに目をつけて、その痕付をも思合せて、癩病患者ぢやないかしらと疑ひだした。車課だけの愛答へをしながらよく見てゐると、薄明りに映つてゐるその皮膚の色は無氣味であつた。

「夜汽車ぢやお困りでせう。それに八王子からは込合つて居りますで、緩くりお休みなさる譯にやまゐりますまい」

「さうですとも」

高山は身延の深敬病院で見た患者の顔や、客掛で見た草津行の患者の馬上の姿を、疲れた頭の中に思起した。紅葉のあざやかな山に圍まれた病院の廊下では、むくれた顔のくづれかけたやうな患者が靴しく靴を立てて、互ひに笑ひ戯れてゐた。女の唄ふ聲も洩れてゐた。

「汽車には乘せて貰へないのです」と、人の話すのを聞いて、羅ひ馬に乘つてゐる醜い患者を見た時に、高山はその患者に同情するよりも先づ、どんな目に會つても生きられるだけ生きて行かねばならない人間のいたましさを感じた。呪ひたいやうな氣がした。さうして、患者同士で笑ひ戯れてゐる病院の廊下こそ、人生の眞の姿であるやうに、彼れは感じてゐるのであつた。さま〳〵な人間の平素の饒舌も、病院の廊下の氣晴らしの戯れと同じやうに彼れには思はれてゐた。あれもこれもこの世の中の出來事であるのに關はらず、劇場の舞臺の席よりも、あるひは花道花壇の相並んだ美しい姿よりも、痩馬に跨つた草津行の患者の貌容に、一層多くの人生の眞實が現はれてゐるやうに、どうかすると、彼れは思つてゐた。

「八王子から先きは景色がようがすが、この邊は淋間でも眺めの面白い處は御座いません」老人は聞き手の無愛想に頓着しないで、何かしら口を利いてゐたが、町田といふ處で、皆なに挨拶して汽車を下りた。

高山は向う側に腰を掛けてゐた老人から受ける不快な刺戟から、免れたのに一安心して、大きな合點袋に寄掛つて目を閉ぢた。

八王子で乘替を待つ間は、待合室のストーブにあたつて、いろ〳〵な男女のいろ〳〵な話に耳を傾けてゐたが、久振りで異つた社會の話を聞くのは、彼れにも興味があつた。

「僕は此間東京へ行つた帰りに、上野の近所の洋食屋で、ひとりでウヰスキーを一本飲んで、新宿までの切符を買つて電車に乘つたら、どうにも溜らなくなつて眠込んぢやつて、上野から東京驛の間を三度行つたり來たりしたよ。事掌に起されて目を開けると、今度こそ失敗らないやうにと、一心になるのだが、どうにも頭が云ふことを聞かない。直ぐに夢になつちまふんでね。しまひには事掌に大小言を喰つちやつた」

赭肥りのした中老の田舎紳士が、さう云つて大笑ひをすると、あたりの人もどつと笑つた。

「寒いと思つたら、雪になつた」と、ある男が云つたので、皆なの目がガラス窓の外へ注がれた。

高山は外へ出て闇の中に降積る雪を見て來て、「一日延さなくつて却つてよかつたよ」と、まつ子に向つて囁いた。因業な家主に對する不快な感じも自ら消失せた。

やがて彼等は、かの酒好きの紳士と一緒に夜行列車に乘つた。窮屈な寝樣をしてゐる客の中へ刺り込んだ彼等は、スチームの過度な温かみや人いきれのために、疲れてゐる頭に痛みを覚えるほどであつたが、かの紳士は二三驛を過ぎる間に口を開けたまゝコクリ〳〵居眠りをしだした。山を登るにつれて雪はます〳〵烈くなつてゐた。をり〳〵息抜きに窓を開けると、雪を伴つた冷たい風が吹込つたが、それが高山には氣持がよかつた。

「これで向うへ着きさへすれば、安心して眠られる家があるからいゝやうなものの、こんな寒い時に、當てにするところがなかつたら心細いだらうな。どんな窮屈なところでも、屈託しないで熟睡の出來るやうになつたらいゝのだが、

おれはどうしても眠れない」高山はだるい欠伸を漏らしながら、まつ子に囁いた。半ば眠りに落ちてゐるまつ子に云つたつて效のないことだつたが、一口でも言はない思ひを口に出して見なければ、退屈の遣り場がなかつた。

彼れは窮屈な寢樣をしてゐる一人々々の顏を見て夜を過してゐたが、室内の孤の一つから記憶を呼起されたのか、ふと東京の尾越夫婦へ宛てて音信をすることにして、鞄の中から封緘葉書と萬年筆とを取出した。尾越夫婦とは去年の夏輕井澤で知合ひになつたので、年末に東京へ行つた矢手に、その家を一度訪ねたこともあつた。

「お二人で大磯へお出でになるといふお話があつたので、心待ちにしてゐましたが、そのうち小生等は土地に飽いて來ましたから、今日大磯を引上げて、今中央線の夜汽車に乘つて居ります。近日また東京へ出掛けますから、その際にはまたお邪魔に上るかも知れません。今雪が降つて居ます。離れ山の麓の我々の小さな家は、今時分凍つてゐるでせうが……」高山は不眠の退屈から、感慨を籠めた筆を運ばせかけたが、ふと自制して、少し詳しい轉居の報告だけにして、暫らく滯在する筈のK市の住居を明かに書き添へて、葉書は車掌に輕んだ。

交友の乏しい彼れに取つては、尾越夫婦の如きは珍らしい知人になつてゐるので、輕井澤の生活を記憶から呼起すたびに、その夫妻のことを思出さないではゐられなかつた。秋風が吹き出して、避暑客は日に〳〵歸つて行つて、月見草の咲誇つてゐた高原も尾花の野となつた時分に、周圍の燈火の消えた闇の中に、尾越の家の一點の燈火のみが鬱かに光つてゐるのを、彼れは懷かしい思ひをして見てゐたのであつた。夫妻の間は睦じさうであつたが、あたり前の夫婦とは思はれないやうなところがあつた。第一、細君が、派手なつくりをしてゐるのに臙はらず、尾越と釣合はぬくらゐに歳を取過ぎてゐた。二人とも遊惰な生活をしてゐた。

高山は、尾越の單純な話振りや、遊惰であつても惡氣のなささうな人柄を好んでゐたが、それよりも細君の色つぽい素振りに知らず〳〵心を牽かれてゐた。

十月に入るまで踏留つてゐた高山夫婦は、その少し前に歸京することになつた尾越夫妻に誘はれて、告別の散歩を共にした。

「どちらが先きに退却するかと思つてたら、私の方が負けましたね。しかし、あなたもいゝよ」と、尾越は云つた。

「僕も大分東京が戀しくはなつてゐるんですが、しかし、東京へ行つて見たつて、面白いこともなさそうですからね」

「私にだつて、東京がいゝ事を持つて待つてゐてくれるのぢやありません。むしろ煩さい思ひをしたきやならないでせうが、でも、東京はうまい物が食べられるだけでも有難いですね」

「尾越はこの頃食氣づいて、やれビスチキが食べたいの、テンプラが食べたいのと食物の事ばかり云つてゐるので御座いますよ」と、細君は横から嘴を入れて、「辛抱氣がないつたらひどいですからね。最初のうちは、私こんな淋しいところには十日ともゐられないだらうと思つてゐたのですけれど、住んで見ると、結句安心してゐられると、覺悟をいたしましたの。それに尾越ははじめはこんな涼しい空氣のいゝところはないつて、夢中で喜んでゐたくせに、餘程前からこの土地に厭いてしまつたらしいんです。男の方が女よりは物に厭きやすいんで御座いますかね」

「さあ、どうですかね……人によつてさま〳〵でせうが、大體男の方が物事に執着が深いん

ぢやないでせうか」

物事と云つても、高山は男女間の情事を念頭に置いて、さう云つたのであつた。それについて、尾越も細君も頻りにめい〳〵の意見を述べた。四人は山腹の四阿に憩うて、暫らく秋晴れの野を見廻した。此處で温かいコーヒーでも飲めたらいゝと、誰れかが云つた。

その言葉を思出すとともに、高山は、續けざまの喫煙で荒らされた喉を潤して、だるい頭に力をつけるために、一杯の温かいコーヒーを飲みたくなつた。

夜明け前にK市に着いた時には、雪が可成り積つてゐた。湖南地方とはちがつた底冷たい、殺氣を含んだ風が彼れの頬に觸れた。どちら向いても春は萌してゐなかつた。

市を取圍んだ遠近の山嶽の雪嶋の景色は美しかつた。高山は市の麓中にある青木家の二階の窓から、富士を中心にした連山が、碧空の下に鮮明に聳えてゐるのを新奇な思ひを寄せて、朝となく晩となく眺めてゐた。雪解道を荒川土手や古城のあたりまで散歩したりしたが、季節がまだ早いので、山裾を差して足を進めることは出來なかつた。

婚禮を前に控へた一家の人々の動靜をも彼れは、新奇な思ひを寄せて、日に夜に眺めてゐた。高山自身の婚禮も、彼れが斡旋した妹の婚禮も、極めて手輕に取運ばれたのであるし、從來冠婚葬祭の世間的の儀式に親しくたづさはつたことはなかつたのだから、純日本の傳統的慣例や、この地方の習慣を巨細に渡つて守らうとしてゐる今度の婚禮の手順を見てゐると、事々に興味があつた。外目には結婚する當人同士の事はそつちのけにして、儀式のための儀式をしてゐるやうに見えるのが、奇怪不思議にも思はれた。

「結納の日取りがまだ極まらないのです」と、青木家の老主人は氣揚しさうに云つて、いろいろと臆測をしてゐた。去年の夏仲人の手を經て話が纏まると、間もなく相手の田村家へ此方から親子連れで出掛けて、酒が入つたので、その儀式は土地の風習として、結納の取交し以上に緣談の成立を保證するものであつたが、その後、先方からいろ〳〵な口實の下に、興入れの期日を延し〳〵するので、青木家では心許なく思はれてゐた。氣揚い思ひをさせられるやうな噂も世間の口から時々傳へられもした。

「良三さんは當世の若い者には珍らしい堅いおとなしい方だし、稼業は繁昌するし、あなたはお仕合せですよ」と、親戚の者に云はれると、「いや、嫁を娶つてしまふまでは、安心して眠られませんよ。重い荷物を背負つてゐるやうでね」と、老主人はこぼした。

「お嫁さんの選好みに苦勞するぐらゐ、親として樂みな苦勞ぢやありませんか。此方のお嫁さんになら候補者はいくらでもあるのでせうから」

「傍で思ふやうにやいかないものでさ」

老主人は、おれの苦勞はおれでたきゃ分らないのだと、これほどの一家の重大事を、傍の者が輕く見てゐるのを不平に思つてゐた。四五年以來、時々持込まれる緣談を一々根掘り葉掘り調べて、些少の瑕瑾をも嫌つて拒絶して、自分で市中を物色して早くから目星をつけてゐた一人にのみ拘泥してゐた彼れは、自分の胸に描かれてゐる良緣に傍から水をかけられるのを好まなかつた。故障が起つたのぢやないかと疑はれるたびに心が騷れた。

當人の良三はすべてを父に任せて冷然と構へてゐた。「お父さんのお好きな××さん」と、浮いた調子で座興に云つて笑ふ者もあつたが、

さういふ時にも、老主人は真面目な顔をしてゐた。

「おれは自分の道楽で勝手に嫁を極めるのぢやない。容色でも育ちでも、氣風でも、これなら青木家の嫁として、世間へ出して恥かしくない、世帶をまかせて大丈夫だと思へばこそ、お前たちにも相談して、こゝまで話を進んで來たのだ。だからお前たちももつと眞剣になつてくれなきゃ困るよ。誰れでもいゝ、當人の氣に入つた者なら誰れでも連れて來いといふやうな手輕にや行かないぢやないか。養者や女郎を引張つて來られても困るからね。相續者は何事も家のためといふことを第一に考へてゐなければならんのだ」

高山も老主人から屢々かういふことを聞かされて、それが世間の親の普通云ひさうなことだとは思ひながら、固定した家といふものを持つて居ない彼れは、そんなことは身に染みて感ぜられなかつた。

「私は早く世を離いで、若い時から今までしみじみ湯治や見物の旅をしたことがありませんよ。今度の事の片がついたら、後は若い者にお讓り申して、時候のいゝ時には十日なり二十日なり、殺くり何處かへ行つて見たいと樂みにして居ります」

老主人はたび〳〵かう云つたが、ある時良三は、

「何時だつて行けたのぢやありませんか。今までに行けないやうなら、これからだつて駄目ですよ」と苦笑して云放つた。老主人は笑つて默つてゐた。

若い健かな良三は、稼業の暇には、せめて市中の散歩でも存分にして見たかつたが、それさへ自由にならなかつた。で、遂に人つて來るのさへ、馬鹿にならない享樂の一つになつてゐた。自分が二十年來住んで來た町でありながら、この市中が何時も珍らしく彼れの目を牽いてゐた。

「今夜は久振りで活動を見て來たいんですが」と云つても、活動寫眞の見物さへ、快く許されない場合が多かつた。

「若い者はそんなに活動が見たいものかな」と、珈琲店だの活動小屋だのと、餘計な娯樂場の出來るのを、父親は歎息した。

「お父さんの若い時分には、何が樂みだつたのでせう」良三の言葉には不平が籠つてゐたが、父親は笑つて默つてゐた。

子供の外出を喜ばない老主人も、自分で終日家の中に蟄居してゐると、頭が鬱陶しくなるので、何かに假託けてはちよつとでも外を歩いて來たがつた。暫らく寄寓することになつた高山が、日々の散歩に出掛ける時に、道案内として一緒に出掛けることもあつた。さういふ時には、世事に暗い高山をも、時に取つての相談相手として緣談に關はつた疑問やら意見やらを、隔意なく口に出した。

「祝儀事もこれからの時世では、成るべく質素にした方がいゝでせうた。當人同士の心掛けがよくつて、内輪が圓滿に收まりさへすればいいので、肝心なことはそれ一つですからね。しかし、先方はなか〳〵手が込んでゐて、手輕に濟みさうぢやありませんよ。仲人も財産家で、私のために一はだ脱いで骨を折つてくれてるんですが、のつけに、今度は青木さんお氣張りなすつてと切込んで來る有樣で、此間も先方の支度は大變ですぜといふ觸込なんですよ。……前つてしまふ」

「それは構はないぢやありませんか、先方は先方、此方は此方だから」

「それでいゝものでせうか。……私の方は昔からの家風で、家の中も御存じの通りに昔のままで何處にも飾りつ氣がないんですが、先方は

一體に派手なやうです……尤も私の家の生活もあんまり悠へ目過ぎるやうですから、これからは若い者次第で、少しは人前のいゝやうに華やかにした方がいゝかもしれませんね」

「さうでせう。財産の餘裕があるのに、强ひて質素に暮らすには及ばないでせう。自分の力で得られるだけの樂みは樂んで今日を愉快に暮らしたいと、當節は誰れでも思つてるやうですから」

「ぢや、まあ、後々までの家の事なんかはどうでもいゝ、自分のしたいことを勝手にすればいいつていふ譯なんですね」

「さう。……しかし、世の中はどう變つて、金持の財産も何時叩潰されるか分らないつていふ時代ですから、自由に費へる間に費つとくのが利口かも知れませんね。一寸先は闇の世ですからね」

「私どもは無理をしてまで儲けようといふ慾はなかつたものです。だから、お蔭で世間の信用も續いて來たし、親戚にも何かと云ふと、相談相手にされるつていふ風ですが、この先はどうなりますか」

「お嫁さんが來たら、家風も變つて來るでせう。何處の家でも、女房といふものは隱然非常に勢力を持つてゐるやうですから」と云つて、高山は一二の例を擧げたりしたが、眞面目に聞かれる情を說くのが、少し氣恥かしくなつたので、「結婚の儀式も儀式だが、一つ新婚旅行をおさせになつちやどうです？　人間の一生に一番樂しいことらしいですから。それに一度機會を取外したらあとではしようたつて出來ないことなのですから」と、半ば慫慂に云ふと、

「え、それはいゝでせう。結婚當時は家の中がごたつきますから、旅行にでも出てくれゝば、家の者の手數が掛らなくつて、結句便利かも知れませんよ」

老主人が家の事、子供の事に、老いの心を碎いてゐるのを感じるにつけて、高山は自分の父親の事を思出した。自分の故郷の家と青木家との氣風の相違をも思比べた。親の側へ置いて親の稼業をそのまゝに續がせて、わが子の一生一動、目顏の晴れ曇りにも、言葉のはしゝにも心を配つてゐる一人の父親と、子供の勝手氣儘な行動を大抵は見過して、古い廣い家に獨りで虚を守つてゐてあまり苦にも思つてゐない一人の父親との、二つの老いた姿を彼れは心の中に描いて、ちつとそれを見てゐた。……高山は自分の妻を選ぶに當つても、事後承諾と些少の費用を求むる以外に、父親の頭をも手足をも煩はさなかつた。彼れの二三の弟の結婚もさうであつた。一人の妹でさへ自分で夫を選んだ。

「どちらが子供のために幸福なのだらう？　どちらが親自身に取つても幸福なのであらう？」高山は、若し自分が良三の親のやうな親を有つてゐたなら、自分が良三の生涯はどう變つてゐたであらうかと、想像をめぐらしたりしたが、それはとに角、一人の子供もない、將來生む望みもない彼れには、親心といふものは幾ともつてゐなかつた。生物學者の説くところから考慮したり、日常見聞してゐるところから推察したりして、親心の概念は、心得てゐても、身に染みて生々と感ずることはどうしても出來なかつた。世界の親々の心は、彼れの力では味ひ知ることの出來ない神秘不可思議の何物かであつた。

「おれの親爺は、いくらやりつ放しであつても、大勢の子供を育てて來たのだから、隨分苦勞したのであらうが、親心といふ不思議な物を味ひ知つてゐるのだから、おれよりは幸福だ」

彼れは、故郷の家の奥座敷の炬燵に當つて、

算盤か帳簿かと睨めつくらをしてゐるか何かしてゐる今の親爺を想像するにつれて、彼れが幼かつた時分の父親を追想した。……彼れが物覚えのいゝのを自慢してゐたらしい父親は、眞夏の休暇に、日本外史や、十八史略の素讀を授けようとしてゐたが、强ひて學ばせられる彼れに取つては、それが苦役のやうに感ぜられてゐた。滿潮時を見計らつて水遊びに出掛ける近所の仲間から誘ひの聲を掛けられたりする時には、自己流の節をつけて朗々と讀立てゐる父親の聲が憎くなつた。で、時々は父が教へたがつてゐる時刻を豫感しては、そつと家を出て遊んで來ることがあつた。……あの時分の父親は、今のおれよりも若かつたのだと思つてゐると、自分の身のまはりが淋しいやうに、高山には思はれた。

支度は略出來上つたから、結納の日取りも式の日取りもそちらで極めて呉れと、先方から仲人を通じて云つて來たので、此方では俄かに勢ひづいて、暦を取出して吉日の穿鑿をはじめた。九星暦の外に日蓮宗の暦をも參考にしたのであつたが、二つの暦の所説が一致してゐないので途はされた。

結納として送るために、京都へ染めにやつた花嫁の式服が着くと、家の者も寄寓者も目を欹てた。式服には孔雀が羽をひろげてゐた。

「成るほどよく染め上げてゐる」と、皆なが云つた。まだ見ぬ女がこの式服を着けた華美な花嫁姿を高山は想像しながら、「先方のお好みださうですが、孔雀の模様は奇拔なのでせうね」

「孔雀は虚榮の鳥だといふぢやありませんか」老主人はそれを氣にしてゐるやうだつた。

「孔雀は蛇を喰ふさうですよ。孔雀明王の有名な佛畫を見たことがありますが、昔は呪ひをかける時に、僧侶がその前で祈つたのださうです」

兩親や花聟の式服も、すでに新調されてゐたのであつたが、まつ子の式服は華美な場所に相應しいのがなかつた。持合せの物は着る機會がないうちに自ら世におくれて見窄らしくなつてゐた。老主婦は頻りにそれを氣にした。先方の親戚は富家ばかりで、誰れとかさんは一萬圓のダイヤの指環を嵌めてゐるなんて、大袈裟な噂を聞いてゐるのに、さういふ人達の中へ、自分の娘をこんな見窄らしい物を着せて交はらせるのは、どうしても忍びられなかつた。

「これでいゝんですよ、どうせ一度お役目に着るきりなんですもの」と、まつ子は諦めてゐるやうに云つた。

「でも、年寄の私たちでさへ新調してゐるんだもの」

「着物のことなぞどうでもいゝの」まつ子は何となく哀れを感じて、「それよりもね、……私は子供はないし、落着くところがないやうな氣がしてならないの。高山に死なれでもしたら、私の行き場所がないんですから、それを思ふと、淋しい野原を一人で歩いてゐるやうな氣がすることがよくあるんです」と、何時になくしみ〴〵と母親に訴へた。

「だつて、親もまだ生きてゐるのだし姉弟もあるのだから、あなた一人で心細い思ひをしてゐなくてもいゝぢやないか」

さう云つた母親の目には涙が浮んだ。まつ子が何故淋しい野原を歩いてゐるやうに思つてゐるのやら母親にはよく呑込めなかつたが、雨露の凌げるだけの小やかな家でも、まつ子のために建ててやつて置かなければ、安心してこの世を去ることが出來ないやうな氣がして、父親にその話をした。父親は笑つて聞いてゐた。

「お父さんは他所から來るお嫁さんのことばか

り心配して、自分の娘のことは考へてくれないから仕様がない」と、母親はこぼしたりした。

皆なが忙しかつた。邪魔物の取片付や汚れ物の洗濯や、新しい調度家財の整理などにまつ子も母親を助けて働いてゐた。自分たちが旅で汚した衣類の始末にも骨が折れた。仲人をはじめ、人の出入りも多かつた。

用事のないのは高山一人であつた。毎日御馳走になつて、市中から近郊へかけて散歩をして、午睡をして、時々は、婚禮の準備を傍觀してゐた。此處を立退いたら何處に住居を定めるかと考へて、まつ子などに相談することもあつたが、その場合が來たらどうにかならうと、輕く見做してゐた。

東京の知人との手紙の遣取りは殆んど絶えてゐたが、ある日計らずも、尾越の音信に接した。

「拜啓、小生先月末より郷里福島へ歸省いたし、昨夜上京仕候　お手紙の趣きによれば、最早大礒を御退去相成りし由、御訪問致さざりしを殘念に存じ候　小生は一身上の都合により、東京に住みがたく相成り候故、近々家を片付けて郷里へ隱退いたすことに決定いたし居候。他日拜眉の機會も有之候はんが、をり〳〵の御音信願上候。輕井澤の閑寂なる風色夢の如く思出され候。奥様へもよろしく」

高山はこの手紙を讀むと、九段の中坂のほとりにある尾越の今の住居を目に浮べた。小さな家であつたが、二階が一室あるし、日當りがよささうで、借家としては手綺麗に出來てゐた。空家の拂底してゐるこの頃、あのくらゐな家が借りられゝばいゝと、ふと思ひついたので、まつ子にさう話した。

「式の日まではまだ大分間があるから、ちよつと東京へ行つて來よう。尾越の後が借りられるかも知れないし、あれがいけなかつたら外を捜して見てもいゝよ」

「こんなゴタ〳〵した家にゐたつて詰らないでせうから、明日でも行つて入らつしやい」

「東京で借家がうまく行かなかつたら、思切つて南九州の方へでも行つて見るんだね」

高山は過日さましに二階で地圖を披いて、未見の土地を空想してゐた。人間や超人の事をいくら考へて見たつて、生れながら持つてゐる自分の智慧はとつくに行詰りになつてゐて、新しい心の世界の開展する望みのないことを熟知して來た彼れは、身邊の事がもつと自由になつたら、未見の土地を巡遊して殘生を送りたいとよく考へてゐた。海外の地圖をも屢々注視してゐた。長崎島原などを經て、薩南の湯の町掛宿に暫らく居を定めて見たいと思つたこともあつたし、日向の茶臼ケ原の孤兒院を訪ねて見たいと思つたこともあつた。その孤兒院には、少年時代の彼れを愛撫して、基督の道を單純平明な言葉で傳へた昔の田舍牧師が老後の生涯を送つてゐる筈なので、高山はお互ひがこの世に生きてゐる間に、一度その牧師に會ひたいと思つてゐた。

「二十何年先生にも御無沙汰をして世の中を渡つて來ましたが、肝心な事はつまり何も分らないで、分らないじまひで私も一生を終りさうです」と云ひたかつた。昔でさへ頭髪が薄くつて痩せさらばうてゐたかの牧師の今の有樣はどんなであらうか。顔に似合はない嫩のやうな柔和な目付は、高山の記憶に今も懷かしみをもつてハツキリ殘つてゐる。……都會から隔絶した薄倖な小兒の教養などに從事してゐるのこそ、人間としての最も尊い生活であつて、現世と天國とをつなぐ梯子はさういふ處にかゝつてゐるのかも知れないが、それでは彼自身かの牧師の傘の下に隨いて安んじて働き得られるかと考へ

へて見ると、考へるさへ可笑しかつた。
（人を殺して心が安んじてゐられないのなら、人を助けたつて、わが心は安んじられないのだ。どちらにしたつて同じことだ）
階下へ下りると、伸人が結納取りかはしのために來てゐた。二三の親戚も座に加はつてゐた。緣起を祝ふための茂久錄の用語も宇配りも、人々に頭腦を絞らせてメケ敷かつた。いくつかの進物臺に載せられた結納の品々は、翁の面や松に日の出などの模樣のある風呂敷をかけられて、伸人の等身で持出された。同じ家の中も、不隣の夜とは違つて、奥床しく見られた。伸人が目出度く納めて歸つて來ると、祝ひの膳が並べられた。盃をやり取りしながら枝から枝へとうつつて行く世間噂も、たえず歡喜の色に照つてゐた。
「良三さんも荷が重くなりなすつたから、これからまた一奮發なさるんですね」と、伸人が云ふと、
「これで身が極まると、働くにも張合がつきますよ」と、老主人が應じた。
高山は翌朝東京へ行つた。

飯田町の宿屋に着いて、茶を一杯飲むと直ぐに外へ出た。田舍から出て來るたびに、こんな空氣の濁つた蒸々しい處で、よく人は生きてゐられることだと感じるのであるが、それとともに自分の故郷へ歸つたやうな氣持もした。女の美しさも彼れの目を楽いた。筋肉の引締つた緒い顔した、天眞の生氣が身體に漲つてゐる火磯などの女よりも、虚弱な肉體を脂粉で色取つてゐる花會の女の方が美しく見えるのを如何ともしがたかつた。
神保町あたりまで行つて、醫藥など二三の買物をした後で、中坂の尾越の家を訪ねるつもりで、九段下まで來ると、數人の若い男女が電信柱へ大きな紙を貼りつけてゐた。立留つて見ると、××會主催の婦人問題講演會の廣告であつた。講演者には高山の知人もあつた。知名な社會主義者もまじつてゐた。巡査が急ぎ足でやつて來て貼終つたところへ、巡査が急ぎ足でやつて來た。
「これは頒けてあるのかね」と訊ねた。
「いえ、別に頒をしてはゐないです」と、髮を長く延した袴を着けた學生らしい男が答へた。
「ぢや、いけない。剝いで下さい」巡査は嚴として迫つた。
「剝がなくともいゝと思ひます」
「いけない、剝ぎたまへ」
二人は顔を紅らめて二三の押問答をしてゐたが、やがて巡査は警察署までの同行を命じた。先きから後の方に立つてゐた、髮を七分三分に分けて束ねてゐる仲間の女は、微笑しながら、「警察署へ行くんだつて。行け〳〵」と、小聲で云つて隨いて行つた。
街上のさういふ光景は、高山には珍らしかつたので面白かつた。
尾越は家にゐたが、家を片付けてゐる樣子は見えなかつた。
「お移りになるのなら、後を讓つて頂きたいと思つてゐるのですが」と、高山は玄關へ上りながら云ふと、
「實は故郷へ引込む日取りは、まだハッキリ極まつてゐないのですよ」と、尾越は面倒さうに云つた。
二階へ通されてから、高山は成るべく東京へ住みたくなつた自分の心持を話して、相手の郷里隱退の理由をも訊ねたが、尾越は暫らくその答へに躊躇してゐた。
「どうも思はしい職業が見つかりませんから、一二年田舍で親爺の手傳ひをしようかなんて思つてゐるんですが、私の故郷はちよつと躊つて見ても、いゝ處ぢやありませんからね。……まだ當分は此方で遊んでゐたつて餓死する心配はないのですが、懷手をして暮らすのは社會に對して濟まないやうに思はれますよ」
「しかし、あせらないで、此方でゆつくり方針を立てたらいゝぢやありませんか。資産家の御子息が田舍でブラ〳〵してゐるのは、尙更傍の者の目について薄情な人間と思はれるでせう」
「いや、今日歸つたら、一生懸命に汗を出して働くつもりなのです。遊んで暮らすのも傍で思ふほどに氣樂ぢやありませんからね」
尾越はふと昂奮した口を利いたかと思ふと、相手の言葉も耳に入らぬやうな風で、落着かない目をしてゐた。
これには何か譯があるのであらうと、高山は感付いたので、長座を遠慮して、間もなく暇を告げた。細君の顔を見ないのが物足らなかつたが、この夫婦の間に何か變つたことでも出來てゐるのではないかと危まれたので、細君のことは訊かなかつた。
去年の末に訪れて來た時には、夫婦は他の中年増と三人で座間からトランプを取つてゐた。輕井澤で退屈のあまり、はじめてこんな物を手

にしたのだと、細君は言譯をしてゐた。
「大晦日を目の前に控へてゐるのに、お宅は天下泰平ですね」と、高山は冷かして、
「僕なぞは勝負事には興味がありませんよ。どちらが勝つても負けてもいゝつて思つてゐるから」と、恬つてゐるやうに云ふと、
「でも、詰らない遊び事にも負けるつてことはいやなものですわ。損得の關係がなくつても、負けるつてことは不當にいやなものだと、私思つてますの」
「お前が今日は負けてばかりゐるからだらう」と尾越が横から言葉を挾んだ。
「あんなことを。まだはじめたばかりぢやありませんか。先の勝は我勝ですよ。昨夕だつて御覽なさいな。あなたが泣顔して蜂芋買ひにいらつしやつたくせに」
「買つて來たのは僕だつたけど、食べたのは誰れだつたらう」
「私かも知れないわね。勝つた方が御馳走になるのは當り前ですもの」細君は無邪氣にさう云つたが、ふと眞面目な顔を高山の方へ向けて、
「いゝ歳をして、馬鹿なことを云つてると お思ひになるでせう。……私どもも遊び永手に今年一杯は怠けて暮らしても、年が明けたら、心を入替へて一働きしようと思つてゐますのです。尾越は氣に入つた職業がなければないで、語學の稽古にでも行つたらいゝだらうつて、私勸めてゐるのですけれど、相變らずの無性者で仕樣が御座いませんの」
「だけど尾越君は語學は一通り修業濟みなんでせう。輕井澤で外國人と何か話してゐたぢやありませんか。僕なぞは日常の挨拶も英語では云へないんですよ」
「毛唐と話したつて詰りませんね」尾越は氣取つた口調でさう云つて、「私の從弟は横濱のSN商會へ出て、何時も外人を相手にしてゐるのですが、その從弟は學生時代から語學が特別によく出來て英語の外に佛蘭西語も相當に話せるんです。此間うち四五日横濱へ遊びに行つてた間に、家内は從弟の話振りを聞いて非常に感心して、それから、私を頻攻したのですが、語學ばかりが學問ぢやありませんからね」
「學問のことはどうだか、私にはよく分りませんけど、英作さん（從弟）は働き者ぢやありませんか」と、細君の言葉には棘を帶びてゐた。
が、高山の手前、話は外へ轉じた。細君は部屋を出て客あしらひの準備に取掛つた。高山は尾越から芝居や寄席や活動寫眞などの事を

聞かされたが、それ等についての彼れの批評や説明はすべて平凡であつた。

「暇だから、見に行つてるやうなものの、大分飽いて來ましたよ。それで從弟のゐる商館へ勧めようかと思つて、略話がついてゐたんですが詰らないことから中止になつて惜しいことをしました。私は俸給の多少に關はらず働いて見たくなつてるのですけど、運が惡くつて私の決心の夢先がいつも挫かれるんです。しかし、來年は京橋のある貿易商の會社へ用られるやうに再今話がつきかゝつてゐるんです」と、尾越はしみ〴〵と云つた。

細君は再び入つて來た時には、服裝を變へて御飯をも餐つてゐた。

高山は二人の話相手として引留められるのを振切つて、夕餐の餐應は受けないで暇を告げたが、同じ夫妻だけの生活であつても、尾越の家には艶があつて、彼れの家のやうに、落莫としてゐないやうに思はれた。

「しかし、夫婦水入らずの生活も、はたの者の云ふほどに氣樂なものぢやないからな」と、彼れは簡單な批評を下した。

翌日、朝餐を濟ますと、直ぐに飯田町の宿を出て、就眠時刻まで何處かで遊び暮らすのを、彼れは例としてゐた。故郷へ歸つて來たやうな氣持とを一しよに持つて、都會の人臭ひ臭ひに身體を浸して彼方此方を歩いた。一度は講釋場の寄席へ行つて、日本人の心にまだとびりついてゐる古風な犧牲獻身の殘骸を見て、彼れの如きものの心にさへ、日本の國土に育つて來たため、講釋の英雄に感動する分子が微かながらもあるのを感じて、不思議に思つたりした。

知人に會ふたびに訊ねても、空家は絶對にないさうなので、結婚式にはまだ間があつたが、兎に角玉市へ後戻りすることにした。

ところが、出立の前夜に、尾越から電話が掛つて來た。一度お訪ねしたいのだが、時刻は何時頃がいゝのだらうと云ふのであつた。

「今からお出でになつても構ひません。……ぢや、待つてゐます」と、高山は返事をした。

女中に客の案内を頼んで置いて、風呂に入つて來ると、尾越はすでに火鉢の側に坐つて、珍らしくも葉巻を吸つてゐた。

「なか〳〵寒いですね」高山は福袍のまゝ火鉢の側に坐つて、「先日のお話のヴェリタスといふ活動寫眞を見ましたよ。活動のうちでは見應へのある方なのでせうね。獨逸物だけあつて神秘的な理窟が映畫のうちに染徹つてゐるやうなところがありますね。三たび現はれ三たび消え、眞理は最後の勝利を占むと云つて、艱難を押切つて眞實を守れ、一時の情に負けて誠を吐くなと云ふ全體の趣向は、近代劇や小説の中にはありさうなことで、いかにも西洋人の好きさうな理窟ですね」

「理窟に深みがあるし、指環の中から出たり、漁夫の網にかゝつたりして、指環で筋が運ばれるのも面白いぢやありませんか。西洋人は思付がいゝんですね」

「そりやに日本の講談なんかの趣向よりは巧い。……だけどあなた方はあんな活動や、イブセンの社會劇なぞを見て、眞實さへ云へば安心してゐられる氣になるんでせうか。……あの活動だつて、本當は、眞理が最後の勝利を占めたのぢやない、作者が眞理といふ世界の人氣者を持つて來て、お座興に勝たせるやうにしたのですね。……誠と眞實だつて、眞剣に取組ませたら、どちらが勝つか分つたものぢやない」

「だけど、本で讀んでも、興行物で見ても、眞實が負けたでお仕舞ひになると、いゝ氣持はしないですからね。世の中の實際の事件についてもさういふ氣持がしますよ。あなたはさう思ひ

ませんか」

「それはさうです……」

高山は、それから先きは、自分の智慧の行詰りで、考へたつて詰したつて、果しがないので、さういふ荒漠たる疑ひの世界へ、尾越と一緒に進んで行く氣になれなかつた。

「空家は見つかりませんが、僕は明日あたり玉市へ歸らうかと思つてゐるんです。親類の婚禮に出席しなければなりませんから。……田舎の結婚式は舊來でいやに仰々しいがあなたのお國の方だつてさうでせうね」

「私は田舎の結婚式にしみ〴〵出たことはないのですよ、姉の結婚の時には隨分大袈裟だつたやうですが、私は東京にゐて、身體の加減も少し惡い時だつたから出席しなかつたのです」

「あなたの御結婚の時には、此方で式をお擧げになつたのですか」と、高山は何の氣なしに訊ねたが、すると、尾越は苦しさうな顔をして、

「まあさらです」と、勢のない聲で答へた。そして、何か見てゐるやうに、上目を空間に据ゑてゐたが、やがて、

「私は當分あの家で獨り住ひをすることにしました」と云つて、その譯を高山が訊返すまでもなく、

「リイフは、私が鹿島へ歸つてゐる間に無斷で家出をして、行先を私に知らせないやうにしてゐたのです。いくら居所を晦ましたつて、略見當はついてゐたのですが、出て行つたものを追掛ける氣にはなれませんから、私は打ちやつとくつもりにしたのです。今度故郷へ歸るについちや、リイフの事が問題になつてゐたのですが、――實はまだ正式に籍に入つてゐなかつたので――當人は私の兩親の許しを得る望みはないと堅く信じてゐたやうでした。それが家出の原因と云へば云へますので、遺書にもその點に重きを置いてゐるのですが、本當はさうぢやないのでせう。入籍するしないは我々の考へぢや第二第三の問題なのですからね。一體私の方でも別れて、當分一人でゐた方が、自分のためにいゝんぢやないかと思つたこともたび〳〵あつたのでした。世間ぢや妻を娶ると生活に振合ひが出來て、仕事にも身が入ると云つてゐますが、私は例外な人間なのか、リイフと一緒に住んでからは、生活の進路が止まつてしまつたやうなのですよ。それで、獨りでゐたら、何か相當な職業が得られて人並に働けるだらうと思はれてならなかつたのでした。京橋の會社の口も、私が獨身だつたら、俸給は薄くつても取逃さないで勤めてゐたのでせうが、リイフがゐたために此方から駄目にしたのでした。故郷ぢや、はじめのうちは苦情をぶつてゐましたが、この頃は默許の形で、私たちが定職でも出來て體面目に暮らしてゐたなら、早晩籍も入れて晃れるのでせうが、兩親に會つてその話をした時に、私の方でどうも熱心に頼む氣にたれなかつたのです。當分アヤフヤにしといてもいゝつていふ氣で、リイフに對する言譯を考へながら歸つて來たのですが、リイフの叔父、見透しでゐるやうなのだから遺書を見た時にはぢよつと驚きましたよ。だけど、私の心ぢや、二三時間も經たぬうちに今後の方針が定つてしまつたから大丈夫だつたのです」

細君が外に男をこしらへたのでもなければ、湯風呂ましに隠れんぼでもやつてゐるのだらうと思ひながら、高山はお座なりの受答へをして聞いてゐた。

「リイフは、年末にあなたがいらつしやつた時にトランプの仲間になつてゐた女か、あるひはリイフの弟の家に多分隠れてゐるか、さうでなくつても、この二人は居所を知つてゐるに違つてゐると思つてゐましたが、私はわざとこの二人の處へは寄りつかないで、葉書で訊合はすことも

さへ控へてゐたのです。無論で出て行つた女を追掛けると思はれるのはいやですからね。……ところが、高山さん、聞いて下さい。妙なことがあるんですよ。あなたが年末にお會ひになつたあの女が――石本さつと云つてワイフとは子供の時からの知合ひだつてことですが――あれが一昨日の午過ぎに、顔色を變へて不意に私んところへやつて來て、奥様は本當にお宅にいらつしやらないのですかと訊れるのです。白ばくれてゐるんだらうと思つて、

あなたは家の奴のゐないことを誰れにお聞きになりました？　と、私は荒つぽく訊返しました。

それであなたは奥様の今いらつしやる處を御存じなのですか。

知つてる筈もないし、强ひて知りたいと思つてもゐません。

御存じないんですつて？　よくそれで平氣でいらつしやるのね。

あの女は呆れたやうに云つて、それから譯を話したのですが、ワイフは使に手紙を持たせてあの女の處へやつて、ある事情でかういふ處へ來て、今九死一生の場合なのだから、××圓くらゐの金を工面して屆けるやうにしてくれ、着換への衣服も何でもいゝから貸してくれつて報んで來たと云ふのでした。九死一生と云つて何事が起つたのだらうと、私も吃驚しましたが、さう聞くと打遣つて置けませんから、あの女と相談して、必要な金と着物とを持つて、一緒に出掛けたのです、氣はあせつても大崎まで行くのだから途中が隨分手間取りました。大崎の家にワイフの掛り合ひがあることは、これまで聞いたことがないので、電車の中で二人していろいろに考へて見たのですが、新宿で乘換へを待つてる間に、あの女が不意に思ひついたやうに、これは自分だけで先きへ行つて樣子を見た方がいゝと思はれるから、あなたは大崎の停車場か何處かで待つてゐてくれと、かう云ひだしたのです。九死一生と云ふ場合に安閑と待つてられる筈がないので、私は飽くまでも反對し、一しよに行くと言張つたのですが、

おくめさんは出拔けにあなたに來られちや、面目のない思ひをするかも知れませんよ。御主人のお留守に家を出たことを、今は良心が咎めてるせいかも、出拔けにあなたをお連れして脅かしたら、却つて穏かに事が濟まないだらうと、心配でなりません。ですから、私を信用なすつてお任せ下さいましな。おくめさんのためにもあなたのおためにも、決して惡いやうにいたしませんと、あの女は、どうしても私を連れて行くまいとするのです。ワイフに後目たいことでもあるのなら、何更早くその家へ行つて見なければ承知出來ない譯なのですが、

ぢや、直ぐに私があなたを迎へに來るか、使を寄越すかするから、十分か五分でも待つてゐてくれつて、あの女は、いかにも當惑したやうな顔をして云つて、先方の家の名も番地もハツキリ數へてくれましたので、私も讓歩して、停車場で少しの間待つてゐることにしたのです。

ところが、十分經つても二十分經つてもあの女からの音信がない。三十分を過ぎると、私はもうぢつとしてゐられなくなつて、慌ててその家を訪ねて行きました。番地が解りにくかつたので、大分手間取りましたが、家のあることは確かにあつたのです。宿屋でもなし料理屋でもなし、新築の普通の家でしたが、ひつそり閑として、人の聲は聞えないのです。入つて聲を掛けると、下女だか主婦だかハツキリしないやうな五十がらみの女が出て來ました。そして、私がかういふ女が今訪ねて來てる筈だから、その人に通じてくれと紹むと、さういふ方は先きい

らしつたけれど、お訪ねになる方が此家にいらつしやらないので、家が間違つたのかも知れないから外を搜して見ると仰有つてゐましたと、親切に教へてくれました。

私は仕樣事なしにまた停車場へ引返して、暫らく待つてゐましたが、果しがないので、三番町のあの女の家へ急いで行つて見たのですが、無論家へは歸つてゐませんでした。置手紙をして一先づ自分の家へ歸りましたが、どうも腑に落ちないので、憮氣てしまひました。があの女が詐欺をした譯ではあるまいが、一生に、はじめて出くはした不思議な事なのですからね、私は手を組んで一心に考へて見ました」

尾越はこゝでちよつと話を切つて茶を飲んだ。話してゐるうちにも、胸に蟠りのないやうな明るい顔をしてゐるので、高山は氣持よく聞くことが出來た。何よりも細君の素性を詳しく聞きたかつたのであつたが、露骨にそれを訊ねるのは氣おくれがされたので、

「その石本何とかいふ女の人は、どういふ素性の人なのです？」と訊ねると

「亭主は質屋の通ひ番頭ださうですが大した敎養はなさそうです。女の方は私のワイフなんかとはちがつて口數の少い落着いた女ですが、ワイフは誰れよりも默意にしてるくせに、あんまりよく云つてはゐないのです。弄花が好きで、そのために方々へ不義理なことをしてるつて云つたこともありました。……今度の事も、さういふ賭負事に關係してあの女が、私から金を引出すために企んだのぢやないか、事によつたら、私の留守中にワイフまでも賭負事の仲間に捲込まれてるのぢやないかと、私も疑つて見ました。晩になつてあの女の家を訪ねて見ると、まだ歸つてゐない。いよ／＼私を騙したのにちがひないと思つて、復讐の手段を考へてゐたのですが、すると、昨日の夕方になつて、奥樣の居所をやうやく搜し當てたから御安心なさい、それについてお話したいことがあるから私の家へ來てくれといふあの女の手紙が速達で來たのです。私は直ぐに支度をして出掛けましたが、此處でいゝ氣になつて訪ねて行つたら、私はまた元の通りの生活を續けなければならんことになるだらうと、一生の岐れ目のやうな氣がしましたから、道を變へて、他の方へ行つちやつたのです。停車場で待呆けを喰はされたかはりに、私は他所へ行つて行方を晦ましてゐるんです。先きもある友人にこの話をすると、今時分細君は君の家へ歸つて待つてるだらうつて、笑ひ事にするのですが、私は思切つて笑顔で歸つて行く氣にやなれないんです。……私は忍耐力のない人間なのでせうが、自分のワイフに、籠絡馬扱ひされて、矢鱈に戯走されるやうにされちや濟りませんからね。いくら賭負事が好きだからつて、女つてものは自分の夫までも賭負の道具に使ひたいものでせうかね」

「あなたの奥さんはどうだか知りませんが、當世の女はみな負けん氣になつたんですね。今に我々は女のお指圖を受けて生きて行くやうになるんでせう」

高山は、世間の男女關係の常例から推して、尾越は今夜にでも細君と妥協するだらうと堅く信じてゐて、彼れの强がつてゐる一時の決心などには殆んど價値を置かなかつたが、細君の家出や石本の企みについては、尾越の打明話以外の隱れた眞相を知りたかつた。

翌日、高山は前觸れはしないで、五市の青木家へ歸つて行つた。結婚式まではまだ數日の餘裕があつたが、家の人たちは寸暇もないやうに忙しさうであつた。

「東京では面白いことがありましたか」と、老

主人に訊かれると、
「東京の宿屋へ泊ると、夜眠れなくって困りますと、高山は答へた。
「尚人でも東京の人はやり口が烈しいですね。私なぞもたまに東京へ行って見ると眩みがついていていゝやうです。しかし、この頃は店員かみな東京へ出たがるので、油斷がなりませんよ。先きへ行ってるものが、手紙を寄越して唆かしたり、たまに歸って來ると、洒落た服裝なんぞして見せびらかしに來るんだから始末が惡い。東京へ行ったからって、取った給金は右から左へ消えて行くだけで、金を殘す者は、十人に一人もないのですが、若い者はみんな腹の中がうはついてゐるから、ちょっとしたらまい口にも直ぐに乘せられてしまふのですな」
「他所の子息の使ひにくいのは當り前ですせう」
高山は人を使つて仕事をした經驗は殆んど無かつたので、空々しい返事をした。
「以前は十年の年季に五年のお禮奉公をするやうな者もあつて、店員が落着いて働いてくれましたが、これからはやりにくくなりますよ、商賣を止めて小さい家で内輪だけの生活をするや、氣骨が折れなくて至極安穩に日が送れる譯ですが、何もしないで遊んで暮らすといふのも、若い者のためによくないでせうかな」
「さあ。……何もしないで生きてるのも案外苦しいかも知れませんね。どっちにしてもいゝ事ばかりはないとすると、働けるだけ働いた方がいゝんでせうね」
高山は自分の身についてもふとさう思つた。自分が長い年月やって來た仕事が、たとひ無意味の事であつたにしろ、手を拱いて茫然として生きてゐるよりは、働き得るかぎりは勞一杯働いた方が、まだしもましなのだと自ら力をつけた。さう思ひついた時の彼れの氣持は、老主人の氣持とさして相違してゐなかつた。家則を讀るべき男子を持つてゐる老主人も、子供の無い彼れも、所有慾や世間慾に支配されて、生命を生きて行かうとするのに差別はなかつた。彼等の胸裡に差してゐる光や影は同じやうな色をして同じやうに動いてゐた。相手の話すことが瓦ひの耳によく觸つた。
今日までに店を仕上げた苦心談や今日までに社會的地位を得た苦心談が、二人の口から出て、ぜ燵の側の一夕の話が榮えた。側で鐵物をして立てたお茶菓子が持込まれた。老主婦の見るるまつ子も、世の家庭團欒の快樂をこの晩にこそ感じてゐた。彼女の式服も間に合つてゐた。
まつ子は、日、良三や店員の助けを借りて、預け物の整理をしたが、酒戸物の、食器が壞れてゐるのを見たり、桐の火鉢が紛失してゐるのに氣がついたりすると、住所不定の生活に氣を腐らせた。何時でも容易に運び出されるやうに荷造りをして土藏の一隅へ積重ねてから、土藏の入口で埃を拂ひながら、良三と肩を並べて一休みした。狹い空地に設けた石燈籠の側には、春らしい光が笑つてゐるやうに搖いでゐた。
「もう直きに櫻が咲くんだわね」まつ子は蹲つてからも見たことのなかつた故郷の澄んだ青空を仰いで、「あなたは今どんな氣持がしてゐて？」
「別に變つたこともないさ」
「だって、あなたの一生の大切な時ぢやないの」
まつ子は揶揄つて見たい氣がしたが、十年前の自分の結婚前後の事を考へると、弟を揶揄ふ餘裕のないやうに、ある感じが胸に喰入つた。夫との關係や夫の身内との關係など、自分の十年の間に經驗させられて來たことが、軸をもつて一時に彼女の神經に觸つた。そして、男女の別はあつても、良三も今に知らないではゐられまいと、思はれた。

良三なぞに話したって甲斐がないと思ひながら、ふと起きて來た彼内の疼みを口に洩らした。それにつれて、自分と同年輩の近所の知人が病んでゐるといふ噂を思出して、病氣の經過を良三に訊れてゐると、女のやうな聲をした男の唄が、塀越しに聞えて來た。「春は春は花咲く向島。オール持つ手に花が散る。ヤートセー〳〵」
「どうしました？　荷物は片付きましたか」と、老主婦がニコ〳〵して寄つて來た。
「おちかさんの病氣はどうしても癒らないんですかねえ」と、まつ子が訊くと、
「寢てばかりゐるんだって。淋々しく癒り目が見えないから、病人も細が起るんだらうよ。若い人の長患ひは本當に氣の毒だよ」
「若い時を患つて暮らすのは因果ですよ。病氣なら烈しくつても、癒るか癒らないか、早く極りがついた方がいゝのよ。嬲殺しにされるのはいやですからね」
母子が話をはじめた間に、良三は二人の間を通抜けて店の方へ行つた。
春雨が音のせぬほどに降つた晩、花屋持參の

「お父さんはお嫁さんさへ來れば、家の中でいい事づくめになるやうに云つてゐるけれど、あなたたつてこれから、寂い思ひをすることもあるわよ」
「そりゃ、何時までも獨身でゐる力が氣樂だらうね」良三は屋根の端で瓦を光らせてゐる小鳥の愛快な運動に目を注いだ。
「あなたは責任が重いんだから、獨身でゐられるものかね。お父さんは家といふことばかり考へてるから、どの子供よりも相續者のあなたを重んじてるのだよ」
「家を大切にするのはいゝが、少しでも新奇なことをすると、危かしがつて御機嫌が惡いんだ。去年の暮にも、×町の長屋の井戸が壞れたから、この機會に水道を引いたら、借家人も喜ぶし、新奇に井戸を掘るよりや經費もずつと廉くて上るとゴつたのだけど、昔からあつた井戸を潰すのは縁起が惡いとゴつてお父さんは聞かないんだ。それで手數を掛けて掘直すと、いい水が溢れるほどに湧き出したものだから、お父さんはいよ〳〵御自慢なのさ。……萬事がさういふ風なのでね」
「しかし、商賣の方はいやけてゐないぜ、繁一郎にやって御覽よ。自分が見込みをつけてはじめたことを失敗したって、それは諦めがつくもの。僕の家は不景氣の打撃は受けないからいゝやうなものの、商賣も儲けで云ふほどには儲らないものだよ。それに何だのかだのと出費が多くつてね」
「さうだらうね。大所には大きな風が吹くって云ふから」まつ子は戯談のやうに笑ひ〳〵云つたが、「でも、あなたは道樂をしないからいゝさ。今度の事には隨分無駄なお錢がかゝってゐるやうだけれど、道樂をして使ふ人のことを思へば何でもないからね」
まつ子自身の昔は云ふまでもないのだが、真三の結婚までの身體も純潔に保たれてゐるのを、彼女は結構な事として考へた。……若い時は慌しく過ぎてしまふ。良三も二十五歳の今までをこの鬱陶しい家の中で過してしまつた。ここ何が結構だか幸福だか分らないやうにも思はれた。
「あなたは丈夫だからいゝね。私はこれつぱかり身體を使つても、足腰が挫けるやうに疲れるのよ。昔はさうぢやなかつたのだけど、一度惡くなつた身體はどうしてもだめなものよ」
春雨が音のせぬほどに降つた晩、花屋持參の

晶々が大勢の人夫によつて運び込まれた。通りがかりにふと立留つて傘を傾げて此方を見ては行過ぎる男女の様子が、高山には面白く見られた。路傍に差してゐる潤んだ光の中に現はれて來る一人々々がそれ〴〵の目付を店の内へ注いでは、やがて闇の中へ消えた。

昔ながらの座敷の中に、箪笥や夜具戸棚や、いろ〳〵な調度が坐るところもないほどに收められて、新しい光を放つた。人夫をねぎらつてから、内輪の祝ひの酒宴が別席で開かれたが、一點の非難も打ちどころのない行屆いた支度について、みんなの話が賑つた。價額の評價もされた。幾棹のかういふ箪笥の中へ收められてゐる衣類の美を盡してゐることも豫想されたが、かういふ品物によつて花嫁其者のねうちも數層の重みを加へたやうであつた。これぢや花嫁さんも家へ來て、家の中の汚らしいのに驚くかも知れないと、老主人は喜びのうちにも氣遣つたりした。

三十近い下女のおきくは、薄暗い臺所で店員の食事拵へなど、自分の受持の仕事にいそしみながらも、婚礼の話にはかれて耳を留めてゐたが、荷物が來てからは、彼女の神經も緊張した。箪笥や調度を覗き見して驚いたり、平生は酒の氣のないこの家に、毎日贅澤な料理の匂ひや酒の匂ひのするのに心を唆かされたりした。家の中に自然に漂つてゐる華やかな雰氣は、臺所の片隅に蹲つてゐる彼女をも包むことを忘れなかつたのであつたが、彼女は店員よりも誰れよりも烈しい刺戟を受けてゐた。結婚といふものが、衣類や調度やさま〴〵な儀式に裝はれないで、結婚その者として、あるがまゝの正體を彼女の目前に鮮かに浮べてゐた。

「私だつて相手さへありや、まだ子供の一人や二人は生んで見せるよ」とおきくは先日笑顔をしてゐつてゐたが、彼女は一度子供を生んだこともあるし、戸籍面でも認められてゐる夫と名のつく男を有つてゐたのであつた。その男はノラクラして當り前の稼ぎをしない上に、兇暴なところがあつたので、彼女自身もつひに愛想を盡かして、屢々兩親の注意をも受けた舉句に、人を間に立てて、離別の話をつけたので公をもした。何處ででも働き者として通つて來た。夫と一緒にゐた間は、絶えず生活に苦しんでゐたが、獨り者になつてからは、立派に自分の口を糊した上に、兩親へも貢ぐことが出來た。「あの男にはもう會つちやならんぞ」と兩親に云はれるたびに、「會いもの、か、恐ろしい」と答へてゐた。

口ばかりでなくつて、堅く決心して働り稼ぎの氣樂さを喜んでゐたのだが、日に月に以前の苦しかつた記憶が薄らぐにつれて、懐かしい記憶のみが心の中に淀んで來た。ある時ある處で、店の若い人に戯談口を聞いてゐると、戯れに肩を叩かれたことがあつたが、それが何とも云へないいゝ氣持がした。もつと強くどやしてくれゝばいゝと思はれた。別れた夫にどやされた時には、もつと強い手答へがした。その夫にをり〳〵打たれた時の、全身に顫慄した移みが、今は怨み憎みの種になるどころか、懇しい懐かしい思出になつてしまつた。

で、年末のある夜、風呂の歸りに、別れた夫に久振りで行會つた時にも、さして恐れなかつた。卒氣ない素振りをされないで、取合つて貰へるのが悦しかつた。そして、誘はれるまゝに木賃宿で一泊した。その後、外出の機會をつくつては二三度媾曳した。

おきくは周圍に渦巻いてゐる婚礼の潮に自分も浸されて、別れた夫の面影を朧に思出してゐた。お金が殘つても人の家に奉公して人の家で寢起をしてゐるよりは、貧しい思ひをして

も自分の家にあめ夫と一しよに住んでゐた方がはるかに仕合せであるやうに思はれた。貧乏するといつても饑ゑるのでもないし凍えるのでもないのだもの、……

此方の思ひが先方へも通つたのか、別れた夫はふと店先へ姿を見せた。しかもそれが、結婚式の當日のことであつた。逢頭垢面の男が、塵一つ留めてゐない土間へ泥下駄で入つて來るのを見ると、家の者は眉を顰めた。目出たい席へ不吉の影が差したやうであつた。

「おきくに會はせて下され。是非話さねばならん大事な用事があるんです」と、その男は頻りに首を重れた。

「今日は忙しいんだから困る」と、家の者は一度は斷つたが、その男は動かなかつた。若し無理な拒絶をして、こんな男を怒らせて怨みを買つたら、今日の大事な日に傷のつくやうな不愉快なことが起らないとも限らないと、氣遣はれたので、とに角おきくに云つてその意志にまかせた。

おきくはニヤ〳〵笑ひながら、平然としてその男を自分の部屋へ連れて行つた。男は「お宅ぢや今夜目出たい式があるんだつてな。おら、此間の晩お嫁さんの荷が入るのを、電信柱の藤に隠れて見とつた。豪勢なもんだな」と云つて、部屋の中に手足を伸した。

「私も忙しいんだよ」

「だからセツセと働くがいゝや、おらあお前の邪魔をしに來たんぢやねえ。殺れたから一休みさせて貰ひさへすればいゝんだ」

男はおきくが掛けてくれた夜具にくるまつて、いゝ氣持で眠りに就いた。おきくは臺所へ出てセツセと働いたが、今までよりも仕事に張合ひがついて來た。そして、酒の殘りや肴の殘りを、寢てゐる男の枕許へ運んで行つた。家の者は混雜に取紛れて、その男のことは忘れてゐた。

女たちが化粧や着衣に手間取つてゐる間に、寄集つた親戚の男同士は、久振りで顔を合せたものもあるので、お互ひの近況について賑かに話合つた。稼業がらで、經濟界の景氣不景氣や、金儲けのことが、何よりも興味のある問題になつてゐた。醫師の一人も、最近百日咳の注射藥の新發見をしたので、××製藥會社から廣く廣出すことにしたと云つて、その效果や莫大な年數の豫想の説明をした。

「この土地には實業家が多いやうですが、學問や新發見をして有名になつた人はあまりないやうですね」と、高山が訊くと、

「この縣内には本當の實業家も少いんです。多いのは相場師と賭博者だけです」と醫師は答へた。

前觸れによつて一同は店先へ列んで、兩親や親戚に護られて到着した花嫁を出迎へた。……下女部屋で殘肴冷酒に舌鼓を打つて、いゝ氣持で寢そべつてゐたかの男は、どよめいた家の樣子に耳を留めると、あたりが暗くなつて人もゐないのを幸ひに、障子の隙間から、顔を出して、奥長い土間の向うを見やつた。明るい光の中を立派に着飾つた男女が、ごた〳〵と入つて來てゐる。おきくも小綺麗なのに着替へて、片隅に立つて慎しやかに出迎へてゐる。

一金持のすることはちがつたものだ。だけど、話りは同じこつた」と呟いて、彼れはまたも安樂なごろ寢をした。

僧老同穴の堅めの盃や、兄弟親戚の盃事や、兩家の親戚引合せの式が梨の如く運んだ後、自動車で新婚披露の式場へ出掛けた時には、夜が可成り更けてゐた。

おきくは皆なが出て行つたあとで、下女部屋へ入つて來た。

「お嫁さんは綺麗だつたらうな」と訊かれると、

「お前にも見せたかつたよ。だけど、花嫁さんは何處で見ても俯向いてゐるから變でねえかの」
「お前だつてもおらと盃事した時にや俯向いとつたでねえか」
「嘘云ふでねえよ　おきくは無邪氣な笑ひを洩らして、「盃事といへば、今夜は何處かの女中さんが一人も三々九度のお酌をしに來てゐたよ」
「おらは手酌で頂戴した。……こもりけえらざなるめいな。お膳樣で御馳走になつた」

披露の宴が首尾よく終つた時には、十二時が過ぎてゐた。高山夫妻は、まつ子の姉婿の祝意でその家に一泊することになつた。離れの新しい座敷で絹夜具に包まれた。が、高山は夜更けての飲食のために胃腸を悩まされ、場馴れない窮屈な宴席で行儀を守つてゐたために神經を疲らされてゐたので、快く眠られなかつた。まつ子も嬰宴の席で絶え間なく受けてゐたいろいろな印象や、青木家の今後の變化に關する想像などによつて刺戟されて、屢々熟睡を妨げられた。

彼等は過ぎてゐたが山國の夜はまだ寒かつた。高山は屢々夜着を掻合せては腹匐ひになつて煙草を吸つた。氣を紛らす書物は傍にないのだから、雜念の虜になつてゐるより外はなかつた。平生やうともすると眠つらい夜を送つてゐる彼れには、今更珍らしいことではないが、深夜に迫纒して湧上る雜念ほど心を疲らせて、しかも何の役にも立たないものはなかつた。……何時どんな醜い病氣に襲るか、どんな醜い喪難に會ふかして、苦しい死樣をするか分らないのだから、どうせ免れがたい死を偶然の運に任せきりにしてゐないで、自分の意志で、最も苦痛の尠い方法を探つて死を早めた方がいゝのぢやないか。人間の眞の幸福はつまりこれ一つで、他の種々雑多な幸福は畢竟水の上の泡沫同樣なものではないかと、彼れは自分に取つての最大な眞理はそれであると思込むことがあつた。強眠を切つて、滴る血潮を見たがら快く死に就いたといふ「クオ・ヴァディス」の中のペトロニウスや、蟒に腕を吸はせて眠るが如くこの世をまつたといふクレオパトラの物語が思出された。さまざまな自殺の方法が綜となり文字となつて脳中に浮んだ。……しかし、かういふ類の妄想や雑念は、明日の日になると、彼れの身に何等の效果をも與へないで、水上の泡沫同樣に消えてしまふのであつた。

「君は自殺の出來る人ぢやないよ」と、彼れは若い時分でさへ、ある友人に云はれたことがあつた。情熱が乏しくなつて理性に富んでゐる人には自殺は出來ないと云はれてゐた。

友人の評論の當否は兎に角、彼れは露國の文學に接觸しだしてから、情婦と心中したり主君のために切腹したりするやうな、彼自身の共鳴しがたいやうな自殺とは、根本の異つてゐる自殺がたまに書かれてゐるのを見て、大いに心を動かされた。……アルツイバーセフ(?)の「死」といふ短篇に書かれてゐる見習士官は、姑息な感情の支配を受けないで、理性のみによつて、自己の探るべき最良の方法は自殺であると確めて、その所說を實行した。

「しかし、小說の筋をそのまゝに信ずるのは間違つてゐるかも知れない。どんな作者だつて思付を誇張して書くやうだから」

彼れはたび〳〵心を動かされた露國の文學からも、實際上の感化は受けることがなくつて、今日に至つた。それ等の文學は深夜の妄想雑念を助けるだけの力を彼れの上に揮ふに過ぎなかつた。

「今日帰つて見たら、稼子がまるきり變つてゐるだらうなこと、高山は夜が明けてから云つた。
「私たちは明日のうちには立たなきやなりませんよ。お父さんもさうした方がいゝだらうつて云つてゐました。私たちに見られてゐちやお嫁さんが居づらいだらうからつて」と云つて、まつ子は今日から自分の生れた家にも安んじて身を託する譯に行かなくなつたことを、痛切に感じた。
「東京へ行くと、差當り宿屋住ひをするんだが、厄介だな」
「昔通の女で宿屋暮らしなんかしてゐる人は滅多にないで寄う」
「安い寡家でもあつたら買つて見るんだね」
先日、青木家と取引のある東京のある商店の店員が、芝に住みいゝ格安な寡家のあることをわざ〳〵知らせて寄れてゐるので、夫妻は東京へ行つたら、先づその家を見に行くことに話を極めた。

夫妻は家族と一しよに、炬燵の上でパンと牛乳の朝餐を喫ばれただけで、匆々に暇を告げた。青木家ではすでに朝の支度を濟まして、珍らしく風呂も沸されてゐた。老主人や花嫁や、隣部の老女などは、床敷に落着いて、茶器や菓子皿を前に置いて、話してゐたが、老主人のみは落着かぬ獨して、何となしに忙しさうにしてゐた。まつ子は昨日までのやうに、勝手にどの室へでも入る譯には行かなくなつたやうに思はれた。

老主人に招かれて、二人は座敷へ入つて話の中に加はつた。花嫁のたね子は、重くるしかつた昨夕の鳥田を崩して、輕快な束髪にしてゐた。その方がよく似合つた。「昨夕は久振りでゲツスリ眠りましたよ。これで重荷を卸して安心しました。花嫁さんとも、今朝家の氣風なんかを、掛値なしにお話ししたら、異存はない結構だといふことで、私は何よりも落んでゐますよ。私の家も今までは殺風景でしたが、若い人が一人殖えたので、これからは陽氣になるでせう」老主人は、風呂の中で思出した古歌を側に引いて、寂しい庭の梅の木に來て留つた鶯を、花嫁に喩へたりして、自分の喜びを、高山夫婦にも配たらとした。

花嫁は微みながらも、可成り快活に話をした。まつ子は明日の出立の準備をするために、奥の間へ行つて、荷造りには母の手や良子の手を借りた。

「明日はどうしても駄もの？　何だか心に退立てるやうでいけないれえ」と、母親は氣が濟まぬやうな顔をして囁いた。

明日の晩には、三ツ日とか云つて花嫁が實家へ歸つて泊つて來るのであるが、その時の「例の」親類廻りの方法などについて、みんなの意見が聞はされた。花嫁も一つ處に坐つてゐるのは苦しかつたので、接會を見ては座を立つて、胸に溜つた鬱氣を洩らした。濕つたものを乾かしに物干臺へ行つたまつ子の後を追つて、「姉さん」と、懐つこい聲を掛けたりした。まつ子はは上めてさう呼ばれたので、座敷の中で他所々々しい日を利いてゐた時とは違つた親しみを覚えて、「入らつしやいな」と招いた。そして、木蓮のはびこつてゐる隣家の中庭を見下ろしたりしながら、打解けた話に耽つて笑ひ聲をも立てたが、その聲を聞きつけた附添の老女は、「たね子樣、階下へいらつしやいまし」と、階段の下から呼立てた。

鳥田は重くつて頭痛がするから、明日の里歸りには束髪に結つて行きたいと、花嫁は望んだが、老女は許さなかつた。明日の朝まつ子の出立の際には是非停車場まで見送つて行きたいといふ望みをも、老女は頑なに斥けた。花嫁さんは首尾よく里歸りを濟ますまでは一歩も外へ

出るものではない、氣儘にさういふことをさせては、自分が側に隨いてゐる甲斐がないと云ふのであつた。

翌朝は雪がちらついてゐた。旅立には相應しい日ではなかつたが、高山夫妻は豫定通りに青木家に別れを告げた。何時ものやうに、良三は停車場へ見送つて荷物の世話などをした。

汽車が出ると、高山は、平穏無事で終始した他家の婚禮の事などは念頭から遠ざけて、今後の自分の方針を考へたり、窓外の雪景色を眺めたりした。線道を滑るにつれて雪は薄くなつて、武藏の平野へ下つた時には、柔かい光があまねく照つてゐた。吉祥寺中野あたりに、粗雜な家が建ちかゝつてゐるのが、住宅のない彼等の目を惹いた。

芝の實家は早速見ることは見たが、問題にするに足らなかつた。彼等は、駿河臺の旅館から赤坂の宿へ、部屋は薄汚くつても閑靜なのを取得にして移轉した。そして、四五日は市中の見物がてら、貸家を捜したり實家の檢分をしたり、建築會社を訪ねたりした。面倒な思ひまでして家を持つには及ばないといふ腹があるので、住宅を求めるに熱心が足らなかつた。折角知人が知らせて呉れた二三の家をも、缺點を見つけては斥けた。まつ子にしても、汚い小さな不便な家を無理に求めてまで、東京住ひをする必要はないと考へるやうになつてゐた。

「あなたも洋行なさるのなら今のうちですね、あんまり歳を取過ぎたら行けなくなるでせう」と、ある日、思詰めたやうに云つた。

「そりや行つてもいゝ。日本の内地を見て歩くよりや異つてていゝに違ひない」

高山はかねてボンヤリ心に描いてゐたことを眞面目に考へた。しかし、それにも煩しさばかりが目先にちらついて、熱心が加はつて來なかつた。歐洲人をも歐米の文化をも今は崇拜して居ない彼れは長い航海の苦痛を凌ぎ、言語の不自由を忍び、外人に銷び外人の生活と妥協するの累ひに耐へることを、想像してゐると、自ら決心がひるんだ。歐米人に對等に親しく附合つて貰つたことを、この上もない光榮のやうに感じて、お茶に饗ばれたの、どういふ話があつたのと、自分が日本人以上になつたやうに誇りがに書いてゐる洋行者の記事文を讀むたびに、無自覺の標本のやうに感じてゐた彼れは、自分も洋行したら、あんな風になるのぢやないかと思ふと、可笑しかつた。

「自分が外國へ行つたからつて、えらくなる譯ぢやないが、異つた景色や異つた生活を見るのは面白いだらう。巴里や倫敦でなくつても、知らない土地なら何處だつていゝのだよ。おれは輕便に行ける方法があればベルシャか土耳古見たいな處へ行つて見たい。それも、一年とか二年とか云ふのでなしに、ゐられさへすりや一生でも住通す氣で行つて見たい」と、彼れはまつ子に向つて遠慮した。

まつ子は高山の空想が著しも實現される場合には、自分の身の振り方をどうつけていゝかと迷つて、日夜思煩ひだした。弟が結婚した後の實家へは最早安んじて身を寄せる譯に行かなかつた。女一人で東京の下宿屋に住む譯には行かなかつた。高山の故郷へも自分一人だけでは手續つて行かれなかつた。東京で知人の家に寄寓するとしても、相應しい家が思當らなかつた。

宿の近くの山王臺の櫻が咲きかけた。K市の家族は花時には、用事をかねて東京へ遊びに來るのを毎年の例としてゐるのだが、今年はどうだらうと、まつ子は結婚後の實家の樣子を知りたさに、誰れかが出て來るのを心待ちにして、

誘ひの手紙を出したが、それと行違ひに、老主人から高山へ宛てた端書が屆いた。

「……御出立後拙宅にも種々の事あり候へども、ゆるゝ〳〵善後策を講じ居候」と、簡單に書かれてゐるのを見た高山は、ふと心に浮んだことがあつたが、不吉な臆測をするのを躊躇して、

「下女がゐなくなりでもしたのぢやないかな」と輕く見做した。そんなことぐらゐだらうと、まつ子も思つてゐた。

ところが、その次の郵便で、良三からまつ子に宛てた手紙が屆いたが、何氣なくそれを讀みかけたまつ子は、中途からおびえた顏して、一字一句を穴のあくほど見詰めた。

「お嫁さんは三ツ目に里歸りをしたつきり戻つて來ないんですつて」と云つて、重苦しい息を吐いた。

「どういふ譯で、……」高山は、緣談のはじまつてからの長い間の老主人の容易ならぬ心遣ひや、結婚前後の煩瑣な動搖を、親しく耳目に觸れてゐるために、世間に有りがちのこととして見過すことが出來なかつた。

「理由がハツキリ分らないから困ると、手紙に書いてあるのです。里歸りの晩には兩親も招かれて、大變御馳走になつて、田村家の内輪の人もみんな揃つて打解けて話をして來たのに、そのあくる朝になつて、たね子さんが頭痛がすると云つて、寢たつきりで、人に口も利かなくなつたのださうです。一日二日と歸りが延びるので、先方の心が分らないから、お父さんも行くし、良三も樣子を見に行つたのだけれど、良三にもお嫁さんを會はさないんですつて。……多分駄目らしいつて良三が書いて來てゐますよ」

「家で可愛がられ過ぎてゐた女が、急に境遇が變つたので神經を痛めたのだらう。おみき（高山の妹）のやうな女でさへ、結婚したあくる朝、家へ飛込んで來て、上へ上らないうちから、羅を出して泣いて、一日寢て居たぢやないか。處女から人の妻になるのは一生の大事件なんだからね。……多分そのうちには收まるだらう。先方の親だつて、あんな立派な支度をして寄越したものを輕卒に引取るつてことはあるまい」

高山は女の心の底を察してゐるやうに云つた。可憐な處女の心が年を取るにつれて次第に太々しくなることにまで思ひを遣めた。

「だけど、お父さんはどんなに心配してゐるでかれて、田村家の内輪の人もみんな揃つて打解けて話をして來たのに、そのあくる朝になつて、たね子さんが頭痛がすると云つて、寢たつきりで、人に口も利かなくなつたのださうです。一日二日と歸りが延びるので、先方の心が分らないから、お父さんも行くし、良三も樣子を見に行つたのだけれど、良三にもお嫁さんを會はさないんですつて。……多分駄目らしいつて良三が書いて來てゐますよ」

「家で可愛がられ過ぎてゐた女が、急に境遇が變つたので神經を痛めたのだらう。おみき（高山の妹）のやうな女でさへ、結婚したあくる朝、家へ飛込んで來て、上へ上らないうちから、羅を出して泣いて、一日寢て居たぢやないか。處女から人の妻になるのは一生の大事件なんだからね。……多分そのうちには收まるだらう。先方の親だつて、あんな立派な支度をして寄越したものを輕卒に引取るつてことはあるまい」

高山は女の心の底を察してゐるやうに云つた。可憐な處女の心が年を取るにつれて次第に太々しくなることにまで思ひを遣めた。

「だけど、お父さんはどんなに心配してゐるでせう。何よりも先きに世間體を氣にしてゐる人が、世間體の惡い目に會つたのですもの。良三だつて、この結果が悪く行かなかつたら、人間が變つてしまひますよ」

今度の結婚は世間の注意を惹いてゐたために却つて始末が惡いと、二人は話合つてゐた。

引續いて葉書や手紙で情報が來た。どれも良三からまつ子に宛てたものばかりであつた。良三が例になく昂奮して筆を執つた有樣が文字の上に現はれてゐた。事件の經過は、高山が樂觀してゐるやうなものではないらしかつた。

「仲人を煩はしても要領を得ない。……當人は以前から病氣してゐるので、從來靜養をつとめてゐたのだが、結婚のためにまた氣分が惡くなつたやうだから、今後引續いて養生をさせたいと云つてゐる。……云ふことに腑に落ちない點があるから、此方から押して訪ねて行くと、先方の父親は、お宅へは申譯がないと云つて兩眼に涙をためてゐる。……結果は覺悟してゐるが、考へてゐると頭が痛んで來てならぬ。往來の人が變な目付で店の方を覗いて通るので、帳場へ坐つてゐると、曝し物になつてゐるやうだ」

二人は良三の手紙の文句を種にして散散し

て、青木家の昨今の繁盛しい狀態を互ひの心に描いてゐた。まつ子は慰めの手紙をながゝと書いて良三へ贈つた。

「あまり立入り過ぎたことは書かない方がいゝぜ。かういふ問題で近潮に差出たことを云ふと、後で恨まれることがないとも限らないから……男女關係になると、兄弟にだつて遠慮のない意見などしない方がいゝよ」と、高山は注意した。他に、心を許して交つてゐる人のないまつ子は、良三とだけは何時までも、親しみを續けて、何か事があつた時には力になつて貰つた方がいゝと、高山は彼女のために思つてゐたのであつた。

「私が行つてお嫁さんに會つて、よく事情を訊いたらどうでせう。女同士だから、こちらの出樣によつちや、案外打解けた話をするかも知れませんよ」

まつ子は手紙の遣取りだけでは、粗いところ〳〵子の眉かぬやうな疑惑しさを感じてゐた。そこへ、季節の變り目で、衣類を取りに行く必要もあつたので、急に思立つて五市へ出掛けることにした。

高山は電車の停留場まで一緒に行つた。まつ子に別れた後で、赤坂見附から三宅坂あたりまで散歩して、濠際の櫻を見て、宿の方へ歸りかけたが、ふと、見附の側で、橋田といふ知人に會つた。橋田は高山の故郷の隣村の生れで、時々來訪してゐたので、高山の住宅についても氣をつけてゐたのであつた。

「今お訪れしたのですよ。お家はまだ極らないので……濠の川に貸地があるんですが、一度見にお出でになりませんか。××建築會社の所有で、建築も便利な方法で引受けることになつてゐるのです」と云つて、橋田はポケットから圖面を出して說明した。

高山は氣乘りがしなかつたが、暇な折だつたから、遊びのつもりで見に行くことにして、橋田が案内に立つた。途中で故郷の話が互ひの話題に出た。

「さういへば、此間故郷へ歸つた時に、私を乘せた伸夫があなたの噂をしてゐました。あのくらゐな人物になつても、東京で生活を立てるのはたゞ難いと見えて、毎月お家から仕送りをしてゐるんだと云つてゐましたよ。まさか、さうぢやあるまいと私は云つときましたが、本當ですか」と、橋田は訊れた。

「それは無根の事でもないよ。仕送りで生きてるつていふ譯ではないがね」と、高山は立入つた話は避けて、「昔僕の名前が出掛つた時分には、僕が月々二百圓づつ故郷へ送つてゐるといふ噂があつたさうだよ。……この頃は僕の信用は故郷の方ぢや形無しだらう」

「私も今度は、死んだ親爺の跡始末をして、持物は一切銀賣にして來ましたが、これで私にはもう故郷といふものがなくなつたやうなものです」

「せい〳〵していゝだらう。氣樂に食へる道さへありや、君のやうな一人ぼつちの等住ひがいいのかも知れないね」

「しかし三度々々辨當飯を食つて生きてるのはあき〳〵しますよ」と云つて、橋田はふと思出したやうに、「財産が殖えれば殖えるで、それだけでは滿足出來ないと見えて、星野の銀助さんが東京へ學問しに來てるさうです」

「へえ、今から學問しようと云ふのかね」高山は詐異な感じに打たれた。星野は小學時代の彼れの同級生で、首席を占めた時が多かつた。さして學才があつたのでも學問が好きなのでもなく、一番になりたいために全力を盡してゐたので、一度その地位から落ちた時には、昂奮して首席の男を目の敵にしてゐた。小學卒業後間もなく結婚して、到殖の道に進んで、浮沈の多

かつた數十年を過して、最近では早くから買占めてゐた朝鮮の土地の價格が暴騰したために、百萬長者になつたと噂されてゐる。

「神田の法律學校へ入つてゐるんださうですが、住所は秘密にして、知人には誰れにも會はないんださうです」

「金が出來たから、代議士にでもなりたくなつたんぢやないかね。今の政黨は頭りに地方の金持を誘惑してゐるらしいから」

「さあ……しかし銀助さんは甘い口にうつかり乘りさうな人ぢやありませんからね。……朝鮮などで土地を持つてると、いろんな面倒な法律問題が起つて來るらしいから、精讀上まかせにしとくのが不安心なので、自分で法律を心得て置かうと思つたのぢやないでせうか」

「成程、星野の性分から見て、あるひはさうかも知れないね。財産家になると、氣骨が折れるものだね」

二人は駒込橋で降りて、程近いところにある貸地を見た。二三軒新築が落成しかけてゐた。地所の賣買などにはまるで經驗のない高山は、ところ〳〵に杭を打つて區切つてある地面を見てゐると、こんな土塊に莫大な價格があるといふのが不思議でならなかつた。そして、其處に居合せてゐた肥流した會社員が、嘉靡でこの地所の價値の說明をするのを、空々しい愛答へをして聞流してゐた。

「偶然の力で人間は左右されるんだね。僕の故郷の家は、菜園や貸小屋や物干場なんかを合せると、持つてる地所が隨分廣い。邊鄙な土地だから、地代なんか無代價同樣らしいが、あれくらゐな地面を都會の近くに持つてゐたら、莫大なものだね。僕の親爺に手腕がなくつて、こゝの土地の地主が理財の手腕の傑れてゐた譯ぢやない。偶然なんだよ」と云つて、彼れは莫大な價値を持つてゐるといふ空地の彼方此方を踏んで見た。

高山は橋田に別れて、獨りで上野へ出た。埃の立たない靜かな日だつたので、公園の花を見て、それから紅染の深い江戸川の花を久振りで見に行つた。電車が廢止されてからは其處は無雜な騷々しい處となつてゐた。

次手だつたから、中坂の屋越の家へ寄つて見たが、屋越は不在であつた。下女に向つて、奥樣はゐるのかと訊ねると、

「いらつしやいません。且那樣お一人です」と下女は答へた。

「且那樣は毎日お勸めにでも行つてゐるのですか」

「いかゞですか。毎日外へお出掛けにはなりますけれど」

高山は自分の今の住所を書置いた。尾越の細君が今まで歸つて來てゐないことが、彼れには不思議であつた。女の方で、尾越のやうな資産家の子息と輕々しく緣を切る筈はないだらうし、男の方でも、あのくらゐな容色のいゝ女とたやすく離別しようの筈はないと思はれてゐた。

彼れは銀座へ出て食事をして宿へ歸つたが、朝から動き通しに動いてゐたため、足が邪魔になるほどに疲れてゐた。身體が衰弱であるといへ、まだ五官が人並の役目をしてゐて、手足も自由に動いて、自分の始末は自分でして出來ないことがないのだからいゝやうなものの、もう幾年かしたら人手を煩はさなければ生きてゐられなくなるであらうが、われも人の如く、老碰するまでも餘生を貪つてゐる外はないのかと思ふと、心底に捕捉しがたい不安が感ぜられた。

彼れは自分で寢床を延べて、寢れてゐる足を伸した。

が、まだ本當の眠りに落ちないでゐるところへ、電話が掛つて來たので、寢衣のまゝで出て行つた。掛けたのは尾越で、近日下宿へ移轉する筈だから、お望みなら家を讓つてもいゝと云ふのであつた。

高山は即答しかねた。一兩日中に御返事すると答へて置いて、「相變らずおひとりなのですか」と訊くと、

「えゝさうです。ちよつと面倒なこともありましたが、當分一人でゐることにしました。元の下宿暮らしが私にはいゝやうですよ。四五日前から御治橋の側の××會社へ出勤してゐるんです」と、尾越は快活な音聲で答へた。

その音聲は、聞じて胸に悩みをもつてゐる人の聲ではなかつた。歳が若くつて氣性も大人しさうなのに、あの綺麗な細君に未練を殘さないで離れることが出來たのかと、高山はいゝ氣持がした。人といふ人の殆んどすべてが（高山自身もあるひはその一人として）何事につけても執念臭いのを當としてゐる世の中に愛人との離別をさへ造作なくやつてゐる人が偶りにも存在してゐると思ふのはいゝ氣持であつた。

一日花見をしただけで、翌朝からは、當分部屋に閉籠つて、机に向ふことにした。世人を、喜ばせるやうな材料をも手腕をも持つてゐない彼れも、十數年筆の上の修練を積んで來てゐるために、書きかければ何とか辻褄を合せて相當な物が書けないことはなかつたが、心と筆とピタリ合つたものの書けたことは、これまでに殆んど一度もなかつたと云つていゝ。そして、自分の技術の不足も感ぜられたが、それよりも、文字によつて自分の心が存分に現はされるものであらうかと疑はれることが多かつた。

「あなたがもつと〳〵眞實のことをお書きになると、お作が面白く拜見出來るんですがね」と、一眞實の事を大切にするのなら、書かないのが一番いゝのかも知れません」と、彼れは答へた。

虚僞か眞實か、彼れは三四日の間、机の前に坐つて筆にのみ親しんで暮らした。そして住宅の事は忘れたやうに、尾越に對する返事さへ出さないでゐたが、すると、頭腦の倦怠した日暮頃に、ふと尾越の來訪に接した。部屋へ入つて來ると、尾越はあたりの穢しくつて陰氣なのに驚いたやうであつた。高山は仕立卸しらしい新しい背廣を着けた珍らしい尾越の洋服姿に、意味ありげな目を注ぎながら、

「この頃は家内がゐませんから、まだ御返事をしなかつたのです」と言譯した。

「かういふ處でよく御勉强が出來ますね」と云つて、尾越は珍らしい物を見付けたやうに、机の上の書き物に目を注いだ。

「僕の仕事は何處にゐたつて抄取らないのですが、あなたの方はどうです？」

「二三日前から受持が極つて、正式に出勤してゐるんですが、生活が規則的になつて身體のためにもいゝやうです」

「さうでせうね。僕などもある時間から時間までの間を、いやでも働かなければならんやうにした方が却つて自分のためにもいゝのぢやないかと思ふこともありますよ」と云つて高山は會社の仕事の有樣を訊ねて、「それで、あの石本とかいふ女の事はどうなりました？　いけない魂膽があつたのですか」

「大した企みはなかつたのでせう。あの金はちやんとワイフの手に渡つてるんですから」と云つて、尾越はあの話の續きを話すのが義務であるやうに話しだしたが、言葉に熱心は添はなかつた。

「あれから石本に會ひましたが、あの女は笑ひ事で濟まして、ワイフを私の家へ收めて元の通りしようと極めてかゝつてるんです。亭主の留

守に腕手に遊び歩くくらゐは、私たちのこれまでの生活から云へば何でもないことなので、書置きまでして出たのも、一時の氣紛れに過ぎないと云へば云はれるので、私も世間の習慣を楯に取つていきり立つて騒ぐ氣はなくなつてゐたのですが、この先何時までも彼奴と一しよにゐるのぢや、私の精神が死んでしまひさうに思はれますから、今が天の與へた時機だと思つて頑張つて見たのですよ。無論私がいくら頑張つて見たつても、ワイフがツカ〳〵歸つて來ようなら、私が負けてへこ垂れてしまふでせうが、彼奴意地つ張りな上に、私を離れたつて廢れ者になる女ぢやないですから、石本の手を經て私に抑つて來るばかりで、直接に私に打突かつて來ないから、私も助かつてゐるんです。……ワイフには親戚が二三人東京にあるんですが、そんな處へは寄りつかないで、石本の家に同居してるやうです。……特別に憎み合ふ事情があつた譯ぢやないから、會社の歸り途なんかには、ふつと會つて見ようかつて氣になることがありますが、見てゐて下さい、私がワイフに會つて愚圖々々で一しよになるやうだつたら、私といふ人間はそれでもうおしまひなのですから」

「だけど、一度細君を持つたことのある男が、獨身で下宿住ひなんかしてゐられるものでせうか」

「私は女が嫌ひになつて、一生女を絶たうと思つてるんぢやありませんよ。……それに、私のことだから、外の女にでも賣保すると、むきにまた捲込まれるかも知れないんですがね」

臆面のない尾越の言葉に、高山は不快な反感を起した。細君の素性の卑しくないことや、遊び事にかけても敏捷なことなどを、尾越は平然と話してゐたが、やがて、「御御前なら、晩餐を附合つて下さいませんか。この頃は晩餐は大抵女人と一しよに食べることにしてゐるんです」と云つて、高山を誘ひ出した。

尾越は有名な飲食店の所在を可成りよく知つてゐた。そして、一二度來たことがあるといつて、お座敷天ぷらの出來る山王下のある家へ入つて行つた。料理の支度の出來る間に電話で、ある友人を呼び出して、明晩の會食の約束をした。

まつ子が、宿屋では思ふやうに出來ない汚れ物の洗濯をしたり、溜追つて入用な衣服を取出したりして、K市から歸つて來た時には、高山の取揃つてゐる机上の小さな仕事が終りに近づいてゐた。

「もう一日か二日でこれが片付くんだから、それまでは面倒な話は聞かないことにしよう」と云つて、彼れは筆の運びの妨げられるのを恐れた。神經の少しの動搖でも直ぐに筆の上に影響して、書きかけた物を引裂いたり反古にしたりすることが、たび〳〵あつたが、彼れのさういふ癖がまつ子には可笑しかつた。そして、時々は、裂かれた物を貼合せたり棄てられた物を拾集めたりして机の上に載せとくこともあつた。そんな屑物も何時か高山の手で利用された。

「私も汽車で疲れて、話をするのも大儀だわ」と云つて、まつ子は横になつて休息したが、こんないゝ季節に、埃つぽい宿で徒らに日を過してゐるのが、腹立たしいほど詰らなく思はれた。

「あなたが早く方針を極めなければ、私の方針も極りませんよ」まつ子は焦躁の感じに堪へられなくつて口走つた。今度見て來た實家の內情よりも、自分たちの境涯が一層痛切に胸に迫つて來たのであつた。

「まあ、も少し待つてろ」

高山は、今の仕事が終りさへしたら、自分たちの身の處分について、いろ〳〵考へが浮んで來さうに思はれてゐた。（自分が工夫して書いてゐる筆へ事から、却つて反射的に刺戟を受けて、純つてゐる心が磨かれて、自分の實生活についてもいゝ分別が出て來さうに思はれてゐた）

いよ〳〵筆を擱いて一息吐く間もなく、意外にも青木家の老主人が訪れて來た。彼や態度には心の屈託が少しも現はれてゐなかつたので、高山もさしていた〳〵しい思ひをしないで、その後の經過を訊ねることが出來た。

「とに角親類廻りだけはさせて、觀つて呉れた家へも返禮をすましたから一安心です。身體が惡いと云ふのだから、先方の氣儘にさせて、當分養生をさせることにして置きました」と、老主人は答へた。

「しかし、急に身體が惡くなつたといふのも變ですね」

「私の方でも、はじめのうちは先方の仕打がいかにも誠意がないと思つてゐましたが、先方の兩親の腹が多少分つて見ると、強いことはいへなくなりますよ」

櫻嫁よく實家へ行つた花嫁が、歸つて來るべき時に歸つて來ないので青木家の人々は寢耳に水のやうに驚いた。口ではあゝいつてゐたものの、家の中が殺しくて淋式なのが、若い女の氣に入らなかつたのであらうと、老主人はかねて氣遣つてゐたことを思寄せて獨り極めにした。伸人が先方の意を通じて來るのも然々しかつたし、課者を紛しに良三を先方へやつても、當人には會はれなかつた。花嫁持參の華美な調度を絶えず見せつけられながら、親子で善後の方法を講じてゐるのは苦しかつたが、何かにつけて出入する親戚や知人に返答のしようのないのが何更苦しかつた。老主人はかつて經驗しなかつた世間の狹い思ひに惱まされなければならなかつた。

「いつそ、道具を一切送返した方が綺麗サッパリになつていゝかも知れないのだが」と、老主人は歎息してその氣になつたが、此處まで運んで來た結婚の道筋や、そのために消費した勞力や金の事を考へると、躊躇められるものなら平穏に收めたかつた。

「どうせいけないのなら、早く見切をつけた方がいゝぢやありませんか。長引かすだけ此方が馬鹿を見るんですから」と、親戚の一人で冷靜な差出口を利くものもあつた。

訪れて來た時には、老主人もわれ知らず、詰問した。

「あなたの仰有ることには誠意がない。伸人からいろ〳〵承つてはゐますが、どれがあなたの本心やら分らないのだから困るぢやありませんか。お預りしてる物を何時お引取りになつてもいゝやうに、私の方では整理はして居ります」

「誠意がないとお腹立ちになつても、私の方では一言も御座いません。自分の注意が行屆かなかつたことをお詫びする外はないのですが」と云つて、田村の老人は目を伏せたが、一二滴の雫が膝の上に落ちた。「しかし、青木さん、私は一人の娘を戲談に結婚させたのぢやないですから、私の心もお察しを願ひたい。長い目で見てゐて下さればお分りになることですが、此方との御緣に不平のあらう筈がないぢやありませんか」

「それでどうなさるおつもりなんです」老主人は相手の涙を見ると、強いことはいはれなかつた。

何しろ身體が弱いのですから、閑靜な處へやつてみつしり養生させたいと思つてゐますのです。子供の持つてゐる運命を見す〳〵喰めさせるのは、私も親として忍ばれませんので、申上げにくいことも申上げる次第なのです。世間體の惡いことも萬々承知しては居りますが、子供の壽命には替へられません」

田村の老人は、一二年前からの娘の健康狀態について話して、そのために此方との緣談を喜びながらも延ばし〳〵して來たことを打明けた。

さう云はれて見ると、老主人は誰れを相手に爭ふことも憤ることも出來なかつた。せめて重なる家へだけでも花嫁に瀕出しして貰つて、あとは向うまかせにする外に、執るべき手段はなかつた。

老主人の話振が概括的なので、高山はこまかい陰影を知ることは出來なかつた。かういふ場合の處置について意見を訊かれても、確信のある返答をすることが出來なかつた。

老主人が用足しに出てゐる間に、まつ子は高山に向つて、

「私が行つてる時に、たね子さんは一度お父さんに連れられて話しに來ましたよ。その時良三に、お腹の中をよく打明けて話したのでせう。……そのまゝ落着くのかと思つたら、お父さんが急立てて連れて歸つたんですがね。金紗に櫻の花を散らした衣服を着て帶を高々と結んだ花嫁さんが、店員が差掛けた薄綠の涙手な模樣のついた雨傘を持つて店先を出て行つた時には、誰れの目にも綺麗な花嫁さんに見えましたよ。良三には尙更さう思はれたのにちがひありませんよ。……だからこれからはお父さんの一存では行けなくなるでせう。良三も此間までの良三とは違ひますからね」

まつ子は田村の老人のやうな父親を有つた花嫁の心强さに思及んで、「世間體よりも娘の生命を大事にするんですもの」と、ある感じを籠めて云つた。

その夜、高山は老主人を誘つて、有樂座の名人會へ出掛けた。寺子屋を語つた呂昇の聲はまだ昔ながらの艶を有つてゐた。演藝には多少の興味をもつてゐる老人は、久振りで聽く名手の音曲に感歎しながらも、此間うちの心勞が出て來たやうに、屢々目を閉ぢては假睡の寢息を洩らした。一仕事終つた後で心の勉んでゐる高山も、呂昇の聲に誘はれて、をり〳〵首を垂れては昏睡の夢心地になりかけた。淨瑠璃の中の喜怒哀樂の聲々が、遠い浮世の騷ぎのやうに微かに彼れの耳に響いた。そして、

"Anywhere, anywhere, out of the world" といつた誰れかの聲が、彼れの力のない心の底で聞かれた。

いろはおくりの半ば頃にふと目を開いた二人は、座を立つて歸りを急いだが、その夜は、古人が美しと見た臨月が春の都會の空を照らしてゐた。

宿へ歸つて、狹い部屋に三人が枕を並べて寢床に就く前に、

「私の家も當分二階がみんな空いて居りますから、御都合で何時でもいらつしやい」と、老主人は云つた。

生まざりしならば

牛島夫妻は、芝の家を出ると直ぐに、小田原へ電報を打つて置いて、銀座でビスケットや餡パンや牛肉の罐詰や甘栗や、それに繪本だの玩具だのをドッサリ買込んで、豫定の時刻に新橋から汽車に乘つた。四五日續いた酷寒のあとで、今日は急に春になつたやうに温かつたので、重ね着した肌は汗ばんで、スチームで温められた車室にぢつとしてゐるのが氣持が惡いくらゐであつた。おそでは、セルのコートを脱いで地味な大島の羽織をも脱いだ。成るべく氣に留めないやうにと心掛けてゐるのに關はらず、汽車に乘るたびに、人々の風俗が目についてならないのであつたが、今日は土曜日で、箱根へでも行くらしい客と、丸髷に結つた藝者とが彼女の眞向ひに乘合せてゐたので、ことに無關心ではゐられなくなつた。さほどの容色ではないが、歳が若くつて身裝がいゝから美しく見られると思はれるにつけて、自分が浮世を棄てた氣で身じまひをかまはなくなつたことが顧みられた。いやに取澄ましてゐるその女の目が絶えず此方へ注がれてゐるらしいのが次第に煩さく思はれだした。「なんだい、鼻の下の長い赭つ面の、口の中の臭さうな男にねだつて、たまに遠出をするのに、金滿家の奥様にでもなつた氣でゐるから、チャンチャラ可笑しい」と、反抗的な氣持にさへなつた。

「かう温かいと小田原は梅が咲いてるだらう」と、夫の長吉が窓外の春めいた景色を眺めて云つたが、おそでは返事をしなかつた。

横濱から乘つた客の中にも、藝者連れの一組がまじつてゐた。この方は大勢で、誰れも様子ぶらないで、惡巫山戯をし合つては騒ぎだした。おそでは眞向ひの藝者によつて、焦立たしい思ひをさせられてゐたのを忘れて、新な客の騒ぎを見ては、自分もその仲間に加はつてゐるやうな思ひをして笑つた。停車場で買つたサンドキッチや蜜柑なども、駄洒落を言ひ合つていろいろに戯れながら食べてゐるのを見ると、いかにも旨さうに思はれた。男の一人が甘納豆を手玉に取つて、口を空へ向けてその一粒々々を巧みに受けては自慢すると、他の男も藝者ともその眞似をした。若い藝者が紙燭をつくつてそつと男の襟に插むのを見ると、おそでは自分たちが昔してゐた惡戯を思出して可笑しくなつた。一人の男が藝起結びにした紙を老妓に貰つて、それを額に載せて顔を仰向けにして、額の紙を鼻の下まで辷り落して、突出した唇で受留めると、他の男も女も然心にその藝當を眞似た。老いたる顔の長い男は、目をパチクリさせて紙を辷らせながら、「おれは長つ面だから前途遼遠だ」と云ふと、おそでもみんなと一しよに聲を出して笑つた。

「馬鹿なことをしてる」と、長吉は小聲で云つて、年甲斐もない老人の所行を苦々しく思つてゐたが、

「あんな人、氣さくでいゝぢやないの」と、おそでは云つた。この頃は次第に氣むづかしくなつて來た夫も、昔はあんな馬鹿遊びをして日を暮らしたこともあつたのだと、昔を懐かしがつてゐたが、

「俊一は停車場へ迎へに來てるだらうか」と、夫が話掛けると、周圍の騒ぎは他所事となつてしまつて、心は俊一の上にのみ集まつた。

「氣分が惡くさへなければ迎へに出てゐます

さ。上田さんにもこの前さう云つてあるんだから、樂みにして出掛けてるでせうよ。あの子の氣が向いたら明日は自動車で箱根へ遊びに行かうぢやありませんか。あの綺麗な湖水を一度見せてやりたいと思つてゐますの。屹度喜びますよ。湖水なんてまだ見たことないんでせうから」

「お前は時々妙なことを云ふね」と、長吉は柔和な切れの長い目に微笑を浮べて、「俊一が湖水を見たことがあるかないか、誰れよりもお前が一番よく知つてる筈ぢやないか」

「本當にさうでしたわね。上田さんが私たちに秘密で俊一を箱根なんぞへ連れて行きやしまいし、外にあの子をかまつて呉れる者はないんですから」と、おそでは自分と夫との外には、世界中で、あの羸弱い一人子の手綱りになるものは一人も牛人もないことを、今更のやうに思ひ詰めながら、「でも、私、時々はかう思ふんですよ。……あなたは笑ひなさるかも知れないけれど。……俊一は私たちが氣がつかない間に、いろ〳〵た變つた事を見たり聞いたりしてゐるんぢやないかと思はれるんです。あの子は突拍子もないことを云ふつて、あなたは笑ひなさるけれど、俊一にはさういふことを云ふ譯があるのかも知れませんよ。私たちに分らないからつて、一概に笑つて濟ましちゃいけないでせう。……上田さんの不顧の事だつて、なか〳〵よく知つてゐるんですもの。學校へ行けないから、讀書は十分に出來ないけど、智慧は人一倍にあるんです。あなたは小さいものだと、誰れでも見くびつていらつしやるからいけないの」

「智慧はどうでもいゝから、身體がもつと丈夫になつて呉れゝばいゝんだがね」

「それは、身體だつて丈夫になりますさ。身體がよくならないのなら、なんであの子一人を小田原なんぞへ打ちやらかして置けるものですか。五年しか壽命のない子は、何處にゐても五年しか生きられないと極つたなら、私は一日だつて、あの子を私の側から手放しすりやしませんよ」

「それはおれだつてさうさ」

長吉も今日は、今までに例のないほどに、俊一の身の上を案じてゐて、それに關聯した自分たち夫婦の將來についてもおそでよりはもつと深刻に思ひ惱んでゐたので、默つて獨りで考へてゐるのは堪へがたかつたが、俊一の事に深入りした話を觸れると、今日はおそでが人前をも憚らないで、非常識なことを云つたり、泣聲をしたりする恐れがあるので、蟲を殺して彼女に逆はないやうにして、わざとニコ〳〵したりしてゐた。

おそでは例の藝者連れの一組の方へまた目を注いだ。そちらでは魔法罐やポケットウヰスキーが取出されて、酒盛をはじめられてゐた。

さつき泣きだしさうにしてゐたのに、もうあんなものを面白がつて見てゐると、長吉は妻の氣まぐれを淺間しく思つたが、その方が昨夕のやうな狂態を見せられるよりは無事でよかつた。小田原通ひも既に一年あまりになるのであつたが、彼れは今度ほど嗜い氣持で汽車に乘つたことはなかつた。部屋借りなぞして俊一に不自由な思ひをさせるのが痛々しさに、無理な工面をして、小さいながらも去年の夏に別莊を建ててからは、月に二三度夫婦連れで俊一を見舞に行くのは何よりもの樂みになつてゐて、「あの子のためにならどんな苦勞でも厭はない。衣服なぞどんな流行おくれの物を着てゐてもいい。たとひ借金に責められても、あの子だけは出來る限りの贅澤をさせてやりたい」と、夫婦は心を一つにして話合つてゐたくらゐであつたが、今日は別莊を建てたことをも長吉は後悔してゐた。自分が死んだあとまで俊一が生殘

つてゐたなら、どんなに悲慘であらうかと思ふと身の毛も彌立つやうで、いつそ今のうちに、自分たちに看護されながら穏かな往生を遂げて呉れればいゝと、かつて思ひもそめなかつたことを望んだりしてゐた。

國府津あたりまで來ると、俊一が出迎へに來てゐるかどうかと、二人は頻りに氣にしだした。が、小田原へ着いて見ると、看護婦の上田も來てゐなかつた。

「今日は加減が惡いのかしら」と、おそでは、心淋しくなつた。

「電報がおくれたのかも知れないね」と、長吉は氣休めを云つた。雜沓してゐる電車に乘るよりも今日は歩いて行かうと云つて、土產物を兩手に提げて停車場を出た。そして、電車には乘れない俊一が、歩くか、俥に乘るかして此方へ來かゝつてはゐないかと、それを待設けながら向うへ目をつけてゐた。

おそでは藝者連れの一組を乘せた自動車が、自分の側を威勢よく行過ぎるのを見送りながら、ちよつと眉を顰めた。

「あなたもたまには、あんな風に陽氣に遊びたいと思ひなさらない？」

「そんなことを思つたつて爲樣がないぢやないか。いつになつても餘分な金は出來やしないのに」

「お金のあるなしに關はらないでさ。あなたは全くあゝいふ氣持になれなくなつたのかしら。人間の性分も歳を取ると變つちまふことがあるんですかね」

「おれは別段性質が變つたやうにも思はれないがな。變つたのは顏付ぐらゐなものだ」

「顏の變つたのは私ですよ。女は若くなくちや駄目ね。私たちの前にゐた丸髷に結つてた藝者は若いから麗があつて綺麗だつたわね。あなただつて始終横目を使つて見てゐたぢやないの」

「何だ、馬鹿な。前にゐる女を見るのに横目を使つてどうするんだい」

長吉は苦笑した。彼れは若い時分の不身持のむくいで、生れながらに病毒を宿してゐる俊一を生んだことを、この頃は果しなく悔いるとともに、さういふ因果な子を自分のために生んだ田舍藝者の小千代に對して、やゝもすると憎惡の念を抱くやうにさへなつてゐたが、小千代ばかりではない、藝者といふすべての藝者を詛ふやうな氣持にさへなつてゐた。藝者の出る宴會をば成るべく避けるやうにして、たまにさういふ處へ行つても不快な感じに苦しむのを例としてゐるほどで、さつきも、汽車の中でいろんな藝者連れの客と乘合せて、自分の愚な昔を見せられるやうなのに惱んでゐたのであつた。

おそでは、夫が若い美しい女を見ても、以前のやうに心を動かさなくなつたらしいのが、本當だとして、喜ぶよりも、男としての衰へとしてむしろ物足らなく思ふのであつたが、さうして氣取つて上べだけ裝つてゐるのだと思はれて小憎らしかつた。

「でもあの藝者はちよつといゝ女ね。あなただつてさう思ふでせう。高慢ちきなところがあるからいやだけど、驕いでた藝者とはまるで人柄がちがふぢやないの」

「それはさうだ……」長吉は、おそでが何時になつても、藝者といふ者を女の中の花でもあるやうに思極めてゐるのを卑んだが、自分が骨の髓までも藝者ぎらひになつてゐることは、おそでの痛い處に觸れる譯なのだから決して口へは出さなかつた。

「あのくらゐの藝者を自分のものにして大威張で且那顏をしようとするには大抵ぢやないわね」

「それはさうだ」

「あなたは四十にはまだ大分間があるのに、お爺さんじみちやつたんですね。男は陽氣なことが好きたやうでなくつちや出世しないのぢやないでせうか」

「お前は時々は陽氣になつてはしやぎだすから仕合せだよ、尤も昨夕のやうに陽氣になり過ぎて取組合ひをやつたりしちや困るけれどな」と、長吉が笑ふと、おそでも笑つて、

「あの時は私の蟲の居所が惡かつたの。およねの奴もいやに突掛つて來るんですもの。……それは昨夕のやうな見つともない姉妹喧嘩たぞ止した方がいゝんですけれどね。でも、私時々は陽氣な遊びをしたいと思ふことがあるんだから、今夜は俊一の處で、昔なで何か賑かなことをして遊ばうぢやありませんか、俊一だつて喜ぶでせうよ」

「それもいゝだらう。だが、俊一の喜びさうな遊びは何だらう？　あの子が心から嬉しさうな顏するのを、おれは一度でも見たいと思つてるんだけれど、駄目だな」

「さう思ふのはあなたの氣のせゐなのよ。俊一の身體はいくら不自由だつても、他人が面白いと思つてることはあの子にも面白いんです。嬉しくつてたまらないつていふやうにニコ〳〵してることがあるのに、あなたは感じないんですかね。あなたよりも私の方が俊一の氣持をよく知つてるんですよ」

ブラ〳〵歩いてゐるうちに、土產物の重みで手がだるくなつた。電車の線路を横切つて狹い道を濱の方へ進むと、松葉杖をついた俊一の後姿がふと二人の目に映つた。

「俊ちやん」と、おそでは思はず、大きな聲で呼掛けた。

まん丸い顏した看護婦の上田が、足を留めて振返つて會釋すると、俊一も重い足を留めてニヤリと笑つた。

「今病院へ行つて來ましたのよ」と、上田は夫婦の近づくのを待つて云つて、一しよに家の方へ向つた。

「今日は元氣がよさそうね。血色もいくらかよくなつたし」と、おそでは云ふ。

「やうなことを云つて俊一に寄添つて、鼻の尖つた目のドンヨリした痩せた顏を覗いて見ながら、彼れの身體中を紙畫したいやうな情火に燃えてゐた。彼れの腰のまはりは、骨膜炎のために蜂の巢のやうに穴があいてゐて、そこには、一日として醫者の手當てを怠つてはゐられないほどに多量の膿が溜るのであつたが、おそでは出來るものなら、俊一の骨をも肉をも腐らせてゐるさういふ膿を、自分の脣で吸取つてやりたかつた。

夫妻は俊一を中に挾んで何か話しながらトボトボと歩いた。

僅かに三室しかない小さな別莊で、間に合せの安普請なのだが、病弱な子供を本位として造られてゐて、風通しも日當りもよかつた。寢臺を据付けて、そこから寢ながらガラス越しに庭や松林が見えるやうになつてゐた。庭には小さな池がつくられて、夏は金魚などを飼つたり水遊びが出來るやうになつてゐた。庭木戸から出ると、海は直ぐ近くなので、波の音はよく聞えて來たが、俊一は毎日の病院通ひ以外には、戸外へ出ることを好まなかつた。退屈な思ひをしてゐる看護婦が、自分が遊びに行きたいために、屢々俊一を唆かすので、彼れは子供心にも厭つてばかりゐては惡いやうな氣がして、三度に一度は誘ひに應じてゐたが、自分から進んで、活動寫眞を見たいとも海を見たいとも言ひ出したことはなかつた。庭にブランコが備へつ

けられてあつたが、それは近所の子供に利用されるか、時としては、看護婦と近所にゐる若い學生との遊び道具に用ひられるばかりであつた。

彼れは寫臺に横はつてゐない時には、日當りのいゝ障子の側に、火箸のやうに細い、青白い足を投出して、冬になつても整つてゐる蠅の動くのを見たり、木立の多い隣の庭へ朝から晩まで來ては鳴いてゐるいろ〳〵な小鳥の聲を聞いたりした。あるひは繪本を見ることもあつた。看護婦がをり〳〵聽かせて呉れる昔噺や怪談や人情話にも耳を傾けた。學校へは一度も行つたことのない彼れも、いつとなしに文字を習ひたくなつて、此方へ來てからは、看護婦が新聞や雜誌などによつて數へて呉れる文字を熱心に覚えようとした。

ある時、彼れは母親が送つてくれた子供の雜誌を開けて見てゐるうちに、「ねてゐてころんだためしはない」といふ文句を、自分ひとりで讀み得たのが嬉しくつて、屢々それを口に出した。

「うまいことを云つてるわね。全くその通りだわ。俊ちんのやうに何もしないで、家の中で寢てばかりゐるのが、間違ひがなくつていゝんですね」と云つて、看護婦は欠伸凄ぎに小唄を唄ふのと同じ調子で「ねてゐてころんだ」を繰返した。をり〳〵遊びに來る分松葉の抱への三子にも「俊ちやんの名言」として吹聴した。

上田にでもをり〳〵揶揄はれるのが、腰部の痛みと同じやうに俊一の心に痛く響くのであつた。彼れは聲を揚げて泣くことはなかつたが、どうかすると、うな垂れて萎れてゐることがあつた。ふと癇癪を起して繪本を破つたり玩具を壞したりすることもあつたが、元氣な子供のやうにあばれだす力はないのだし、拗付も薄弱に出來てゐるのだから、その癇癪も傍の者を驚かすには足らなかつた。

今日は日が温かかつたし、看者の手當てを受けたあとだつたので、俊一の機嫌もよかつた。土産の玩具のうちでは、天狗の面を喜んで、それを自分の寫臺のそばに懸けた。「買つた時にはこんなものは仕様があるまいと思つたのだが、かうやつて見ると、成るほど面白いね。しかしお前は夜こんなものを見ても怖くはならないか」と、長吉が訊くと、

「怖いものか。僕はこんな眞赤い顏が好きだ」と、俊一は答へた。

「へえ、お前は赤いものが好きなの？　はじめて聞いたわね」と、おそでは俊一の好みの一つをはじめて發見したやうに喜んだ。

彼女は東京の家にゐる時とはちがつて、此方では、氣持よく奉所働きをして、新しい魚を材料に二三品の料理を注意して拵へて、四人で食卓を圍んだ。銚子もつけて、彼女自身も久振りで猪口を手にした。酒をうまいとは思はないのだが、昔自棄飲みをした癖が殘つてゐるので、飲むとなると隨分飲めた。「お母さんの顏はあの天狗樣のやうになつたらう。女が眞ッ赤い顏しちや見つともないけれどね」と云つたりして、酔ふほどに飲んだ。長吉も不斷より快く餘分に飲んで、上田にも勸めて、無理强に二三杯猪口を重ねさせた。たゞ一人青白い顏してゐる俊一は、みんなの顏が紅味を帶びて來るのを不思議に思ひながら見廻してゐた。

「此間うちは寒う御座いましたから俊ちやんは何處へもいらつしやらなかつたのです」と云つて、上田は公園の梅が咲きかけたといふ噂を傳へた。

「ぢや、明日はみんなで梅見にでも出掛ませうね」と、おそでは調子づいて云つたが、するとふと片足の短い俊一の松葉杖突いた妻に乘人の意地悪い目が注がれる有樣が思出されたので、人目の多い處へ遊びに出掛ける興味は薄

らいでしまつた。親子だけで、人通りの少い淋しい濱邊か野良の方を選んで散歩したかつた。それよりも今夜のやうに家中に閉籠つて、傍に氣兼ねしないで遊んでゐる方が却つてましなのかも知れないと思はれたりした。

「俊一は今何處か行つて見たいと思つてる處があるの？　公園へは行きたいの？　箱根の山へでも登つて見たかあないの？」と訊くと、俊一は首を振つた。

「僕は船に乘つて見たいな。艪が押せるといゝんだけれど、僕は駄目だらうな」

「だつて海は危いぢやないの。この邊の海は荒いから船がひつくり返つたら助かりやしないよ。お前は船に乘つたことがないから、珍らしいもののやうに思ふんだね。それなら、もつと身體がよくなつてから汽船に乘せて上げようよ。みんなで房州へでも行きませう……。ねえ、お父さん」と云つて、おそでは、長吉が悲しさうな眼付で俊一を見詰めてゐるのを顧みて、「この頃、お父さんはお酒を召上ると、却つて沈んぢやつていけない、今夜は羽目を外して賑かに遊ばうつて、あなたも約束しなすつたぢやないの。俊一の氣に入りさうな遊びつて何だらうね」と云つて、看護婦の方へ向いて、「上田さんは、いろ〳〵な流行唄を知つてらつしやるから、唄つて聞かせて頂戴ね。私なぞ、長いこと、寄席へも淺草へも行つたことがないから、當節の唄は些とも知らないのよ。いつだつたか、雨がショボ〳〵降つてゐた日に、あなたは井戸端で洗物しながら唄つてらしつたわね。雨は降る降る城ケ島の磯につて。聲がいゝから、私聞惚れてゐたんですよ。私など喉が干枯びちやつて駄目なんだけど、あなたは病氣したことがないし、歳も若いから、聲もいゝんですね」

「唄でも何でも、上田さんに隱し藝があるんなら、一つやつて貰ひたいもんだね」長吉はいく醉つても、今夜は妻子の顏を見るにつけて起つて來る鬱陶しい思ひを、擽散らさうとして、お世辭でなしにさう云つた。

「私は無藝大食だから駄目ですわ。奥さんのを一度聽かせて頂きたいつて、三子さんによくさう云つてゐるんですよ」

「私は何をしてもカラッ下手なの。若い時分には逆立歩きはちよつと上手だつたのだけど、この歳でそんな眞似は出來ないわね」

おそでは、ふと興に乘つて、汽車で見た酒輕な遊びの眞似をした。紙捻をつくつて額に載せて、仰向けた平顏をゆすぶり〳〵唇のところまで運ばせて、「うまく行つたわね。あなたもやつて御覽なさい」と左右を見た。俊一は面白がつてニヤリと笑つたが、長吉は何を馬鹿なと云つたやうな苦笑ひした。

「サア、やつて御覽なさい」と、おそでが上田の顏へ紙捻を押付けると、上田は半ばお義理に眞似て見たが、自分で笑つてばかりゐて熱心が足らなかつたので、二三度やり直しても、いつも鼻のところから横へ落ちた。同じ平顏でも、艷のある顏の肉を微動させながら、紅い下唇を突出して、接吻をでも待受けてゐるやうな上田の動作は、長吉の目についた。俊一は上田のしくじりを更に面白がつて笑つた。

「サア、あなたもやつて御覽なさいな。俊一が面白がつてるぢやありませんか」

おそでは夫にも迫つた。長吉は妻や看護婦の顏で擽でられ、唇で濡らされた紙捻を額に載せて、同じやうに道化た眞似をした。俊一はますま〳〵面白さうに、聲を立てて笑つたが、「お前もやつて御覽」と母親に勸められると、いやだと首を振つて後退した。

「極りが悪いの？　だつて、此處にはお父さんとお母さんとみんなお前の好きな人ばかりゐるのぢやないの。遠慮することはありやしないよ。

どんな惡戯をしてもいゝんだよ。思ひ切り暴れて御覽なさい。誰れも叱りやしないから。……お母さんは俊ちやんと一しよに暴れてもいゝんです」

「お前に暴れられちや堪らないね」と、長吉は嫌味らしく云つたが、心の中では本當にさう思つてゐた。喜怒哀樂の昂進した時のおそでの擧動の物狂ほしさを、彼れは危かしがつてゐたのであつた。「俊一はお父さんの髪を梳いてお呉れ。以前は髪梳きが好きだつたのに、この頃はいやになつたのかい」と云つて、綺麗に分けてある自分の長い髪をわざと手で掻亂して、頭を前へ突出したが、俊一は母親の渡した櫛を手に取ることさへしなかつた。

「床屋さんはもう廢業したのね。お父さんの髪の毛は長くつて煩さいから、鋏でチョキ〳〵と切つて上げればいゝのに。俊ちやんが切るのなら、お父さんだつて怒んなさりやしないよ」とおそでは、不斷看護婦が繃帶や膏藥などと切るのに用ひてゐた剪刀を引寄せて、自分で毛を切る眞似をして見せた。

「そいつは御免だ」と、長吉が頭を引込めると、

「いゝぢやないの。俊ちやんの悪みに切らせておやんなさい」と云つて、おそでは俊一を嗾しかけた。

「切らせたきやお前の髪でも切らせるさ」

「よ御座んすとも。罪ほろぼしにいつか切らうと思つてたこともあるんだから」

「俊一は お父さんやお母さんの髪を切つたつても、首を斬つたつても、幸福にも樂みにもなりやしないね。サアお父さんのところへお出で。繪本を讀んで聞かせてやらう」と云つて、長吉は危險な剪刀は妻の手から取つて、後の方へやつて、俊一を招いたが、俊一は萎れた顏して大儀さうにして、坐つた處を動かなかつた。

夫婦が戲れるにしても爭ふにしても、上田は傍で見てゐるのを快しとしないで、湯に行くと云つて出支度をした。

「どうせ明日は お風呂を立てさせるよ」とおそでは云つたが、上田は買物をして來ると云つて外へ出た。

「あの人はよく辛抱して呉れるけれど、他人は他人だから、やはり氣が置けていけない。親子三人でかうして暮らしてゐられたら、私迷はないでゐるんだけど、駄目ねえ」と、おそでは眞面目になつて歎息した。

「だからお前が思切つて此方に居つくことにしたらいゝぢやないか。おれは下宿住ひでも我慢すると云つてるんだから。さうすれば看護婦の高い給金だけでも助かるんだから、お前の收入がなくなつても、どうにかやつて行けんことはないだらう」と、長吉も眞面目に云つた。

「そりや、私にだつて、繃帶の掛け方ぐらゐは分らないことはないから、看護婦まかせにして置くよりは、私が終始側についてゐた方が、俊一の身體のためにもいゝに違ひないんです。だけど、私は一錢の稼ぎも出來なくなつてあなたの收入ばかりを當てにするやうになつちや、心細いんですもの。あなただつて下宿生活を平氣だなんて今こそ云つていらつしやるけど、長くは辛抱が出來やしませんよ」

「なに、おれは辛抱して見せるよ。それにおれ一人だつたら、一週に二度ぐらゐは此方へ泊りに來られるだらう」

「私を俊一の側へつけといて、あなたは東京で一人で暮らした方がいゝと思つていらつしやるの？　此間からの話の樣子ではどうもさうらしいわね」

おそでは、一刻も俊一を離れてはゐられないと思ひ詰めるたびに、自分の職業などは拋出して小田原に定住する氣になるのであつたが、

自分の 目の屆かなくなつたあとの夫の身持が疑はれるので、さうも極めかねた。近年夫はどんな女とも關係ひをつけてはゐないらしいけれど、機會さへあつたら誰れにでも手を出しさうな樣子が見えてゐるのだから、少しでも油斷は出來やしないと、彼女の猜疑の目は、留守番と臺所の手傳ひのために同居してゐる妹のおよねの上にさへ及んでゐた。

「お前が此方へ來たいのなら、さうしようと云つたまでぢやないか」と、長吉は話を外さうとしたが、おそでは この頃の癖で、いやにこだはつて來だした。

「俊ちやん、お父さんはね、お前やお母さんを何時棄てて、他所へ行つちまふかも知れないんだよ。だけど、心配しないでおいで。お母さんは大丈夫、俊ちやんを離れやしないよ。どんなに貧乏しても、二人で仲よく暮らしませうね」

おそでは さう云つて、俊一を抱締めて頬擦りしたが、俊一が悲しさうな顏すると、彼女も涙を落して、夫に棄てられたあとの母子の境涯を想像しては悲みに耽つた。

「下らないことを云ふものぢやないよ」長吉は妻のいやみな泣つ面を見ると、酒の醉ひも醒めるやうに感じながら、「俊一は此方へおいで。お父さんが面白いお話を聞かせて上げようね」と、兩手を差延べて、俊一の細つこい身體をぐつと引寄せようとしたが、おそでは、取られまいとして ます〳〵だき締めるので、俊一は出拔けに「いたいよ〳〵」と叫んで泣き出した。そして驚いた二人が手を離すと、彼れは力もなく横に倒れた。

やがて俊一が機嫌を直したころには、さつき峻しくなりかゝつてゐた夫婦の心も和いで、三人は火鉢を圍んで、甘栗など食べながら邪氣のない笑ひ話に耽つた。昨日は何をたべたか、一昨日は何をたべたか、この頃は夜よく眠られるかといふやうなことを、おそでは俊一に訊ねたが、上田が側にゐないのを幸ひに、彼女の日常の行爲をも彼れから訊かうとした。

「上田さんは笠間さんと箱根へ行く約束をしとつたよ」と、俊一は先日耳に留めたことを話した。

「××にゐる書生さんとかい……。今度の人は親切でよく辛抱して呉れると思つてゐたけれど、ぢや、あの人もそろ〳〵いや氣がさして來たのだね」

「上田と笠間といふ人との仲が怪しいのかい」と、長吉は横から口を出した。

「それは極まつてゐますさ。私は大分前から感づいてゐたんです。そんなことはどうでもいゝんだけど、あの人が行つちまふと、また代りを探さなければならないから、苦になるんです」

「どうでもいゝつてことはないよ。お前は何とも思つてゐないやうだけれど、若い男と女とが巫山戲た話なぞしてゐるのを俊一に聞かせるのはよくないよ」

「それは構はないぢやないの。この前の人もああだつたし、どうせ若い人を輒めば、そのくらゐなことは大目に見てゐなきや駄目ですよ。看護婦が色男をこしらへたからつて、あなたが嫉妬やかなくつてもいゝのよ」おそでは ツケツケ夫をやつつけて、俊一には柔しく、「それで笠間さんはこの頃は毎日やつて來るの？」

「時々遊びに來るの。緣側へ腰を掛けて話をするんだけど、僕は側へ行かんやうにしてるんだ。昨日はお菓子を持つて來て、僕にもたべろつて云つたけれどね、僕行かなかつたの」

「なぜ？　笠間さんは活潑ないゝ人ぢやないの」

「でも、僕はあの人好きぢやないよ」

「笠間さんがお前の氣に入らないことを云つたのかい。お前は何でもよく分るからね」

俊一は自分の病氣について侮辱的な言葉を笠間が云つたことをよく覺えてゐたが、それを兩親の前に打明けては惡いやうな氣がしたので默つてゐた。

「俊ちやんは此頃も上田さんは好きなのだらう。あの人のすることで氣に入らないことがあつて？　かういふところがいけないと思つてることがあるのなら隱さないでお母さんに仰有いよ」

「そんなことない」

「お前は上田さんが好きなのね。この前の人よりも」

俊一が首肯くのを見て、長吉が、

「ぢや、少々給料を增してもいゝから、もつとゐて貰ふやうにするんだな」と云ふと、

「六十圓だつて特別なんですもの。この上出してたまるものですか」と、おそでは、はじめ高い謝禮を出溢つた夫が、無造作にさう云ふのを怪しんだ。

「でも、俊一の氣に入つてるのなら、少々の金は惜まないで、引留めといたらいゝぢやないか」

「それはさうだけど、お金さへ出しやゐてくれるとは限らないわ」おそでは、さう云つて、置時計を見て、「俊ちやんはもう寢んねしなきやならないでせう。今夜はお母さんが寢かして上げようね」と、俊一に寢支度をさせて、十歳にもなる男の子としては輕過ぎる身體を橫抱きにして、寢臺の上へ運んだ。柔かい夜具をふはりと掛けてやつて、おとなしく目を閉ぢた俊一の細そりした顏を暫らく見下ろした。

言葉が止切れると、東京とはちがつた周圍の寂しさが二人の心にしみ入つた。長吉は食卓の上に頰杖を突いて煙草を吸ひながら、寢臺の方へ目をやつてゐたが、おそでの身體が邪魔になつて、俊一の寢姿は見られなかつた。都會の濁つた空氣の中にゐては健康が長く保たれないといふ醫師の注意によつて、一人子をこの海岸に住ませることになつたのも、今になつて見れば、一時の氣休めに過ぎなかつたことが分るにつけて、自分たち親子三人の身は暗い闇に鎖されてゐるやうに思はれてならなかつた。そして、近年夫妻が、こんな不具な兒を生んだ罪亡ぼしのために心を合せてゐたのが、昨今はお互ひの心に隙間が出來て來たので、大切な一人子の始末が長吉には言ひやうのない煩ひになつて來た。

「俊一」さへ生まれてゐなかつたら、こんな愚な女とはとつくの昔に別れてゐる。三十を過ぎたばかりで生氣を失つて末枯れた顏や肉體をしてゐるやうな女を、男盛りの自分が、後生大事に守つてゐるにはあたらなかつたのだ。それも俊一が人並に健かになる望みがあるのなら、それだけを樂みにして、外の事には目を瞑つてゐてもいゝのだが、どうせ望みはないに極まつてゐる」と思ふと、いろんな苦勞に堪へる張合ひがなかつた。

彼れは寢臺の側に立つてゐるおそでの後姿を見ながら、せめて彼女を此方に定住させて、自分一人東京で氣儘な下宿生活をするやうにでもなつたらと望んでゐた。上田が俊一の氣に入つてゐるのなら、おそでは、どうならうとも、さういふ女に俊一の短い一生の介抱を頼むことにしたらいゝと、おそでの亡くなつたあとを空想したりした。そんなことを空想するにつれて、若い學生と上田との關係が不快に感ぜられだした。

「俊一」はもう寢つきましたよ」と、おそでが火鉢の側へ戻つて坐つたところへ、看護婦も歸つて來た。湯上りで一層艷々してゐる上田の若い顏は、今度は不思議に長吉の目を惹いた。

「あなたも毎晩淋しいでせうね。波の音ばかり

聞えて」と、おそでが云ふと、

「さうでも御座いませんわ。この頃は私もスツカリ小田原に馴れたんですね」と、上田は爽かな聲で應へて、「今三子さんに會ひましたのよ。出拔けに後から私の目を壓へてお酒臭い息を吹き掛けるから、私吃驚しました。あの人は氣さくでいつも面白さうですのね。明日は此方へお伺ひすると云つてました」

長吉は、妻が若い藝者など相手にして、得意になつて自分の昔を語つたりするのを好まなかつたが、でも、三子の快活な氣質、太り肉の健かな若い身體に對しては不快な感じを寄せる譯に行かなかつた。

翌日もあたゝかい日であつた。俊一は誰れよりも早く目をさまして、雨戸の隙間から差して來る朝の光で天狗の面を見たり、窓際へ來て鳴いてゐる小鳥の聲を聞いたりしてゐたが、昨夕は不斷よりもよく寢れたために何だか嬉しいともなく、ひとりで微笑まれた。先日上田さんが笠間さんに、「あの子はいくら手を掛けたつてどうせ駄目なんです。一度風邪を引いても、それでおしまひなんです。何も知らないんだから可哀さうですよ」と小聲で云つてゐたのを、自分のことを話してゐるのだと、俊一は耳に留めてゐて、今もその言葉を思出したが、その言葉は少しも彼れを悲しませはしなかつた。父や母が傍にゐて呉れるのは何よりも嬉しくつて、時々來て呉れるのが待たれてはゐたが自分が兩親に隨いて東京へ歸りたいとも思つてゐなかつた。

炊事でも洗濯でも、すべての雜用を足して呉れる隣家の主婦が、臺所口から聲を掛けると、おそでは目を醒まして、「今日は朝からお風呂を立てますから水を汲んで下さいね」と、寢床から云つた。

東京のゴミ〳〵した處で働いてゐる夫妻は、雨戸を開けて田舍の朝の空氣に觸れると、日頃の疲れが拭はれてしまふほどの快さを覺えた。長吉は朝餐の支度の出來る間濱邊を散歩することにした。日はよく照つて風もないので、沙の上に蹲んで大海を見渡してゐたが、すると、そこへ笠間がやつて來て、額を見合せると、先方から挨拶した。

「お散歩ですか」と云つて、相手の顏をよく見ると、以前と違つて血色がよくなつて頰に肉もついてゐるので、「大變お丈夫になりましたね」と云ふと、

「えゝ、身體はスツカリよくなりました。月が變つて溫かになつたら、此方を引上げようと思つてゐます」と、笠間は元氣よく云つて、目禮して行過ぎた。

「彼奴、おそでや上田にはよくお喋舌してるくせに、おれを嫌ひたがつてあんまり話をしたがらない」

長吉はさう思ひながら、笠間の方を見やつてゐたが、健かになつて東京へ歸つて行く笠間の幸福を思ふにつけて俊一の事が新にいたましく胸に迫つて來た。そして、同じ人間の形を具へて生れて來ながら、俊一のみが悲慘な生存を續けねばならないのを、考へればどうしても諦めかねた。

で、家へ歸つて、

「笠間さんは肺病が根治したのだらうか。見たとこは、大變達者さうになつてるね」と、誰れに云ふともなく云ふと、

「海岸でお會ひになつて？」と、上田は眞面目で、「あの方はこの頃は、病氣しない前よりも强くなつたから寒い日にでも海岸を運動していらつしやるんですつて」と、手拭を姉樣かぶりにして、障子に拂塵をかけながら云つた。

「難病が癒つたあとは格別に悦しいものでせうね。肺病のやうな病氣でも養生次第で完全に癒るんですかね」

「あの方も一時は絶望していらしつたんですつて。だから、これからは生命びろひをした氣で勉強するのだと云つていらつしやるんですよ」

笠間の生國や通つてゐた學校について、二人が訊ねたり答へたりしてゐる間、おそでは側にゐながら口出しないで浮かない顔をしてゐたので、長吉が氣にして、言葉を掛けると、

「さつき上田さんのお手傳ひをして、俊一の繃帶を取替へたのですけどね。それはひどくなつてるの……」と、おそでは萎れて云つたが、その顔は不斷よりも一層憂さん染みてゐた。「以前よりももつとひどいんです。五つも六つもの穴がぺつたり膿でふさがつてゐて、ガーゼを通すと、穴の中は横の方まで空虚になつてゐて、此方からあつちへガーゼが通るんですもの。まるで田舎のお竈見たいに、口は別々になつてても、奥は一しよに穴が開いてるんぢやありませんか。あなたも一度よく見ておやんなさい」

「それはおれも醫者からよく聞いてゐるよ」

長吉は、今更云はなくつてもいゝことを妻が口に出すのを苦々しく思ひながら顔を顰めた。

「聞いただけでは駄目ですよ。病氣の本元をよく見なければ」

「おれは醫者ぢやないし、見たつて爲方がないぢやないか」

「顔だけ見てると、俊一も次第に丈夫さうになつてゐるから、あなたは平氣でゐられるんです」

さう云つて夫の冷淡を攻めだしたおそでも、平生は俊一の患部を熟視することを恐れて、看護婦の手傳ひをする時でも、成るべく目を外らすやうにしてゐたのであつたが、今朝は、事によつたら今後自分一人で病兒の世話をしなければならぬと覺悟して、勇氣を出して、日々の手當ての仕方を看護婦に教はつた。そして、地獄をのぞいたやうな戰慄を覺えたのであつた。

掃除を濟まして、不斷は亂雜になつてゐる家の中を綺麗に取片付けて、四人揃つて遲い朝餐の膳に向つたが、夫妻は氣持よく食物を味ふことが出來なかつた。風呂が沸くと、長吉が入つたあとで、おそでは俊一の身體を拭つてやつて、障りのない處を丹念に磨いてやつた。手の指先や手首などを、石鹸や垢磨を用ひていぢり廻してゐると、俊一はおとなしく、愛撫に依つて受ける快感を樂んでゐるやうにニコついた。湯の温かみで被れの青い皮膚にも、人間らしい艶が出て、頬にも紅味が差した。

「俊ちやんの身體にはこれだけの元氣があるんだから、いゝ空氣を吸つておいしい物をたべて養生してゐれば、次第に丈夫になるんですよ。さう心配することないの」と云つて、おそでは急にまた希望を回復して、自分の心を慰めた。

夫婦が案じてゐたやうに、看護婦が暇を與れよと申出はしなかつたし、隣家の主婦の給金や家の費用も滯りなく支拂ふことが出來たし、子供を相手に一日遊び暮らして、夜の汽車で二人一しよに歸りさへすれば、例の通りなのであつたが、午過ぎに留守居のおよねから、盜難に會つたといふ意外な電報が來たので、二人は吃驚して顔の色を變へた。

「戸締りをよくしなかつたんだらう。家を空けて遊びに出てゐたのかも知れない」と、おそでは妹の不注意を憤つて、側にゐたら殴りつけてでもやりたいやうに昂奮したが、衣類持物のすべてを盜まれてしまつたやうな氣がするとともにドンヨリした萎れた兩眼に涙が浮んだ。

「大切な物をみんな盜まれてしまつたら、これからどうするんですよ。今日が目から前のみ蓋のまゝで路頭に迷はなきやならないぢやありま

せんか」

「さう慌てなくつてもいゝよ……しかし、電報が來たのだから直ぐ歸らなきやなるまいな」長吉は努めて落着いて云つたが、この頃自分の心の内や外に微見えかゝつてゐた惡運のおとづれが、この盜難を最初として續々起つて來るのではないかと恐ろしく感じた。

「なに、家ぢう探したつて碌な物はないんですよ」と、强ひて笑ひを浮べて、看護婦の慰問に答へて、おそでを促して歸支度に取掛つた。いくら急いだつて、汽車の中で二時間あまりもぢつとしてゐなければならないと思ふと、二人はもどかしくてならなかつた。

「お母さんは四五日したらまた來ますからね。上田さんの云ふことをよく聞いて、おとなしくしていらつしやいよ」と、おそでは俊一に別れを告げたが、俊一はいつもの通りで、ちよつと寂しい顔をしたばかりで、さして別れづらい樣子を見せなかつた。

「俊ちやんをお願みしますよ」

「ぢや、お大事に」

上田は、戸口でいつもの通りの挨拶を取りかはして、二人がアタフタと出て行くのを見送つたあとで、家の中へ戻つたが、盜難の話を聞かされたために、病兒と自分との二人生活が俄かに心細く思はれだした。

「俊ちやん、あなた怖かないの？　東京のお家のやうに此處へ泥棒が入つたら困るわね」と云ふと、

「さうしたら何でも持つて行かせればいゝでせう」と、俊一は事もなげに云つた。

「泥棒つて、たい物を取つて行くばかりぢやないのよ」

「ぢや、どうするの？」

「刃物で斬つたり突いたりするかも知れないの。刃物を振廻されたりしたら、あなただつて怖いでせう。私今夜から此處で寢るのが怖くなつてよ」

「ぢや、あなたも東京へ歸つちまふの？」

「歸りたくつても、あなたを一人此處へ打ちやらかしといて歸りやしないわ」上田は、ふとこの病兒を不憫に思つてさう云つて、「俊ちやんはこの頃は東京へ歸りたかないですか。たまにはお母さんに隨いて歸んなさればいゝのに」

「歸りたい時にはいつでもさう云つてやればお母さんが迎へに來て呉れるんだからいゝ」

「お母さんが大事なひとり息子を田舎へ打ちやらかして置くのも不思議だれど、あなたが孤兒見たいにこんな處に一人ぼつちにされて、さう淋しいとも思はないのは私不思議でならないわ。親子の仲はそんな筈ないと思ふんだけど。……」

さう云はれると、俊一も母親の懐かしい思ひが胸に迫つて來たが、口へは出さなかつた。そして、自分で寫臺の方へ行つて横になつた。仰向けに寢たまゝ目をパッチリ開けて、狹い天井を見ながら、窓外の物音に耳を留めてゐたが、其處では近所の子供が騒しい聲を立てて遊んでゐた。俊一には、言葉がよく聞き取れなかつたが、時々は煩さく感ぜられる子供等の騒ぎも、今日は心の慰みとなつた。彼れは障子を開けて、彼等の活潑な擧動を見下したりした。四人も五人もの子供が、向ひの危かしい石垣の上に登つて、互ひに他を突き落さうとし合つてゐた。拍子を取つて勢よく飛下りる者もあつたが、飛びおりて平氣で地上に立つのが、俊一の目には不思議なこととして映つた。彼れは誰れの足にも腰にも怪我のないのを不思議がつた。さういふ騒ぎの間に、小鳥が隣の樹木から自由に此方へ飛んで來るのを、彼れの目は見のがさなかつた。

俊一が外へ心を惹かれてゐる間に、上田は

縁側で日向ぼつこをしながら、朝のうち讀みそこなつた新聞を讀んでゐたが、そこへ三子が湯屋の歸り途に立寄つた。髮をハイカラに結つてゐて、面長な引締つた顔立も、中流の奥樣らしいがベタ〳〵したやうな歩きつ振りが、どうしても田舍の藝者か酌婦見たいで本性をあらはしてゐた。

「あの人は顔ばつかり お上品らしくしようとしてゐるけど、胴から下がだらしがない」と、おそでが上田に云つたことがあつた。

上田はいゝ話相手として迎へて、夫婦が例よりも早目に歸京した譯を話した。姉さんには是非聞いて貰ひたいことがあつたのに惜いことをしたと、三子は大袈裟に云つて、

「此方の御別莊へ、有りつたけのお金をつぎ込んで、箪笥の中も金庫の中も空つぽだなんて云つてたけれど、泥棒に取られるやうな物が有るんですかね」と、冷かすやうな口調で云つたが、「でも、お氣の毒ね。たまに俊ちやんに會ひに來なすつたのに」と、同情した表情をして、寢臺の方を覗いて、「俊ちやん、寢ていらつしやるの?」と聲を掛けた。

俊一は振返つて微笑したが、直ぐに寢床に横はつて、二人の方から顔を背向けた。「あなたのお母さんはあなたの生まれる前には三子さんのやうだつたのよ」と、かねて上田から聞かされてゐたのだが、彼れはそのために却つて三子に親しみがなくなつてゐた。

「私この頃思ひ餘つてることがあつて、姉さんの智慧を借りたいと思つてゐたのよ。姉さんが ゐないから上田さんに聞いて頂かうかしら」三子は嬉々しくさう云つて、溫まつてゐた肌の冷たくなるのをふと氣遣つて、障子を締めて火鉢の側へ寄つて「かういふ家にゐて、氣儘に寢たり起きたりしてゐたらいゝでせうね」と、何かを考へてゐるやうな目をしてあたりを見廻してゐた。

「淋しくつて爲樣がないわ。それに大切な病人を預かつてるんだから油斷は出來ないんですもの。私さつきから考へてゐたのよ。俊ちやんの身體に絲まりがついたら、私の白衣生活もおしまひにしようと思つてゐたのですけれど、それまで待つてゐられさうでないの」

「でも、もう少しの間でせうから、勘めてお上げなさいな。あなたならこそ、牛島さんも安心して俊ちやんを任せてゐられるのよ」

これまでにもをり〳〵話合つてゐたやうに、おそでが紙見を打ちやつて置いて、夫の側に喰付いてゐるのを二人で非難して、口では何と云つてゐても、子供よりは御亭主の方が大切なのであらうかと、さういふ實感を持つてゐない二人は、いろ〳〵に當推量をし合つたが、話がそつちへ外れて、いやに眞面目になりだすと、三子は最初話しかけた話を遂めるのが後目たくなつた。

「此方の主婦さんは嫉妬深いのね。今度なぞ側で見てるといやになるんですよ」と、上田が云つたので、

「それは燒餅やきですとも。だから、私牛島さんには成るべく口を利かないやうにしてゐるのよ。あなたも氣をつけてらつしやい。詰らない疑ひを受けちやいけないから」と、三子は應へて、「でも、上田さん、何よ」と調子づいて、「男でも女でも、あんまり燒かなさ過ぎるのも强合ひのないものよ。私の知つてる人の奥さんは、御主人が何をしてゐても、本當に平氣でゐるらしいの」

「ケーさんて方でせう。主婦さんに聞いてよく知つてますわよ」

「ケーさんでもコーさんでもいゝから、上田さん親身で聞いて下さいね。……私、その人に月に三度ともしみん〳〵會やしないのよ。一年の餘

も喧嘩一つしないで照降なしに續いて來てゐるのだけど、その人のお腹の中が、私にはどうもよく呑込めないの。私の身をどうして呉れるんですよと、改まつて一つ訊けばいゝのだけど、それを口に出すのが怖いやうで、何時會つても云はれないのよ。……私は前から氣をつけてゐたから、大した借金は殘つてゐないのでせう。年末にも、濱の××屋だの此處の××からいろいろな反物を持つて見せに來るし、家の姉さんが傍から勸めるし、私も去年ので間に合はせるのは氣が利かないから、浮かり手を出しかけたの。下着も欲しい、長襦袢も欲しい、帶も欲しい、今年は山嶽か流行つてるなんて、私だつて、お正月には切立ての新しい物を身體につけたいには絲まつてゐまつさ。だけどこゝが大事な所だと、私は考へちやつたの。まだ二年や三年稼がうと思へば稼げなかないし、ちつとやそつとの借金でこの先が暗くなるつてことはないのだけど、若しもあの人に心から私の身を引取つて呉れる氣があるのなら、私の方でも今をのうちにその覺悟をして、あの人に成るべく餘計な迷惑を掛けないやうにしなきやならないと思つて衣服のことなんぞ目を瞑つて我慢したのよ。御覽なさい。私は指環さへ一つ持つてゐないのぢやないの。私だつて以前は負けることは嫌ひな見榮坊だつたから、頭のものだつて、手足につけるものだつて、何處へ出ても恥かしくない物を、一身上拵つてゐたのだけど、ある事のために、さういふものはみんな無くしたのです。……年末にあの人に會つた時に、お前はお正月の支度は出來たかと訊かれたから、そんなものはどうでもいゝんですと、負惜みを云ふと、さうかつて、それつきりだつたの。見榮坊の私が物はよくつても去年のお古を着てまがひ環珊の簪なんぞ差して、見榮も外聞もかまはないで、お座敷へ出てゐるのは誰れのためだか何のためだか、あの人はよく知つてるくせに、とゞの詰りの肝心なことを私の前で言ひ出さないのだから、私じれつたくて仕樣がない。先方でも私の方から言ひ出すのを待つてるのかも知れないけど、私どうしても思切つて口には出せないのよ。家の事情でお前の一生を見てやる望みはないから、これまでの緣だと思つてくれと云はれはしないかと、詰らないことが氣になつてならないの」三子はふと聲に力を入れて、「全體あの人の奥さんが燒餅をやかないからいけないんだわ。騒いでくれゝば、いゝか惡いか、どちらかにキツパリ道がつくのだけれど、奥さんがおとなしいから、强合ひがないつたらない」と云つて、「上田さん、あなたはどうお思ひになつて?」

「私には分らないわ」上田は相手の手放しの惚氣を座興として聞いてゐたのであつたが、ふと自分の胸に思ひ當るところがあつた。「それで、その方があなたの一生を見てやると仰有つたらあなたはすぐにも今の稼業をお止めになるの?」

「さうよ。私今が丁度廢業にいゝ汐時だと思つてゐるの。看板の空いたのがあるからつて、私の氣を引いて見る人もあるけれど、私氣乗りがしないの」

「あなたの稼業は傍で思ふほど面白かないんですかね」

「私別段稼業をいやだつて思やしないんですけどね。でも、好き好んで藝者なぞになるものぢやないわね。あなた方の御商賣の方が樂いのよ」

「さうでもありませんよ。私もはじめは白衣生活にあこがれてゐたのですけれど、内輪に入つて見るといやなことばかりなのですよ」上田はかねて見聞してゐる内輪のいやな事を話さうとしたが、相手に度視まれるのが氣になつたの

で、話を轉じて、「ケーさんとかはいくつになりなさるの？」

「牛島さんよりも一つか二つ上なんですよ。もうお爺さん」

「さう」

「變に思つていらつしやるのね。でも、男で本當に手頼りになるのは四十くらゐの人なのよ。あなたは二十代の若い方がお好きなんでせう」

三子は平氣でさう云つたが、上田はドギマギして返事をしないで目を伏せた。笠間のことを三子に知られてゐるのではないかと思ふと、顔が火照つて來て、向ひ合つてゐるのが堪へられなくなつた。

「俊ちやんは私たちの話を聞いてゐたのね」と、三子は目をパッチリ開けて此方を見詰めてゐる俊一の方を顧みて云つたので、上田はそれを幸ひに

「俊ちやんはお醫者さんへ行かなきやなりませんね」と云つて座を立つた。

上田は三子よりは却つて三つ四つ年上であつたが、色慾についての經驗や知識は三子に及ばないと思つてゐたので、をり〳〵此處へ來ておそでや自分に向つて、無遠慮にしやべり立てる彼女の話をいつも好奇心をもつて面白く聽いてゐたのであつた。今日は三子が歸つたあとで俊一を連れて病院へ往來する間に、三子の云つたことを思出してゐると、笠間に對する自分の氣持がそれによく似てゐるのぢやないかと思はれだした。お互ひに心の中で思ひ合つてゐても、どちらかが口へ出して云はないかぎりは、煮え切らない日がいつまでもつゞくのだと、上田は笠間と自分との伸をさういふことに極めてしまつた。「でも、あの女はケーさんに一生を見て貰へるか貰へないか分らないだけで、一年の餘も關係は續いてゐるのだけれど、そこへ行くと、私たちの間は綺麗なものだ」と、自分の肉體の課白を誇る氣にもなつたが、それをひそかに誇つたあとでは直ぐに、三子などのやうに自由に自分の肉體をあつかひ得られる境遇の人々の羨ましさが力强く胸にわき立つた。今までに二三度誘惑を斥けて自分の潔白を守つて來たことも、おそでなどに向つて口でこそ自慢げに吹聽したものの、眞實は幸福を取逃した口惜しさが感ぜられてゐた。……そして、今差當つて自分をかまつて呉れさうな男は、笠間の外には無いのに、その笠間も月が變つたら東京へ歸つてしまふのだと思ふと、上田は思惟々々してゐられない氣がした。

夜になると、平生の夜にまして淋しかつた。退屈さましに、俊一に童話を一つ二つ讀んで聞かせたが、氣乘りがしなかつたので、いつものやうな親切な說明は附加へないで、書物を押やつた。どうせ笠間は、近所の噂を憚つて夜は遊びに來ないに極つてゐる、誰れか話應へのある人が訪ねて呉れゝばいゝと、頼りと心待ちにされた。三子などは今時分、唄つたり喋舌つたり、いろんな男に巫山戯られたりしてゐるのであらうと想像すると妬ましくなつた。いくらか報酬がよくつて氣樂であるために、病兒を相手に浮々と幾ケ月も過したことが後悔された。

「泥棒が來たらどうしようね、俊ちやん」と、默つてばかりゐるのが堪へられなくなつて、獨言でも云ふ氣で、ふと話をしかけたが俊一が返事をしないので、「泥棒だつて、あなたをどうもしないだらうけれど、私はひどい目に會はされるかも知れないから、氣味が惡いわ。笠間さんにでも泊つて貰ふといゝんだけれどね」

「さうしたらいゝでせう。僕、笠間さんが來たつて構やしないよ」

「あの人は本當にいゝ人よ。あなたはさう思はないの？」

俊一はあの人は緣ひだと云ひかねて、ニヤリと笑つただけであつたが、上田は「獨言を續ける氣で、

「私笠間さんがこの家へ毎晩泊りに來てくれるといゝと思ふのよ。あの人だつてあんな汚らしい貸間に一人ぼつちで寢てゐるよりや、此處へ泊りに來た方がいゝにちがひないのだけど、世の中は面倒くさいものね。俊ちやんも身體が丈夫でもつと歳を取つたら、屹度好きな女の人が出來るに違ひないわ。あなたは今どんな女の人がいゝと思つてゐて？　三子さんのやうな人？　私のやうな人？」などと云ひながら、俊一の側へ寄つて、自分の顔を押出して見せたが、俊一は返事はしないで微笑してゐた。三子や上田の若い艶のいゝ顔は、母親の顔とはちがつた味ひをもつて、彼れにも感ぜられてゐたのであつた。

「あなたはお父さんに似て、顔立は惡かないのよ。病氣のために血色が惡いから何だけれど、本當はいゝ男なの。鼻筋が通つて面長でちよつと品がいゝのね。鼻の恰好が笠間さんにも似てゐるのね」

上田はさう云つて俊一の鼻を抓んでいぢくつて、彼れが後退すると抱きかゝへて頬ぺたをおつつけた。「私の鼻はあなたのとはちがつてペタンコでせう」と、俊一の手を執つて强ひて彼女の鼻をいぢらせた。毎日大小便の世話までしてゐるので、俊一の肉體のどこに觸れるのも珍らしいことではないし、いつも臭氣のある汚い肉塊のやうに彼れを見做してゐたのだつたが、今夜はかつて感じなかつた快感が感じられた。……空想の昂奮した今夜の彼女は鼻ばかりではなくつて、俊一の肉體のどこをでも笠間の肉體であるやうに夢見た。俊一自身も、彼女のくどい愛撫を避けるやうに身體を動かしながらも、彼女に手放されたくない氣持になつてゐた。

「さあお休みなさい」と、やがて、上田は俊一を寢臺の上へそつと置いた。そして、火鉢の上で滾つてゐた鐵瓶の湯を金盥にうつして、脣を拭ひ手を洗ひ、戸締りに氣をつけて寢床に就いた。

今度牛島夫妻が來たら、何とか口實をつくつて暇を貰ふことにしようと、略極めて、上田は四五日の間ソハ〳〵して過した。その間に一二度笠間が隣側へ立寄つてくれたのだが、折惡く、隣の主婦が庭の掃除に來てゐたので、通り一ぺんの笑ひ話を取りかはしただけであつた。

「今月一杯でいよ〳〵此方をお立ちになるの？」と訊くと、

「えゝ、もういつでも立てるやうに準備が出來てるんです。僕のために送別會でもやつて呉れませんか」と、笠間は云つた。

「こんな土地にでも永くいらしつたんだから、いよ〳〵お別れとなると、思ひ殘ることもあるでせうね」

「そりやあるかも知れませんね」

「私も少し事情が出來て近々に東京へ歸ることになるかも知れないんです」

「ぢや、僕と一しよに歸つちやどうです」

「御迷惑ぢやなくつて？」

それから互ひに揶揄ふやうな口を利き合つたのであつたが、上田はあとでの思出に、笠間の心の底がまだ見極められないので低徊しかつた。低徊しさのあまりに、あたりが纏まつて、隣の主婦も來てゐない夜には、病兒を側へ引寄せては、惜氣もなく、若い女の熱の籠つたキッスを、病兒の肉體のあちらこちらへ與へた。か

うして、病兒が笠間と化してそこに寢てゐると思ふと、泥棒の恐怖も自ら忘られた。

「×時の汽車で行く」といふ牛島夫妻の電報を見ると、上田は四五日以來の事を考へて、稍〻後目たい氣持がした。早速鏡に向つて粉飾をして、俊一の顏をもよく洗つてやつて、時刻が來ると、外出をいやがる俊一を宥め賺して、停車場へ連れて行つた。途中で、「お母さんにいろんなお喋舌しちやいけませんよ。よ御座んすか」と、いく度も言ひ聞かせたが、そのたびに、俊一は首肯いた。

窓から顏を出してプラットホームを見てゐた牛島夫妻は、汽車を下りると直ぐに、俊一のそばへ寄つて行つたが、彼れの顏が、この前よりも著しく窶れて色が青褪めて、目元や口邊に漏らした笑ひさへ凄いやうなのに驚いた。二人はこも〴〵上田に訊糺したが、上田は、

「別段お惡いつてことないんです」と云つて、「暫らく家にばかりいらしつたのに、久振りで此處までお歩きになつたのでお疲れなすつたのでせう」

「ぢや、お迎へに來て貰はなきやよかつたのにね」と云つて、おそでは俊一を衆人の目から庇ひながら停車場を出て、俥を連ねて家へ行つた。

いつものやうに土產は多かつたが、俊一は嬉しい顏もしなかつた。

「先日あんた風に慌てて歸つたから、氣になつて、今度は早く樣子を見に來たのよ」と云つておそでは、上田の問ひに應じて盜難の話をした。……盜まれた物は二三點の衣類に過ぎなかつたので、留守居のおよねの身にも怪我はなかつたのだから、夫妻は歸つて見て安心したのだけれど、およねが恐れて、この後の留守居番を堅く斷つたのに困つた。で、いつそのこと、これを機會に、おそではある商店への通勤をよして、芝の家を片付けて、小田原に定住することにして、長吉は下宿住ひをしようかと、夫妻の間に話が纏まりかけてゐるのであつた。

「さうなつたら俊ちやんのためにもよろしいんですね」と、上田が云ふと、

「盜難も、弱い子供を打遣らかしといた天罰かも知れないのね。以後氣をつけろつて、何處かの神樣か佛樣かが泥棒になつて私たちを戒めて下すつたのかも知れませんよ」と、おそでは此間から殊勝らしく感じてゐたことを云つた。

盜難を神佛のお諭しのやうにまで、おそでが祭り上げるのは、長吉には可笑しかつたが、それを緣に生活變更の覺悟を妻がしだしたのは、彼れの思ふ壺に陥つた譯なので、何よりも嬉しかつた。それで、妻のその覺悟を弛めさせないやうにと、此間から自分も貴族で盜難をあがめ來つてゐた。

「お前が俊一の看護に一心になつてゐてくれれば、おれも安心して一生懸命に働かれるよ」と、屢々云つて、母親の愛情によつて子供の難病のよくなることを空想するとともに、彼自身の自由な生活の道が久振りで就に開かれるのを空想してゐた。今來て見ると、俊一は意外に衰へてゐたが、上田はこれまでよりも愛かしいやうに、彼れには思はれた。

其後の病兒の食事や睡眠などについて、夫妻は上田に訊糺して、變りはないと聞いて一時安心はしたが、俊一が側になく不機嫌に振舞つて、取つてやつた土產の西洋菓子を疊の上へ拋出したりするのを見ると、それが病氣の重くなつた爲ではないかと疑はれた。「氣持が惡いのかい」と、左右から訊ねたが、俊一は返事をしなかつた。

で、不斷のやうな陽氣な遊びやお喋舌は自ら遠慮されて、しめやかな夜を過した。上田自身の希望ででもあり、おそでも覺悟してゐたので、看護婦(附)屋の打合せもされた。

「私だつて二三日身を入れて上田さんに敎はつたら、俊ちやんの看護や手當てが、間違ひなしに出來ないことはありません。長い間人まかせにしていゝ氣になつてゐたのがいけなかつたのです」と、おそでは決心を强めて云つた。そしてその夜は病兒の眠りを守るやうに、寢臺の直ぐ側へ自分の寢床をのべた。

俊一は寢支度をしてゐる上田の方を見やつて、彼女が昨夜や一昨日の夜とはちがつて、きつい顏をしてゐるのを不思議に思つた。留守中の上田の所行ををり〳〵母親に向つて打明けてゐる彼れも、先日來の彼女の不思議な所行は誰れにも云つてはならないやうな氣がしてゐたが、上田が東京へ歸りさうな話をさつき傍で聞いてからは、彼女に別れることが何となく悲しくつて、母親が代りに來てくれることもさして悲しくは思はれなかつた。それに上田が笠間と一しよに歸るらしいことを考へると、不斷から何となく好きでなかつた笠間が憎らしくさへ思はれ出した。

「俊ちやんは眠れないの？」眞夜中にふと目を醒ましたおそでが、電氣を點けて、寢臺を覗いて云ふと、俊一は目を瞑つて夜具の中へ顏を引込めた。

「氣分が惡かないの？　背が痛かないの？」

「どこも痛かないよ」と、俊一は力を入れて答へた。

「それだといゝけれど、夜中にでも氣持が惡かつたら、お母さんを起しなさいよ」

「ハイ」

俊一はキッパリ答へたが、母親が電氣を消して寢床に就くと、再び目を開いて闇の中を見詰めた。遊び友達と云つては一人ももたないで育つて來た彼れは、この土地へ來てから知合ひになつた隣の主婦やその子供や、三子や笠間や、病院の醫師や看護婦などの言語動作を耳目に觸れて、わづかに世の中を知つてゐたのであつたが、みんなが彼れを、「死にかゝつてゐる人間」「可哀さうな人間」として取扱つたり噂をしたりしてゐるのを、彼れはつねに腹に留めてゐて、自分は足が惡くつて外の人のやうに飛んだり跳ねたりが出來ないのに、夢の中では屢々外の人にもまさつて飛べもし躍ねられもされるのを不思議に思つてゐた。そして、闇の中で目を開けてゐると、誰れかが寢臺の上へやつて來て、自分を捉へて何處か遠い處へ連れて行きはしないかと思はれて、多少恐ろしかつたが、連れられて行つて見たい氣もした。兩親には平生離れてゐるし、隣の主婦や三子や醫師など、彼れの世の中のすべての人々の言語動作に懷かしみも親しみも寄せられないでゐる彼れは、知らない誰かに連れられて、遠い處へ行つても構ふことはないと、ひとりで覺悟を極めてゐた。むしろさうなることを待設けることさへあつた。今夜は闇の中で目を開けてゐると、ことにさう思はれた。……波の音は不斷よりも强く響いて來た。風が吹いて雨戸が音をたてた。今にも誰れかが寢臺の側の窓の戸を開けて入つて來さうな氣がして、俊一は顏をそつちへ向けたが、そのまゝで知らず〳〵淺い眠りに落ちた……再び目が醒めた時には、音のしてゐた雨戸の隙間は明るくなつてゐて、自分が同じ處に寢てゐるのを、彼れは知つた。

寒い風が吹いて日差しも鈍かつたので、夫妻は朝から火鉢に親しんで、内輪の暮らし向きの話に耽つて、外へ出ようとはしなかつたが、正午過ぎに三子の訪ねて來る前觸れがあると、長吉は彼女に會ふことを緣つて、一人で寒さを冒して公園の梅を見に出掛けた。

おそでは三子の此間の話を上田から聞かされてゐたが、今日はさういふ浮ついた他人の事に關はり合つて笑ひ興ずる氣にはなれなかつた。

で、「姉さん」と三子が威勢のいゝ聲で呼び掛けて入つて來ても、いつものやうに調子を合せて迎へはしなかつた。淡雅の事や夫婦別居の事など一通り話が運んだあとで、三子は、

「姉さんが小田原へ越していらつしやれば、私は相談相手が出來て、心强くなるわね」と、喜んで、「それで、牛島さんは一週に一度づつくらゐ此方へ泊りにいらつしやるの？」

「えゝ、さう、……毎日一しよにゐて喧嘩ばかりしてゐるよりや、その方が二人のためにもいいんですよ」

「姉さんも變つたわね」

「變つたつて？　何が變つたのさ。私が何年經つても亭主一人を後生大事に守つて、一日だつて放さないやうにしてるつて、あなた達は笑つたことがあつたわね」

「……でも姉さんは可愛い俊ちやんのために、且那樣と別々に暮らさうといふのだから、結構なことだけれど、私を御覽なさいな。あの人に奥さんがあるために、いつまでも一しよになれないで愚圖々々してるぢやありませんか」三子は忌々しさうに云つた。

「……私は本當の事は知らないけど、話にだけ聞いてゐると、あなたは全く愚圖々々ね。成つちやゐないわよ。早くどちらかに極めたらいゝぢやないの？　あなたに腕があるのなら、ケーさんとかをうまく抱き込んで、奥さまでも何さまでも、さつさと追拋出させるやうにしたらいいぢやないの？　どうせ藝者稼業をしてゐるのに、お上品ぶつて、世間の人に遠慮や斟酌をするには當らないのさ」おそでは自分の昔を顧みて、三子のやうな場合を想像しながら、ふと昂奮して云つた。

「だけど、あの人のお腹の中が私には分らないんですもの」三子は甘えた口調で、「それは私を可愛がつて呉れるのですけど、私の一生の手綱りになつて呉れるのだか呉れないのだか、それがハッキリ分らないの。姉さんだつたらあのくらゐな年輩の男の人の心がよく分るでせうけど、私には見當がつかないのよ」

「歳を取つた男はずるいからね。家の人だつてさうですよ。……三ちやんはケーさんにお金の迷惑も掛けないやうにして慾も得も棄ててかゝつてるのに、その實意が先方へ通じなくつちやいゝ加減あなたを釣つといて、いざとなつたら背中を向けようつていふ腹なのかも知れないよ。當てにしないで用心しなきやいけないね」

「ケーさんは決してずるかないのよ。餘計な癖しがらせなんかは云はないのよ。……姉さん一度ケーさんに會つて下さらない？」

「いやなことだね。お温かい所を見せつけられて溜るものぢやない」

「あら私顔負なのよ。……ケーさんの樣子を通りがかりにでも、姉さんに見て貰ひたいの。姉さんなら、私なんぞとはちがつて、一目見たら、あの人の價値が分るでせう」

さう云はれると、おそでもうかと得意になつて、「全體ケーさんて云ふ人は何處の誰れだか、正體を明かして御覽な」

「姉さんが會つて呉れゝば明かしてもいゝわ」と云つて、三子はおそでが首肯くのを見ると、炎の室にゐて此方の話を耳に留めてゐるらしい上田に遠慮しながら、疊の上に書いて見せた。そんなことではおそでがよく呑み込まないので、硯箱を持つて來て鼻紙に書いて、その人の家の道筋の圖取りまでもした。

「小綺麗ないゝ家なのよ。奥さんが實家へ行つてゐた時に、私夜おそく庭木戸から忍んで行つて、夜明頃まで泊つたことが一度あつたの。夜中に私が鮒をかくと、ケーさんは私の耳を引張つちや起し〳〵するの」

「饒舌ぢやないよ」おそでは睨みつける眞似をした。鼻紙に書かれてゐる名前は見るか聞くかしてゐるやうな氣がした。

「私姉さんにはまだ秘密で話したいことがあるのよ。姉さんに後楯になつて貰つて一仕事して見たいことがあるんですよ。一日箱根へでも行つてゆつくり相談したいんだけど、姉さんは一人ぢや困られないかしら。旅費は私の分は私が出してもいゝわ」

「箱根へでも何處へでもそのうち行つてもいゝけれど、當分は駄目らしいの。それよりも私一度この土地のお茶屋で遊んで見たいよ。お金が出來たら、三ちやんの家の人をみんな××へでも呼んで御馳走したいと思つてるんだけれど、とんなに貧乏ばかりしてゐちや駄目ね」

「お止しなさいよ、そんな無駄なことは。……それよりも、姉さんは此方へ越していらつしやることに纏まつたら、此方で一商賣はじめなすつちやどう？　私いゝことを思ひついてるのよ」

「相談つてそのことなの？　あなたの思つてること大抵は察しがついてるさ」

おそでは意味ありげな笑ひを浮べた。上田を憚つて明らさまに口へは出さなかつたが、三子がかねて他事のやうに話してゐたことを思出して、「叔父さんのお店のやうな爺むさい商賣のお手傳ひは、私の性には合はないのだからね。俊一に手が掛らなければ、もつと面白い稼ぎをして見たいのさ」と、ふと心が浮き〳〵した。色氣のある社會には、牛島が好まないために、長い間遠ざかつてゐるし、藝者屋だの料理屋だのを營むには、いゝ手蔓もないし、資本も得られさうではなかつたが、三子から聞いてゐる曖昧屋なるものは、自分の力でもやつてやれないことはなさうに思はれた。地道な稼業ではうまい儲けの得られないことを長い間知つて來た彼女は、昔通つて來た社會が利益の多いところだつたやうに慾の上から思はれたし、第一いろ〳〵な男をあやつつたり、いろ〳〵な男に揶揄はれたりする樂みは、ともすると思出されてならなかつた。

「私には私の望みがあるのだしさ。姉さんは智慧もあるし腕もあるのに、面白い稼ぎもしないで、陰氣な顏してボンヤリしてちや損ぢやないの」

三子がおそでを唆かして歸つたあとで、おそでは上田を顧みて、今日は自分が俊一を病院へ連れて行かうと云つたが、

「俊ちやんは少し熱があるやうです。風邪をお引きになつたのでせう」と云つて、上田は檢温器を病兒の脇の下へ插んだ。

長吉が公園から市街の方を散歩して、コーヒー店へ寄つたりなどして歸つた時には、病院の代診が上田に呼び迎へられて、病兒の腰部を洗滌をして、發熱に對する注意をもして歸つて行つたあとであつた。おそでは代診に聞いたことを話して、

「昨日寒いのに停車場まで迎へに出たのがいけなかつたんです」と、昂奮して上田の不注意をもなじつた。

「さうばかりでもあるまいよ。昨日停車場で見た時に非常に寒れてると思つた。醫者は別段變つたことも云はなかつたのだね」

「變つたことつて何も云はなかつたわね、上田さん」

「えゝ、何も仰有いませんでした」

長吉は窓臺の側へ寄つて、萎れて老人らしい相をしてゐる病兒の顏を見入つて、

「氣分が惡いのかい。身體の何處が痛いなら痛い、氣持が惡いなら惡いと云つて御覽」と訊ねたが、

「僕はどうもないんだ」と云つて、俊一は額を顰めて目を瞑つた。

「それならいゝが默つてゐちや駄目だぞ。上田さんでもお父さんでもお母さんでも、お前のために此處についてゐるんだから、安心して元氣を出さなきやいけないよ」

俊一は目を開けてうなづいたが、父の顏を見るのが煩さかつたので、再び目を瞑つた。……發熱とそれに伴ふ五體の疲勞によつて惱まされたためか、平生茫然として人の顏を見たり人の話聲を聞いたりしてゐた彼れも、今は見馴れた人間の顏も自分を苦しめるもののやうに思はれだした。父母の顏でも繪本で見た赤鬼や青鬼のやうに見えだした。彼れはふと手を伸して、寢臺の側の柱に懸つてゐる天狗の面を引つたくつて壓の上へ拋出した。夫妻はそれを見て呆氣に取られた。

そこへ、隣の主婦が冷し氷と病院の藥とを持つて來たので、上田は早速病兒に服藥させたが、俊一は顏や手を動かせて彼女の接近を避けるやうに努めた。笠間や三子の顏も目の前にちらつくやうで氣持が惡かつた。

「お藥はにがくつて〻」と、上田が訴ねると、

「いゝえ、にがかない」

「お藥を飲んで温かくしてれば直ぐに癒りますよ。お母さんは、今夜は此處に泊るんだから安心していらつしやい」と、おそでが云ふと、

「みんなが默つてゐて呉れるといゝんだけれどな」と、俊一はこの別莊へ來て以來はじめてさう云つた。

夫妻は靡を滑めた。俊一は氷袋が額に載せられてゐるのも關はないで、顏を夜具の中へ引込めるやうにした。そして周圍の靡は暫らく聞えなくなつたが、これまでに耳に觸れてゐる人々の言葉が棘をもつて一つ〳〵浮んで來た。

さつき聞いてゐた三子と母親との話だつてハツキリ耳に覺えてゐたのだが、その話の意味がいくらか分ると、彼れの贏弱い頭には痛かつた。

「風邪を引いてもあの子の身體は危い」と、上田が醫者さんや上田が云つてゐるやうに、僕が今風邪を引いてゐるのなら、僕は死ぬるかも知れないと、ひとりで考へられた。

「お前はとに角當分此方に泊ることにして、お れだけ歸つて行かう。俊一の病氣が若しも惡いやうだつたら、電報でも打てば直ぐにやつて來るよ」と、長吉はおそでに云つて、こま〳〵した家の用事を互ひにさゝやいたが、今日は病兒をうしろに夫婦の別居生活に關はつた話をヒソ〳〵としてゐるのが、おそでには手觸りなく淋しく思はれて、しまひには妻子を此處へ置いて自分一人東京で暮らさうとする夫の心根を無慈悲の至りのやうに言ひだした。

「だつて、お前がさうしようと云つたのぢやないか。おれがこちらから毎日東京へ出勤する譯には行かないのだから、止むを得ないよ」と、長吉が穩かに云つても、おそではさういふ條理の立つた言葉にも耳を貸さないで、プル〳〵首を振つた。

「今日の俊一は不斷とはちがふんです。いつか悲しい思ひをしなければならないと、何年もの長い間、私たちが恐れてゐた日が來たのに、あなたは一人で東京へ行つて勝手な眞似をしようとしてゐるんぢやありませんか。あなたの顏を見ればあなたがお腹の中で何を企んでゐるか、私にはちやんと分るんですからね」と、いきり立つて、妹のおよねの事まで持出して靡を蹴らげた。

「ぢや、おれが店を止めて此處で何もしないでボンヤリ暮らすのがお前の本望なのかい。俊一の治療代にも差閊へるやうになつてもいゝつて云ふのかい」

「私は今のやうな陰氣な貧乏暮らしをするために、あなたの處へ來たのぢやないですよ。若いうちを面白い目もさせないでこき使つて、俊一の身體に萬一事があつたら、それをいゝ機會に私を追出さうと、あなたは思つてるにちがひないんだ」

二人の爭ひが募つてくると、上田は傍にゐるのがゐづらくなつて、そつと座を外して、隣の家へ行つたが、他人がゐなくなると、おそでは夫の身體にむしやぶりついて惡態を吐きだした。殆んど一夜も離れないやうに同棲してゐながら、妻の肉體に嫌惡を覺えて疎々しくしてゐる長吉は、その代りに妻の惡態や取組合ひに苦しめられるのを我慢してゐたのであつたが、今夜は少しの理由もないのに、爭ひを起されたのをつい憤つて、拳をかためておそでの頬べたを殴りつけた。……十年の間お互ひに自分の望みを殺して同棲してゐた鬱憤を相手に對して一度期に晴らし合つてゐるやうに、二人は次第に五體にある力を盡して爭つた。火鉢を引くり返したり、障子を倒すまでも止めなかつた。

上田や隣の主婦が音を聞きつけて、そつと様子を見に庭先へ來た時には、おそでは青褪めた顏して、ヒッ〳〵と沒入つてゐた。そして物心ついて以來、はじめてかういふ男女の爭ひを見せつけられた俊一が、ひとり寢床を出て松葉杖突いて、寒い風の吹いてゐる戸外へ出ようとして、玄關先に倒れたのを、夫妻は知らないでゐた。

オペラ

私は、この頃、ラムの「エリア隨筆」を机上に置いて愛讀してゐる。この人は趣味性に富んだ人であるが、音樂だけは分らなかつたらしい。

「私は天性音響について敏感だ。溫かい初夏の眞晝に響く大工の槌の音でさへ、物狂はしいくらゐに私をいら立たせる。しかし、さういふ意味のない音は、音樂の如く一定の目的をもつた音に比べると何でもないのだ。我々の耳は物を打つ音などには受け身であるからいゝが、音樂に對しては受け身になつてはゐられない。……私はある日伊太利オペラを聽いてゐたが、次第に云ひやうのない苦痛に堪へられなくなつたので、最も騷々しい街上へ驅込んで、意味のない音響の中に身を沒して、今までの果のない役にも立たない乾燥無味の注意に苦まされた心を慰めた。平和な日常生活の音響のする、氣取らない集合の中に隱れ場所を求めた」

彼れはかう書いてゐる。私は先夜帝劇で伊太利オペラ「お蝶夫人」を聽いたあとで、ラムのこの感想を讀んで、大いに同感した、ラムの聽いたのは、多分帝劇のよりもいゝオペラであつたのだらう。それでさへ彼れはさう感じた。

序幕の終りの、お蝶夫人の米國士官との掛合ひの唄など、まるで、さかりのついた牡猫牝猫が屋根の上で鳴合つてゐるのを聞いてゐるやうな氣がした。

かう云つても、私はラムのやうな音樂嫌ひではない。たゞ、時々日本へ來る程度の外國のオペラを好まないだけだ。

（『白鳥隨筆集』より）